岩手県埋文センター文化財調査報告書第35集

二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書

二戸市　**家ノ上遺跡・長瀬A遺跡**

昭和57年3月

岩手県教育委員会
(財)岩手県埋蔵文化財センター
建設省岩手工事事務所

二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書

二戸市　**家ノ上遺跡・長瀬Ａ遺跡**

Ⅰ．序　　論

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター組織

役員		
理事長	新里　盈	（県教育長）
副理事長	中原　良一	（県教育次長）
常務理事	菅原　一郎	（センター所長）
理　事	吉田　良和	（県農政部次長）
〃	田代　太志	（県林業水産部次長）
〃	後藤　光雄	（県土木部次長）
〃	板橋　源	（県立博物館長）
〃	草間　俊一	（県立盛岡短大学長）
〃	小形　信夫	（県民俗の会会長）
監　事	白石　丈雄	（県教委総務課長）
〃	及川　久男	（県教委財務課長）

職員	
所　長	菅原　一郎
副所長	小野寺　登
総務課長	小笠原　喜一
庶務係長	岡沢　成治
主　事	佐藤　久四郎
〃	戸草内　幸男
〃	立花　多加志
技能員	佐藤　春男

調査課長	嶋　千秋			資料課長、	瀬川　司男
主任専門調査員	近藤　宗光			専門調査員	高橋与右衛門
〃	遠藤　勝博			〃	本沢　慎輔
〃	国生　尚			〃	工藤　利幸
専門調査員	村上　達夫	専門調査員	平井　進	〃	高橋　文夫
〃	畠山　靖彦	〃	種市　進	〃	四井　謙吉
〃	朝野　孝二	〃	鈴木　隆英	〃	中川　重紀
〃	菊池　利和	〃	三浦　謙一	〃	松野　恒夫
〃	鈴木　恵治	〃	岩淵　久		
〃	小平　忠孝	〃	光井　文行	岩手県立	
〃	大原　一則	〃	佐藤　勝	文化財専門員	渡辺　洋一
〃	田鎖　寿夫	〃	高橋　義介		
〃	佐々木嘉直	〃	佐々木清文		
〃	栃沢　満郎	〃	酒井　宗孝		

緒　　言

1．本報告書は、国道4号線二戸バイパス建設予定地内に所在する岩手県二戸市家ノ上遺跡・長瀬A遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。2遺跡に共通する事項は一括して「序論」として掲載した。なお各遺跡のまとめは紙数の関係で割愛せざるを得なかった。

2．発掘調査は各遺跡の調査要項に示した期間に行なわれた。室内整理作業は昭和56年4月6日から同年12月28日までの期間に行なわれた。

3．各遺跡の発掘調査はそれぞれの調査要項に示した者が担当し、室内整理作業はすべて四井謙吉が担当した。

4．発掘調査にあたっては、次の諸機関のご協力をいただいた。

建設省東北地方建設局岩手工事事務所・岩手工事事務所二戸国道維持出張所・二戸市教育委員会

5．発掘調査の作業には、竹林卯太郎・沢内義一・畑本芳雄の三氏をはじめとする地元の方々にご協力をいただいた。巻末に発掘調査作業協力者名簿を掲載して、感謝の意を表した。

6．本報告書の執筆にあたり石器の石質鑑定は、岩手県立大船渡農業高等学校教諭佐藤二郎氏に依頼した。

7．本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

Ⅰ．序論　　1．調査に至る経過……瀬川司男　　2．調査方法と室内整理の方法～4．基本層序……四井謙吉

Ⅱ．家ノ上遺跡……四井謙吉

Ⅲ．長瀬A遺跡……四井謙吉

8．実測図トレース・遺物実測・図版作成などにあたっては、次の方々にご協力をいただいた。

越場ミチエ・阿部蓉子・家子珠枝・浅沼朝子・戸花耐子・川崎清子・菊池仁子・吉田　京・浅沼啓子・浅沼恵美子・滝村キヨ・天沼キミエ・佐藤ヨシ・佐藤良子・川村京子・武蔵アサヨ・佐藤満恵・大木エサ・吉田サン・佐藤リエ・武蔵ヒサ・佐々木キヌ・大木絹子

9．また出土遺物の写真撮影にあたっては、次の方々にご協力をいただいた。

岩渕希士・佐藤和也

本文目次

Ⅰ．序　論

1．調査に至る経過……6
2．調査方法……7
（1）座標軸の設定……7
（2）粗掘り・遺構検出……8
3．遺跡の立地……8
4．基本層序……9

Ⅱ．家ノ上遺跡

1．検出遺構……21
（1）原始時代……21
①竪穴住居址……21
②炉　址……36
③ピット……36
（2）中　世……48
①竪穴住居址……48
2．遺構外の出土遺物……57
（1）土　器……57
（2）石　器……60
（3）土製品……61

Ⅲ．長瀬Ａ遺跡

１．検出遺構……97

（１）原始時代……97

①竪穴住居址……97

②ピット ……108

③陥し穴状遺構 ……108

④土器埋設遺構 ……110

（２）古　　代 ……122

①竪穴住居址 ……122

②ピット ……138

２．遺構外の出土遺物 ……167

（１）土　器 ……167

（２）石　器 ……169

（３）土製品 ……170

図版目次

Ⅰ．序　論

図版１　岩手県全体図……3
図版２　二戸バイパス関連遺跡
　　及び周辺遺跡分布図……5
図版３　家ノ上遺跡グリッド配置図……10
図版４　長瀬Ａ遺跡グリッド配置図……11
図版５　遺跡深掘り土層断面図……12
　ａ．家ノ上遺跡
　ｂ．長瀬Ａ遺跡

Ⅱ．家ノ上遺跡

図版１　遺跡地形図……15
図版２　家ノ上遺跡遺構配置図（１）……17
図版３　家ノ上遺跡遺構配置図（２）……18
図版４　家ノ上遺跡出土遺物
　　重量分布図（１）……19
図版５　家ノ上遺跡出土遺物
　　重量分布図（２）……20
図版６　Ａｄ56住居址……31
図版７　Ａｅ06住居址……32
図版８　Ａｆ53住居址（１）……33
図版９　Ａｆ53住居址（２）……34
図版10　Ｂｃ59住居址……35
図版11……43
　ａ．Ｂａ03炉址
　ｂ．Ｂａ50炉址
図版12……44
　ａ．Ａｄ56ピット
　ｂ．Ａｄ59ピット
　ｃ．Ａｇ03ピット
　ｄ．Ａｈ03ピット
図版13……45
　ａ．Ａｈ06ピット
　ｂ．Ａｈ50ピット
　ｃ．Ａｉ12ピット
　ｄ．Ａｉ50ピット
図版14……46
　ａ．Ａｉ53ピット
　ｂ．Ａｊ03ピット
　ｃ．Ａｊ50ピット
　ｄ．Ａｊ53ピット
図版15……47
　ａ．Ｂｂ12ピット
　ｂ．Ｂｂ53ピット
　ｃ．Ｂｃ62ピット
　ｄ．Ｂｄ53ピット
図版16　Ｂｄ53住居址……50
図版17　遺構内の出土遺物（１）……51
図版18　遺構内の出土遺物（２）……52
図版19　遺構内の出土遺物（３）……53
図版20　遺構内の出土遺物（４）……54
図版21　遺構内の出土遺物（５）……55
図版22　遺構内の出土遺物（６）……56
図版23　遺構外の出土遺物（１）……62
図版24　遺構外の出土遺物（２）……63
図版25　遺構外の出土遺物（３）……64

図版26　遺構外の出土遺物（４）……65

III．長瀬Ａ遺跡

図版１　長瀬Ａ遺跡遺構配置図……93
図版２　長瀬Ａ遺跡出土遺物
重量分布図……95
図版３　Ｄｆ12住居址 ……105
図版４　Ｄｊ06住居址（１） ……106
図版５　Ｄｊ06住居址（２） ……107
図版６　Ｃｇ09ピット ……112
図版７ ……113
ａ．Ｂｃ18陥し穴状遺構
ｂ．Ｃａ15陥し穴状遺構
図版８ ……114
ａ．Ｄａ03陥し穴状遺構
ｂ．Ｄｇ09陥し穴状遺構
図版９　Ｄｅ50土器埋設遺構 ……115
図版10　遺構内の出土遺物（１） ……116
図版11　遺構内の出土遺物（２） ……117
図版12　遺構内の出土遺物（３） ……118
図版13　遺構内の出土遺物（４） ……119
図版14　遺構内の出土遺物（５） ……120
図版15　遺構内の出土遺物（６） ……121
図版16　Ｂｂ06住居址 ……139
図版17　Ｂｂ18住居址 ……140
図版18　Ｂｃ12住居址 ……141
図版19　Ｂｆ15住居址 ……142
図版20　Ｂｊ03住居址 ……143
図版21　Ｂｊ21住居址 ……144
図版22　Ｃａ09住居址（１） ……145
図版23　Ｃａ09住居址（２） ……146
図版24　Ｃａ18住居址（１） ……147
図版25　Ｃａ18住居址（２） ……148
図版26　Ｃｄ12住居址（１） ……149
図版27　Ｃｄ12住居址（２） ……150
図版28　Ｃｄ12住居址（３） ……151
図版29　Ｄｂ03住居址（１） ……152
図版30　Ｄｂ03住居址（２） ……153
図版31　Ｄｅ09住居址（１） ……154
図版32　Ｄｅ09住居址（２） ……155
図版33　Ｃｅ06ピット ……156
図版34　遺構内の出土遺物（７） ……157
図版35　遺構内の出土遺物（８） ……158
図版36　遺構内の出土遺物（９） ……159
図版37　遺構内の出土遺物（10） ……160
図版38　遺構内の出土遺物（11） ……161
図版39　遺構内の出土遺物（12） ……162
図版40　遺構内の出土遺物（13） ……163
図版41　遺構内の出土遺物（14） ……164
図版42　遺構内の出土遺物（15） ……165
図版43　遺構内の出土遺物（16） ……166
図版44　遺構外の出土遺物（１） ……171
図版45　遺構外の出土遺物（２） ……172
図版46　遺構外の出土遺物（３） ……173
図版47　遺構外の出土遺物（４） ……174
図版48　遺構外の出土遺物（５） ……175
図版49　遺構外の出土遺物（６） ……176

写真図版目次

II．家ノ上遺跡

写真図版 1 ……69

a．調査風景

b．調査風景

写真図版 2 ……70

a．調査風景

b．調査風景

写真図版 3 ……71

a．Ａｄ56住居址

b．Ａｄ56住居址（土層断面）

写真図版 4　Ａｅ06住居址……72

写真図版 5 ……73

a．Ａｅ06住居址（土層断面）

b．Ａｅ06住居址（土層断面）

c．Ａｅ06住居址（土器出土状況）

d．Ａｅ06住居址（土器出土状況）

写真図版 6 ……74

a．Ａｆ53住居址

b．Ａｆ53住居址炉

c．Ａｆ53住居址P_3（土器出土状況）

写真図版 7 ……75

a．Ｂｃ59住居址

b．Ｂｃ59住居址（土器出土状況）

c．Ｂｃ59住居址（土器出土状況）

写真図版 8 ……76

a．Ｂａ03炉址

b．Ｂａ50炉址

c．Ａｄ56ピット

d．Ａｄ56ピット（土層断面）

e．Ａｄ59ピット

f．Ａｄ59ピット（土層断面）

写真図版 9 ……77

a．Ａｇ03ピット

b．Ａｇ03ピット（土層断面）

c．Ａｈ03ピット

d．Ａｈ03ピット（土層断面）

e．Ａｈ06ピット

f．Ａｈ06ピット（土層断面）

写真図版10……78

a．Ａｈ50ピット

b．Ａｈ50ピット（土層断面）

c．Ａｉ12ピット（土層断面）

d．Ａｉ50ピット（石錘出土状況）

e．Ａｉ50ピット

f．Ａｉ50ピット（土層断面）

写真図版11……79

a．Ａｉ53ピット

b．Ａｉ53ピット（土層断面）

c．Ａｊ50ピット

d．Ａｊ50ピット（土層断面）

e．Ａｊ53ピット

f．Ａｊ53ピット（土層断面）

写真図版12……80

a．Ｂｂ53ピット

b．Ｂｂ53ピット（土層断面）

c．Ｂｃ62ピット（土層断面）

d．Ｂｄ53ピット

e．Ｂｄ53ピット（土層断面）
写真図版13……81
ａ．Ｂｄ53住居址
ｂ．Ｂｄ53住居址
写真図版14　遺構内の出土遺物（１）……82
写真図版15　遺構内の出土遺物（２）……83
写真図版16　遺構内の出土遺物（３）……84
写真図版17　遺構内の出土遺物（４）……85
写真図版18　遺構内の出土遺物（５）……86
写真図版19　遺構内の出土遺物（６）……87
写真図版20　遺構外の出土遺物（１）……88
写真図版21　遺構外の出土遺物（２）……89
写真図版22　遺構外の出土遺物（３）……90

III．長瀬Ａ遺跡

写真図版１　遺跡周辺の航空写真 ……181
写真図版２　検出遺構群 ……182
写真図版３ ……183
ａ．深掘り土層断面
ｂ．Ｄｆ12住居址
写真図版４ ……184
ａ．Ｄｆ12住居址（土層断面）
ｂ．Ｄｆ12住居址炉
ｃ．Ｄｆ12住居址P_{10}(土器出土状況)
ｄ．Ｄｊ06住居址
写真図版５ ……185
ａ．Ｄｊ06住居址（土層断面）
ｂ．Ｄｊ06住居址炉
ｃ．Ｄｊ06住居址（土器出土状況）
写真図版６ ……186
ａ．Ｃｇ09ピット
ｂ．Ｃｇ09ピット（土層断面）
ｃ．Ｃｇ09ピット（土器出土状況）
写真図版７ ……187
ａ．Ｂｃ18陥し穴状遺構
ｂ．Ｂｃ18陥し穴状遺構(土層断面)
ｃ．Ｃａ15陥し穴状遺構
写真図版８ ……188
ａ．Ｄａ03陥し穴状遺構
ｂ．Ｄａ03陥し穴状遺構(土層断面)
ｃ．Ｄａ03陥し穴状遺構(土層断面)
ｄ．Ｄａ03陥し穴状遺構(土層断面)
写真図版９ ……189
ａ．Ｄｇ09陥し穴状遺構
ｂ．Ｄｇ09陥し穴状遺構(土層断面)
ｃ．Ｄｇ09陥し穴状遺構(土層断面)
ｄ．Ｄｅ50土器埋設遺構
写真図版10 ……190
ａ．Ｂｂ06住居址
ｂ．Ｂｂ06住居址（土層断面）
写真図版11 ……191
ａ．Ｂｂ06住居址（土層断面）
ｂ．Ｂｂ06住居址カマド
ｃ．Ｂｂ06住居址（土器出土状況）
ｄ．Ｂｂ06住居址（土器出土状況）
写真図版12 ……192
ａ．Ｂｂ18住居址
ｂ．Ｂｂ18住居址（土層断面）
写真図版13 ……193
ａ．Ｂｂ18住居址カマド
ｂ．Ｂｃ12住居址カマド
ｃ．Ｂｃ12住居址
写真図版14 ……194

a．Ｂｃ12住居址(炭化材出土状況)
b．Ｂｃ12住居址(紡錘車出土状況)
c．Ｂｆ15住居址
写真図版15 ……195
a．Ｂｆ15住居址（土層断面）
b．Ｂｊ03住居址
写真図版16 ……196
a．Ｂｊ03住居址（土層断面）
b．Ｂｊ03住居址カマド
c．Ｂｊ03住居址（土器出土状況）
d．Ｂｊ03住居址
（鳥獣類骨片出土状況）
写真図版17 ……197
a．Ｂｊ21住居址
b．Ｂｊ21住居址（土層断面）
写真図版18 ……198
a．Ｂｊ21住居址カマド
b．Ｃａ09住居址
写真図版19 ……199
a．Ｃａ09住居址（検出状況）
b．Ｃａ09住居址１号カマド
c．Ｃａ09住居址２号カマド
写真図版20 ……200
a．Ｃａ09住居址P_3
b．Ｃａ09住居址P_3(土器出土状況)
c．Ｃａ09住居址P_3（土層断面）
d．Ｃａ09住居址
（フイゴ羽口出土状況）
写真図版21 ……201
a．Ｃａ09住居址
（遺物・礫出土状況）
b．Ｃａ18住居址
写真図版22 ……202
a．Ｃａ18住居址（土層断面）
b．Ｃａ18住居址カマド
c．Ｃａ18住居址（土器出土状況）
d．Ｃａ18住居址(紡錘車出土状況)
e．Ｃａ18住居址（カヤ出土状況）
写真図版23 ……203
a．Ｃｄ12住居址
b．Ｃｄ12住居址（検出状況）
写真図版24 ……204
a．Ｃｄ12住居址（土層断面）
b．Ｃｄ12住居址(炭化材出土状況)
写真図版25 ……205
a．Ｃｄ12住居址(炭化材出土状況)
b．Ｃｄ12住居址
（炭化樹皮出土状況）
写真図版26 ……206
a．Ｄｂ03住居址
b．Ｄｂ03住居址（検出状況）
写真図版27 ……207
a．Ｄｂ03住居址（土層断面）
b．Ｄｂ03住居址（土層断面）
c．Ｄｂ03住居址カマド
写真図版28 ……208
a．Ｄｂ03住居址（土器出土状況）
b．Ｄｂ03住居址
（土器・鉄器出土状況）
c．Ｄｂ03住居址(紡錘車出土状況)
d．Ｄｂ03住居址（勾玉出土状況）
e．Ｄｂ03住居址
（土製勾玉・土玉出土状況）
f．Ｄｂ03住居址(炭化物出土状況)

写真図版29 ……209
a．Ｄｅ09住居址
b．Ｄｅ09住居址（検出状況）
写真図版30 ……210
a．Ｄｅ09住居址（土層断面）
b．Ｄｅ09住居址カマド
写真図版31 ……211
a．Ｄｅ09住居址(炭化材出土状況)
b．Ｄｅ09住居址（土器出土状況）
c．Ｄｅ09住居址（カヤ出土状況）
写真図版32 ……212
a．Ｃｅ06ピット
b．Ｃｅ06ピット（土層断面）
写真図版33　遺構内の出土遺物（１）　…213
写真図版34　遺構内の出土遺物（２）　…214
写真図版35　遺構内の出土遺物（３）　…215
写真図版36　遺構内の出土遺物（４）　…216
写真図版37　遺構内の出土遺物（５）　…217
写真図版38　遺構内の出土遺物（６）　…218
写真図版39　遺構内の出土遺物（７）　…219
写真図版40　遺構内の出土遺物（８）　…220
写真図版41　遺構内の出土遺物（９）　…221
写真図版42　遺構内の出土遺物（10）　…222
写真図版43　遺構内の出土遺物（11）　…223
写真図版44　遺構内の出土遺物（12）　…224
写真図版45　遺構内の出土遺物（13）　…225
写真図版46　遺構内の出土遺物（14）　…226
写真図版47　遺構内の出土遺物（15）　…227
写真図版48　遺構外の出土遺物（１）　…228
写真図版49　遺構外の出土遺物（２）　…229
写真図版50　遺構外の出土遺物（３）　…230
写真図版51　遺構外の出土遺物（４）　…231

表　目　次

表１　家ノ上遺跡出土石器計測表……67
表２　家ノ上遺跡円盤状土製品計測表……68
表３　家ノ上遺跡土坑墓出土古銭計測表……68

Ⅲ．長瀬Ａ遺跡

表１　長瀬Ａ遺跡出土石器・石製品計測表 ……177
表２　長瀬Ａ遺跡円盤状土製品計測表 ……179

序

岩手県は四国四県に匹敵する広大な面積を有し、その広大な県土に存在する埋蔵文化財包蔵地は、県教育委員会文化課調査によりますと4,719ヶ所の多きとなっております。この数は今後の精密な分布調査によって更に増加するものと考えられます。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先の貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を守り伝えることが我々の責務と考えている所であります。

岩手県を南から北に縦断する国道４号線は181.8kmの長きにわたっております。この国道４号線は自動車時代の到来により交通事情が悪化し、特に市街地における交通渋滞を引き起こし市民生活へも影響をもたらしております。これの解消のため県下各地においてバイパス開通の要望が高まっております。

本報告書にかゝわる二戸バイパスも、二戸市中心部を通る国道４号線の交通渋滞緩和のため建設省東北地方建設局岩手工事々務所によって建設されるものであります。このバイパス路線内に13ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が存在しておりました。これらの包蔵地は、建設省と県文化課との協議によって一部工法変更による保存の外は調査の上記録保存することとしました。

発掘調査は、昭和49年度から行なわれ、昭和56年度をもって終了いたしました。この調査によって得られた成果は大きく、例えば長瀬Ｂ遺跡の県北地区初の縄文時代早期集落、荒谷Ａ遺跡の大型住居址、下村Ｂ遺跡の配石遺構、大渕遺跡の弥生時代住居址、数多くの奈良・平安時代集落など貴重な資料が得られております。

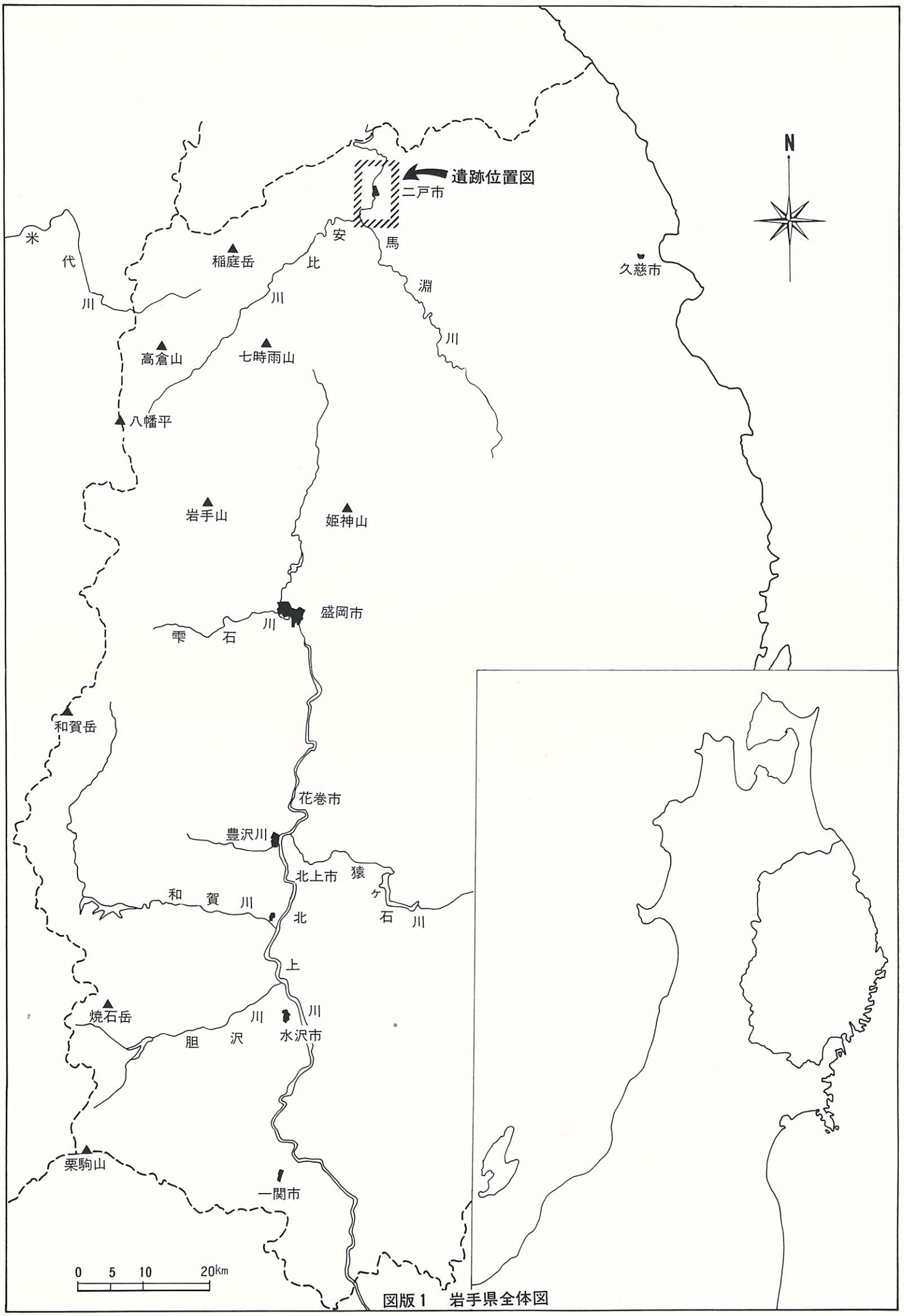
本年度はセンターに新たに資料課を設置し、鋭意報告書作成にとり組みました。本報告書の内容については不十分な点が多々あるとは思いますが、いささかでも関係各位の参考に供され斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教委、委託者をはじめ関係各位に多大のご協力、ご援助を頂きましたことを厚く感謝申し上げ、今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

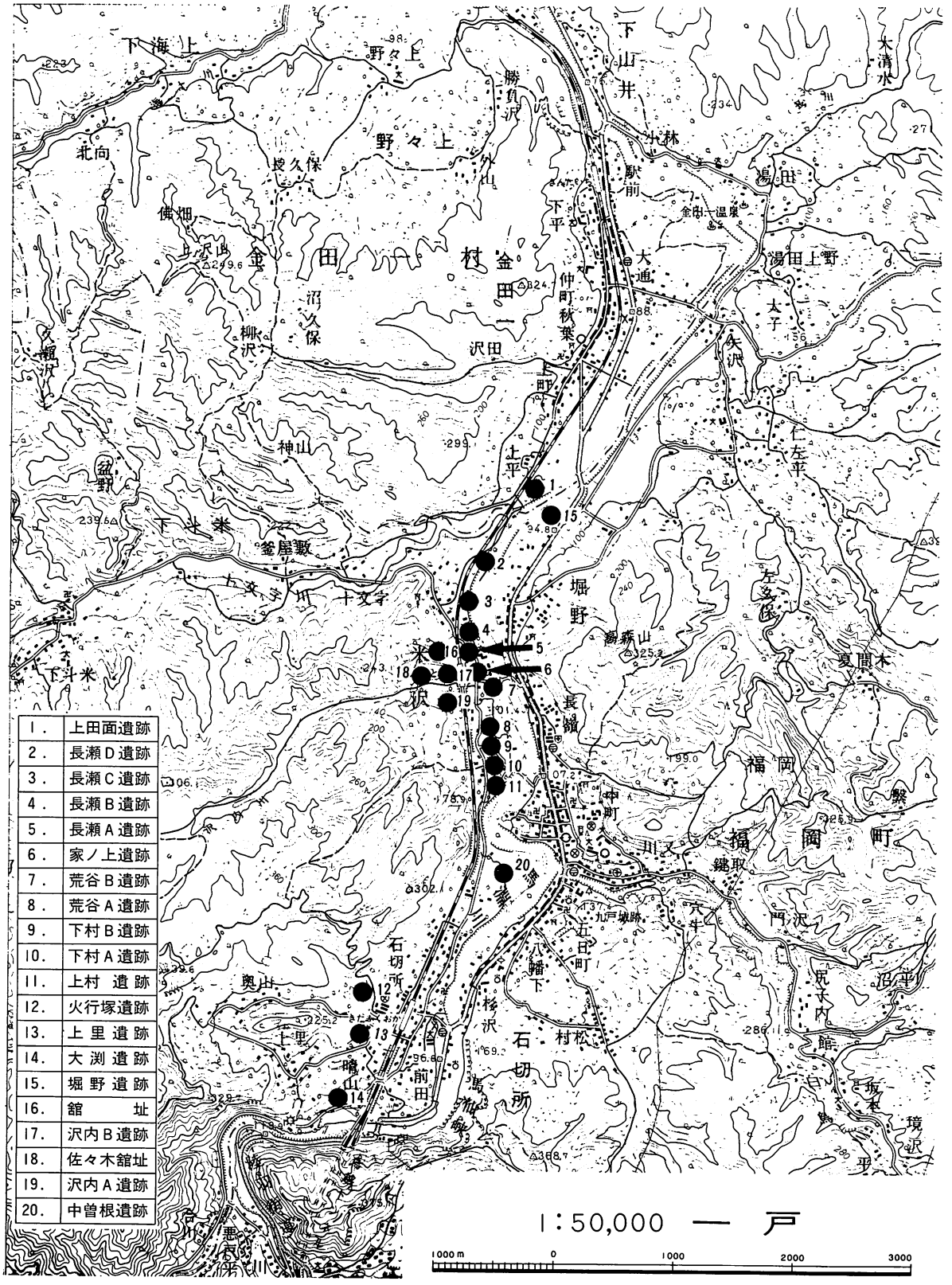
昭和57年３月

（財）岩手県埋蔵文化財センター

理事長　新　里　　盈


遺跡位置図
二戸市
N
米
代
川
稲庭岳
安
比
川
馬
淵
川
久慈市
高倉山
七時雨山
八幡平
岩手山
姫神山
盛岡市
雫
石
川
和賀岳
花巻市
豊沢川
北上市
猿
ケ
石
川
和
賀
川
北
上
川
焼石岳
川
胆
沢
川
水沢市
栗駒山
一関市
0 5 10 20km

図版1　岩手県全体図



図版2　二戸バイパス関連遺跡及び周辺遺跡分布図

1．調査に至る経過

岩手県は四国四県に匹敵する県土をもち、自然を多く残している。しかし列島改造が叫ばれた昭和40年代後半から急激に大型開発の波が押し寄せてきた。特に昭和47年に東北縦貫自動車道・東北新幹線・バイパス・工業団地等の建設が一斉にはじまった。これらの開発は当然遺跡を内包することになる。この遺跡に対する処置が文化財保護行政側の問題となり、それに対応するため昭和47年岩手教育委員会事務局社会教育課に埋蔵文化財調査班が設置された。翌年これの強化のため同事務局に文化課が新設され、調査体制が整備された。その後調査量の増大と整理・報告書の停滞が目立ち、これの解決の方途として、昭和52年に財団法人岩手県埋蔵文化財センターが設立された。

本報告にかかわる二戸バイパスは国道４号線バイパス工事の一環で、建設省東北地方建設局岩手工事事務所が事業主体となって建設したものである。

二戸市の中心街は、馬淵川と山地との間に存在する狭い平坦部を中心に発展した城下町で南北に長く延びている。この市街地の中心を国道４号線が通り、交通量の増加に伴ない朝夕のラッシュ時の混雑は一戸町とともに県内一・二であろう。この交通渋滞解消のためにバイパス建設は永年の懸案事項であり、地元市民の念願でもあった。

二戸バイパス建設計画は昭和48年以前から存在し、48年においてはじめて県教委文化課との協議が行なわれた。しかしこの時には建設計画は固まり路線発表も終り一部用地買収が行なわれており、協議は工事計画と調査行程との調整に絞られた。同建設事業に対する県文化課による分布調査は昭和48年に第一次、昭和49年に第二次が行なわれ、その結果路線内に13ケ所の遺跡が存在することが確認された。この分布調査の結果を基に再度協義が行なわれ、昭和49年度より調査を開始し、重要な遺跡発見の時はその都度協議する事とした。

調査は49年４月から県教委文化課によって路線中央部の上村（うわむら）遺跡から開始され、順次北に向って進められた。49年・50年度の調査において縄文時代中期の大型住居址・大型甕棺・十和田ａ降下火山灰堆積の住居址の発見など、県北地方における久しぶりの本格的調査として、貴重な成果をあげた。昭和50年度において、長瀬地区の遺跡に火山灰層を間層とする縄文時代早期から平安時代までの文化層の堆積が認められ、それが約１kmに亘ることが推定された。このようなことは、岩手県において貝塚以外では認められた事のないものであるため、岩手工事事務所に保存方の協義を申し入れた。それと同時に１kmの路線部分に30m メッシュのトレンチを入れ、遺構検出のための試掘調査を行なった。その結果、長瀬Ｂ遺跡から長瀬Ｄ遺跡まで全面的に遺構が検出され、特に北端の長瀬Ｄ遺跡には土師器伴出の住居址・縄文時代住居址・ピッ

トが集中しているものと思われた。

この試掘調査結果をもとにして文化庁と協義した所、文化庁からも時代の異なる文化層が層位的に存在する貴重な遺跡であるから保存するようにという指示を受けた。この指示を受けて岩手工事事務所と50年10月頃より路線迂回も含めてあらゆる可能性を検討した。この検討の途中、文化庁の視察など保存への動きが新聞報道された事によって地元が硬化し県議会において問題化するなどの事態が生じた。しかしその後紆余曲折を経て51年２月、岩手工事事務所より最終案として長瀬Ｄ遺跡の切土を盛土保存工法に変更するという提示があった。この工法変更によって長瀬Ｂ・Ｃ遺跡も薄いが盛土工法となり、切土がなくなることとなった。この最終案を文化課が了承し、文化庁の了解もとりつけた。ただし長瀬Ｄ遺跡においても第一面は完掘し記録保存する事にした。

調査は昭和51年度まで県文化課が担当し、昭和52年度から県埋蔵文化財センターが担当した。昭和52年度は長瀬Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡と上田面（かみたも）遺跡の側道分を調査した。ただし長瀬Ｃ遺跡の500㎡は用地未買収のため調査対象外となった。昭和53年度は上田面遺跡の残り分を県埋蔵文化財センターが、中曽根遺跡を二戸市教育委員会が調査した。昭和54年度は県埋蔵文化財センターが大渕（おおぶち）遺跡・上里（うわざと）遺跡・火行塚（ひぎようづか）遺跡を、二戸市教育委員会が中曽根遺跡の継続調査を行なった。昭和56年度に長瀬Ｃ遺跡の未買収地分と私道取付部分を調査し、野外調査の一切を終了した。

報告書の発刊は上村遺跡・下村（したむら）Ａ遺跡・下村Ｂ遺跡・上里遺跡については57年度の予定である。56年度に発刊される家ノ上・長瀬Ａ・長瀬Ｂの３遺跡以外の他の６遺跡の報告書は、55年度に発刊されている。

２．調査方法

家ノ上遺跡・長瀬Ａ遺跡の野外調査および室内整理方法は、長瀬Ｂ遺跡において展開された方法とは一連のものである。これらの方法については長瀬Ｂ遺跡の発掘調査報告書の「序論」の中で詳述してあるので、ここでは２遺跡の野外調査の方法に関する事項のうち次の２点についてだけ述べるに止めたい。

（１）座標軸の設定

家ノ上・長瀬Ａ遺跡の発掘調査において、次のように座標軸を設定した。２遺跡とも調査対象区域内のバイパス中心杭の中から、基準としてそれぞれ任意の２点を選びその一方を座標原点とした。選定した２点間を結ぶ直線と、座標原点を通りこれに直交する直線を基準線とした

（図版３・４）。各遺跡の基準点として選定したバイパスの中心杭は以下のとおりである。

●家ノ上遺跡　　№265（座標原点）・№266、座標中軸線の方位Ｎ－16°00′00″－Ｗ

●長瀬Ａ遺跡　　№271（座標原点）・№272、座標中軸線の方位Ｎ－２°16′20″－Ｗ

（２）粗掘り・遺構検出

層位ごとに遺構の有無を確認しつつ、最終的にⅥａ層の下位の深さまで掘り下げた。粗掘り・遺構検出をほとんど人力によって行なったが、長瀬Ａ遺跡においてはⅣ層～Ⅴ層の土層除去や深掘りの際にベルトコンベヤーも利用した。家ノ上遺跡は発掘調査以前に重機を投入して二度に渡って土砂が持ち去られたため、粗掘りを行なう余地はほとんどなかった。本調査でその存在が確認された遺構は、２度の破壊から難を逃れたかあるいは破壊を受けながらも辛うじてほんの一部分が残存したか、いずれかのものであろうと思われる。なお一度目の遺跡破壊直後に分布調査で現地を踏査した際、Ⅴ層の南部浮石層上面に西壁中央部にカマドをもつ古代の住居址が認められた。その確認された位置は調査対象区の中央部付近であった。しかしこの住居址もこの後二度目の重機の投入によって消滅してしまった。以上の点から推測して、家ノ上遺跡には本来もっと多くの遺構が存在していたものと考えられる。

３．遺跡の立地

家ノ上・長瀬Ａ遺跡は、北流する馬淵川の西岸にある二戸市米沢（まいざわ）地区に所在する。遺跡の所在地点は東北本線北福岡駅から北に3.0km±、二戸市役所から北西に2.1km±のところにある。遺跡の東方に標高852.2m の折爪岳（おりづめだけ）を望むことができる。

２遺跡は馬淵川とその支流によって形成された米沢段丘の同一地形面上に載っており、標高は105m ±を計る。これらの遺跡は東西にのびている小規模な開析谷によって隔てられている。遺跡の現状は畑地であるが、この開析谷は水田として利用されている。遺跡が載っている面と開析谷の底面との比高は2.6m ±を計る。周辺の遺跡としては、荒谷Ａ遺跡・荒谷Ｂ遺跡・沢内Ａ遺跡・沢内Ｂ遺跡・長瀬Ｂ遺跡・長瀬Ｃ遺跡・長瀬Ｄ遺跡などがある。

4．基本層序

家ノ上・長瀬A遺跡の主体部の深掘り地点での基本層序を上から順に述べると次のようになる。

Ⅰ層：7.5ＹＲ2/2黒褐色土層。表土層で耕作による攪乱が著しい。層厚８cm±～20cm±を計る。

Ⅱ層：7.5ＹＲ2/1黒色土層。この層のところどころの中間部に灰白色を呈する十和田ａ降下火山灰の層が介在している。この層は遺物包含層であり、上位には古代を中心とする遺物が、また下位には原始時代（主として縄文時代中期末葉～後期前葉の時期）の遺物がそれぞれ分布している。層厚15cm±～20cm±を計る。

Ⅲ層：7.5ＹＲ3/3暗褐色土層。この層は中振浮石の層で、淡黄色を呈する粗粒の浮石が散在している。層厚25cm±～40cm±を計る。

Ⅳ層：7.5ＹＲ2/2黒褐色土層。この層は南部浮石混りのクロボク層で、原始時代（縄文時代早期末葉～前期前葉の時期）の遺物包含層となっている。上位には前期前葉の、また下位には早期末葉の遺物がそれぞれ分布している。層厚30cm±～45cm±を計る。

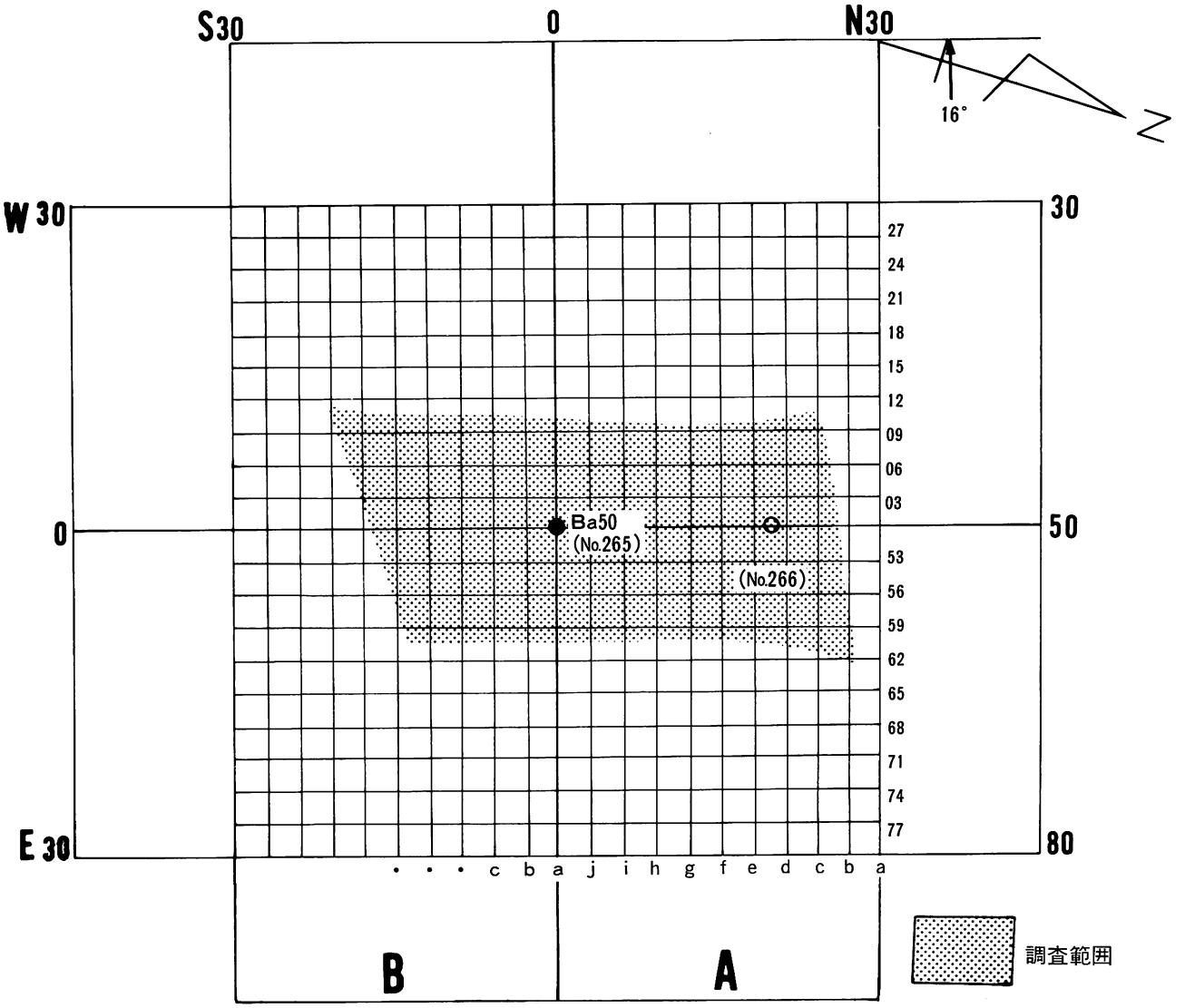
Ⅴ層：7.5ＹＲ8/8黄橙色土層。この層は南部浮石の層で、層厚25cm±～45cm±を計る。

Ⅵa層：7.5ＹＲ3/4暗褐色土層。この層は原始時代（縄文時代早期中葉）の遺物包含層となっている。層厚15cm±～25cm±を計る。

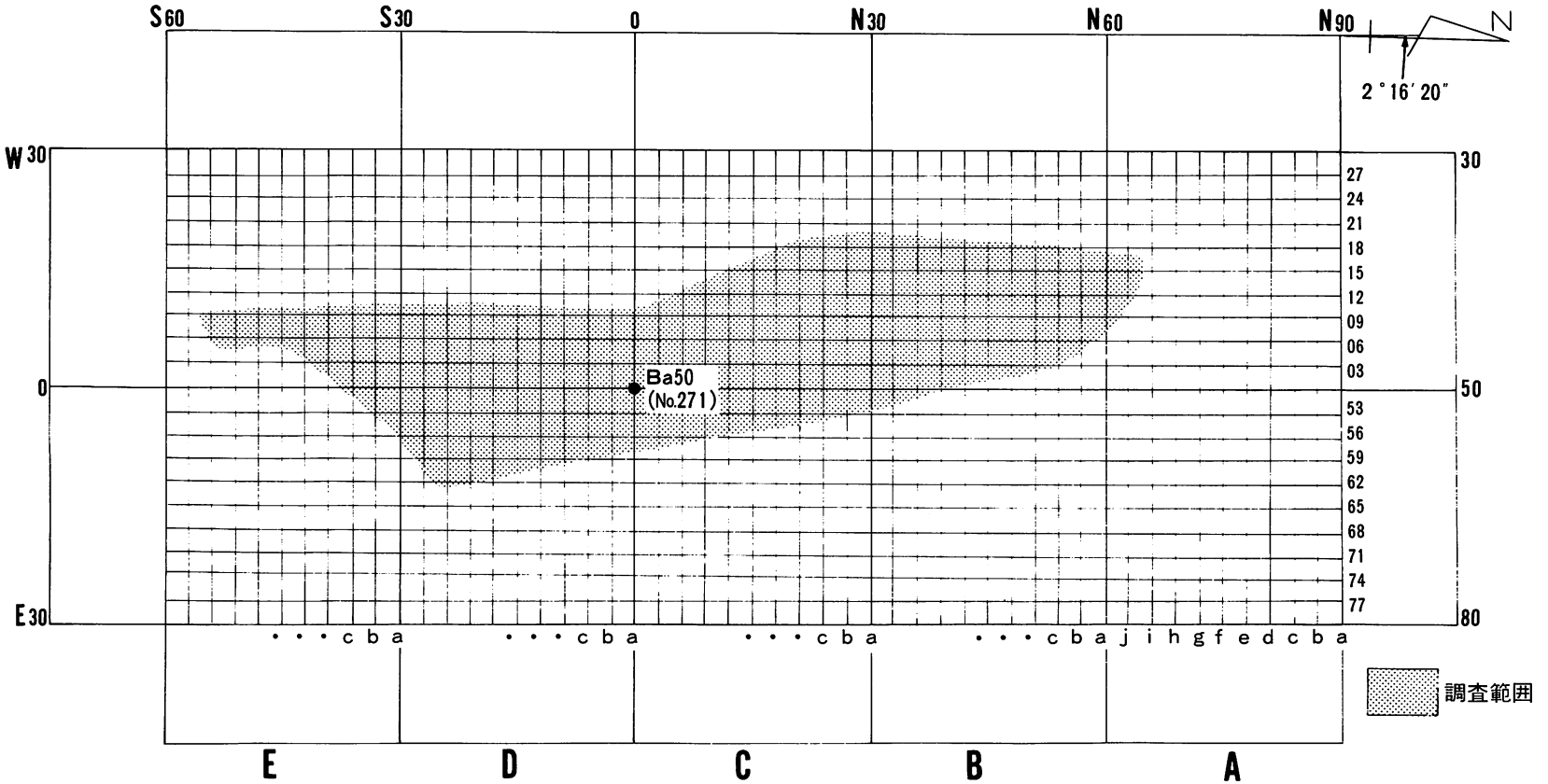
Ⅵb層：7.5ＹＲ4/6褐色土層。無遺物層で、層厚20cm±～50cm±を計る。

Ⅶ層：この層は砂質火山灰起源の砂質シルト層で層厚60cm±～150cm±を計るが、それぞれの遺跡によって層相が若干異なる。家ノ上遺跡の場合には色調によって、ａ（7.5ＹＲ4/4褐色）・ｂ（7.5ＹＲ6/6橙色）・ｃ（7.5ＹＲ6/4にぶい橙色）の３つに分けられる。このうちｂ・ｃはａに比べてかなり粘性をもっている。長瀬A遺跡の場合は10ＹＲ7/2にぶい黄橙色を呈するものとなっている。

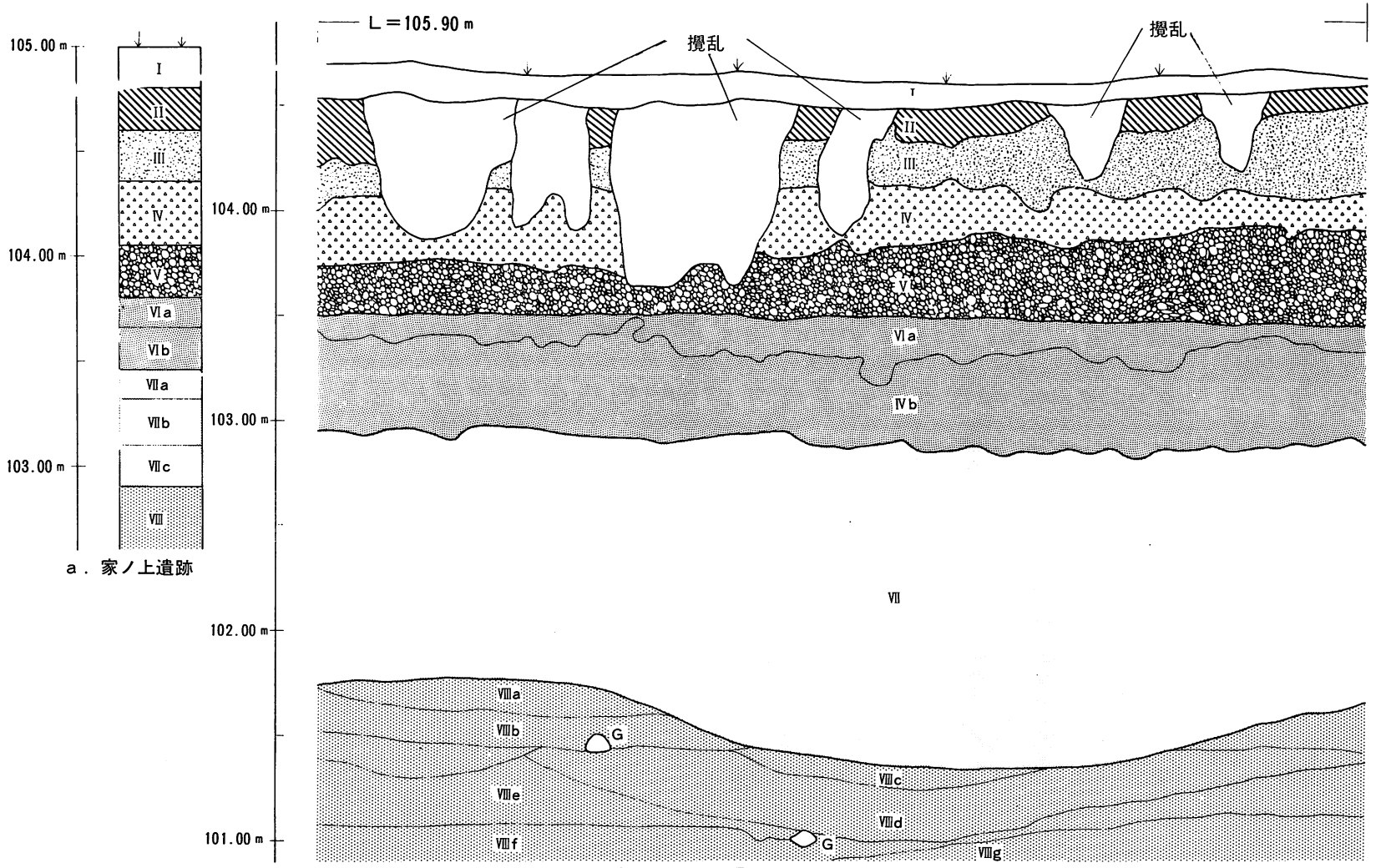
Ⅷ層：この層は色調が異なる浮石質の砂が縞模様に互層をなして堆積しているものである。この層も遺跡によって層相が異なる。家ノ上遺跡の場合は５Ｙ8/3淡黄色・５ＢＧ7/1明青灰色・Ｎ３暗灰色の色調を示す砂の互層となっている。長瀬A遺跡の場合には、ａ（５ＢＧ4/1暗青灰色）・ｂ（５ＢＧ6/1青灰色）・ｃ（N6/0灰色）・ｄ（10ＹＲ7/2にぶい黄橙色＋N4/0灰色）・ｅ（10ＹＲ7/3にぶい黄橙色）・ｆ（7.5ＧＹ7/1明緑灰色）・ｇ（10ＹＲ5/2灰黄褐色）のような色調を呈するもので構成されており、それぞれが不整合な堆積状態を示している。層厚は15cm±～60cm±を計る。



図版3　家ノ上遺跡グリッド配置図



図版4　長瀬A遺跡グリッド配置図



図版5　遺跡深堀土層断面図

II. 家（いえ）ノ上（かみ）遺跡

1．遺跡所在地　岩手県二戸市米沢字家ノ上

2．調査担当者　四井謙吉

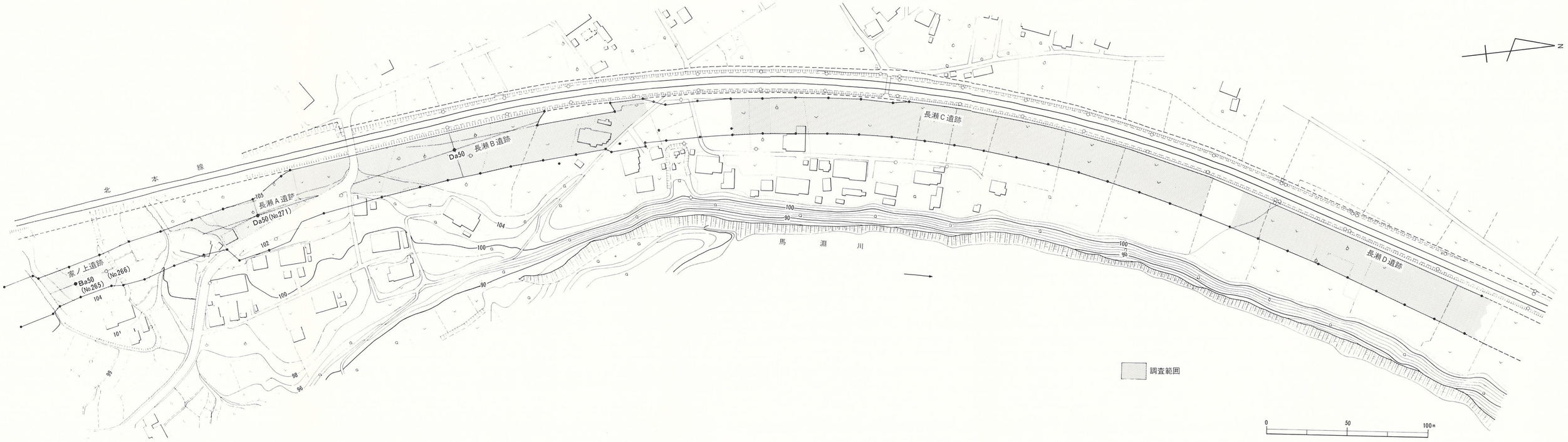
3．調査補助員　高田和徳・関　豊・福士廣志・鈴木貞行

4．調査期間　昭和51年4月21日～6月19日

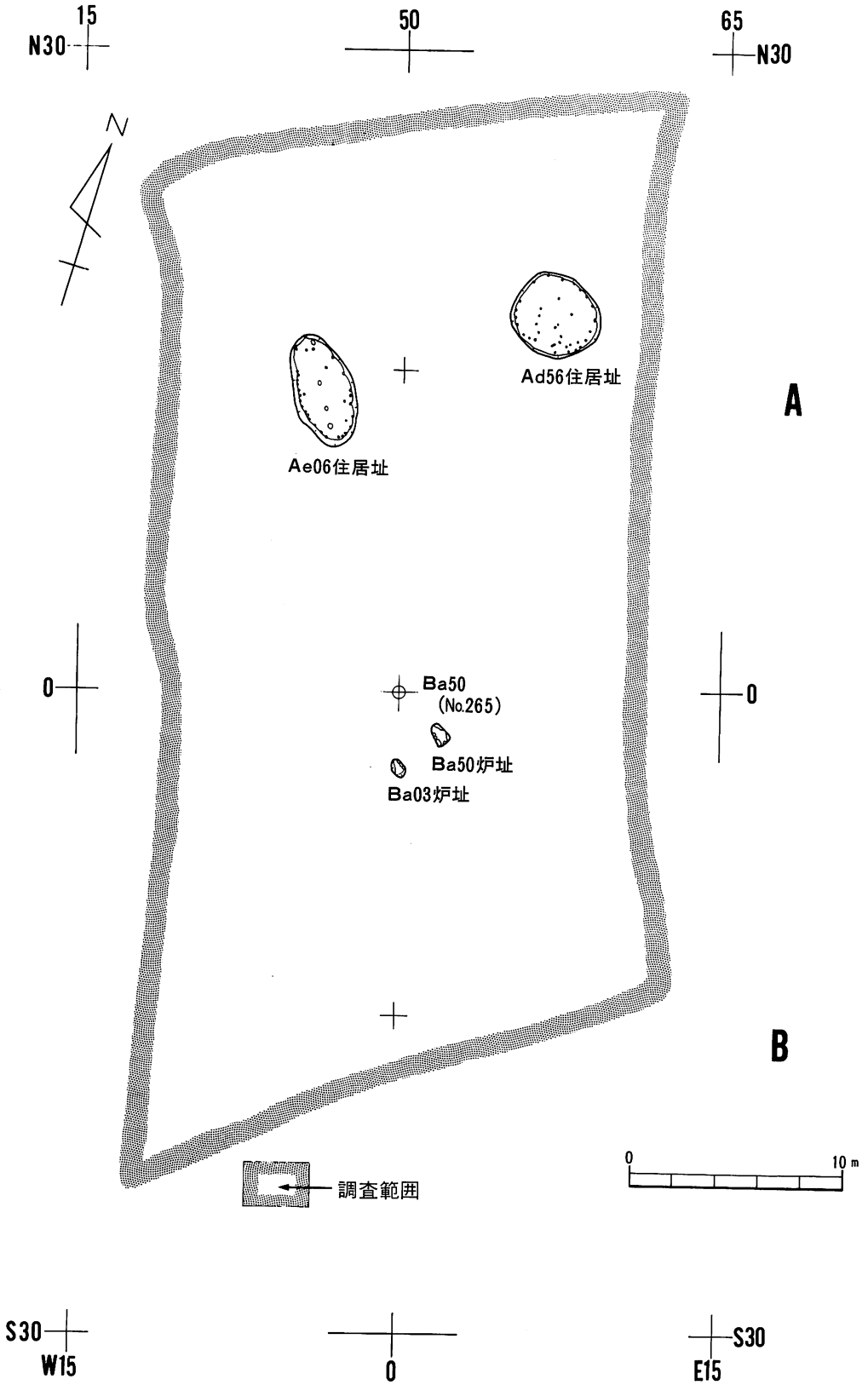
5．調査対象面積　932m²

6．発掘面積　932m²

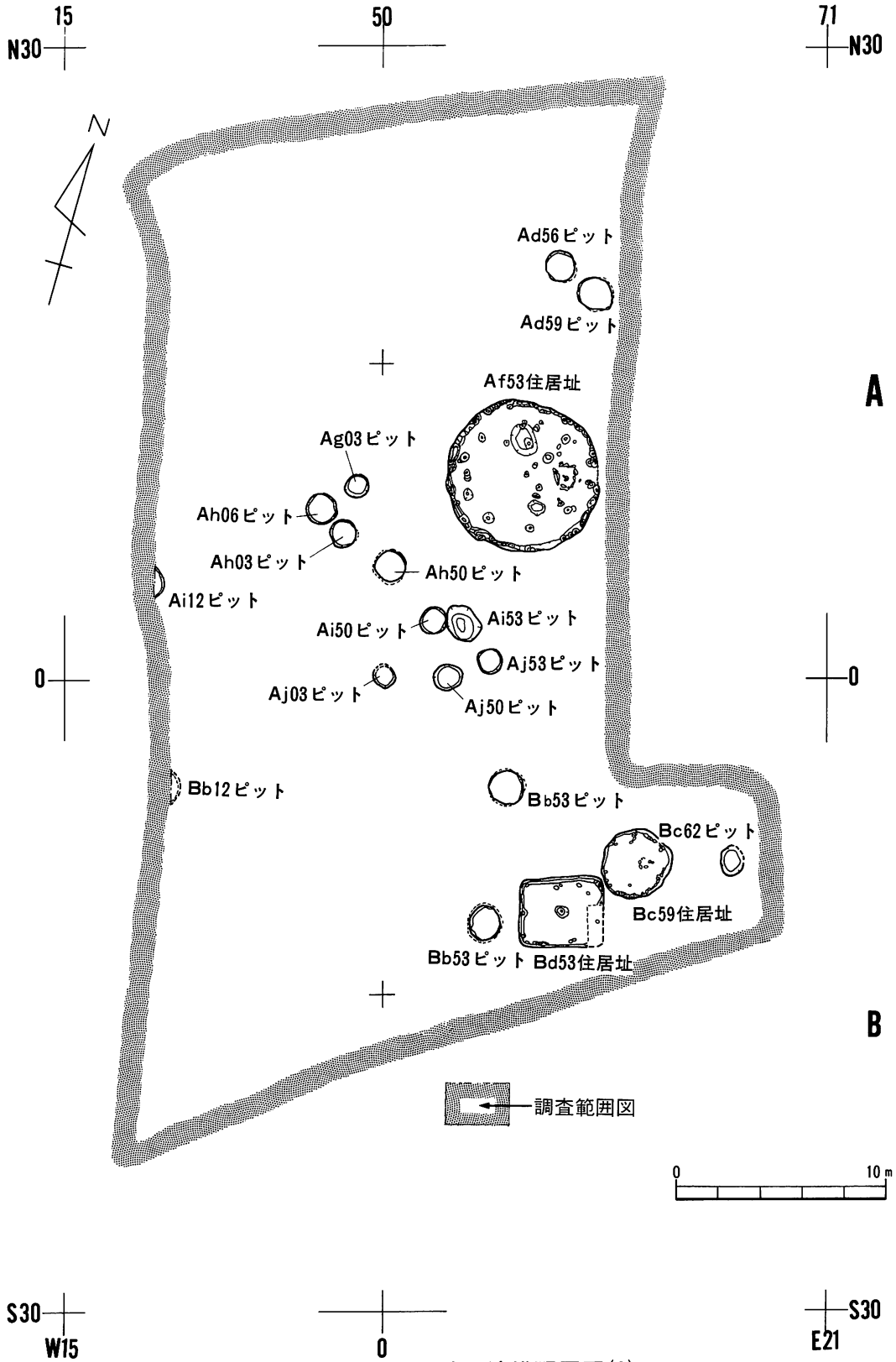
7．遺跡記号　ＩＫ76


北本線
長瀬A遺跡
長瀬B遺跡
長瀬C遺跡
長瀬D遺跡
茶ノ上遺跡
Da50
Da50 (No.271)
Ba50 (No.265)
(No.266)
馬瀬川
調査範囲
0
50
100m
N

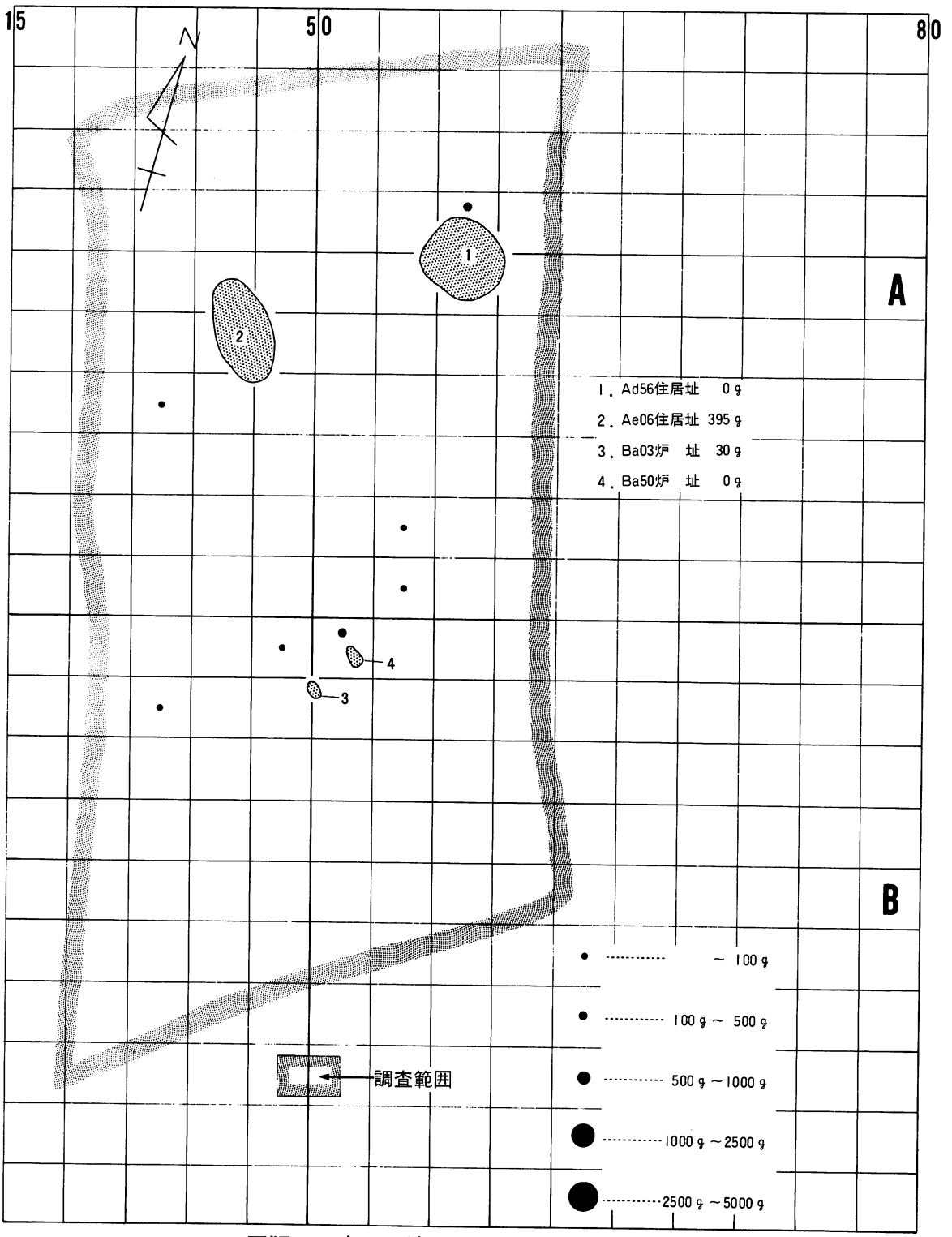
図版1　遺跡地形図



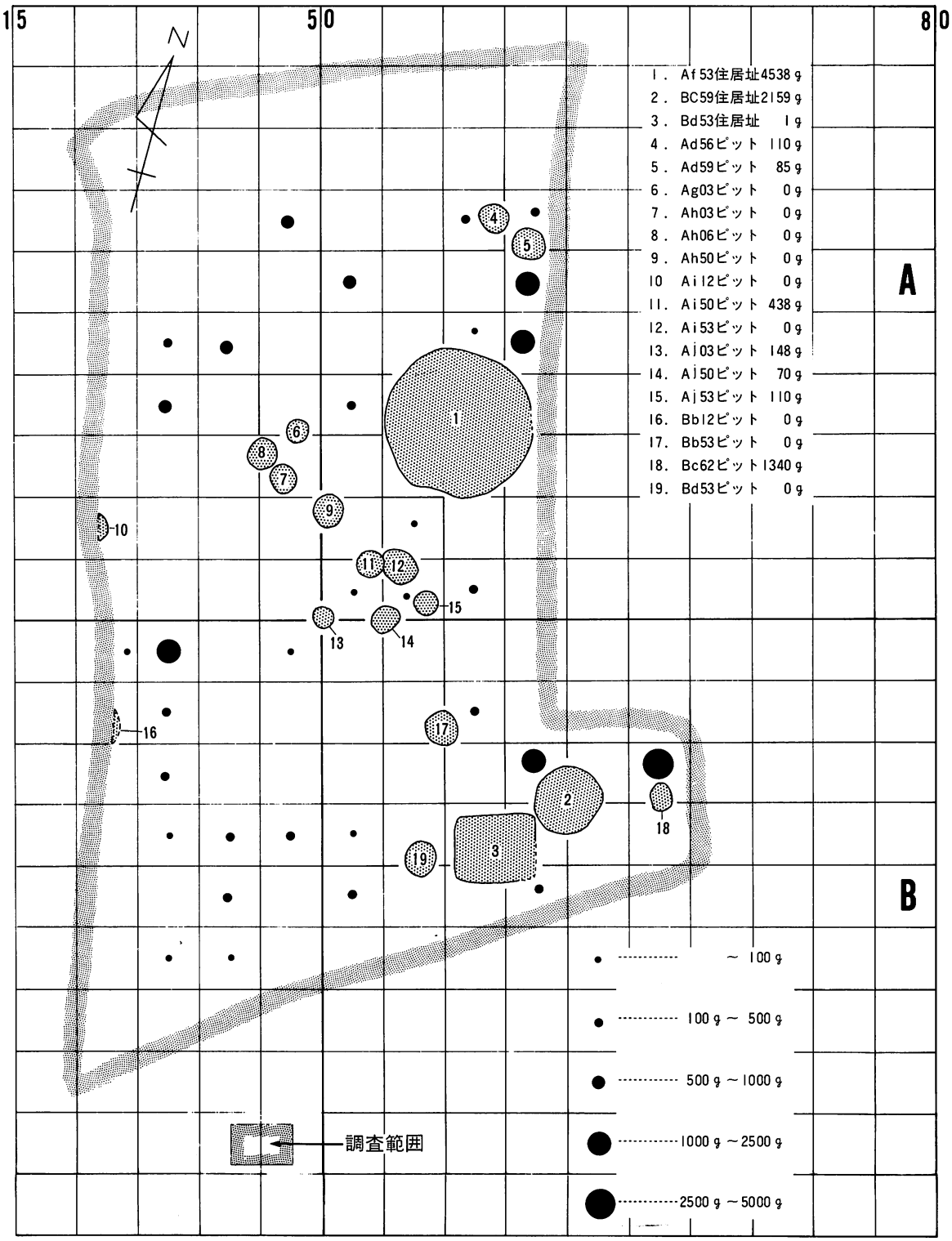
図版２　家ノ上遺跡遺構配置図(1)



図版 3　家ノ上遺跡遺構配置図(2)



図版4　家ノ上遺跡出土遺物重量分布図(1)



図版5　家ノ上遺跡出土遺物重量分布図(2)

1．検　出　遺　構

（1）原始時代

①　竪穴住居址

Ａｄ56住居址

遺　構（図版６・写真図版３－ａ・ｂ）

この住居址はⅥａ層の上面で検出されたものである。住居址内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、このＡｄ56住居址内には床面・壁などを何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す５棟の住居址が存在していることが判明した。これらの５棟の住居址の新旧関係は不明であるが、一応ここではＡｄ56－ａ住居址・Ａｄ56－ｂ住居址・Ａｄ56－ｃ住居址・Ａｄ56－ｄ住居址・Ａｄ56－ｅ住居址と仮称する。これらの住居址について以下に記載するが、柱穴配置以外の各住居址に共通する事項についてまず一括して述べることとする。

規模は4.1m ±×3.6m ±を計り、平面形は隅丸方形状を呈する。

埋土は炭化物を微量に含む暗褐色土層・褐色土層・黄褐色土層などで構成されている。

床面はほぼ平坦で全体的にやわらかい。

壁高は、北壁20cm±・東壁33cm±・南壁18cm±・西壁20cm±を計る。炉は認められなかった。

Ａｄ56－ａ住居址

この住居址は、Ａｄ56住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径10cm±・深さ13cm±）・P_6（径９cm±・深さ８cm±）・P_{12}（径７cm±・深さ６cm±）・P_{18}（径８cm±・深さ９cm±）の４個で構成され、正方形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{12}・P_6－P_{18}、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成する。

Ａｄ56－ｂ住居址

この住居址は、Ａｄ56住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_4（径７cm±・深さ25cm±）・P_9（径８cm±・深さ10cm±）・P_{13}（径13cm±・深さ19cm±）・P_{20}（径７cm±・深さ６cm±）の４個で構成され、菱形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_4－P_{13}・P_9－P_{20}、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ａｄ56－ｃ住居址

この住居址は、Ａｄ56住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_3（径７cm±・深さ５cm±）・P_8（径８cm±・深さ14cm±）・P_{11}（径８cm±・深さ８cm±）・P_{12}（径７cm±・深さ

6 cm±）・P_{13}（径13cm±・深さ19cm±）・P_{17}（径 7 cm±・深さ12cm±）・P_{19}（径 8 cm±・深さ14 cm±）・P_{20}（径 7 cm±・深さ 6 cm±）の 8 個で構成され、八角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_3－P_{13}・P_8－P_{20}・P_{11}－P_{19}・P_{12}－P_{17}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ａｄ56－ｄ住居址

この住居址は、Ａｄ56住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径10cm±・深さ13cm±）・P_3（径 7 cm±・深さ 5 cm±）・P_6（径 9 cm±・深さ 8 cm±）・P_9（径 8 cm±・深さ10 cm±）・P_{12}（径 7 cm±・深さ 6 cm±）・P_{15}（径 8 cm±・深さ 5 cm±）・P_{18}（径 8 cm±・深さ 9 cm±）・P_{20}（径 7 cm±・深さ 6 cm±）の 8 個で構成され、八角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{15}・P_3—P_{12}・P_6－P_{20}・P_9－P_{18}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ａｄ56－ｅ住居址

この住居址は、Ａｄ56住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_3（径 7 cm±・深さ 5 cm±）・P_6（径 9 cm±・深さ 8 cm±）・P_7（径10cm±・深さ 9 cm±）・P_{10}（径 7 cm±・深さ 5 cm±）・P_{12}（径 7 cm±・深さ 6 cm±）・P_{13}（径13cm±・深さ19cm±）・P_{16}（径 8 cm±・深さ13 cm±）・P_{19}（径 8 cm±・深さ14cm±）・P_{20}（径 7 cm±・深さ 6 cm±）・P_{21}（径 8 cm±・深さ 7 cm±）の10個で構成され、九角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_3－P_{13}・P_6－P_{21}・P_7－P_{20}・P_{10}－P_{19}・P_{12}－P_{16}がそれぞれ対になる在り方をしている。

以上の柱穴のほかに住居址内の床面には、P_2（径 7 cm±・深さ14cm±）・P_5（径 7 cm±・深さ13cm±）・P_{14}（径 8 cm±・深さ 5 cm±）・P_{22}（径 8 cm±・深さ14cm±）・P_{23}（径 8 cm±・深さ 8 cm±）・P_{24}（径 7 cm±・深さ 3 cm±）・P_{25}（径 9 cm±・深さ 4 cm±）・P_{26}（径10cm±・深さ 7 cm±）・P_{27}（径 7 cm±・深さ10cm±）・P_{28}（径 7 cm±・深さ 7 cm±）・P_{29}（径 8 cm±・深さ10cm±）・P_{30}（径12cm±・深さ10cm±）・P_{31}（径12cm±・深さ 5 cm±）・P_{32}（径 6 cm±・深さ 7 cm±）・P_{33}（径 4 cm±・深さ 4 cm±）・P_{34}（径 8 cm±・深さ 5 cm±）・P_{35}（径 7 cm±・深さ 4 cm±）・P_{36}（径 7 cm±・深さ 4 cm±）・P_{37}（径 7 cm±・深さ 4 cm±）・P_{38}（径 7 cm±・深さ11cm±）の柱穴状ピット群が検出されている。しかしこれらのピット群の具体的な位置づけについては不明である。

Ａｄ56住居址からの出土遺物はない。そのためこの住居址の所属時期を断定することはできないが、層位的にみてＡｅ06住居址と同じ時期に位置づけられるものと考えられる。

Ａｅ06住居址

遺　構（図版７・写真図版４、５－ａ～ｄ）

この住居址はⅥａ層の上面で検出されたもので、Ａｄ56住居址の 8 m 南西に位置する。

規模は長軸径5.2m ±×短軸径2.9m ±を計り、平面形は楕円形を呈する。

埋土は炭化物を含む暗褐色土層・褐色土層・黄褐色土層・灰黄褐色土層・にぶい黄褐色土層

で構成されている。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴は、P_1（径８cm±・深さ10cm±）・P_2（径15cm±・深さ９cm±）・P_3（径８cm±・深さ15cm±）・P_4（径10cm±・深さ27cm±）・P_5（径11cm±・深さ21cm±）・P_7（径10cm±・深さ18cm±）・P_8（径８cm±・深さ19cm±）・P_{10}（径８cm±・深さ21cm±）・P_{11}（径８cm±・深さ22cm±）・P_{12}（径８cm±・深さ20cm±）・P_{13}（径10cm±・深さ22cm±）・P_{14}（径９cm±・深さ22cm±）・P_{15}（径８cm±・深さ12cm±）・P_{16}（径８cm±・深さ11cm±）・P_{17}（径11cm±・深さ17cm±）・P_{18}（径８cm±・深さ14cm±）・P_{19}（径10cm±・深さ19cm±）・P_{20}（径10cm±・深さ９cm±）・P_{21}（径10cm±・深さ18cm±）・P_{23}（径８cm±・深さ９cm±）・P_{24}（径10cm±・深さ９cm±）・P_{27}（径９cm±・深さ14cm±）・P_{28}（径９cm±・深さ８cm±）・P_{29}（径６cm±・深さ８cm±）・P_{34}（径20cm±・深さ46cm±）・P_{35}（径20cm±・深さ31cm±）の26個で構成され、楕円形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1-P_{29}・P_2-P_{28}・P_3-P_{24}・P_4-P_{20}・P_5-P_{19}・P_7-P_{17}・P_8-P_{15}・$P_{10}-P_{14}$・$P_{13}-P_{35}-P_{34}$がそれぞれ対になる在り方をしている。

以上の柱穴のほかにこの住居址内には、P_6（径10cm±・深さ15cm±）・P_9（径８cm±・深さ13cm±）・P_{22}（径８cm±・深さ22cm±）・P_{25}（径７cm±・深さ６cm±）・P_{26}（径９cm±・深さ７cm±）・P_{29}（径６cm±・深さ８cm±）・P_{30}（径12cm±・深さ10cm±）・P_{31}（径34cm±－10cm±・深さ５cm±－34cm±）・P_{32}（径15cm±・深さ10cm±）・P_{33}（径７cm±・深さ６cm±）・P_{35}（径20cm±・深さ31cm±）・P_{36}（径35cm±・深さ13cm±）の柱穴状のピット群が検出されている。しかしこれらのピット群の具体的な位置づけについては不明である。

壁高は、北壁23cm±・東壁40cm±・南壁47cm±・西壁40cm±を計る。

Ａｄ56住居址と同様に住居址内に炉は認められなかった。

なお埋土中から炭化材が少量出土しているが、住居址の中央部分に検出された炭化材は床面直上のレベルに位置していた。

出土遺物（図版17－１～11・写真図版14－１～11）

出土遺物は、床面上から得られた土器片（１～８）と石器（９～11）である。

土器片はいずれも体部の破片であり、胎土には繊維が含まれている。地文として羽状縄文が施されている。色調は外面がにぶい橙色で、内面が暗褐色を呈する。また内面にはナデ調整がみられる。これらの土器片は、地文の原体や胎土の性状からみて、長瀬Ｂ遺跡において貝殻文土器と共伴して出土している土器と同種のものと考えられる。出土した石器は、不定形石器（９）・使用痕のある剝片（10・11）である。９は石器の長軸に直交する縁辺の一部に刃部加工がなされている。10は剝片の長軸に平行する縁辺に使用痕が認められるものである。11は貝殻状の剝片であり、剝片の長軸に直交する縁辺に使用痕が認められる。

Ａｆ53住居址

遺　構（図版８、９・写真図版６－ａ～ｃ）

この住居址はＶ層の上面で検出されたが、住居址の所属時期や埋土の性状などからみて、実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。住居址内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、このＡｆ53住居址内には床面・炉・壁などを何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す７棟の住居址が存在していることが判明した。これらの７棟の住居址の新旧関係は不明であるが、一応ここではＡｆ53－ａ住居址・Ａｆ53－ｂ住居址・Ａｆ53－ｃ住居址・Ａｆ53－ｄ住居址・Ａｆ53－ｅ住居址・Ａｆ53－ｆ住居址・Ａｆ53－ｇ住居址と仮称する。これらの住居址について以下に記載するが、柱穴配置以外の各住居址に共通する事項についてまず一括して述べることとする。

規模は径7.3m ±×7.1m ±を計り、平面形は円形を呈する。

埋土は黒褐色土層・黄褐色土層・褐色土層などで構成されている。これらの土層の中で黒褐色土層や一部の黄褐色土層には少量の炭化物が包含されている。

床面は非常に堅くしまっていて、全体的に凹凸がみられる。

壁高は、北壁７cm±・東壁43cm±・南壁９cm±を計る。西壁は調査以前にすでに削剝されて消失している。

幅12cm±～20cm±・深さ５cm±～10cm±を計る壁溝が、壁に沿って一巡する形で設けられている。この壁溝の底面には柱穴状のピットのような落ちこみが多くあり、かなりの凹凸がみられる。

炉は住居址の東壁寄りに位置する石囲炉である。120cm±×90cm±の隅丸長方形状に構築されている。炉の構成礫は粒径15cm±～55cm±の安山岩類亜角礫であり、床面から25cm±の深さに埋置されている。炉の使用面は床面より18cm±低いレベルにある。この使用面下には火熱により層厚６cm±を計る現地性の焼土が形成されている。炉内の使用面より上位の部分は炭化物を少量含む黒色土や暗褐色土などで充塡されていた。東側炉縁から東壁にかけて極めて浅い凹みが認められた。またこの部分に粒径30cm±×10cm±の安山岩類亜角礫が１個存在していた。もしこの浅い凹みが炉に付随して作られた「前庭部」で残存していた礫が「前庭部」の構成礫であるという見方をすれば、Ａｆ53住居址の炉は形態的に複式炉の系統を引くものであるといえるであろう。

住居址内で炉に近接した位置に２個の貯蔵穴状のピット（P_3・P_{19}）が確認された。P_3は炉より130cm±北東にあり、径150cm±×120cm±・深さ20cm±の規模をもち楕円形を呈する。なおP_3の底面から深鉢形土器の底部が出土している。P_{19}は炉より110cm±南西にあり、径80cm±×60cm±・深さ13cm±の規模をもち楕円形を呈する。

Ａｆ53－ａ住居址

この住居址は、Ａｆ53住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_4（径55cm±・深さ70cm±）・P_{14}（径40cm±・深さ32cm±）・P_{20}（径35cm±・深さ74cm±）・P_{22}（径50cm±・深さ70cm±）の４個で構成され、菱形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_4－P_{20}・P_{14}－P_{22}、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ａｆ53－ｂ住居址

この住居址は、Ａｆ53住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径45cm±・深さ60cm±）・P_{13}（径45cm±・深さ72cm±）・P_{15}（径33cm±・深さ78cm±）・P_{20}（径35cm±・深さ74cm±）・P_{21}（径50cm±・深さ74cm±）の５個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{13}・P_{15}－P_{21}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ａｆ53－ｃ住居址

この住居址は、Ａｆ53住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径45cm±・深さ60cm±）・P_5（径25cm±・深さ35cm±）・P_8（径25cm±・深さ16cm±）・P_{13}（径45cm±・深さ72cm±）・P_{15}（径33cm±・深さ78cm±）・P_{20}（径35cm±・深さ74cm±）・P_{21}（径50cm±・深さ74cm±）の７個で構成され、六角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{21}・P_5－P_8－P_{20}・P_{13}－P_{15}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ａｆ53－ｄ住居址

この住居址は、Ａｆ53住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径45cm±・深さ60cm±）・P_{13}（径45cm±・深さ72cm±）・P_{15}（径33cm±・深さ78cm±）・P_{21}（径50cm±・深さ74cm±）・P_{23}（径40cm±・深さ75cm±）の５個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{21}・P_{13}－P_{15}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ａｆ53－ｅ住居址

この住居址は、Ａｆ53住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径45cm±・深さ60cm±）・P_{13}（径45cm±・深さ72cm±）・P_{15}（径33cm±・深さ78cm±）・P_{21}（径50cm±・深さ74cm±）・P_{22}（径50cm±・深さ70cm±）・P_{23}（径40cm±・深さ75cm±）・P_{24}（径35cm±・深さ65cm±）の７個で構成され、六角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{21}・P_{13}－P_{15}・P_{22}－P_{23}－P_{24}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ａｆ53－ｆ住居址

この住居址は、Ａｆ53住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径45cm±・深さ60cm±）・P_5（径25cm±・深さ35cm±）・P_8（径25cm±・深さ16cm±）・P_{13}（径45cm±・深さ72cm±）・P_{15}（径33cm±・深さ78cm±）・P_{20}（径35cm±・深さ74cm±）・P_{21}（径50cm±・深さ74cm±）・P_{23}（径40cm±・深さ75cm±）の８個で構成され、七角形の配置を示す。これらの柱穴の

中で、P_1—P_{21}・P_5—P_8—P_{20}・P_{13}—P_{15}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ａｆ53—ｇ住居址

この住居址は、Ａｆ53住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径45cm±・深さ60cm±）・P_5（径25cm±・深さ35cm±）・P_8（径25cm±・深さ16cm±）・P_{13}（径45cm±・深さ72cm±）・P_{15}（径33cm±・深さ78cm±）・P_{20}（径35cm±・深さ74cm±）・P_{21}（径50cm±・深さ74cm±）・P_{22}（径50cm±・深さ70cm±）・P_{23}（径40cm±・深さ75cm±）・P_{24}（径35cm±・深さ65cm±）の10個で構成され、八角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_{24}—P_{23}—P_{22}・P_1—P_{21}・P_5—P_8—P_{20}・P_{13}—P_{15}がそれぞれ対になる在り方をしている。

以上の柱穴のほかに住居址内の床面には、P_2（径25cm±・深さ25cm±）・P_6（径35cm±・深さ60cm±）・P_7（径20cm±・深さ31cm±）・P_9（径25cm±・深さ14cm±）・P_{10}（径50cm±・深さ42cm±）・P_{11}（径23cm±・深さ20cm±）・P_{12}（径25cm±・深さ８cm±）・P_{16}（径28cm±・深さ77cm±）・P_{17}（径35cm±・深さ19cm±）・P_{18}（径22cm±・深さ57cm±）の柱穴状のピット群が検出されている。しかしこれらのピット群の具体的な位置づけについては不明である。

出土遺物（図版17—12～14、18—16～28・写真図版14—12・13、15—14～25、16—26～28）

出土遺物は、床面上や床面直上などから得られた土器および土器片・石器・土製品である。

床面上の出土遺物としては、完形の小型土器（13）がある。13は体部下半部に膨らみをもつものである。地文としてＲＬの単節の斜縄文が施されている。外面は広い範囲に渡って黒斑が形成されたため、全体的に暗褐色の色調を示す。

住居址内のピット関係からは、土器（12）・石器（23）が出土している。12は貯蔵穴状のピットP_3の底面上から得られた深鉢形の土器で、口縁部～体部上半部の部分が欠損している。地文はＬＲの単節の斜縄文であるが、外面のナデ調整によって磨消されているためマダラ状になっている。土器は内外面とも明黄褐色の色調を示す。また内外面にススの付着が認められる。底部には木葉痕が明瞭に残されている。23は柱穴P_1の最下部から得られた使用痕のある剝片である。石器の頭部を除く周縁に使用痕が認められる。なお石器の頭部には打面が残存している。

以上に述べた遺物のほかはすべて床面直上から得られたものである。床面直上の出土遺物としては、土器片（14～20）・石器（22、24～28）・土製品（21）がある。土器片はすべて深鉢形土器の破片である。14は磨消縄文手法による曲線的な縄文区画文と鰭状の小突起とで文様が構成されている。15は口唇部に沿って幅１cm±の粘土紐が貼り付けられており複合口縁状を呈する。この粘土紐の上にもＬＲの単節の斜縄文が施されている。16は波状口縁の破片で丸味のある山形の小突起をもつ。この突起の頂部に粘土紐の貼付によって撚糸状を呈する口唇部が作り出されている。また突起部分には径８mm±の孔が設けられている。地文は縦位の撚糸文である。なお口縁部の内外面に赤色顔料状の付着物がみられる。17～19はＬＲの単節の斜縄文を地文とする深鉢形土器の破片である。17・18は同一個体の破片であり、口唇部が外反している。19は

口唇部が角張った状態に整形されている。17～19の胎土には金雲母が含まれている。20はＲＬの単節の斜縄文を地文とする深鉢形土器の破片である。17～20のいずれの内面も入念なミガキ調整が施されている。床面直上から出土した石器は、不定形石器１点（22）・使用痕のある剝片２点（24・25）・石斧１点（26）・磨石２点（27・28）である。22は石器の長軸に直交および平行する縁辺の一部に刃部加工されているものである。24は剝片の長軸に直交する縁辺に使用痕がある。25は剝片の長軸に平行する両側縁に使用痕がみられる。26は断面形がやや角張る磨製石斧である。刃部の一部が破損している。27は平面形が楕円形を呈する扁平な磨石である。ほとんど全面が使用されている。28の磨石も平面形が楕円形を呈するが、27に比べてやや不整である。主に側面の部分が使用されている。床面直上から出土した土製品は円盤状土製品１点(21)だけである。この円盤状土製品は単節の斜縄文を地文とする土器の破片の周囲を打ちかいて作られたものである。土器片の周囲を打ちかいただけで、周囲を擦った痕跡はない。

なお、これまでに記述した出土遺物のうち土器および土器片は、時期的に縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

Ｂｃ59住居址

遺　構（図版10・写真図版７－ａ～ｃ）

この住居址はIII層の上面で検出されたものであり、調査区南側の段丘崖寄りに位置している。住居址内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、このＢｃ59住居址内には床面・壁・炉などを何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す10棟の住居址が存在していることが判明した。これらの10棟の住居址の新旧関係は不明であるが、一応ここではＢｃ59－ａ住居址・Ｂｃ59－ｂ住居址・Ｂｃ59－ｃ住居址・Ｂｃ59－ｄ住居址・Ｂｃ59－ｅ住居址・Ｂｃ59－ｆ住居址・Ｂｃ59－ｇ住居址・Ｂｃ59－ｈ住居址・Ｂｃ59－ｉ住居址・Ｂｃ59－ｊ住居址と仮称する。これらの住居址について以下に記載するが、柱穴配置以外の各住居址に共有する事項についてまず一括して述べることとする。

規模は径3.4m±×3.1m±を計り、平面形は円形を呈する。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成されている。埋土の中位にある暗褐色土層中には炭化物が包含されている。

床面は全体的にやや凹凸をもち、堅くしまっている。

壁高は、北壁26cm±・東壁26cm±・南壁24cm±・西壁27cm±を計る。

壁溝は東壁～南壁～西壁の部分に断続的な形で設けられており、幅８cm±～18cm±・深さ３cm±～９cm±を計る。

炉は石囲炉の形態を示すもので、住居址中央部から少し東壁に寄ったところに位置している。

この石囲炉は、東側炉縁の構成礫のほとんどが抜き取られて欠損しているが、残存部の状況や礫の抜き取り痕の状態からみて、径60cm±×50cm±の円形を呈するものと考えられる。炉の構成礫は粒径15cm±～20cm±の安山岩類亜角礫であり、床面から15cm±の深さに斜位に埋置されている。炉の使用面は床面より7cm±低いレベルにある。この使用面下には火熱により層厚7cm±を計る現地性の焼土が形成されている。なお炉の東側部分の使用面上から完形の深鉢形土器が横位の状態で出土した。また東側炉縁際および西壁寄りの床面上から出土した粒径10cm±～15cm±を計る数個の安山岩類亜角礫が出土した。これらの礫は、火熱を受けた痕跡が認められることや先に述べた炉の礫の抜き取り痕と形状の点で符合することから判断して、炉の構成礫であったと思われる。

Ｂｃ59―ａ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径15cm±・深さ14cm±）・P_8（径30cm±・深さ21cm±）・P_{15}（径13cm±・深さ10cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｂｃ59―ｂ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_3（径12cm±・深さ20cm±）・P_{10}（径13cm±・深さ11cm±）・P_{16}（径17cm±・深さ25cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｂｃ59―ｃ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_3（径12cm±・深さ20cm±）・P_{10}（径13cm±・深さ11cm±）・P_{17}（径16cm±・深さ18cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｂｃ59―ｄ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_7（径15cm±・深さ11cm±）・P_{14}（径20cm±・深さ10cm±）・P_{18}（径20cm±・深さ11cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｂｃ59―ｅ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径20cm±・深さ15cm±）・P_9（径16cm±・深さ18cm±）・P_{13}（径16cm±・深さ27cm±）・P_{18}（径20cm±・深さ11cm±）の4個で構成され、長方形の配置を示す。

Ｂｃ59―ｆ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径20cm±・深さ15cm±）・P_8（径30cm±・深さ21cm±）・P_{14}（径20cm±・深さ10cm±）・P_{17}（径16cm±・深さ

18cm±）の4個で構成され、菱形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_2—P_{14}・P_8—P_{17}、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ｂｃ59—ｇ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_3（径12cm±・深さ20cm±）・P_8（径30cm±・深さ21cm±）・P_{13}（径16cm±・深さ27cm±）・P_{17}（径16cm±・深さ18cm±）の4個で構成され、菱形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_3—P_{13}・P_8—P_{17}、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ｂｃ59—ｈ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径15cm±・深さ14cm±）・P_6（径12cm±・深さ12cm±）・P_9（径16cm±・深さ18cm±）・P_{15}（径13cm±・深さ10cm±）・P_{16}（径17cm±・深さ25cm±）の5個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_6—P_{16}・P_9—P_{15}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｂｃ59—ｉ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径25cm±・深さ14cm±）・P_6（径12cm±・深さ12cm±）・P_9（径16cm±・深さ18cm±）・P_{15}（径13cm±・深さ10cm±）・P_{17}（径16cm±・深さ18cm±）の5個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_6—P_{17}・P_9—P_{15}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｂｃ59—ｊ住居址

この住居址は、Ｂｃ59住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径20cm±・深さ15cm±）・P_8（径30cm±・深さ21cm±）・P_{15}（径13cm±・深さ10cm±）・P_{16}（径17cm±・深さ25cm±）・P_{18}（径20cm±・深さ11cm±）の5個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_2—P_{15}・P_{18}—P_{16}がそれぞれ対になる在り方をしている。

以上の柱穴のほかに住居址内の床面には、P_4（径12cm±・深さ11cm±）・P_5（径15cm±・深さ9cm±）・P_{11}（径20cm±・深さ10cm±）・P_{12}（径15cm±・深さ9cm±）・P_{19}（径11cm±・深さ10cm±）・P_{20}（径16cm±・深さ16cm±）の柱穴状のピット群が検出されている。しかし、これらのピット群の具体的な位置づけについては不明である。

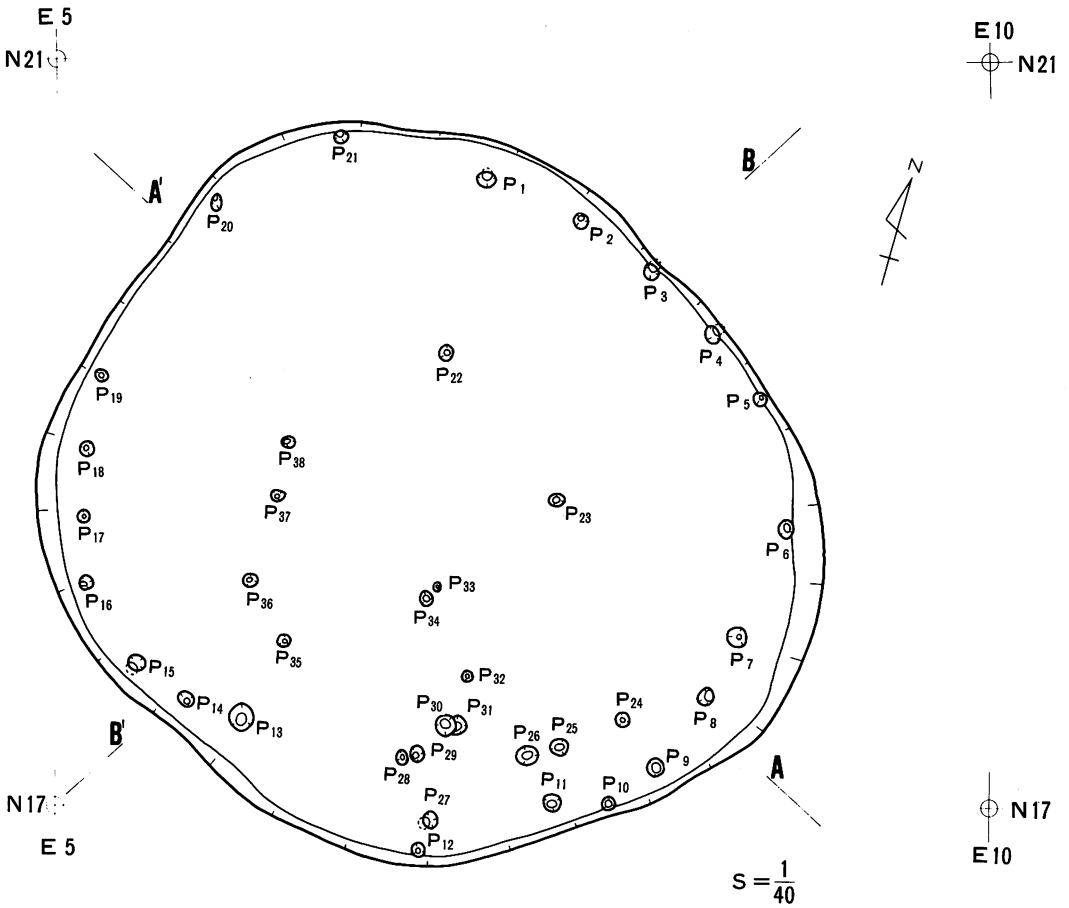
出土遺物（図版19--29～40・写真図版16—29～40）

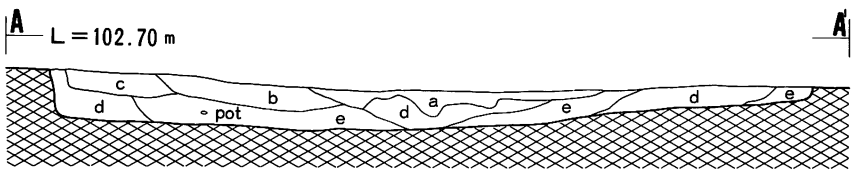
出土遺物は、炉から得られた土器や床面直上から得られた土器片・石器・土製品である。

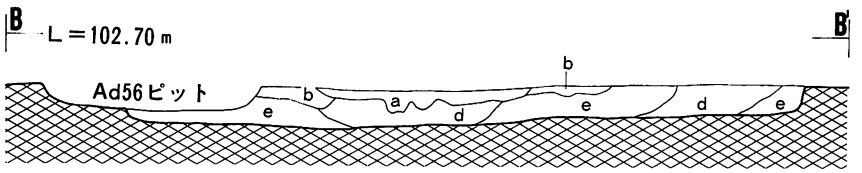
炉から得られた土器は、写真図版7—ｂに示したような完形の深鉢形土器である。この土器は体部中央部から下半部にかけて膨らみをもつもので、地文がＬＲの単節の斜縄文である。遺物展示会に出品後現在に至るまでこの土器の所在が不明であるため、本報告の図版の中に掲載することができなかった。

床面上から得られた遺物は、土器片（29～38）・石器（40）・土製品（39）である。土器片は文様の特徴により次のように大別できる。a．磨消縄文手法による縄文区画文が施文されているもの(29～31)、b．沈線文が施文されているもの(32～35)、c．地文が斜縄文のもの(36～38)となる。36･37は口唇部に沿って粘土紐が貼り付けられており、複合口縁状を呈する。石器(40)はスクレイパーであり、その長軸に平行する右側縁部に刃部が形成されている。この石器の頭部に打面が残されている。土製品（39）は円盤状土製品であり、縄文区画文に沿って円形の刺突文が施文された土器片の周囲を打ちかいて製作されたものである。土器片の周囲を打ちかいただけで擦った痕跡は認められない。平面の形状は円形を呈する。

これまでに記述した出土遺物の中で土器および土器片は、時期的にみて縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられるものと考えられる。



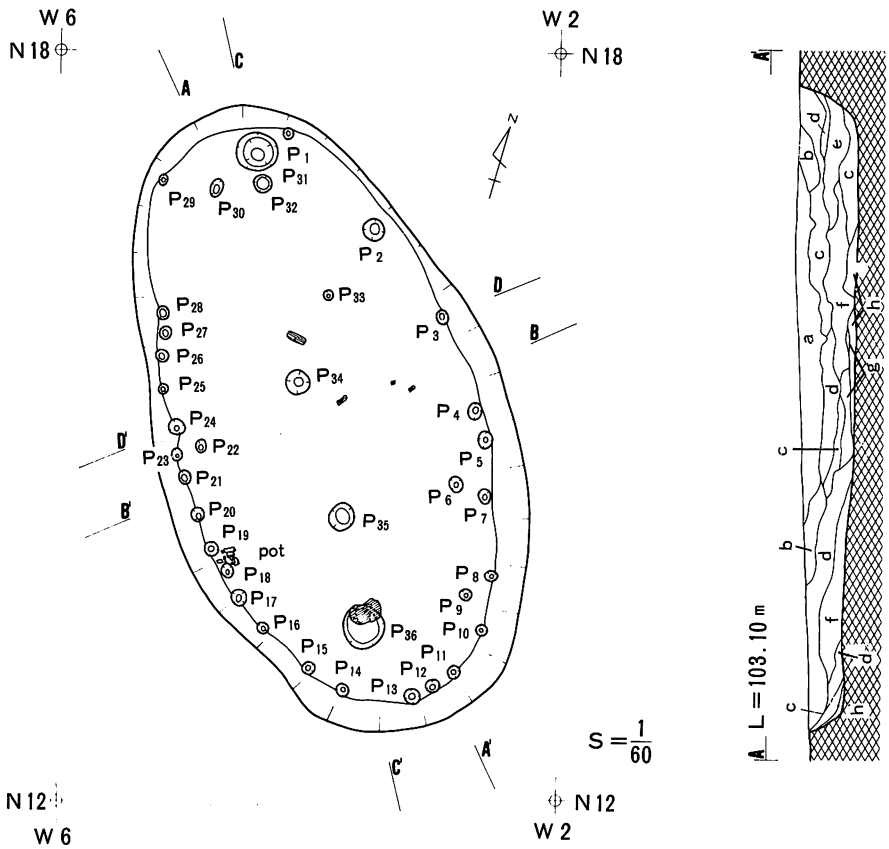




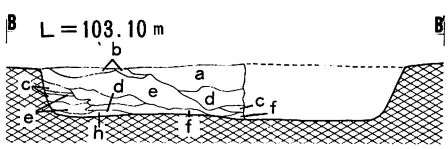
a．10YR3/3　暗褐色土層（含炭化物）
b．10YR3/4　暗褐色土層（含炭化物）
c．10YR4/4　褐色土層（含炭化物）
d．10YR5/4　にぶい黄褐色土層（含炭化物）
e．10YR5/8　黄褐色土層（含炭化物）

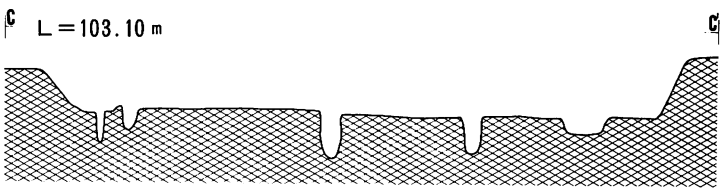
S = 1/40

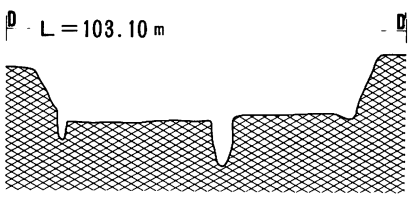
図版6　Ad56住居址



a．10YR3/3暗褐色土層(含炭化物)
b．10YR4/3にぶい黄褐色土層(含炭化物)
c．10YR4/6褐色土層(含炭化物)
d．10YR4/4褐色土層(含炭化物)
e．10YR5/8黄褐色土層(含炭化物)
f．10YR6/6灰黄褐色土層
g．10YR3/4暗褐色土層(含炭化物)
h．10YR5/3にぶい黄褐色土層(含炭化物)

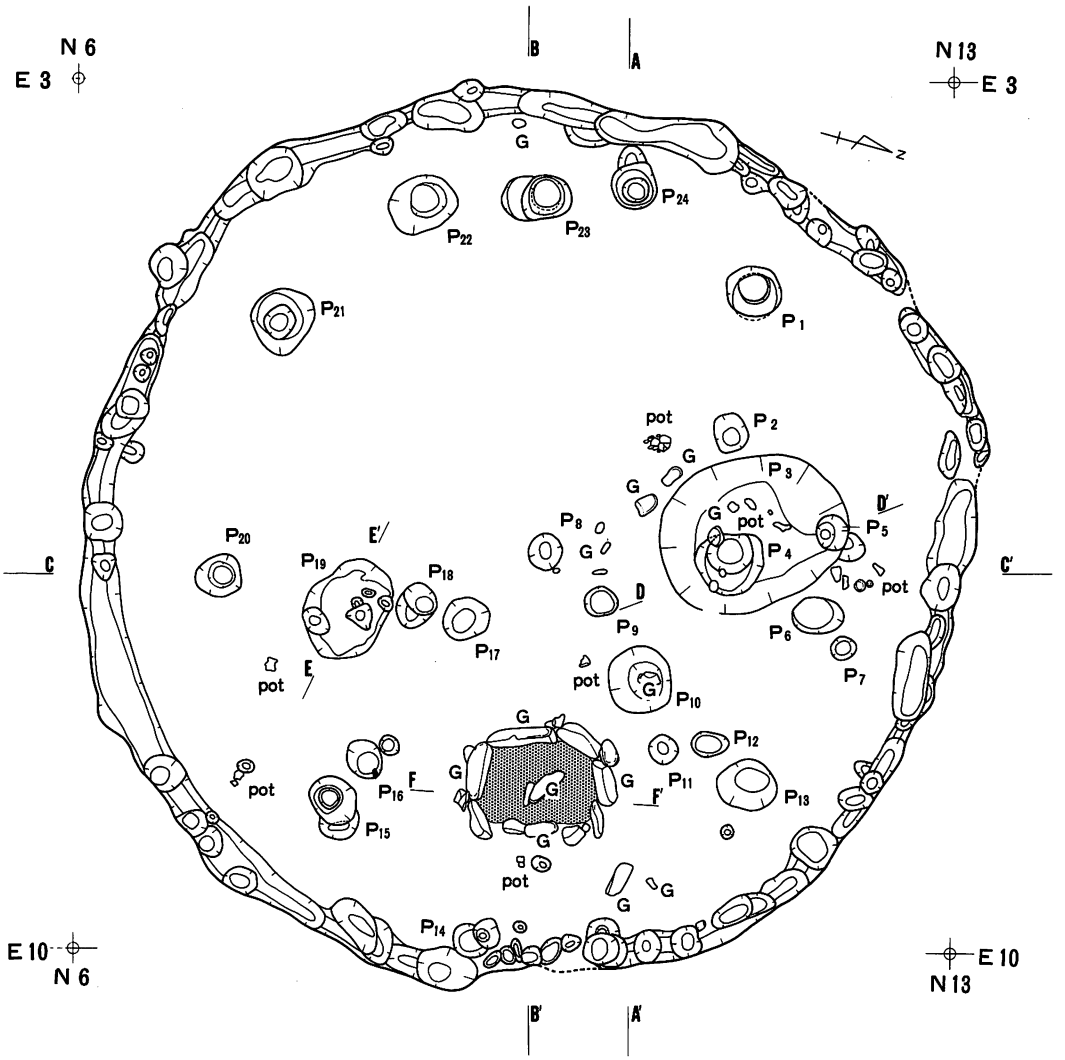


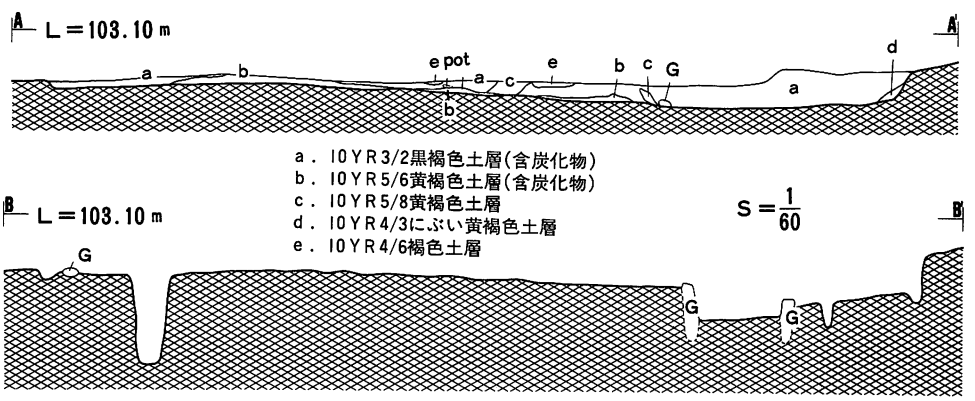




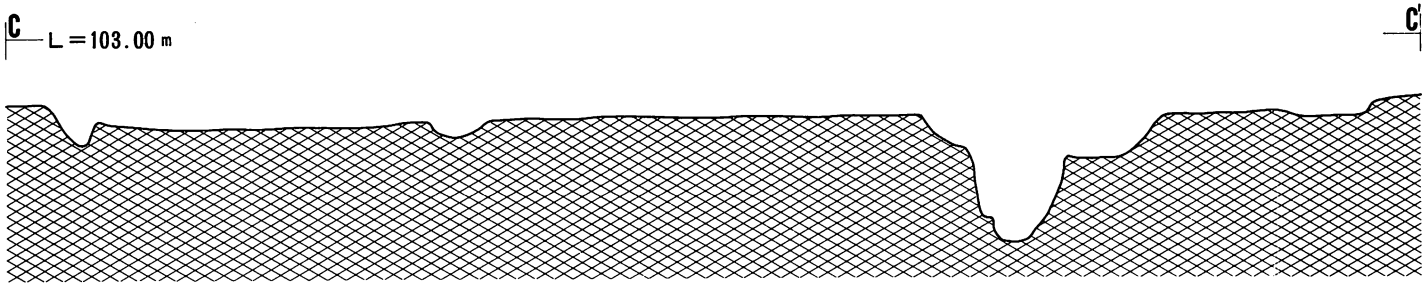
S = 1/60

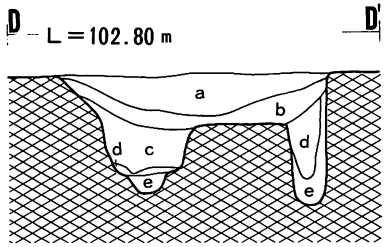
図版7　Ae06住居址



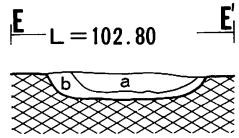


図版8　Af53住居址(1)



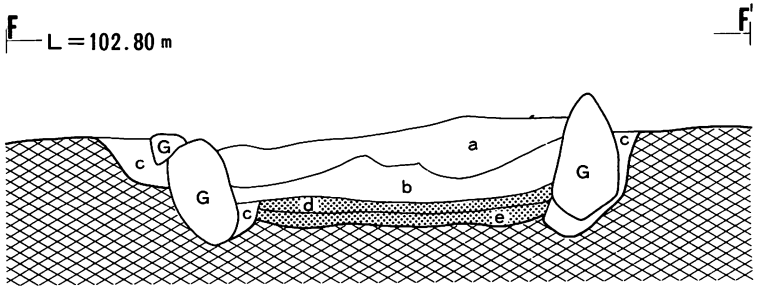


a．10YR2/1　黒色土層(含炭化物)
b．10YR3/3　暗褐色土層(含炭化物・礫)
c．10YR5/6　黄褐色土層
d．10YR1.7/1　黒色土層
e．10YR5/8　黄褐色土層



a．10YR3/3 暗褐色土層(含炭化物)
b．10YR4/6 褐色土層

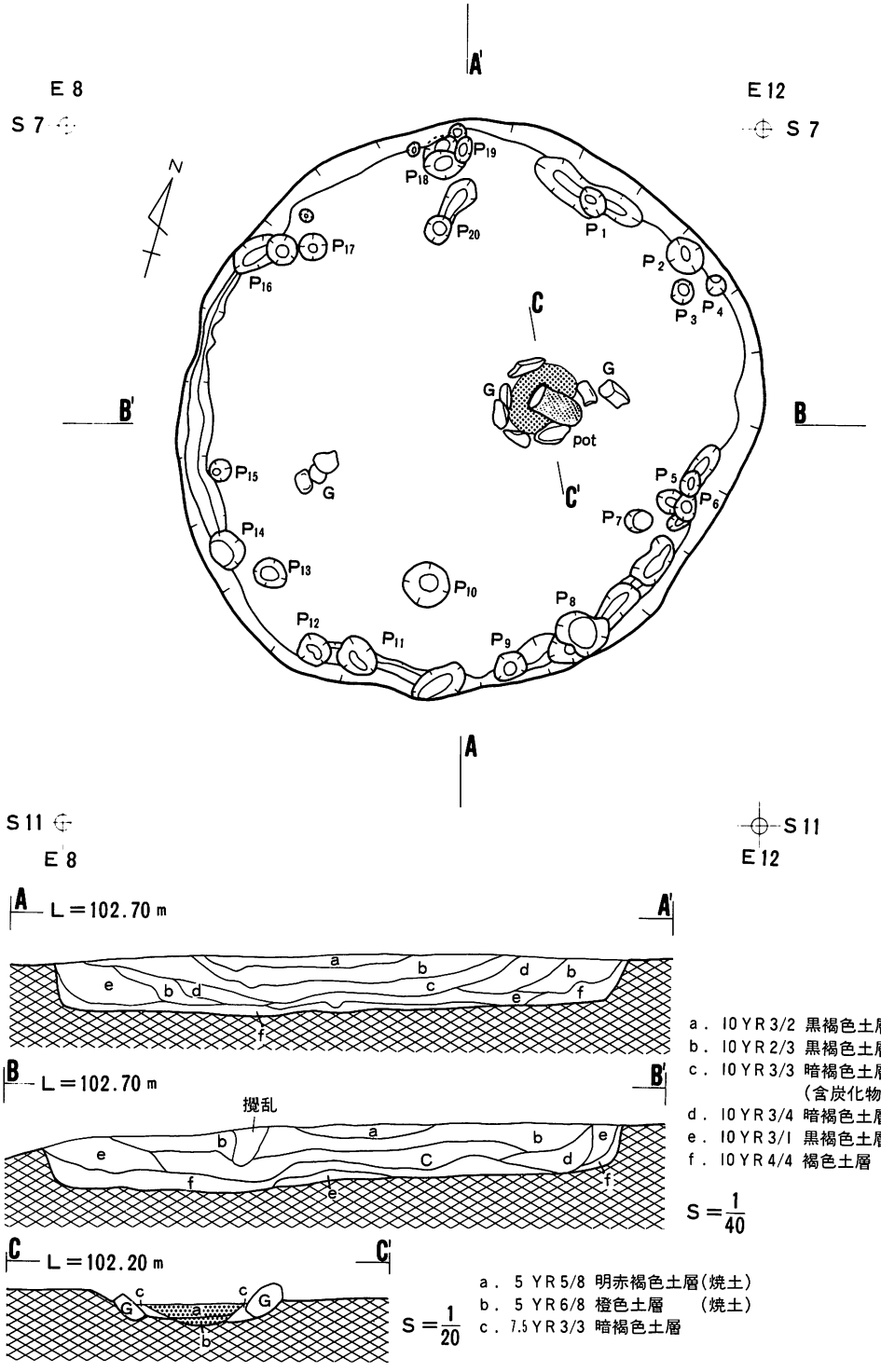
S＝1/40



S＝1/20

a．10YR2/1 黒色土層(含炭化物)
b．10YR3/3 暗褐色土層(含炭化物)
c．10YR5/4 にぶい黄褐色土層
d．5YR3/3 暗赤褐色土層(焼土)
e．5YR7/8 橙色土層(焼土)

図版9　Af53住居址(2)



図版10　Bc59住居址

② 炉　址

Ｂａ03炉址

遺　構（図版11―ａ・写真図版８―ａ）

この炉址はⅥａ層の上面で検出されたもので、Ａｅ06住居址の南東15m ±に位置する。炉の使用面は70cm±×40cm±の不整な楕円形状の広がりを示す。使用面下には層厚12cm±の赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。この炉址には断面形が皿形を呈する掘り方がみられる。掘り方は平面形が楕円形を呈し、開口部径80cm±×52cm±・底部径40cm±×20cm±・深さ18cm±の規模を計る。

出土遺物（図版19―41・42・写真図版17―41・42）

出土遺物は炉の使用面上から得られた41・42などの胎土に繊維が含まれている土器細片である。これらの土器片は、胎土の性状や地文の原体の状況などからみて、Ａｅ06住居址出土の土器片と同種のものと考えられる。

Ｂａ50炉址

遺　構（図版11―ｂ・写真図版8―ｂ）

この炉址はⅥａ層の上面で検出されたもので、Ｂａ03炉址の２ｍ ±北側に位置する。炉の使用面は95cm±×50cm±の不整な楕円形状の広がりを示す。使用面下には層厚８cm±の赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。この炉址にはＢａ03炉址と同様に断面形が皿形の掘り方がみられる。掘り方は平面形が楕円形を呈し、開口部径100cm±×55cm±・底部径80cm±×35cm±・深さ10cm±の規模を計る。出土遺物はない。

③ ピット

Ａｄ56ピット

遺　構（図版12―ａ・写真図版8―ｃ・ｄ）

このピットはⅥａ層の上面で検出されたが、出土遺物の時期や埋土の性状などからみて、実際は層位的にⅡ層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径150cm±×142cm±・底部径150cm±×140cm±・深さ12cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は皿形を呈する。

埋土は黒色土層・黄橙色土層・暗褐色土層などで構成されている。上位にある黒色土層中には炭化物が少量包含されている。

底面は平坦で堅くしまっている。

出土遺物（図版20—43～45・写真図版17—43～45）

出土遺物は埋土中から得られた43～45などの土器片である。43・44には磨消縄文手法による縄文区画文が施文されている。45は地文がＲＬの単節の斜縄文である。44・45の胎土に金雲母が含まれている。これらの土器片は時期的に縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

Ａｄ59ピット

遺　構（図版12—ｂ・写真図版8—ｅ・ｆ）

このピットはⅥａ層の上面で検出されたが、Ａｄ56ピット同様に出土遺物の時期や埋土の性状などからみて、実際は層位的にⅡ層の下位に位置するものであろう。Ａｄ56ピットはこのピットの50cm±北側の地点にある。規模は開口部径162cm±×158cm±・底部径160cm±×155cm±・深さ20cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は皿形を呈する。

埋土は暗褐色土層・黒色土層・黄橙色土層などで構成されている。

底面は平坦で堅くしまっている。

出土遺物（図版20—46～48・写真図版17—46～48）

出土遺物は埋土中から得られた46～48などの土器片である。46は沈線文が施されている。47には磨消縄文手法が用いられている。48は地文がＲＬＲの複節の斜縄文である。47・48の胎土に金雲母が含まれている。これらの土器片は時期的に縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

Ａｇ03ピット

遺　構（図版12—ｃ・写真図版９—ａ・ｂ）

このピットはⅥａ層の上面で検出されたが、埋土の性状からみて実際は層位的にⅡ層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径110cm±×105cm±・底部径93cm±×90cm±・深さ15cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は皿形を呈する。

埋土は黒褐色土層・黒色土層で構成されている。一部の黒褐色土層中に炭化物が包含されている。

底面は平坦で堅くしまっている。この底面上から長さ８cm±～30cm±・幅４cm±～10cm±の炭化材が対をなす形で検出された。出土遺物はない。

Ａｈ03ピット

遺　構（図版12—ｄ・写真図版９—ｃ・ｄ）

このピットはVIａ層の上面で検出されたが、埋土の性状からみて実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径135cm±×130cm±・底部径129cm±×123cm±・深さ20cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は皿形を呈する。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層で構成されている。一部の黒褐色土層中に炭化物が包含されている。

底面は平坦で堅くしまっている。南壁寄りの底面上から長さ６cm±～18cm±・幅３cm±～５cm±の炭化材が検出された。出土遺物はない。

Ａｈ06ピット

遺　構（図版13―ａ・写真図版９―ｅ・ｆ）

このピットはVIａ層の上面で検出されたが、埋土の性状からみて実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。前述のＡｇ03ピット・Ａｈ03ピットとは近接した配置関係にある。規模は開口部径150cm±×148cm±・底部径144cm±×140cm±・深さ13cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は皿形を呈する。

埋土は三つの黒褐色土層で構成されている。西壁寄りに存在する黒褐色土層以外の土層中には炭化物が包含されている。

底面は平坦で堅くしまっている。出土遺物はない。

Ａｈ50ピット

遺　構（図版13―ｂ・写真図版10―ａ・ｂ）

このピットはVIａ層の上面で検出されたが、埋土の性状からみて実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径155cm±×150cm±・頸部径150cm±×145cm±・底部径160cm±×155cm±・深さ90cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は頸部のくびれがゆるやかなフラスコ形を呈する。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層・黄褐色土層などで構成されている。黒褐色土層中には炭化物が包含されている。

底面は平坦で堅くしまっている。出土遺物はない。

Ａｉ12ピット

遺　構（図版13―ｃ・写真図版10―ｃ）

このピットはIII層の上面で検出されたものである。２分の１ほどが調査対象区外にあるためこのピットの規模・形状を正確に把握できないが、検出された部分から推定すると、開口部径

150cm±・底部径140cm±・深さ65cm±の規模をもち円形の平面形を示すものと考えられる。断面形は擂鉢形を呈する。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・黄褐色土層などで構成されている。

検出された部分の底面はゆるやかな曲面で僅かにやわらかい。出土遺物はない。

Ａｉ50ピット

遺　構（図版13―ｄ・写真図版10―ｄ～ｆ）

このピットはＶ層の上面で検出されたが、出土遺物の時期や埋土の性状などからみて、実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径125cm±×120cm±・底部径120cm±×115cm±・深さ53cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は浅いビーカー形を呈する。

埋土は黒褐色土層・黒色土層・暗褐色土層・にぶい黄褐色土層で構成されている。黒色土層および一部の黒褐色土層中には炭化物が包含されている。

底面はやや平坦で堅くしまっている。このピットはＡｉ53ピットの一部を切っている。

出土遺物（図版20―49～55・写真図版17―49～55）

出土遺物は埋土中から得られた土器片（49～53）と石器（54・55）である。49は磨消縄文手法による縄文区画文が施文されている。50～52は地文が網目状撚糸文である。53は無文のものである。54・55の２点の石器は石錘であり、埋土の上位から出土している。２点とも平面形が楕円形を呈する安山岩類の扁平な礫を素材としており、礫の短軸の両端に打ちかきが作られている。打ちかきは両面にみられる。

以上の出土遺物の中で、土器片は時期的に縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

Ａｉ53ピット

遺　構（図版14―ａ・写真図版11―ａ・ｂ）

このピットはＶ層の上面で検出されたが、埋土の性状やＡｉ50ピットとの切りあい関係からみて、実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径188cm±×150cm±・底部径70cm±×40cm±・深さ72cm±を計り、平面形は楕円形を示す。断面形は擂鉢形を呈する。

埋土は褐色土層・暗褐色土層・黒褐色土層・黄褐色土層で構成されている。褐色土層中には炭化物が少量包含されている。

底面はゆるやかな凹状を呈し僅かにやわらかい。このピットはＡｉ50ピットによって東側の一部分が切られている。出土遺物はない。

Ａｊ03ピット

遺　構（図版14－ｂ）

このピットはＶ層の上面で検出されたが、出土遺物の時期や埋土の性状からみて、実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。北壁の部分が消失しているが残存部から推定して、開口部径120cm±×107cm±・底部径107cm±×97cm±・深さ13cm±の規模で平面形が円形を示すピットと考えられる。断面形は皿形を呈する。

埋土は暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層で構成されている。褐色土層中には少量の炭化物が包含されている。

底面はやや平坦でやわらかい。

出土遺物（図版21－56～61・写真図版18－56～61）

出土遺物は底面から得られた56～60などの土器片と石器（61）である。56は無文の口縁部片である。57は沈線文が施文されている。58は縄文区画文が施文されている。59は地文がＲの無節の斜縄文である。60には網目状撚糸文が施文されている。出土した石器（61）は使用痕のある剝片であり、雁股状の形状を示す。剝片の長軸に平行する側縁に使用痕が認められる。

以上の出土遺物の中で、土器片は時期的に縄文時代中期末葉～後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

Ａｊ50ピット

遺　構（図版14－ｃ・写真図版11－ｃ・ｄ）

このピットはＶ層の上面で検出されたが、出土遺物の時期や埋土の性状などからみて、実際は層位的に下位に位置するものであろう。規模は開口部径135cm±×130cm±・底部径128cm±・深さ45cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は浅いビーカー形を呈する。

埋土は黒褐色土層・黄褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。黒褐色土層中には炭化物が包含されている。

底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物（図版21－62～65・写真図版18－62～65）

出土遺物は埋土中から得られた62～65などの土器片である。62～64は磨消縄文手法によって文様が形成されている。63は体部最下半部の破片であり、地文としてＬＲの単節の斜縄文が施されている。65はＲの無節の斜縄文が地文として施されている。これらの土器片は時期的に縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

Ａｊ53ピット

遺　構（図版14―ｄ・写真図版11―ｅ・ｆ）

このピットはＶ層の上面で検出されたが、出土遺物の時期や埋土の性状からみて、実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径117cm±×107cm±・底部径107cm±×103cm±・深さ48cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は浅いビーカー形を呈する。

埋土は黒色土層・黒褐色土層で構成されている。一部の土層中に炭化物が包含されている。

底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物（図版21―66～71・写真図版18―66～71）

出土遺物は埋土中から得られた66～71などの土器片である。66～70の土器片はいずれも磨消縄文手法による縄文区画文が施文されているものである。71は底部の破片であり、地文としてＬＲの単節の斜縄文が施されている。これらの土器片は時期的に縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

Ｂｂ12ピット

遺　構（図版15―ａ）

このピットは調査対象区の境界線部分の土層断面中にその存在が確認されたものである。このピットの規模・形状の詳細は不明であるが、確認された断面の状況から推定して、開口部径170cm±・底部径90cm±・深さ43cm±の規模で断面形が擂鉢形を呈するピットと考えられる。

埋土は黒色土層・黒褐色土層・黄褐色土層で構成されている。この埋土とＩ層の間に層厚５cm±の灰白色を呈する十和田ａ降下火山灰が不連続な状態で堆積している。

底面はやや平坦である。この底面上に層厚２cm±を計る橙色の現地性の焼土がみられた。出土遺物はない。

Ｂｂ53ピット

遺　構（図版15―ｂ・写真図版12―ａ・ｂ）

このピットはＶ層の上面で検出されたが、埋土の性状からみて実際は層位的にII層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径170cm±×153cm±・頸部径157cm±・底部径175cm±・深さ50cm±を計り、平面形は円形を示す。断面形は浅いフラスコ形を呈する。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・黄橙色土層・褐色土層などで構成されている。一部の黒褐色土層中には炭化物が包含されている。

底面は平坦で堅くしまっている。出土遺物はない。

Ｂｃ62ピット

遺　構（図版15―ｂ・写真図版12―ｃ）

このピットはⅥａ層の上面で検出されたが、出土遺物の時期や埋土の性状からみて、実際は層位的にⅣ層の上位に位置するものと考えられる。規模は開口部径140cm±×110cm±・底部径110cm±×77cm±・深さ14cm±を計り、平面形は楕円形を示す。断面形は皿形を呈する。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層で構成されている。

底面はやや平坦で僅かにやわらない。

出土遺物（図版22―72・73・写真図版19―72・73）

出土遺物は底面上から得られた72・73などの土器片である。72・73は同一個体の深鉢形土器の破片である。これらの土器片には地文として羽状縄文が施されている。またその胎土には多くの繊維が含まれている。以上の土器片は時期的に縄文時代前期中葉から末葉に位置づけられるものと考えられる。

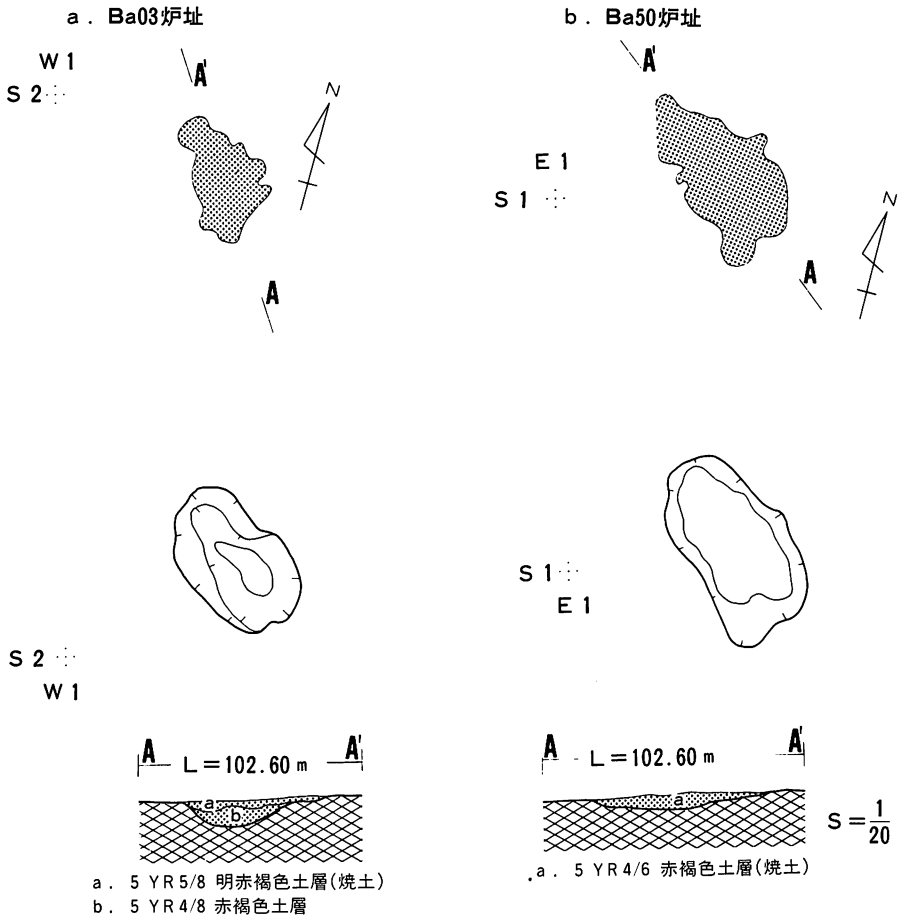
Ｂｄ53ピット

遺　構（図版15―ｄ・写真図版12―ｄ・ｅ）

このピットはⅤ層の上面で検出されたが、埋土の性状からみて実際は層位的にⅡ層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径166cm±×143cm±・頸部径153cm±×130cm±・底部径175cm±×150cm±・深さ50cm±を計り、平面形は楕円形を示す。断面形は浅いフラスコ形を呈する。

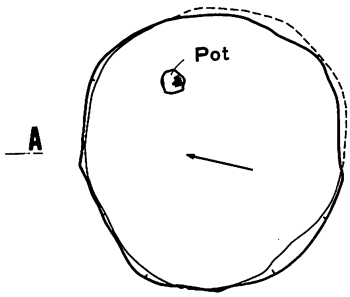
埋土は黒色土層・褐色土層・暗褐色土層・黄褐色土層などで構成されている。上位にある黒色土層中には少量の炭化物が包含されている。

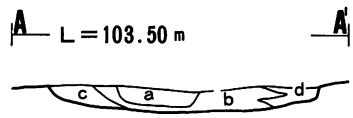
底面は平坦で堅くしまっている。出土遺物はない。


a．Ba03炉址
W 1
S 2
A'
A
N
S 2
W 1
A
L＝102.60 m
A'
a
b
a．5 YR5/8 明赤褐色土層(焼土)
b．5 YR4/8 赤褐色土層
b．Ba50炉址
A'
E 1
S 1
A
N
S 1
E 1
A
L＝102.60 m
A'
a
S＝1/20
a．5 YR4/6 赤褐色土層(焼土)

図版11

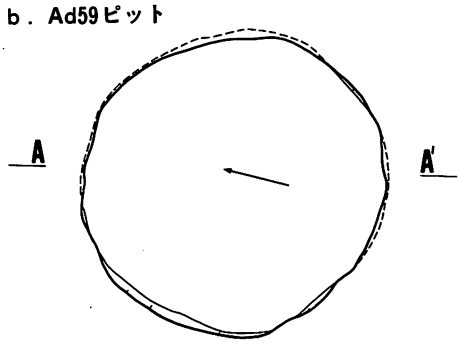
a．Ad56ピット

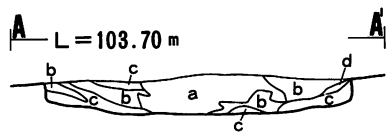




a．10YR2/1 黒色土層(含炭化物)
b．10YR2/2 黒褐色土層
c．10YR7/8 黄橙色土層
d．10YR3/3 暗褐色土層

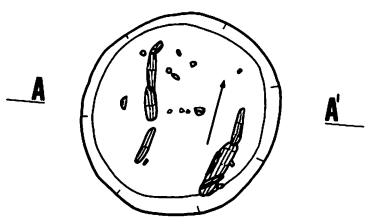
b．Ad59ピット

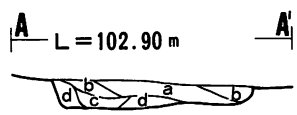




a．10YR3/3 暗褐色土層
b．10YR2/1 黒色土層
c．10YR2/3 黒褐色土層
d．10YR7/8 黄橙色土層

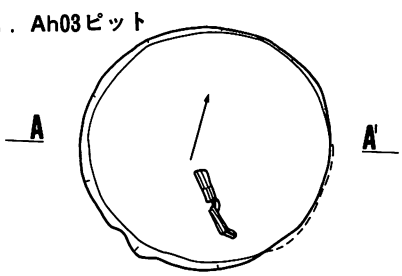
c．Ag03ピット

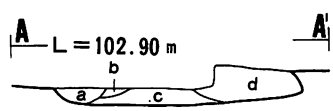




a．10YR3/1 黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR2/3 黒褐色土層
c．10YR2/2 黒褐色土層(含炭化物)
d．10YR2/1 黒色土層

d．Ah03ピット



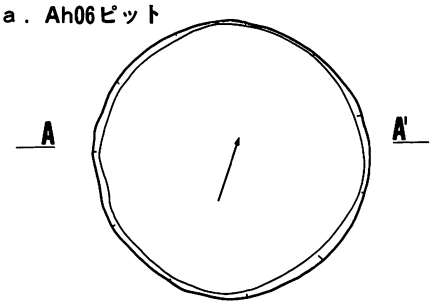


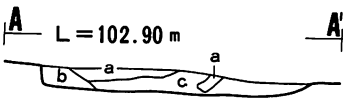
$S = \frac{1}{40}$

a．10YR3/2 黒褐色土層
b．10YR2/2 黒褐色土層
c．10YR3/1 黒褐色土層(含炭化物)
d．10YR3/3 暗褐色土層(含炭化材)

図版12

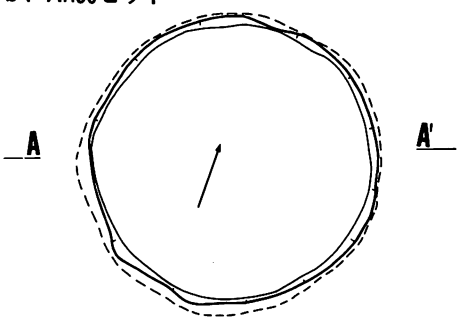
a．Ah06ピット

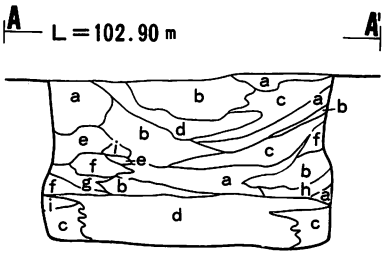




a．10YR2/3 黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR2/2 黒褐色土層
C．10YR3/1 黒褐色土層(含炭化物)

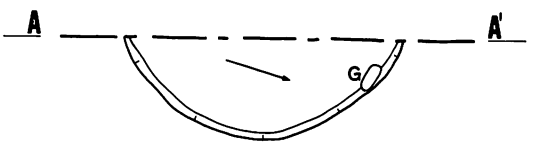
b．Ah50ピット



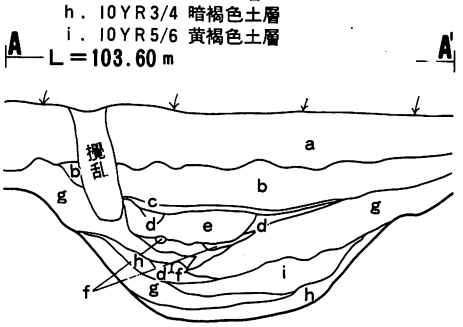


a．10YR2/2 黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR3/2 黒褐色土層(含炭化物)
c．10YR2/3 黒褐色土層
d．10YR3/3 暗褐色土層
e．10YR4/6 褐色土層
f．10YR2/1 黒色土層
g．10YR4/4 褐色土層
h．10YR3/4 暗褐色土層
i．10YR5/6 黄褐色土層

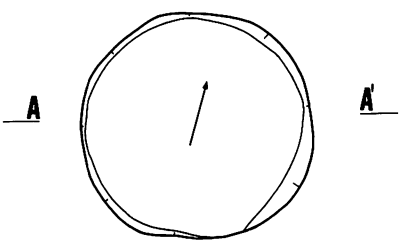
c．Ai12ピット

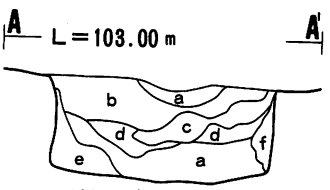


a．10YR2/2 黒褐色土層(Ⅰ層)
b．10YR2/1 黒色土層
c．10YR1.7/1 黒色土層
d．10YR2/3 黒褐色土層
e．10YR3/3 暗褐色土層
f．10YR5/8 黄褐色土層
g．10YR3/1 黒褐色土層
h．10YR3/2 黒褐色土層
i．10YR3/4 暗褐色土層



d．Ai50ピット



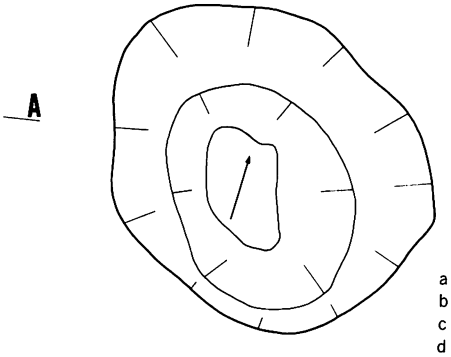


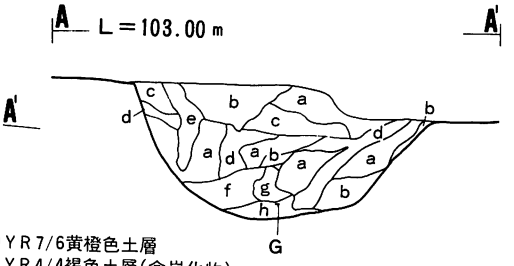
$S = \frac{1}{40}$

a．10YR2/2 黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR3/2 黒褐色土層
c．10YR2/1 黒色土層(含炭化物)
d．10YR3/1 黒褐色土層
e．10YR3/3 暗褐色土層
f．10YR4/3 にぶい黄褐色土層

図版13

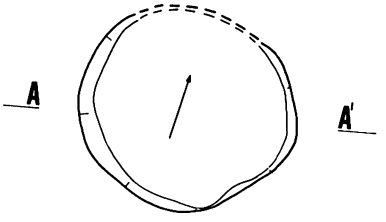
a．Ai53ピット

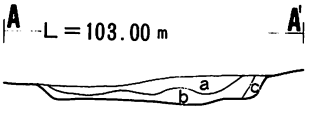




a．10YR7/6黄橙色土層
b．10YR4/4褐色土層(含炭化物)
c．10YR3/3暗褐色土層
d．10YR3/1黒褐色土層
e．10YR5/8黄褐色土層
f．10YR2/3黒褐色土層
g．10YR4/6褐色土層(含炭化物)
h．10YR5/6黄褐色土層

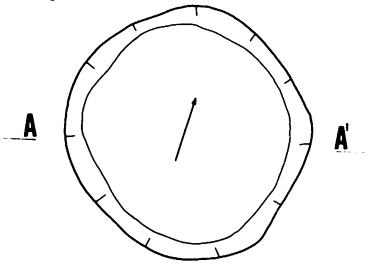
b．Aj03ピット

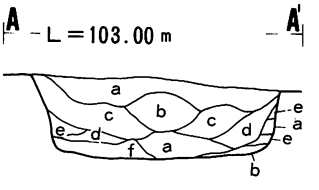




a．7.5YR3/4暗褐色土層
b．7.5YR2/2黒褐色土層
c．7.5YR4/6褐色土層(含炭化物)

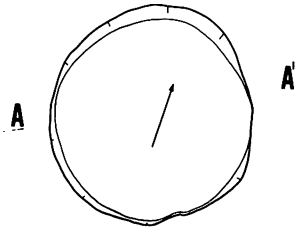
c．Aj50ピット

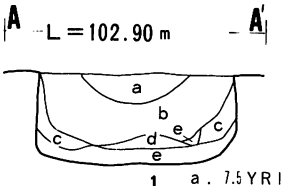




a．10YR2/2 黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR2/3 黒褐色土層(含炭化物)
c．10YR2/1 黒色土層
d．10YR1.7/1黒色土層
e．10YR5/8 黄褐色土層
f．10YR3/3 暗褐色土層

d．Aj53ピット



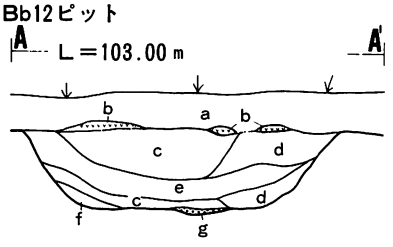


S＝$\frac{1}{40}$

a．7.5YR1.7/1黒色土層(含炭化物)
b．7.5YR2/1 黒色土層(含炭化物)
c．7.5YR3/1 黒褐色土層(含炭化物)
d．7.5YR2/2 黒褐色土層(含炭化物)
e．7.5YR3/2 黒褐色土層

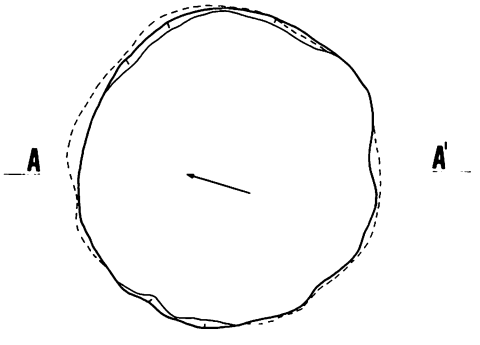
図版14

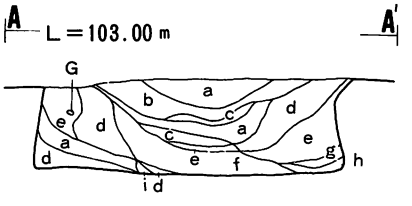
a．Bb12ピット



a．10YR3/1 黒褐色土層(Ⅰ層)
b．10YR8/2 灰白色土層(十和田a降下火山灰)
c．10YR2/1 黒色土層
d．10YR2/2 黒褐色土層
e．10YR1.7/1黒色土層
f．10YR5/6 黄褐色土層
g．5 YR6/8 橙色土層(焼土)

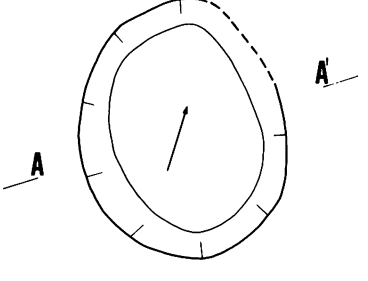
b．Bb53ピット

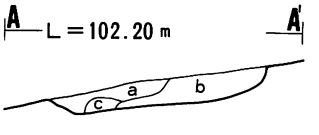




a．10YR3/2 黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR3/4 暗褐色土層
c．10YR2/3 黒褐色土層
d．10YR2/1 黒色土層
e．10YR1.7/1黒色土層
f．10YR3/3 暗褐色土層
g．10YR7/8 黄橙色土層
h．10YR4/4 褐色土層
i．10YR4/3 にぶい黄褐色土層

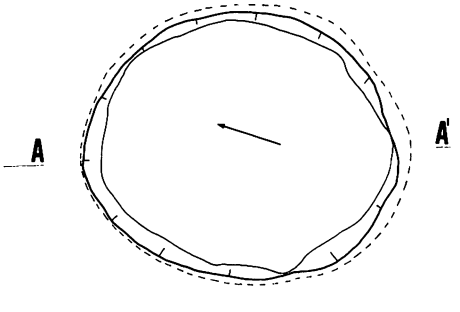
c．Bc62ピット

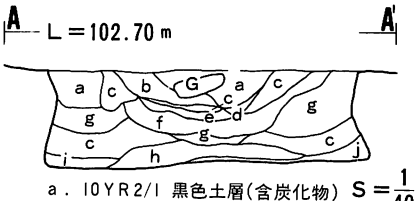




a．10YR2/2黒褐色土層
b．10YR3/2黒褐色土層
c．10YR3/4暗褐色土層

d．Bd53ピット





a．10YR2/1 黒色土層(含炭化物) $S=\frac{1}{40}$
b．10YR4/6 褐色土層
c．10YR2/2 黒褐色土層
d．10YR2/3 黒褐色土層
e．10YR3/3 暗褐色土層
f．10YR3/4 暗褐色土層
g．10YR1.7/1黒色土層
h．10YR5/6 黄褐色土層
i．10YR4/4 褐色土層
j．10YR3/2 黒褐色土層

図版15

(2) 中　世

① 竪穴住居址

Ｂｄ53住居址

遺　構（図版16・写真図版13）

この住居址はⅢ層の上面で検出されたもので、調査対象区南端の段丘崖寄りに位置する。東壁のほとんどが掘りすぎによって消失しているためこの住居址の正確な規模・形状を把握できないが、残存部から推定して4.0m ±×3.3m ±の規模をもち平面形が隅丸長方形を呈するものと考えられる。

埋土は黒色土層・暗褐色土層・黒褐色土層などで構成されている。床面より 4 cm±上方のレベルに炭化した材・カヤおよび現地性の焼土が認められた。炭化材は長さ 8 cm±～35cm±・幅 3 cm±～ 8 cm±を計り、カヤはこれらの材の間に散在している。現地性の焼土は 2 箇所に存在している。住居址北西隅にみられる焼土は155cm±×80cm±の楕円形状の広がりを示す。また住居址の中央部にみられる焼土は55cm±×40cm±の楕円形状の広がりを示す。これらの焼土の色調は橙色を呈する。

床面はやや平坦で堅くしまっている。

柱穴はP_1（径16cm±・深さ36cm±）・P_3（径21cm±・深さ32cm±）・南東隅の壁際に存在したであろうと思われる仮想柱穴 P_X・P_5（径23cm±・深さ40cm±）・P_6（径15cm±・深さ41cm±）・P_7（径17cm±・深さ42cm±）・P_8（径15cm±・深さ35cm±）・P_{12}（径18cm±・深さ50cm±）の 8 個で構成され、長方形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、住居址の中央部に確認された P_{12} は、開口部径67cm±×55cm±・底部径55cm±×40cm±・深さ 5 cmの規模で平面形が楕円形を示す掘りこみの底面中央部にある。この掘りこみの断面形は皿形を呈する。なおこの住居址の精査を担当した福士廣志の観察記録には、柱穴の底部に「意識的に固めたと考えられる硬くしまった土がつまっていた」とある。

以上の柱穴のほかにこの住居址内には、P_2（径20cm±・深さ20cm±）・P_4（径16cm±・深さ 5 cm±）・P_9（径25cm±・深さ10cm±）・P_{10}（径15cm±・深さ 8 cm±）・P_{11}（径35cm±・深さ 4 cm±）の柱穴状のピット群が検出されている。しかしこれらのピット群の具体的な位置づけについては不明である。

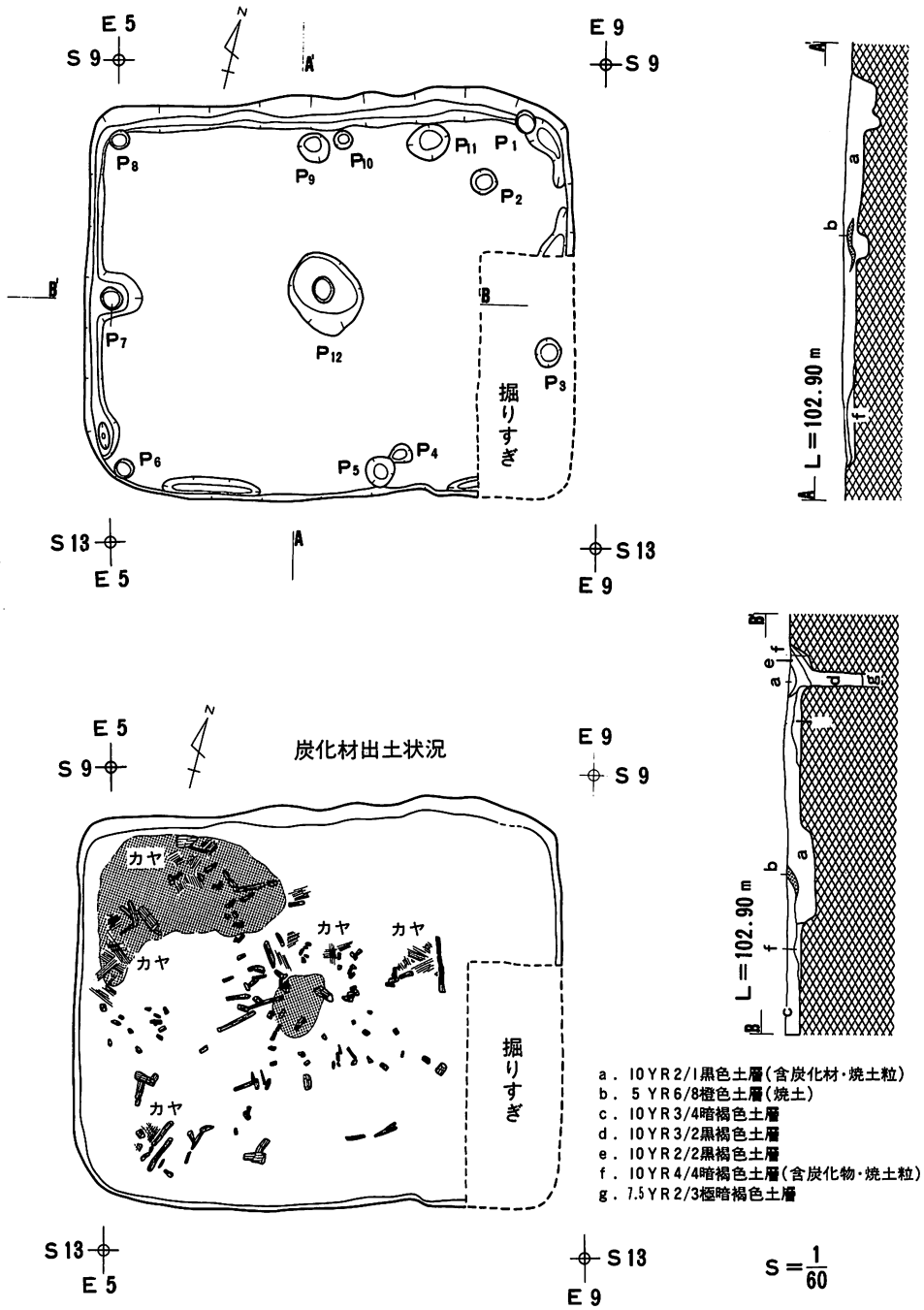
壁高は、北壁16cm±・東壁 5 cm±・南壁10cm±・西壁 7 cm±を計る。

幅10cm±～15cm±・深さ 5 cm±～ 7 cm±を計る壁溝が、北壁から西壁の部分では連続する形でまた南壁の部分では不連続の形で設けられている。

この住居址内の床面上には地床炉などの施設は確認されなかった。

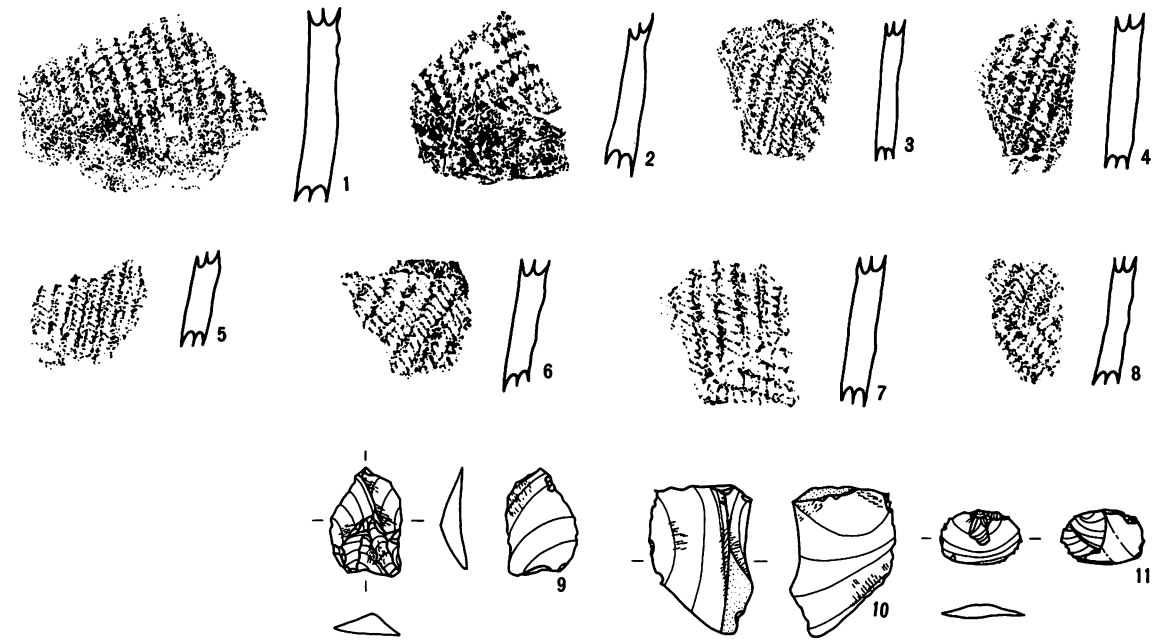
出土遺物（図版22—74・写真図版19—74）

出土遺物は埋土中から得られた縄文土器の細片と古銭（74）である。74は「元祐通宝」の銘のある古銭で、直径2.3cm・重量3.13ｇを計る。

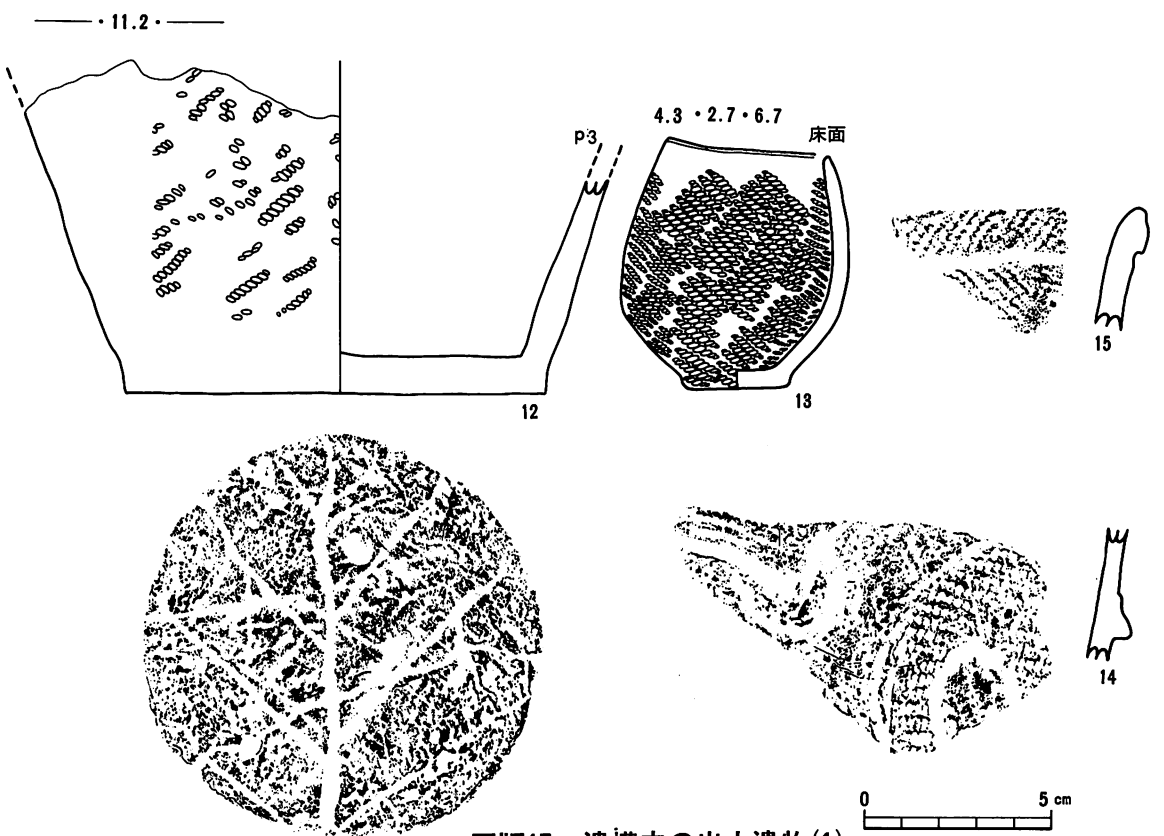


図版16　Bd53住居址

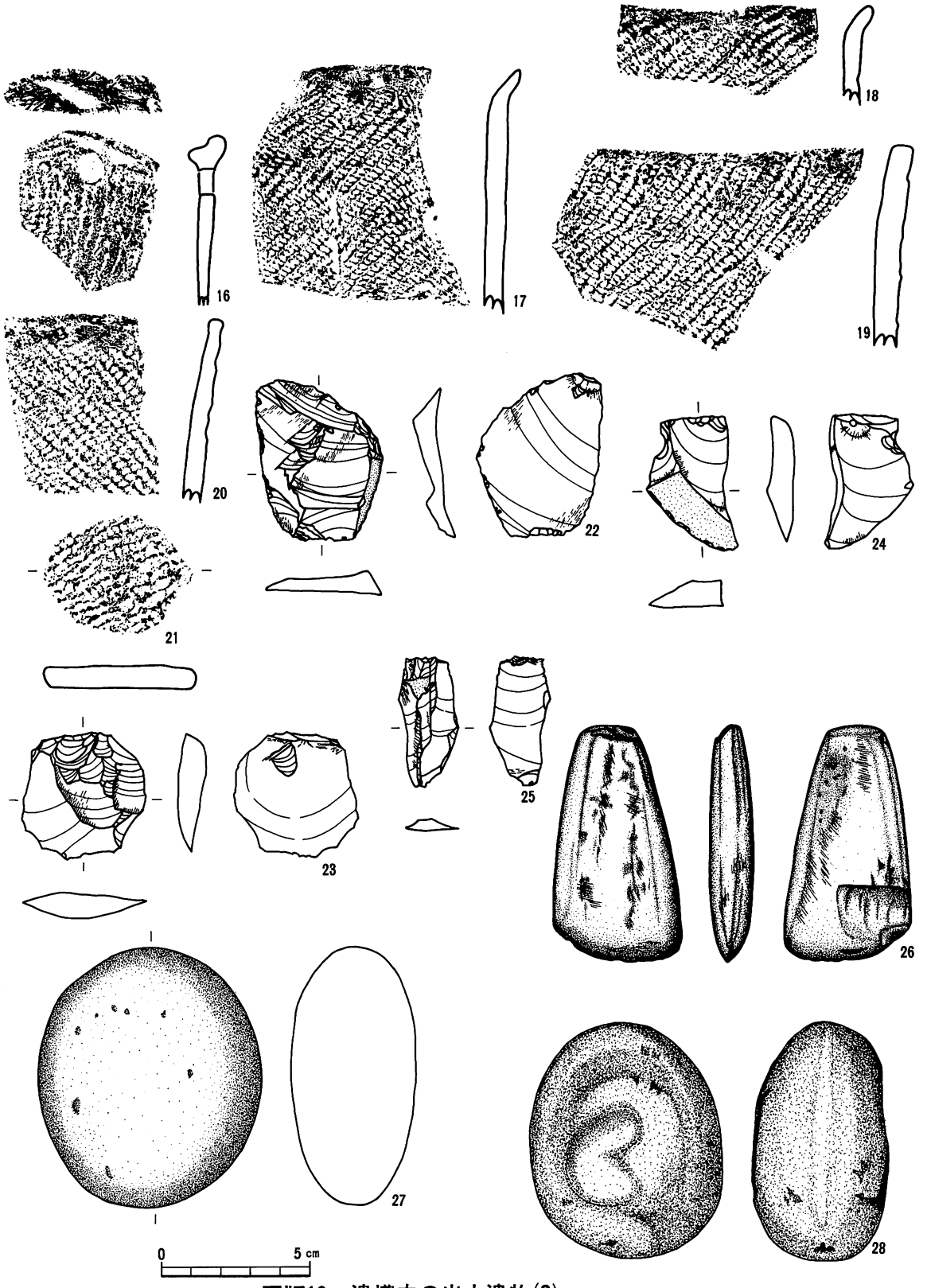
Ae06住居址（1～11）



Af53住居址（12～28）

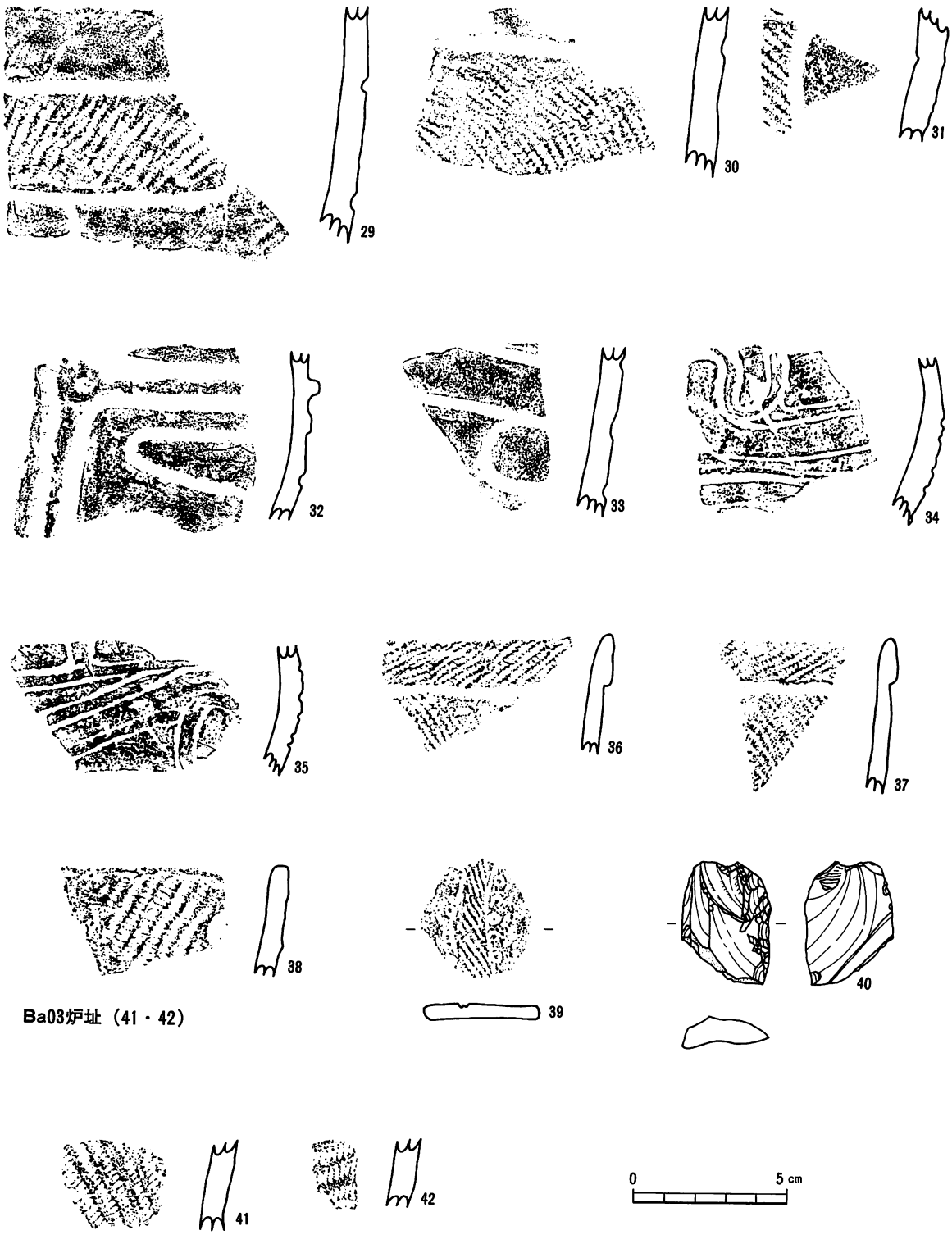


図版17　遺構内の出土遺物(1)



図版18　遺構内の出土遺物(2)

Bc59住居址（29～40）



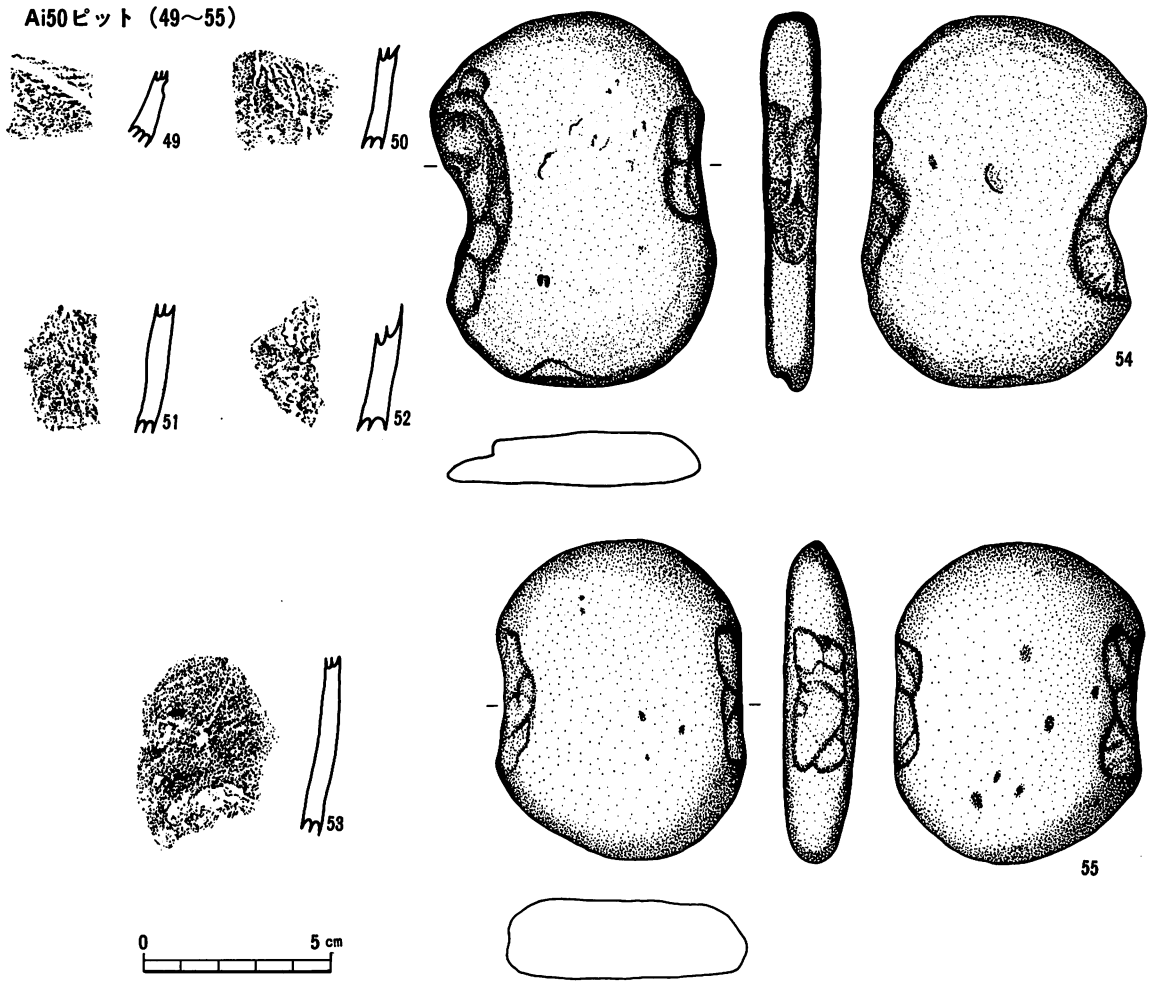
Ba03炉址（41・42）

図版19　遺構内の出土遺物(3)

Ad56ピット（43～45）

Ad59ピット（46～48）

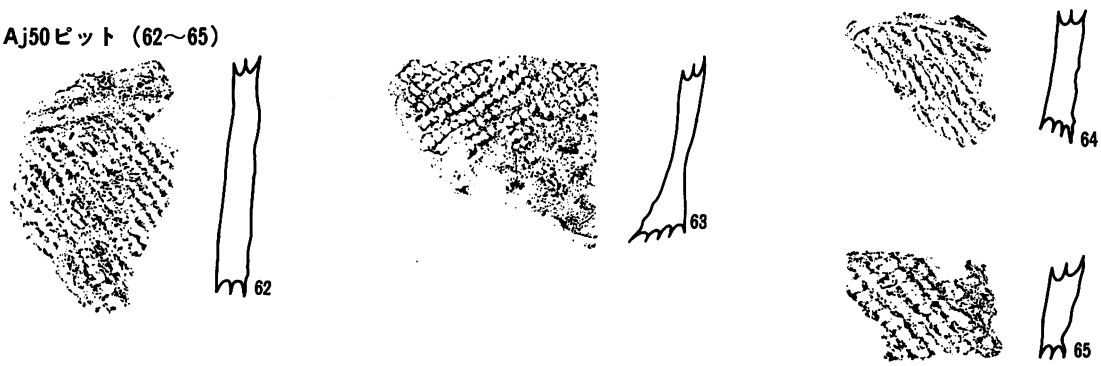
Ai50ピット（49～55）



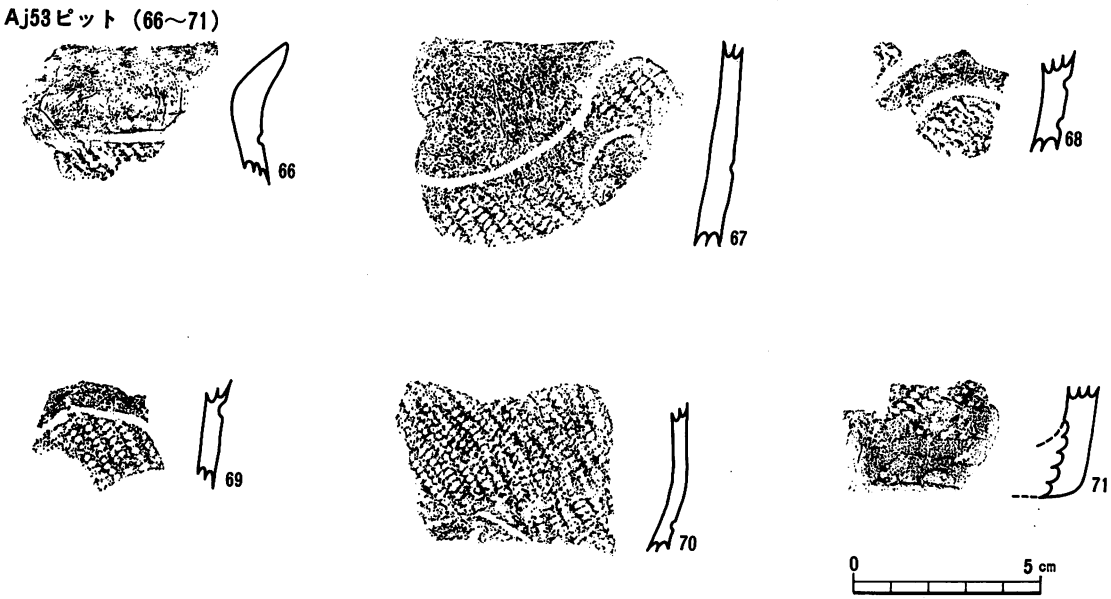
図版20　遺構内の出土遺物(4)

Aj03ピット（56～61）

Aj50ピット（62～65）

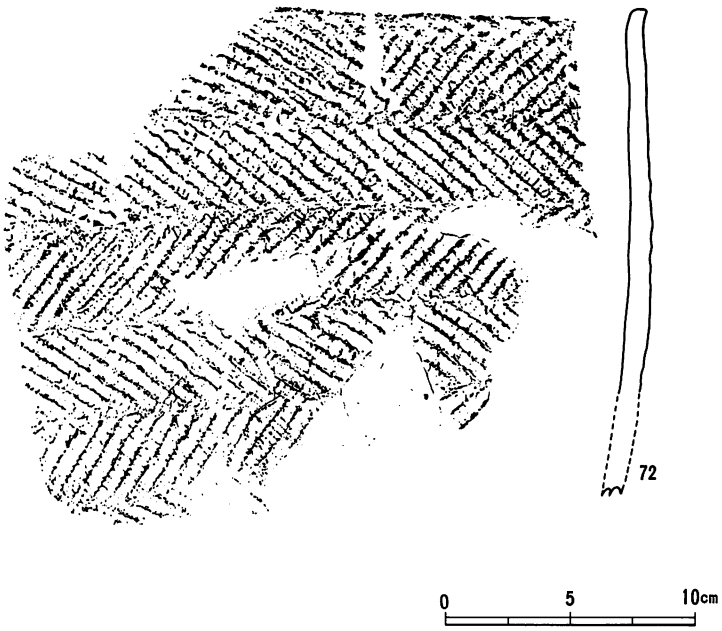


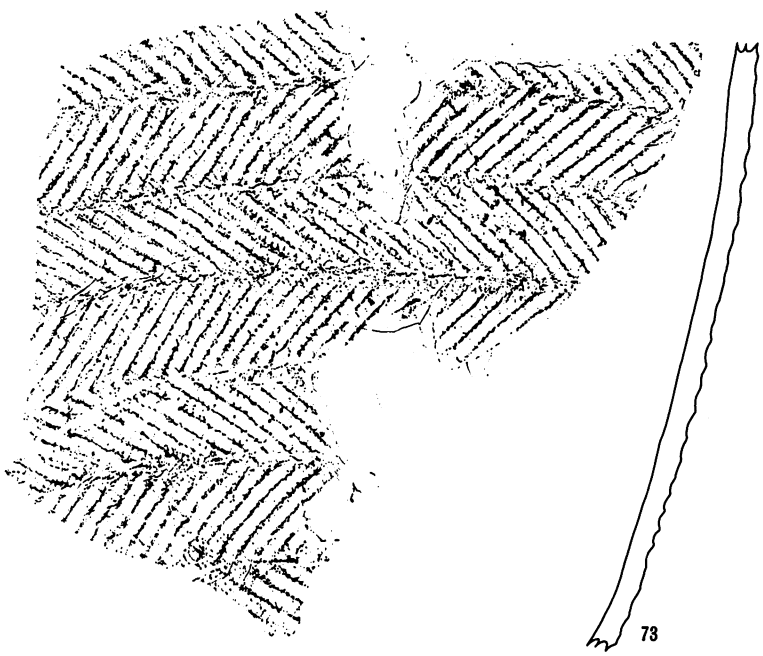
Aj53ピット（66～71）



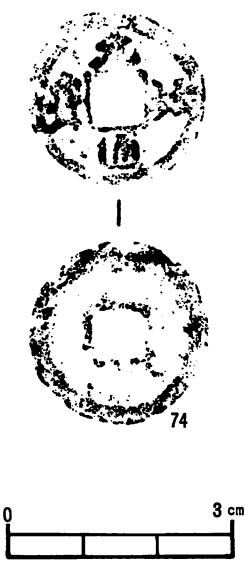
図版21　遺構内の出土遺物(5)

Bc62ピット（72・73）





Bd53住居址（74）



図版22　遺構内の出土遺物(6)

2．遺構外の出土遺物

家ノ上遺跡の遺構外の出土遺物は、土器・石器・土製品からなる。出土した土器は縄文土器と土師器である。石器としては、石匙・篦状石器・スクレイパー・使用痕のある剝片・石斧が出土している。土製品としては、土偶・滑車形耳飾りが出土している。以下にこれらの出土遺物について述べる。但し出土層位が不明なものや表採資料などは記述の対象から除外した。

（1）土　器

①　原始時代

〔1〕縄文土器

家ノ上遺跡の遺構外から出土した縄文土器を時期別に分類すると、縄文時代早期・前期・中期・後期の各時期に分けられる。これらの各時期の土器について記述するにあたって、早期の土器を第Ⅰ群土器、前期の土器を第Ⅱ群土器、中期の土器を第Ⅲ群土器、後期の土器を第Ⅳ群土器、というように名称を付し用いることとしたい。なお長瀬A遺跡の遺構外から出土した縄文土器についても、これらの名称を使用して記述を行ないたい。

1）**第Ⅰ群土器**（図版23―2～10・写真図版20―2～10）

この群に属する土器は、文様上の特徴により次のように分けられる。

A．地文に縄文が施文されているもの（2～10）

この類は地文の状況によって次のように細分できる。

a．地文が羽状縄文であるもの（2～6）

2～6はいずれもⅣ層下位から出土した土器片である。2・3は口縁部に施文された羽状縄文が数条の平行沈線によって区切られており刻目状を呈する。これらの土器片の内面にナデ調整がみられる。胎土には少量の繊維が含まれている。色調は明赤褐色を示す。4～6の胎土にも繊維が含まれている。5の内面には入念なナデ調整が加えられている。

b．地文が斜縄文であるもの（7）

7はⅣ層中位から出土した尖底土器の破片である。この尖底部には乳頭状の突起がみられる。地文はＬＲＬの複節の斜縄文である。胎土には多くの繊維が含まれている。

B．条痕状の沈線文が施文されているもの（8．9）

8．9はⅣ層下位から出土した土器片である。8は沈線文が羽状に施文されている。9は網目

状に沈線文が施文されている。これらの土器の胎土にも繊維が含まれている。

C．無文のもの（10）

10の土器片はVIa層の上面から出土している。外面にはヘラ状の工具による縦位のミガキ調整が施されている。内面にはスス状の付着物が認められる。10の胎土にも繊維が含まれているが、その量は上述の土器片のものに比べて極めて少ない。

2）**第II群土器**（図版23—11～15・写真図版20—11～15）

この群に属する土器は、施文方法の違いによって次のように分けられる。

A．撚り方の異なる原体によって羽状縄文が施文されているもの（11～13）

11～13はIV層上位から出土した土器片である。施文されてある羽状縄文は、いずれも条間の稜が明瞭であるのに対して節が不明瞭である。11には同じ列に逆に撚った原体を施文して構成された菱形状の文様がみられる。どの土器片も内面のナデ調整は入念であり、胎土に多くの繊維が含まれている。

B．原体の回転方向を変えて施文された斜行縄文が羽状を呈するもの（14・15）

14・15もIV層上位から出土した土器片である。これらの土器片はいずれも原体はＲＬであり、胎土に多くの繊維が含まれている。内面のナデ調整はやや粗い。70の口唇部上面には縄圧痕が施されている。

3）**第III群土器**（図版23—１、16～20・写真図版20—１、16～20）

この群に属する土器は、文様上の特徴により次のように分けられる。

A．磨消縄文手法による縄文区画文が施文されているもの（16～19）

16～19はII層下位から出土した土器片である。17・18には縄文区画文の端部に連続する形で鰭状の小突起がみられる。16・19の胎土には金雲母が微量に含まれている。

B．地文のみが施文されているもの（１・20）

１・20の土器片もII層下位から出土している。１はやや小型の深鉢形土器の破片であり、口縁部が内弯しながら立ちあがっている。地文はＬＲの単節の斜縄文である。内外面に多量のススが付着している。20の地文はＲの無節の斜縄文である。内面には入念な縦方向のミガキ調整が施されている。そして胎土には多量の金雲母が含まれている。

4）**第IV群土器**（図版23—21～30・写真図版20—21～23、21—24～30）

この群に属する土器は、文様上の特徴により次のように分けられる。

A．貼付による垂下文が施文されているもの（21・22）

21・22はII層下位から出土した土器片である。垂下文は波状口縁の頂部から施されている。21の波状口縁の頂部に母指状の貼付がみられる。どちらの土器片も内面が入念にみがかれており、胎土に少量の金雲母が含まれている。

B．帯状の磨消縄文が施文されているもの（23～25）

23～25はII層下位から出土した土器片である。23・24の文様を構成している帯状の磨消縄文は平行沈線状に施された直線的なものと渦巻状に施された曲線的なものとからなる。25の帯状の磨消縄文は巴形に施されている。いずれの土器片の内面も入念にみがかれている。

C．幾何学的な沈線文が施文されているもの（26～28）

26～28はII層下位から出土した土器片である。26・27は直線的な沈線と曲線的な沈線とで文様が構成されている。いずれの土器片の内面にも入念なミガキ調整がみられる。

D．網目状撚糸文が施文されているもの（29・30）

29・30の土器片もII層下位から出土している。30の網目は29に比べて小さい。どちらの土器片も胎土に粗粒の砂を含み、浅黄橙色の色調を示す。

② 古 代

〔1〕**土師器**（図版24—31～33・写真図版21—31～33）

Bb15グリッドのII層上位から3点の土師器（31～33）が出土した。31・32は輪積み成形による長胴形の甕の口縁部片である。外面の口縁部～体部上半部には縦方向のハケ目がみられる。外面の口唇部および内面の口縁部には横ナデがみられる。内面の体部上半部は横位のナデ調整である。33は甕の底部片である。底部には木葉痕が明瞭に残されている。外面の体部下半部にはヘラケズリが施されている。これらの土器片は灰黄褐色の色調を示し、焼成は大変良好である。

（2）石　器

①　原始時代

〔1〕**石　匙**（図版25―1・2・写真図版21―34・35）

出土した石匙は2点（1・2）でII層下位から得られている。1は石器の長軸方向につまみ部が作り出されている石匙である。この腹面には第一次剥離面が残されている。2は剥片剥離作業の過程で得られた石匙の形をした剥片に部分的に加工を施して製作されたものである。石器の長軸方向に対して右側につまみ部がある。この背面には自然面が残されている。

〔2〕**箆状石器**（図版25―3・写真図版21―36）

出土した箆状石器は1点（3）でVIa層上位から得られている。この石器の平面形は三角形状を示し、縦断面形の腹面側の部分は直線的である。

〔3〕**スクレイパー**（図版25―4～10・写真図版21―37～43）

出土したスクレイパーは7点（4～10）であり、いずれもVIa層上位から得られている。これらのスクレイパーは、刃部の位置により次のように分けられる。

A．石器の長軸と直交する縁辺に刃部が形成されているもの（4～6）

4の頭部にはネガティブバルブがみられる。5は長軸方向の両端に刃部が形成されている。この右側縁部には折断面がみられる。6の背面および腹面の一部にピッチ状の付着物が認められる。

B．石器の長軸に平行する縁辺に刃部が形成されているもの（7～10）

7は打面の反対方向に刃部が形成されている。8の刃部の剥離調整はやや粗い。9の左側縁部に折断面がみられる。10は平面形が三日月形を示すもので、両面の剥離調整は入念である。

〔4〕**使用痕のある剥片**（図版26―11・12・写真図版21―44・45）

使用痕のある剥片は2点（11・12）出土している。2点ともVIa層上位から得られたものである。11は剥片の長軸に平行する両側縁部に使用痕がみられる。12も11と同じような位置関係にある両側縁部に使用痕が認められる。

〔5〕**石　斧**（図版26―13・14・写真図版22―46・47）

出土した石斧は2点（13・14）である。どちらも磨製石斧であり、II層下位から得られたものである。13は頭部の部分が欠損しており、また14は刃部の部分が欠損している。13の刃部は破損が著しい。

（3）土　製　品

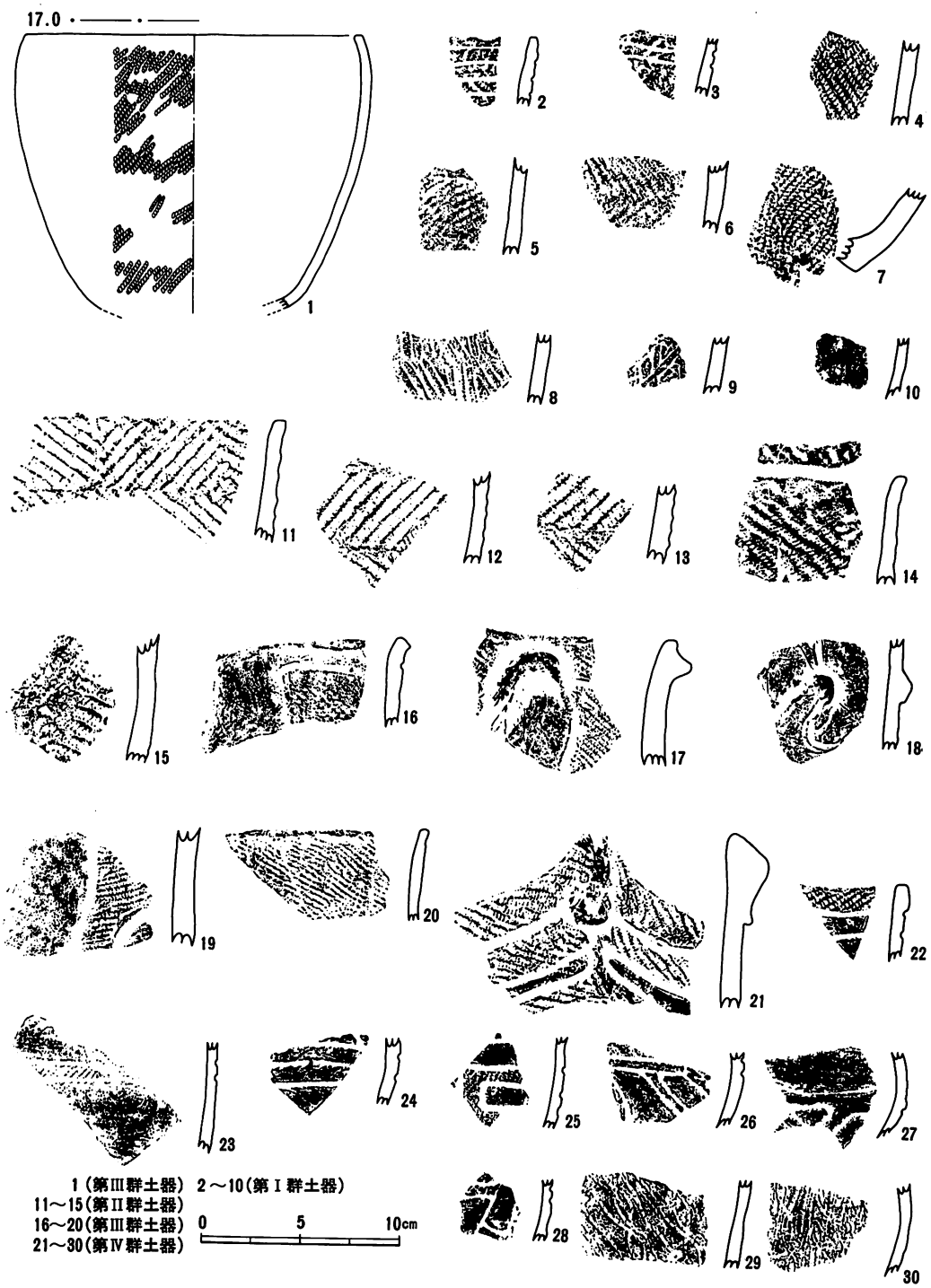
①　原始時代

〔1〕**土　偶**（図版26—15・写真図版22—48）

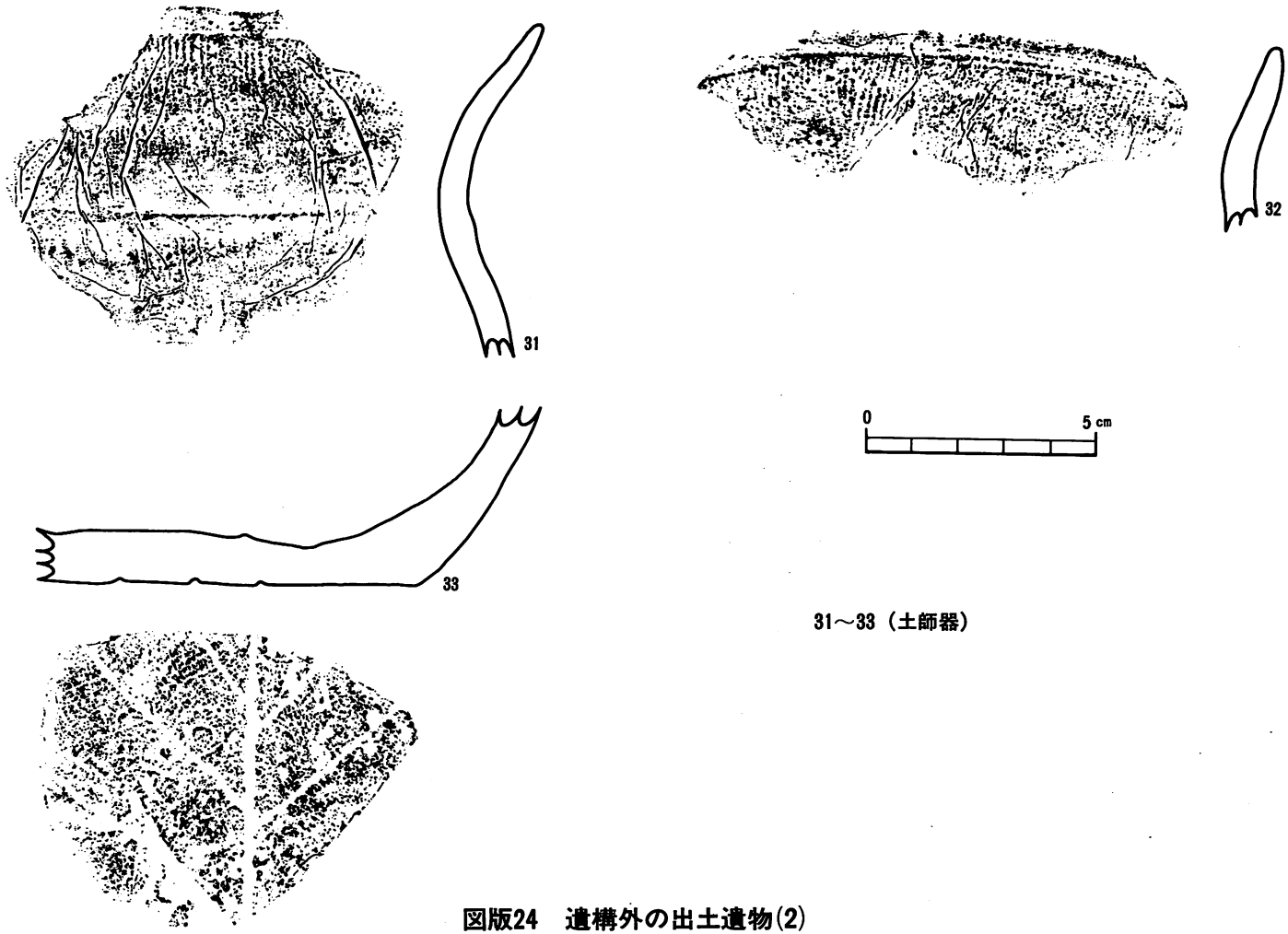
出土した土偶はII層下位から得られた1点（15）である。この土偶は板状の土偶であり、平面形は撥形を示し縦断面形・横断面形はともに隅丸長方形を呈する。表面の上部に粘土の貼付によって乳房が表現されているが、右側の乳房の部分は粘土が剝落してしまっており径8㎜±の円形の凹みになっている。左右の乳房を結ぶ線を底辺とする逆三角形の頂点にあたる位置に臍が形作られている。この臍の表現は乳房と同じ方法である。土偶の下底部の面を除くすべての面には沈線による文様が施文されている。この沈線文は一度引かれただけで二度描きされていない無調整の沈線文であり、渦巻状・「Y」字状・平行沈線状に施文されている。土偶の最上部の面には径3㎜±の孔が3個みられる。これらの孔のうち左右の端にある孔は斜めに穿たれて側縁部に貫通している。この土偶の色調は全体的に褐灰色を呈する。胎土には金雲母が少量含まれている。

〔2〕**滑車形耳飾り**（図版26—16・写真図版22—49）

出土した滑車形耳飾りは1点（16）でII層下位から得られている。この耳飾りの平面形は径5.4cm±の円形を示す。中心の孔は径1.3cm±を計る。中心部分に径1.3cm±を計る孔が設けられている。上下両面にはこの孔の周囲をとりまくような形で刺突文が施文されている。この刺突文は竹串状の工具によって施されたもので、二重の環状を呈する。全面にミガキ調整がみられる。全体的に色調は浅黄橙色を示すが、黒斑の部分は青黒色を呈する。

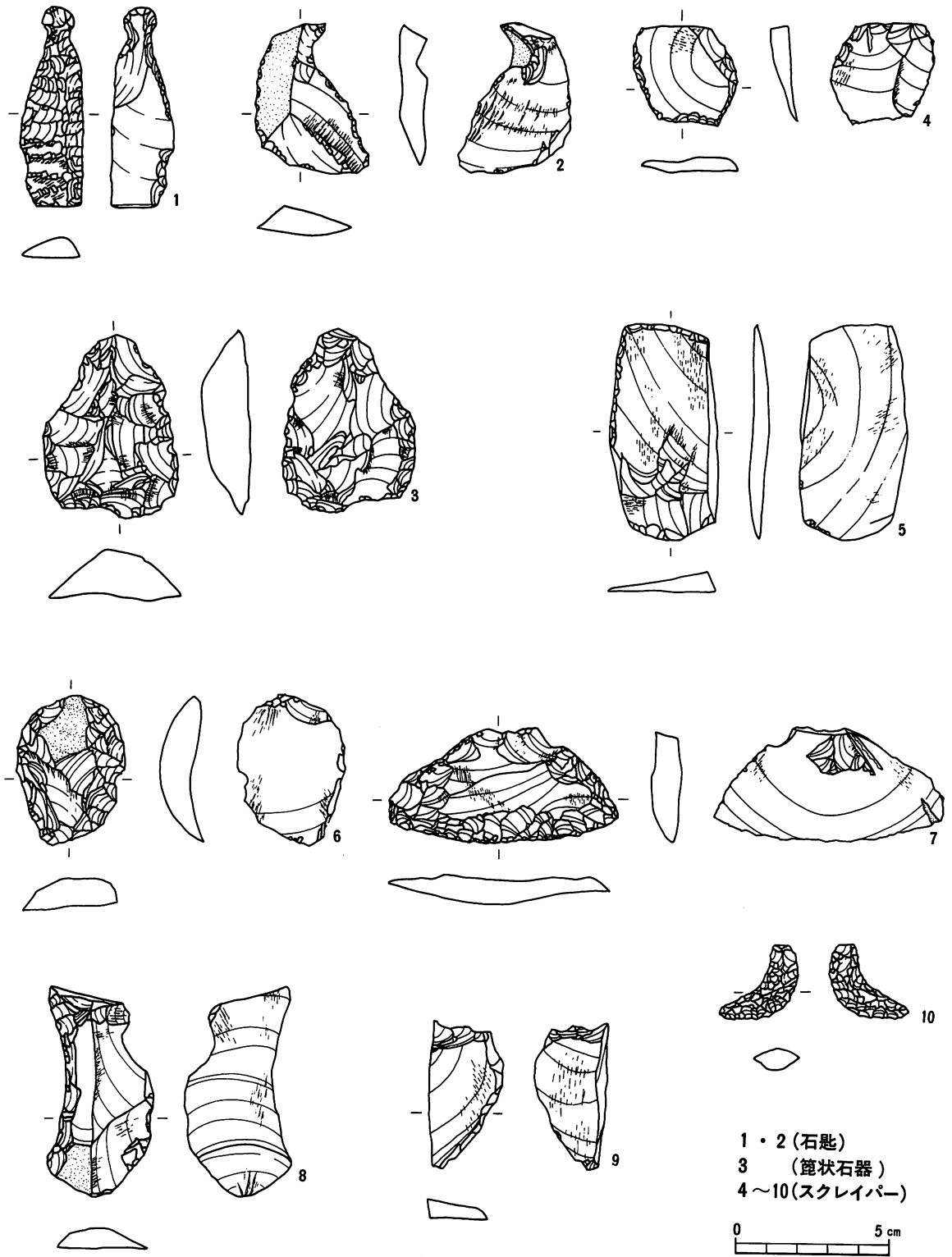


図版23　遺構外の出土遺物(1)

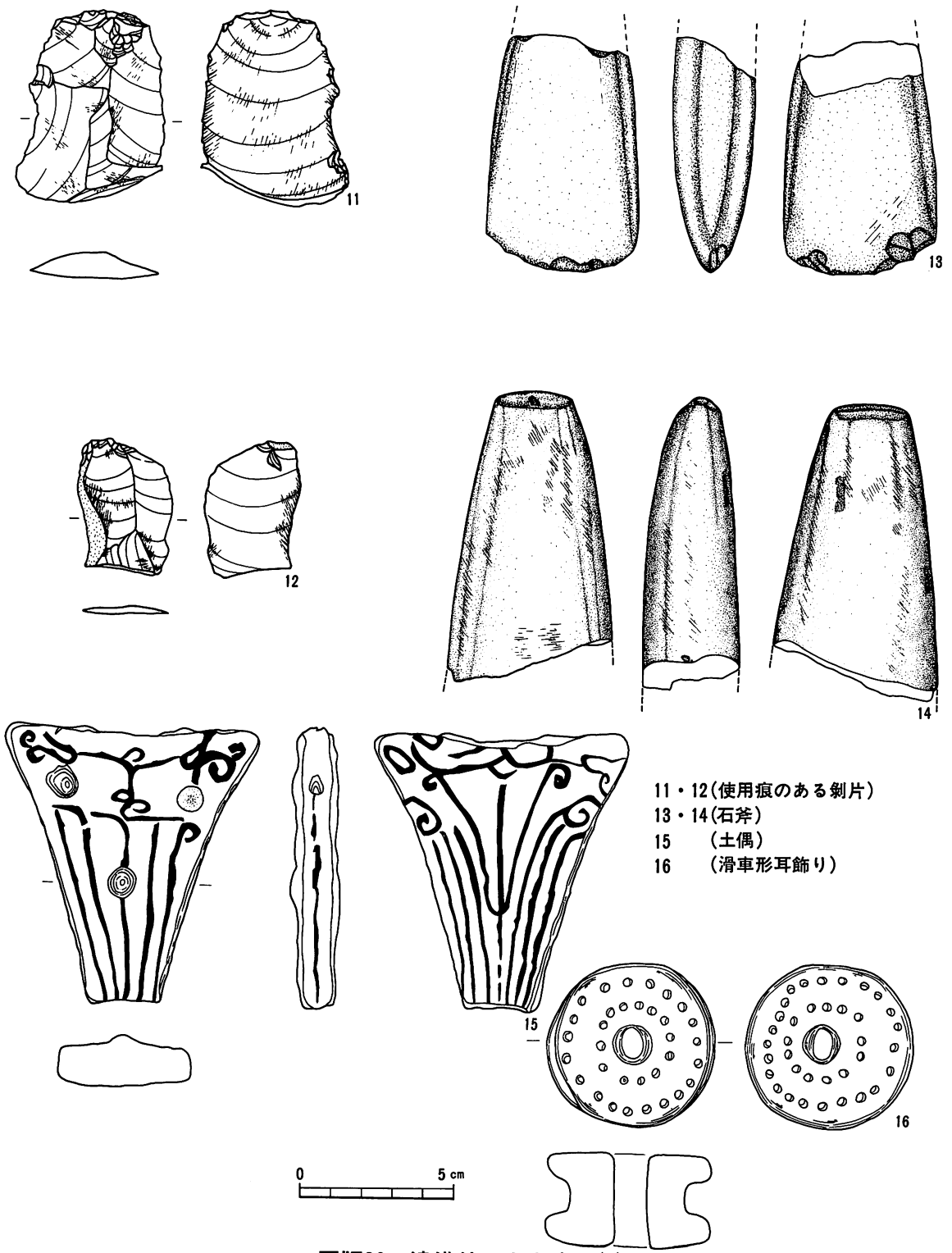


31～33（土師器）

図版24　遺構外の出土遺物(2)



図版25　遺構外の出土遺物(3)



11・12(使用痕のある剝片)
13・14(石斧)
15　(土偶)
16　(滑車形耳飾り)

図版26　遺構外の出土遺物(4)

表1　家ノ上遺跡出土石器計測表

番号	器　　種	出土遺構・地区	図版番号	写真図版番　号	計測値 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　　質	産　　地
1	不定形石器	Ae 06住居址	17—9	14—9	3.0	1.9	0.5	2.11	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
2	使用痕のある剥片	Ae 06住居址	17—10	14—10	4.0	2.5	0.6	8.72	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
3	使用痕のある剥片	Ae 06住居址	17—11	14—11	1.4	2.2	0.3	1.04	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
4	不定形石器	Af 53住居址	18—22	15—22	5.5	3.9	0.8	19.95	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
5	使用痕のある剥片	Af 53住居址	18—23	15—23	4.0	4.1	0.9	15.31	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
6	使用痕のある剥片	Af 53住居址	18—24	15—24	4.5	2.6	0.9	11.10	泥質凝灰岩	奥羽山地、中新統
7	使用痕のある剥片	Af 53住居址	18—25	15—25	4.3	1.9	0.4	3.67	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
8	石　斧	Af 53住居址	18—26	16—26	7.9	4.2	1.4	85.00	凝灰質粘板岩	北上山地、古生界
9	磨　石	Af 53住居址	18—27	16—27	8.7	7.5	4.1	380.00	閃緑岩	北上山地、古生界
10	磨　石	Af 53住居址	18—28	16—28	7.9	6.4	4.5	380.00	輝石玢岩	北上山地、中生代貫入岩
11	スクレイパー	Bc 59住居址	19—40	16—40	4.0	2.9	0.9	6.97	流紋岩	奥羽山地、中新統
12	石　錘	Ai 50ピット	20—54	17—54	10.0	7.2	1.4	198.00	輝石安山岩	奥羽山地、新第三系
13	石　錘	Ai 50ピット	20—55	17—55	8.5	6.5	2.1	190.00	両輝石安山岩	新期火山、第四系
14	使用痕のある剥片	Aj 03ピット	21—61	18—61	1.9	1.8	0.2	1.75	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
15	石　匙	B区—II	25—1	21—34	6.5	2.0	0.7	9.05	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
16	石　匙	Af 59—II	25—2	21—35	4.7	3.5	0.9	11.96	泥質凝灰岩	奥羽山地、中新統
17	箆状石器	Ba 50—VI a	25—3	21—36	5.9	4.3	1.5	37.63	凝灰質硬質泥岩	奥羽山地、中新統
18	スクレイパー	Ba 50—VI a	25—4	21—37	3.1	3.3	0.6	8.18	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
19	スクレイパー	Ba 50—VI a	25—5	21—38	7.0	3.5	0.6	23.23	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
20	スクレイパー	Ba 50—VI a	25—6	21—39	4.5	3.5	1.1	17.25	泥質凝灰岩	奥羽山地、中新統
21	スクレイパー	Ba 50—VI a	25—7	21—40	3.6	7.4	1.0	26.19	凝灰質硬質泥岩	奥羽山地、中新統
22	スクレイパー	Ag 09—VI a	25—8	21—41	6.2	3.0	0.7	21.25	玻璃質凝灰岩	奥羽山地、中新統
23	スクレイパー	Bb 09—VI a	25—9	21—42	4.7	2.4	0.6	1.10	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
24	スクレイパー	Ag 50—VI a	25—10	21—43	2.4	2.0	0.7	2.49	硬質泥岩	奥羽山地、中新統

番号	器　　種	出土遺構・地区	図版番号	写真図版番　号	計測値 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　　質	産　　地
25	使用痕のある剝片	Ag 50—Ⅵa	26—11	21—44	6.1	4.3	0.9	27.68	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
26	使用痕のある剝片	Ba 50—Ⅵa	26—12	21—45	4.2	3.0	0.3	4.75	泥質凝灰岩	奥羽山地、中新統
27	石　斧	Af 59—Ⅱ	26—13	22—46	7.6	4.8	2.6	165.00	輝緑岩	北上山地、古生界
28	石　斧	Ai 15—Ⅱ	26—14	22—47	9.3	5.2	3.2	245.00	輝緑岩凝灰岩	北上山地、古生界

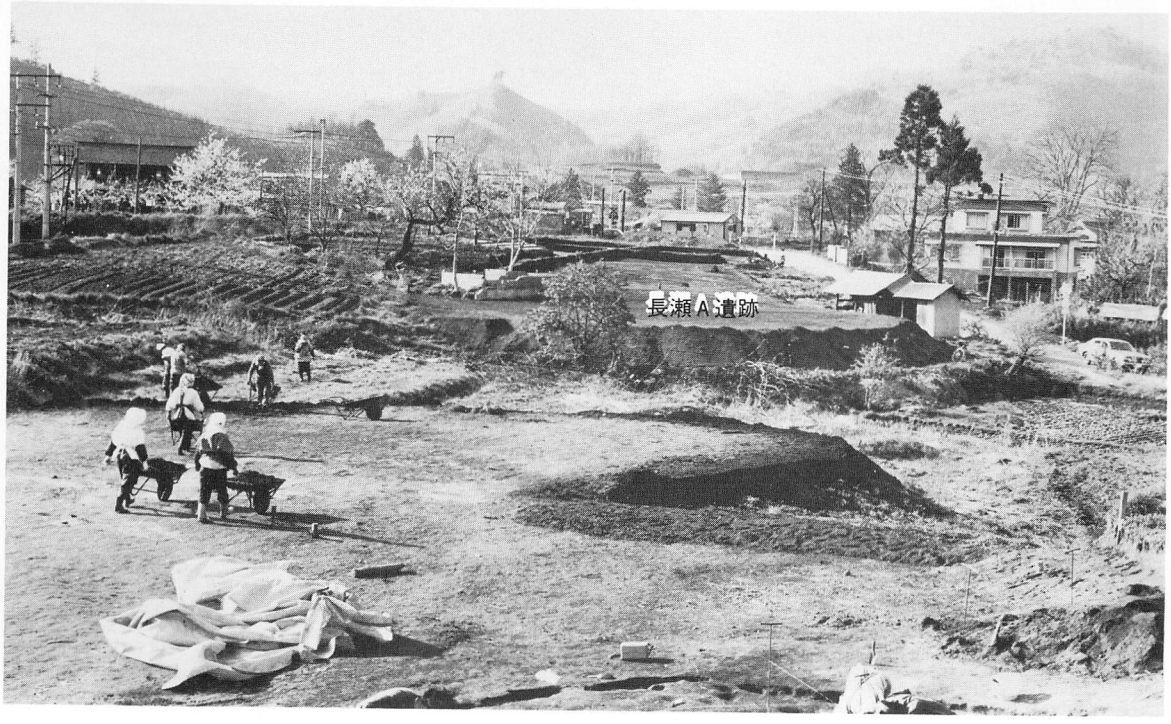
表2　家ノ上遺跡円盤状土製品計測表

番号	出土遺構・地区	図版番号	写真図版番　号	計測値 長軸長×短軸長(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)
1	Af53住居址	18—21	15—21	5.0×4.0	0.8	20.55
2	Bc59住居址	19—38	16—39	3.9×3.7	0.5	9.55

表3　家ノ上遺跡土坑墓出土古銭計測表

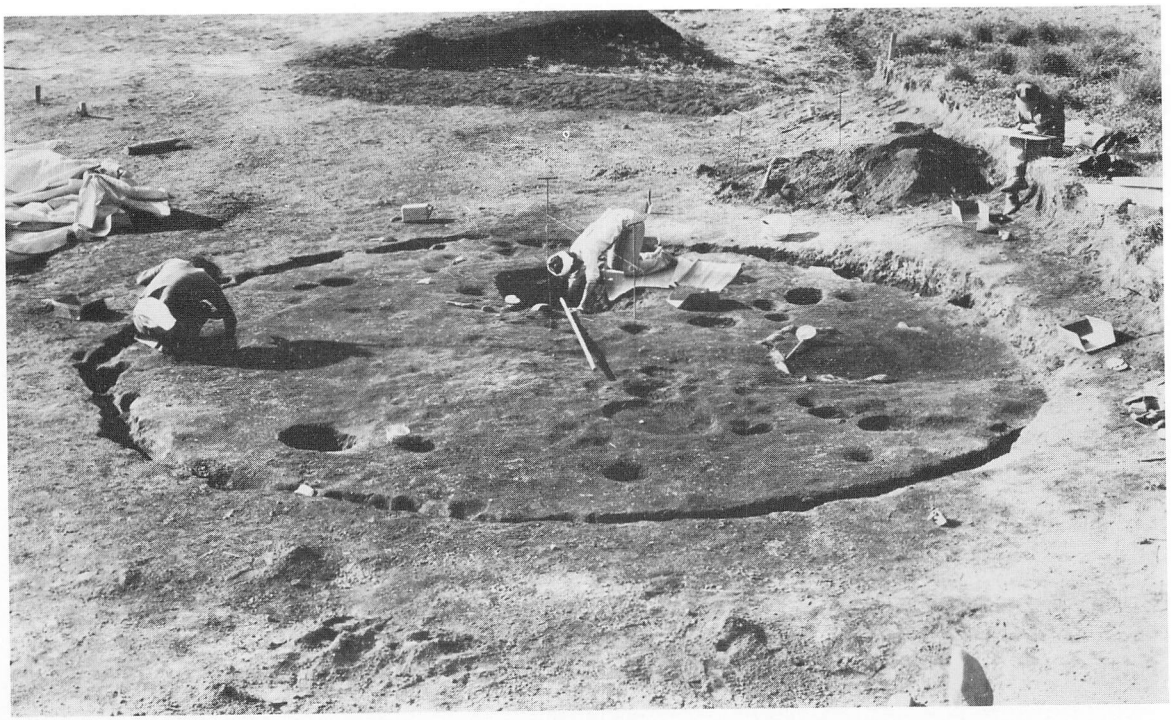
番号	名　　称	出土遺構	図版番号	写真図版番　号	計測値 直　径(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　　考
1	元祐通宝	Bd53住居址	22—74	19—74	2.3	0.1	3.13	銅銭

a. 調査風景



b. 調査風景

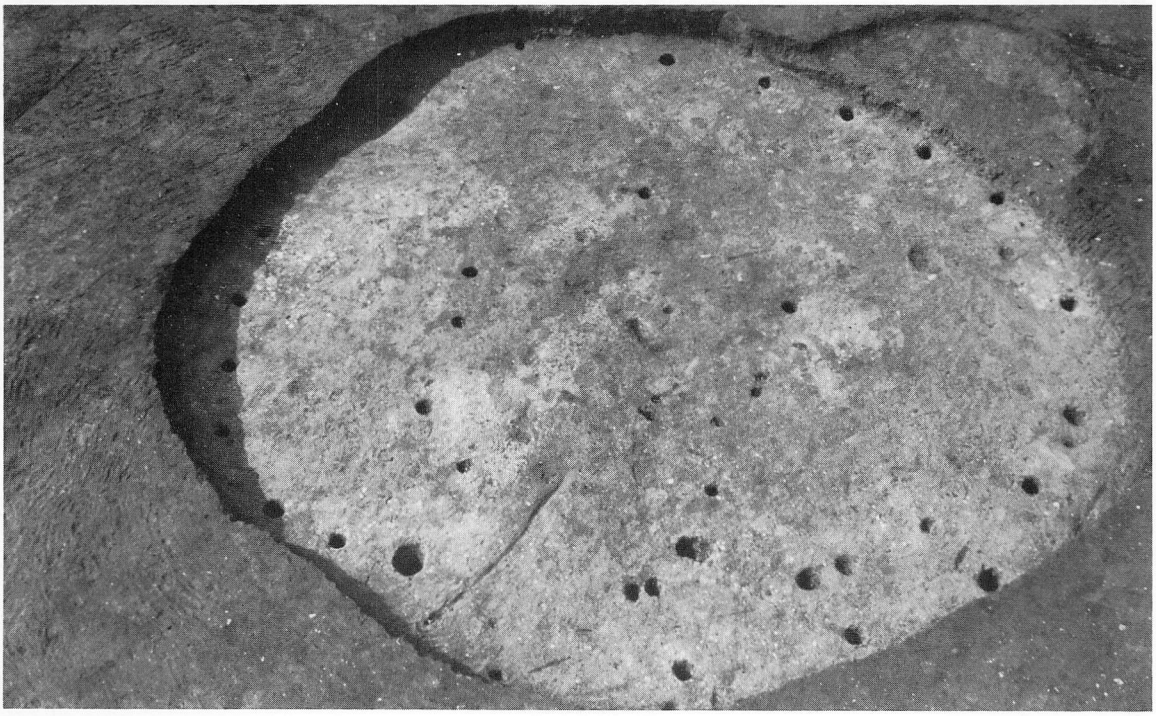
写真図版 1



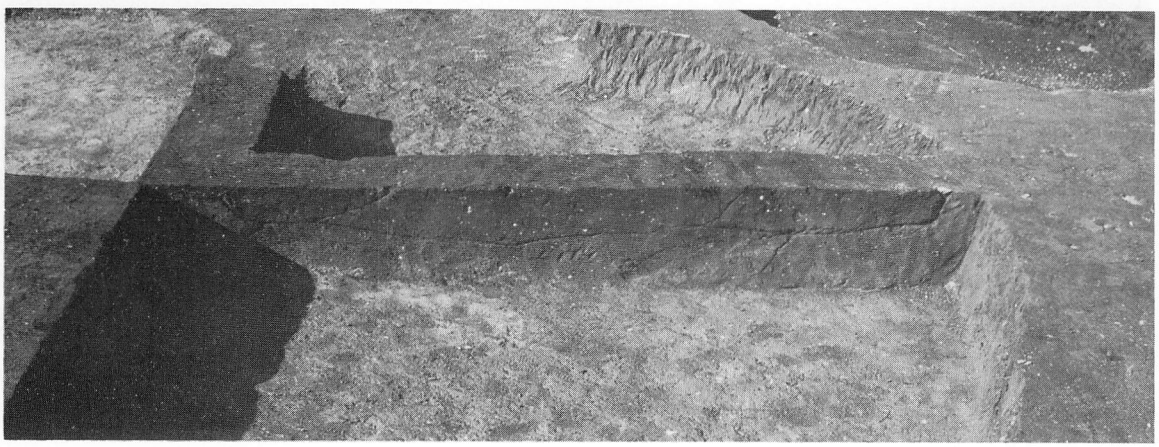
a. 調査風景

b. 調査風景

写真図版 2

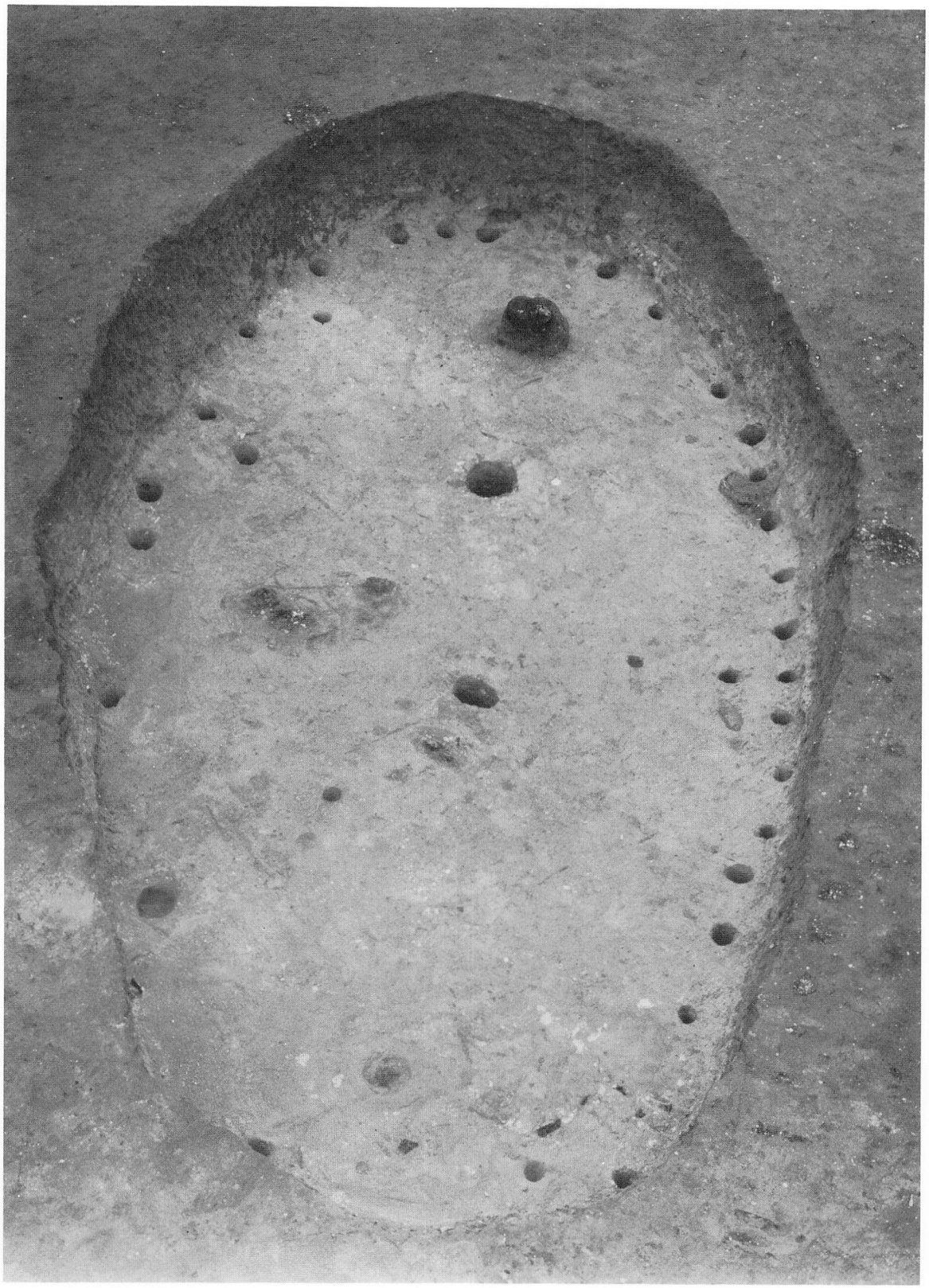


a. Ad56住居址



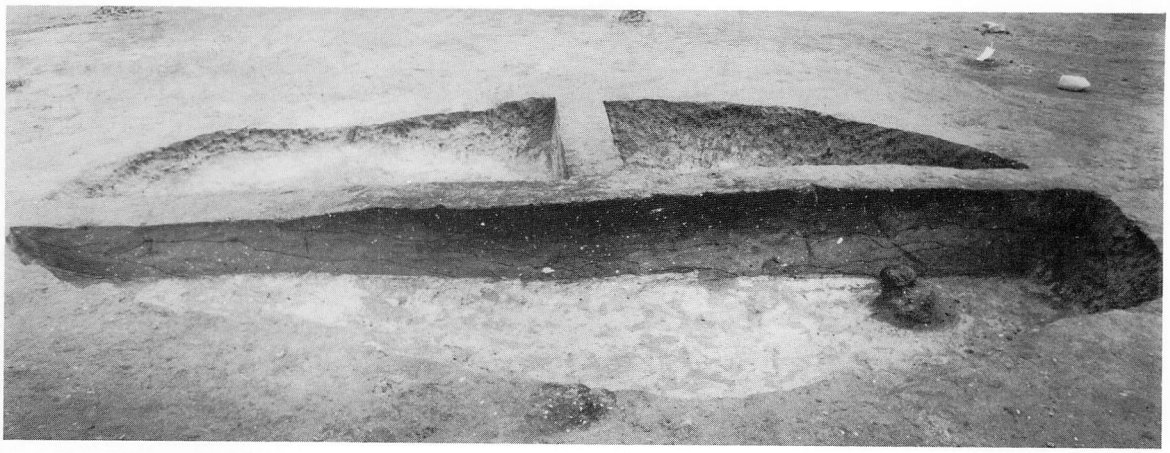
b. Ad56住居址（土層断面）

写真図版 3

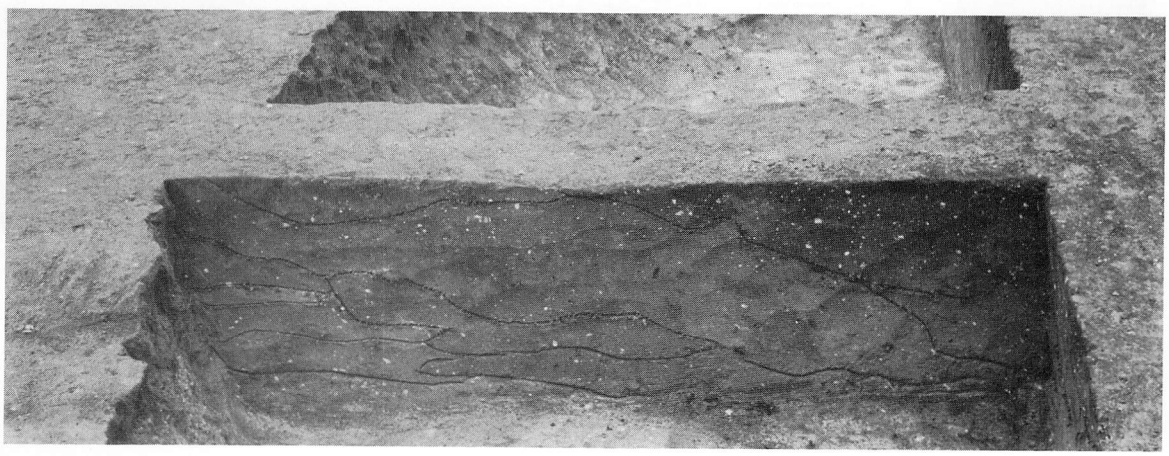


Ae06住居址

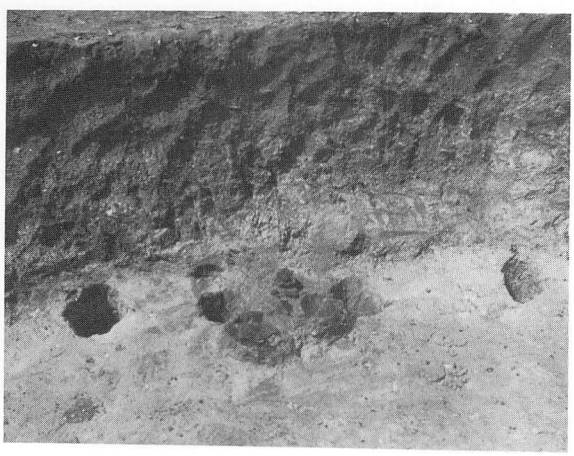
写真図版 4



a. Ae06住居址（土層断面）



b. Ae06住居址（土層断面）

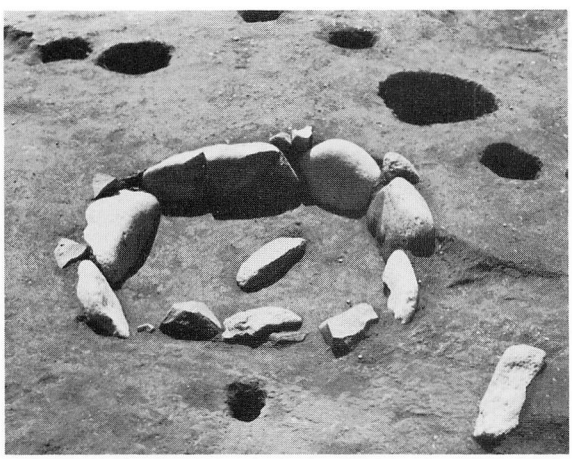


c. Ae06住居址（土器出土状況）

d. Ae06住居址　（土器出土状況）

写真図版 5

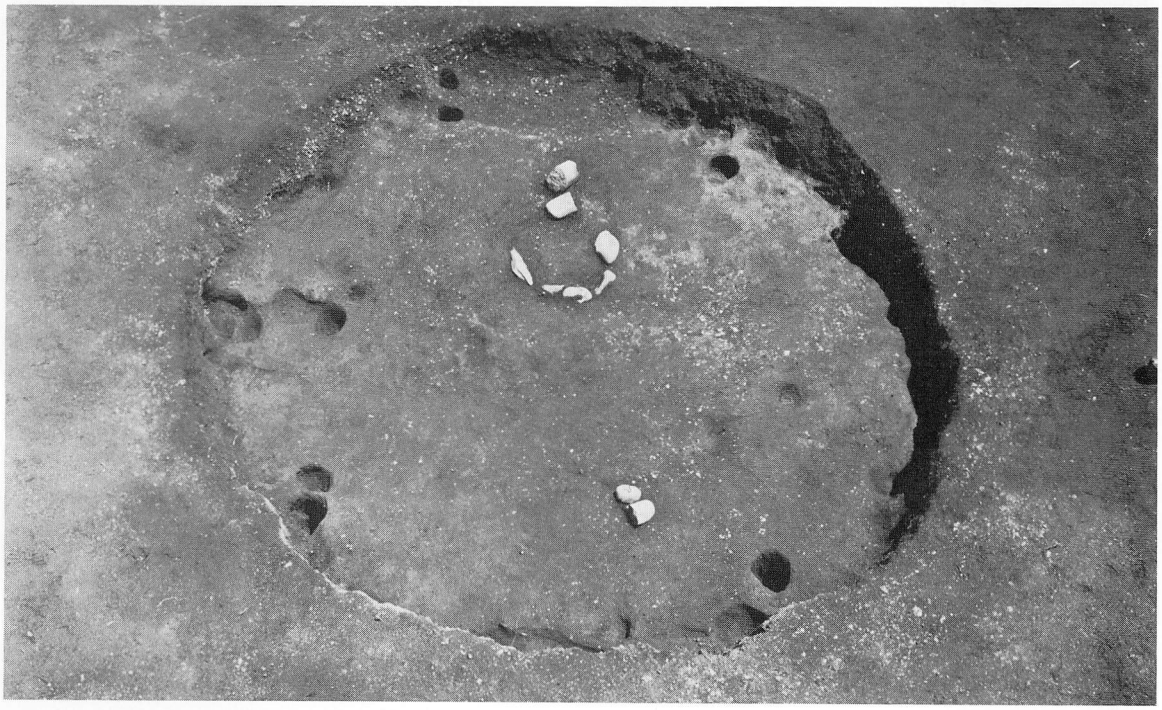
a. Af53住居址



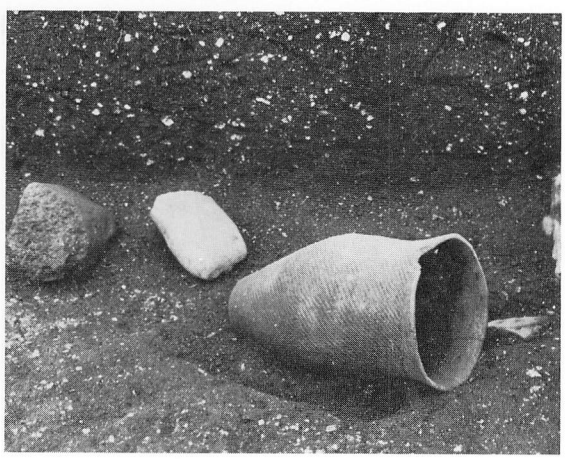
b. Af53住居址炉

c. Af53住居址P_3（土器出土状況）

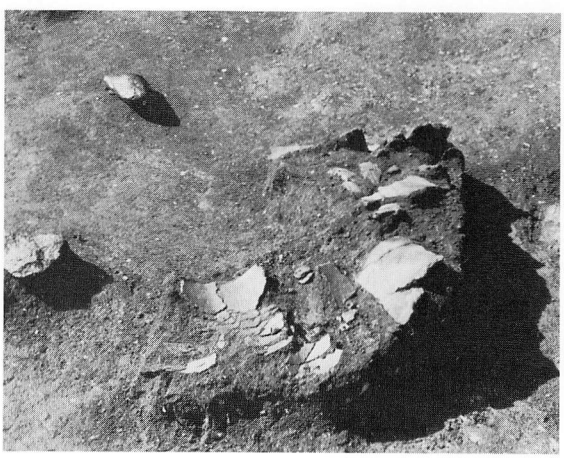
写真図版 6



a. Bc59住居址

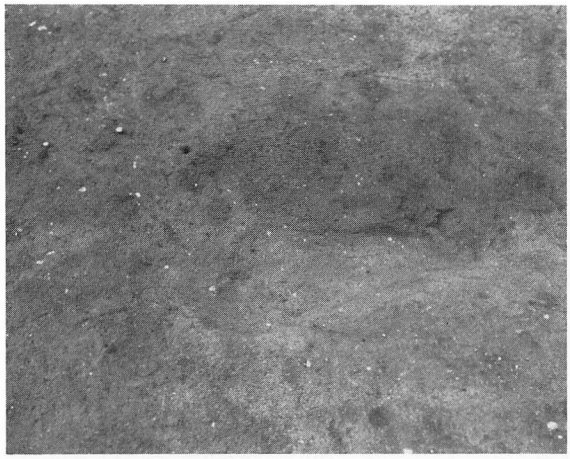


b. Bc59住居址（土器出土状況）



c. Bc59住居址（土器出土状況）

写真図版 7

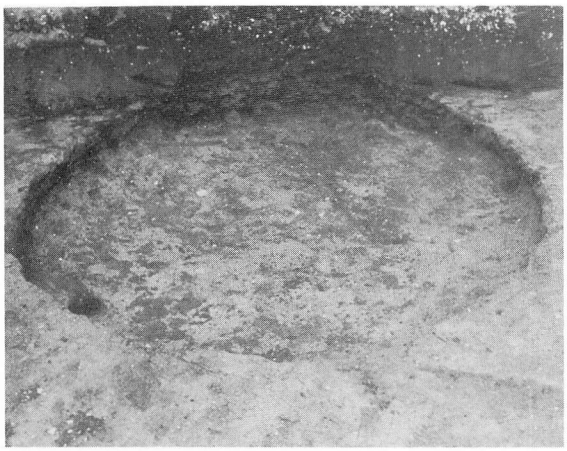


a. Ba03炉址

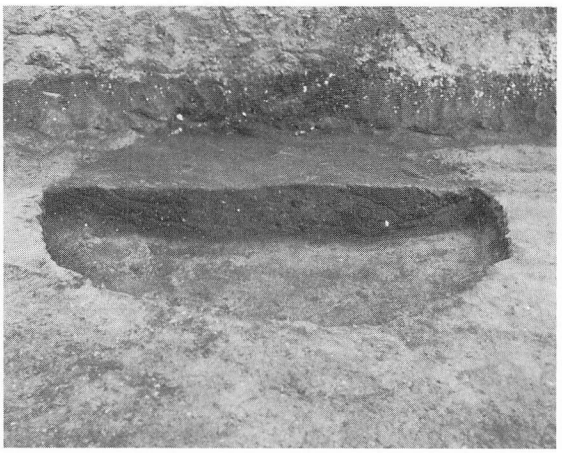
b. Ba50炉址

c. Ad56ピット

d. Ad56ピット（土層断面）

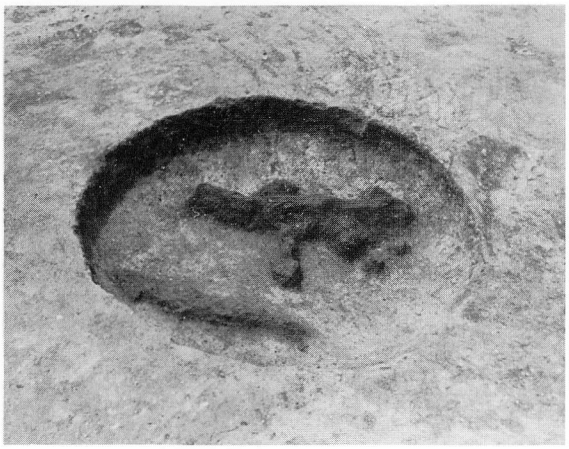


e. Ad59ピット

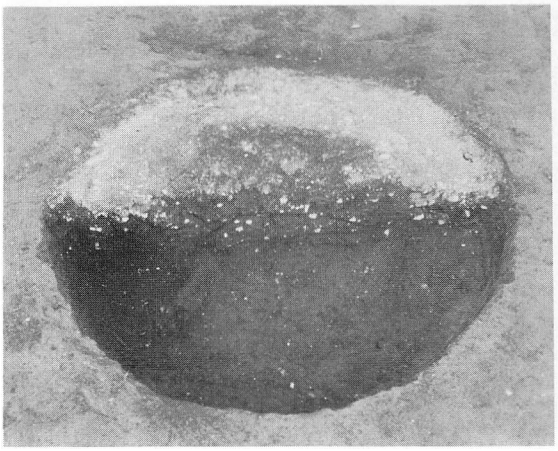


f. Ad59ピット（土層断面）

写真図版 8

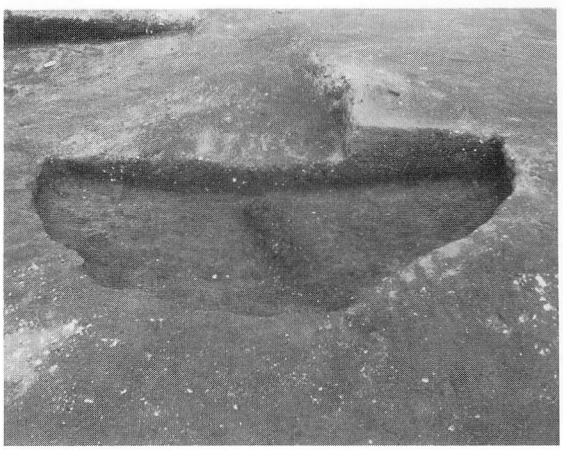


a. Ag03ピット

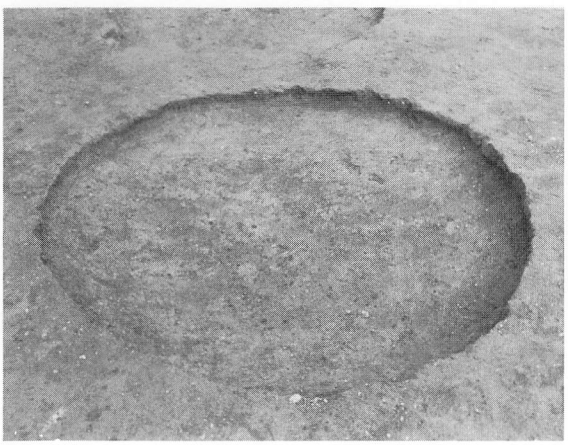


b. Ag03ピット（土層断面）

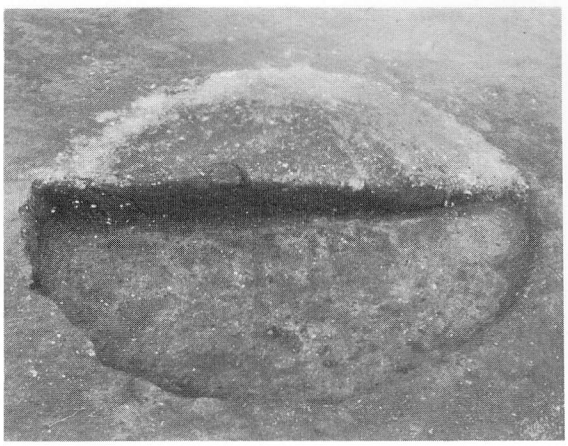
c. Ah03ピット



d. Ah03ピット（土層断面）

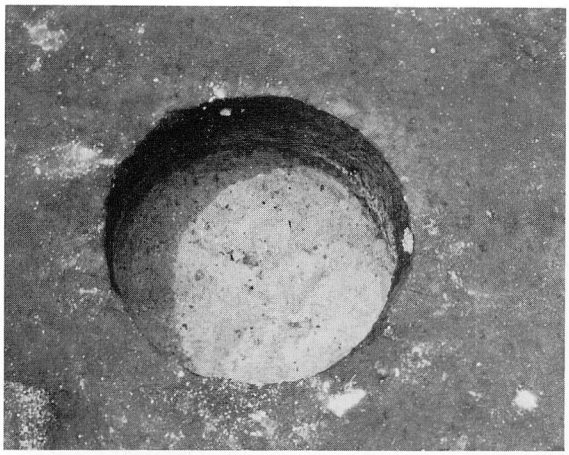


e. Ah06ピット

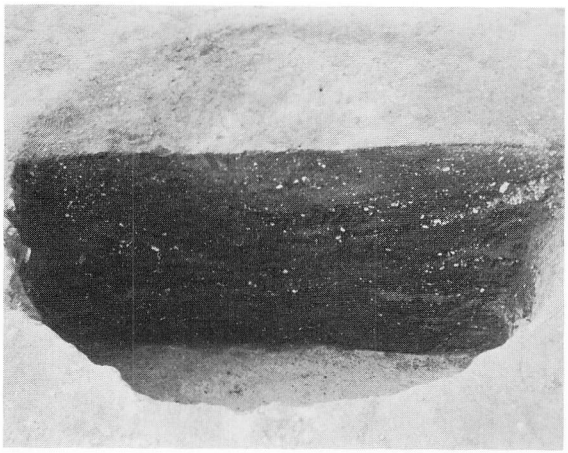


f. Ah06ピット（土層断面）

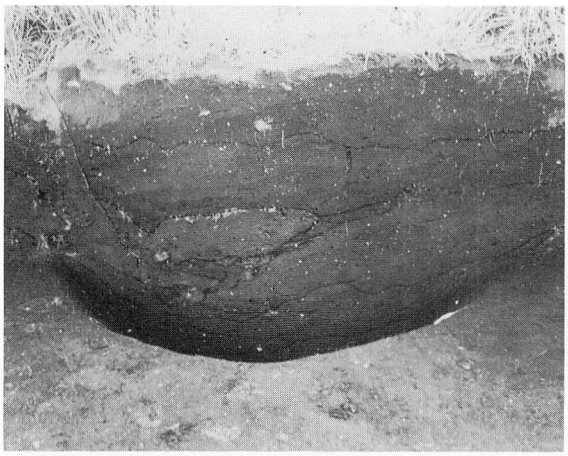
写真図版 9



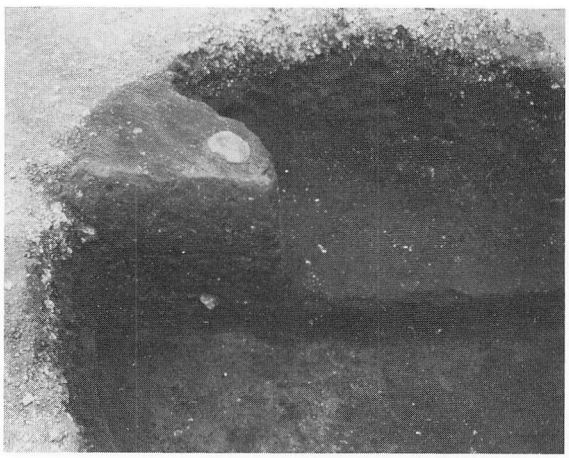
a. Ah50ピット



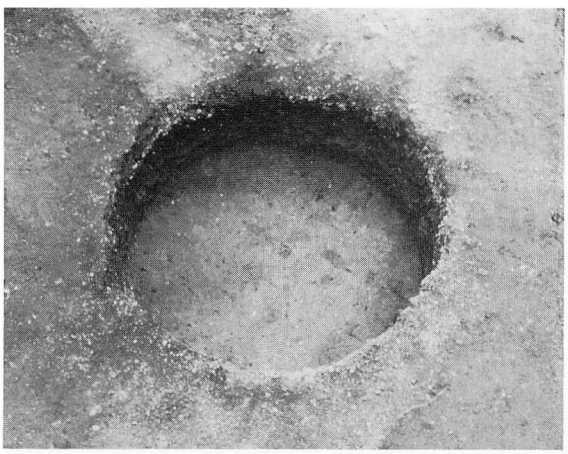
b. Ah50ピット（土層断面）



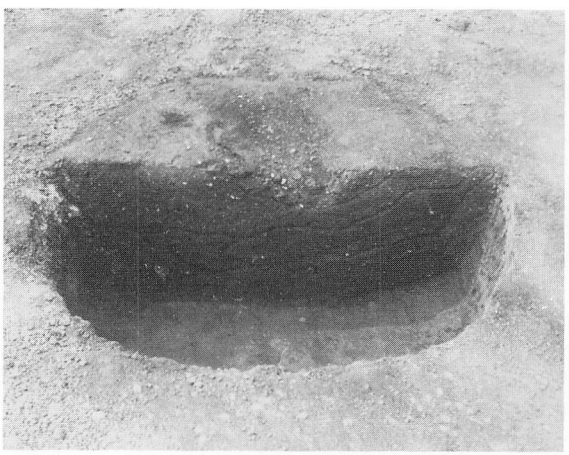
c. Ai12ピット（土層断面）



d. Ai50ピット（石錘出土状況）

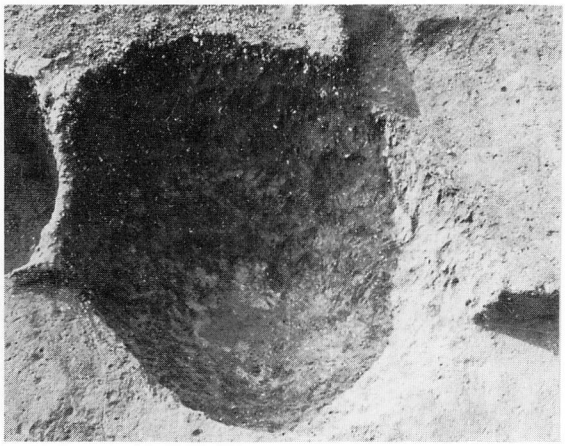


e. Ai50ピット



f. Ai50ピット（土層断面）

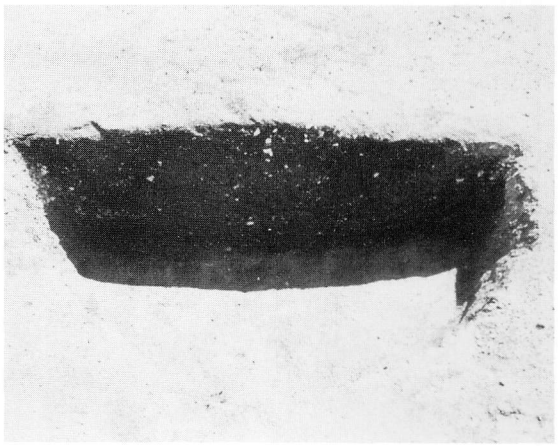
写真図版10



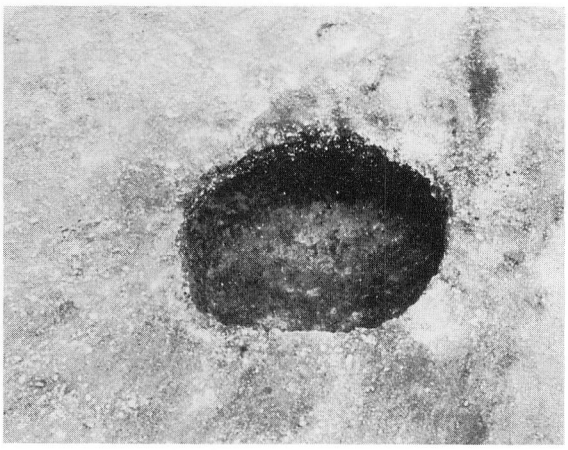
a. Ai53ピット

b. Ai53ピット（土層断面）

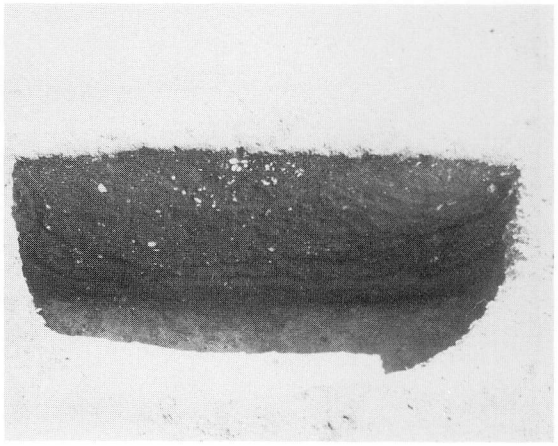
c. Aj50ピット



d. Aj50ピット（土層断面）

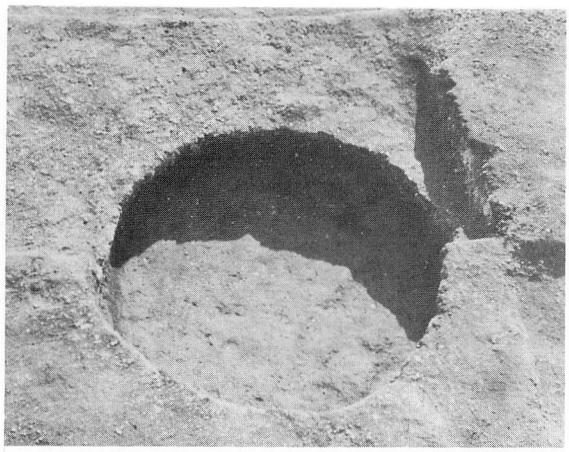


e. Aj53ピット



f. Aj53ピット（土層断面）

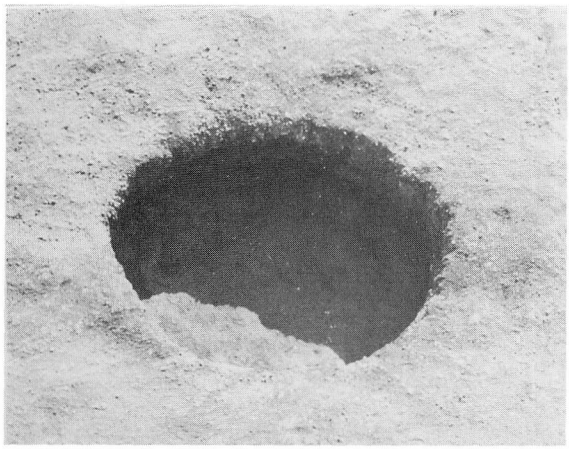
写真図版11



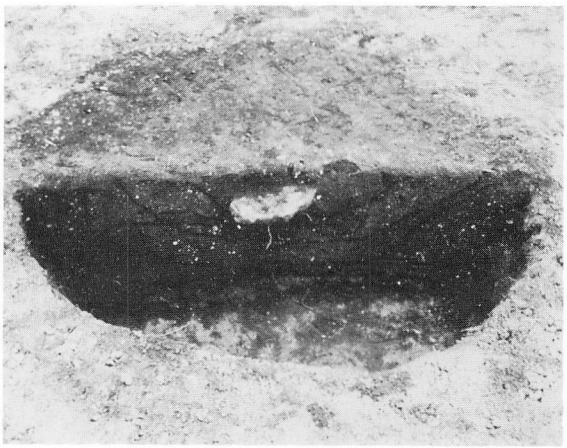
a. Bb53ピット

b. Bb53ピット（土層断面）

c. Bc62ピット（土層断面）



d. Bd53ピット



e. Bd53ピット（土層断面）

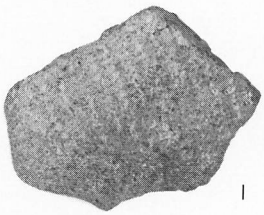
写真図版12

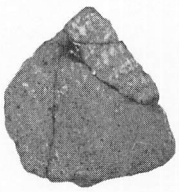
a. Bd53住居址

b. Bd53住居址（炭化材出土状況）

写真図版13

Ae06住居址（1～11）


1


2

3

4

5

6

7

8

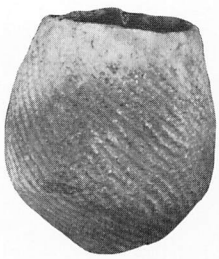
9

10

11

Af53住居址（12～25）

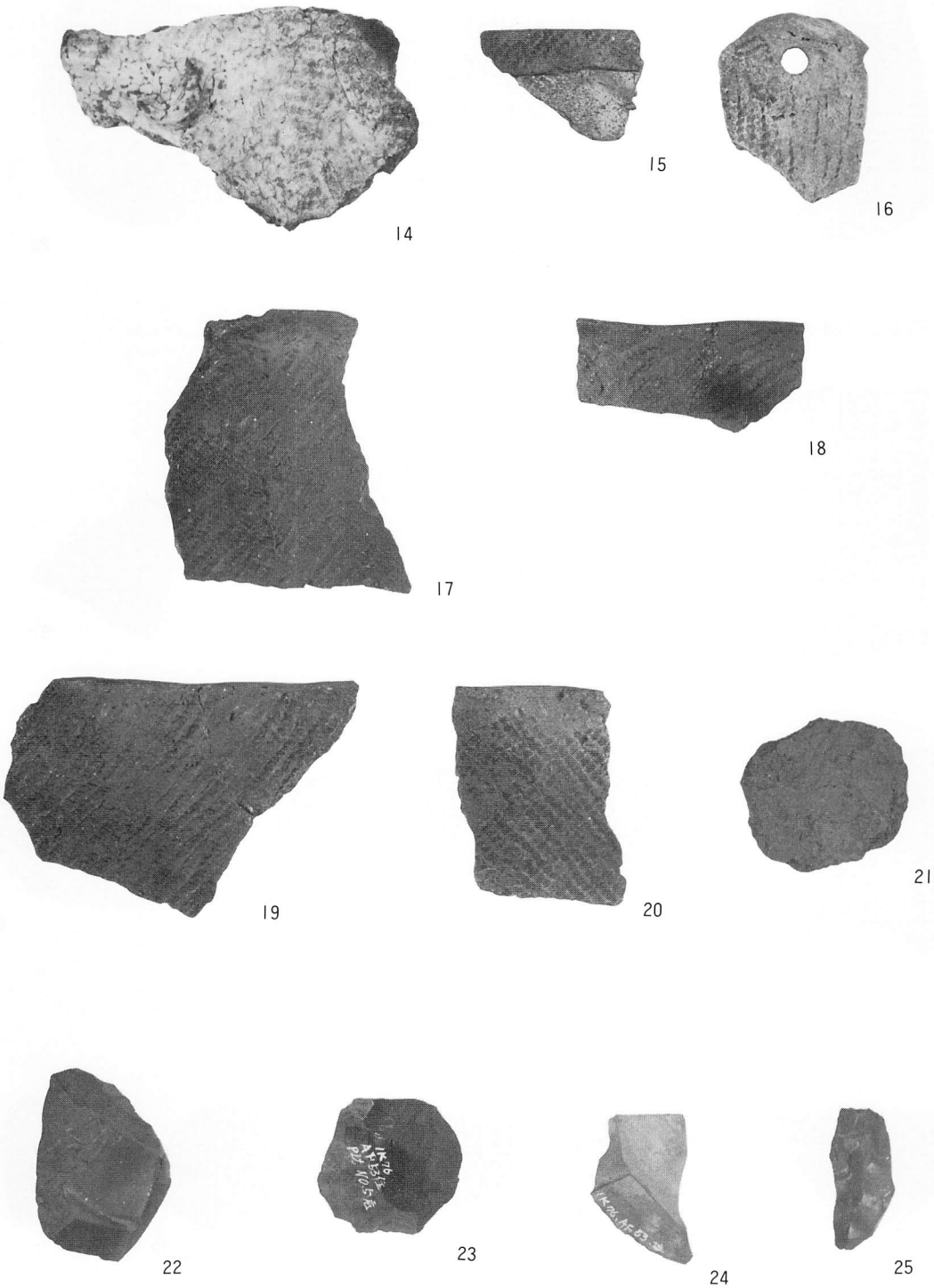
12


13

遺構内の出土遺物(1)

写真図版14

Af53住居址

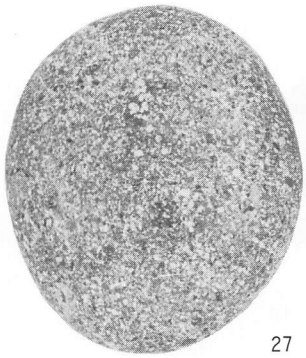


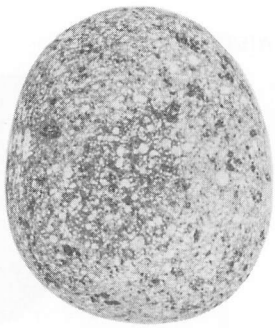
遺構内の出土遺物(2)

写真図版15

Af53住居址（26～28）

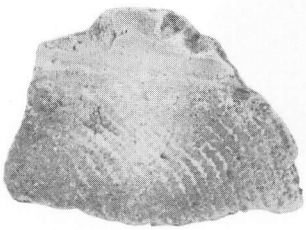
26

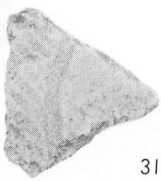

27

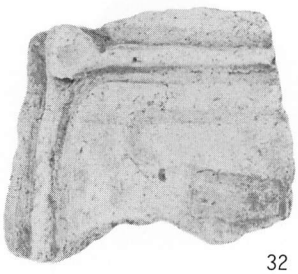

28

Bc59住居址（29～40）

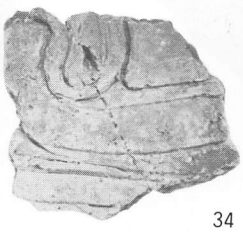
29

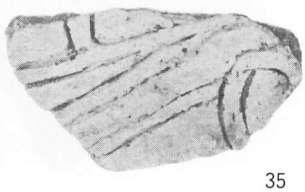

30

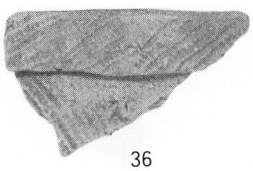

31

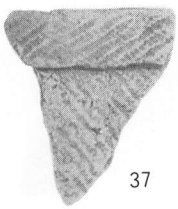

32

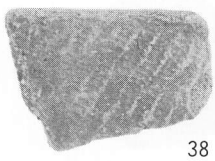
33


34


35


36


37


38

39

40

遺構内の出土遺物(3)

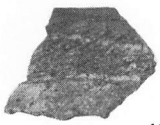
写真図版16

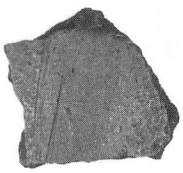
Ba03炉址（41・42）

41

42

Ad56ピット（43～45）

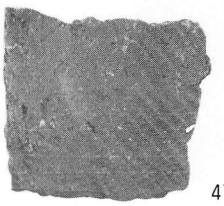

43

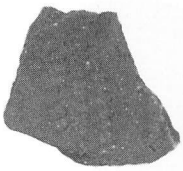

44

45

Ad59ピット（46～48）

46


47


48

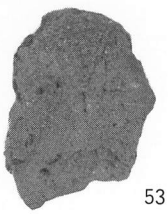
Ai50ピット（49～55）

49

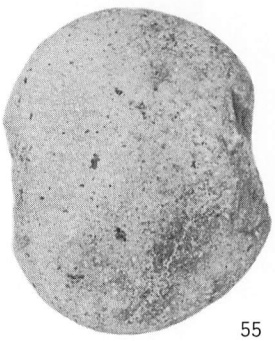
50

51

52


53

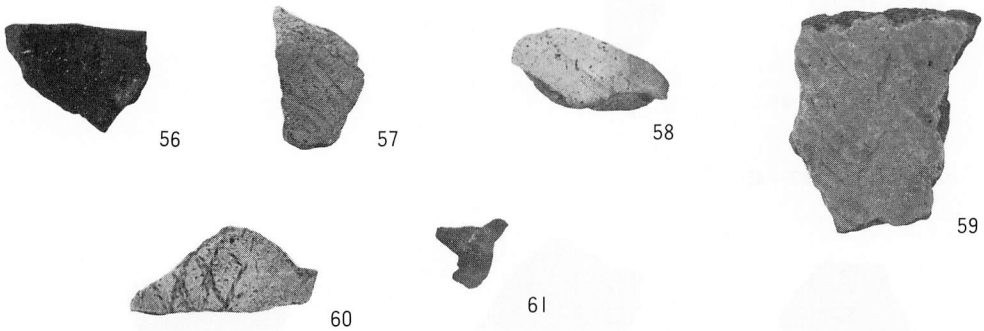
54


55

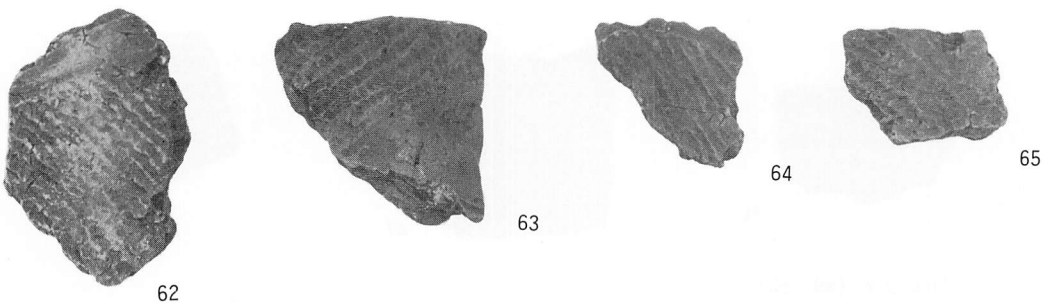
遺構内の出土遺物(4)

写真図版17

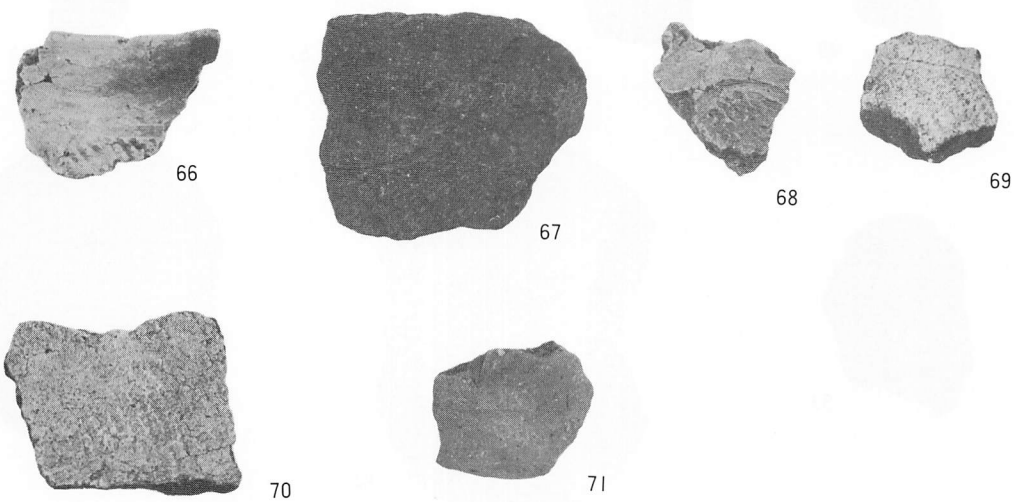
Aj03ピット（56～61）



Aj50ピット（62～65）



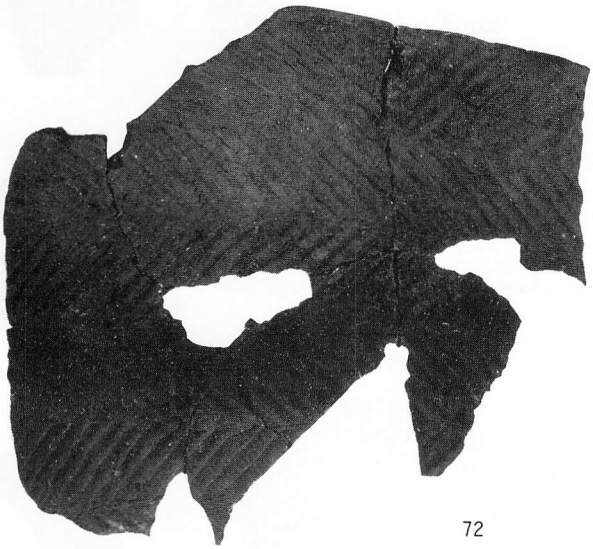
Aj53ピット（66～71）



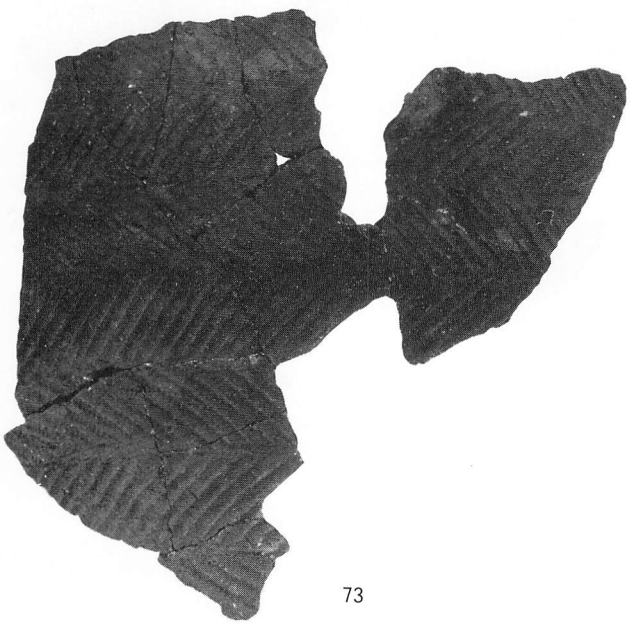
遺構内の出土遺物(5)

写真図版18

Bc62ピット（72・73）

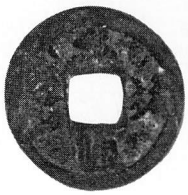


72



73

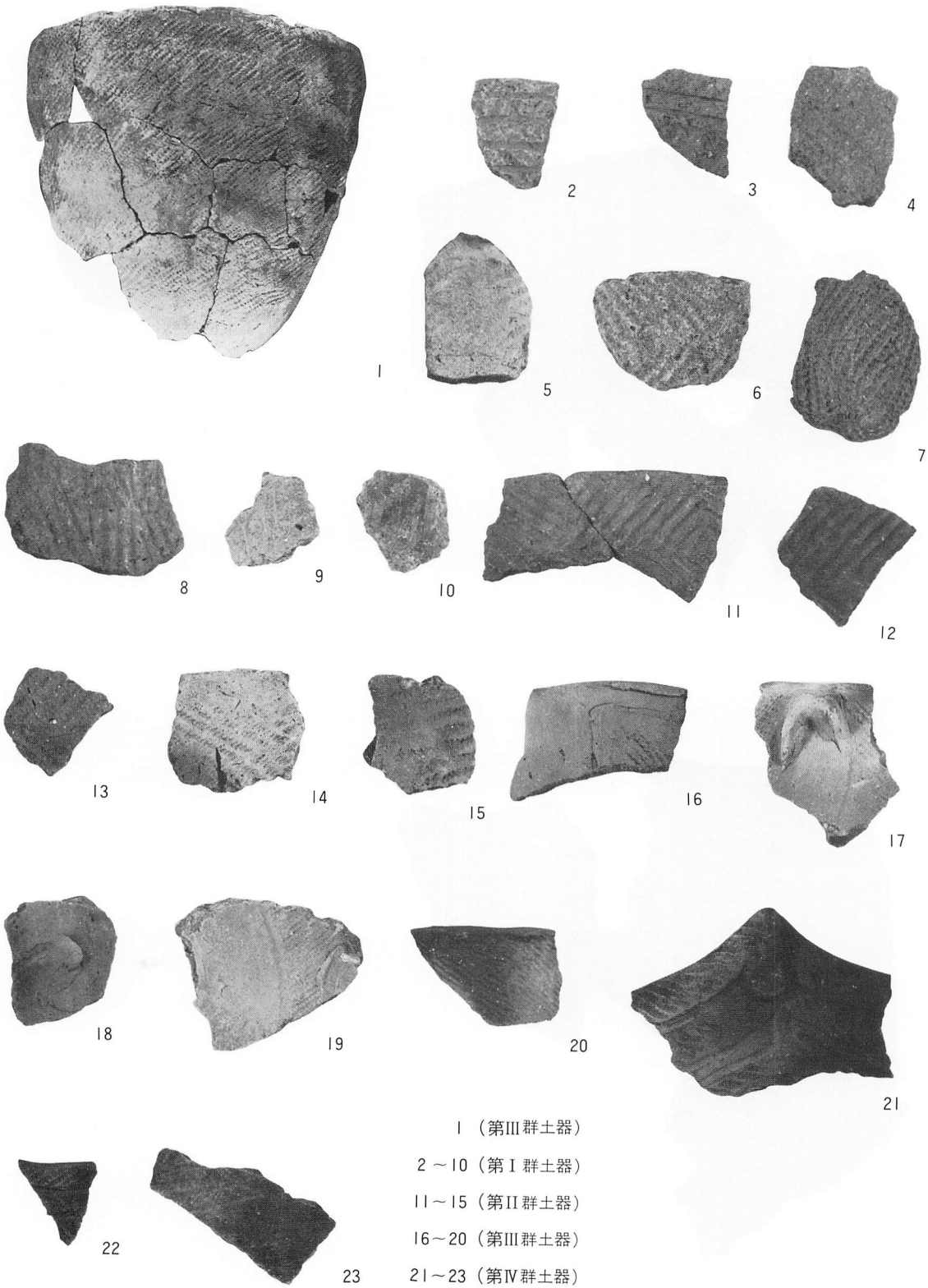
Bd53住居址（74）



74

遺構内の出土遺物(6)

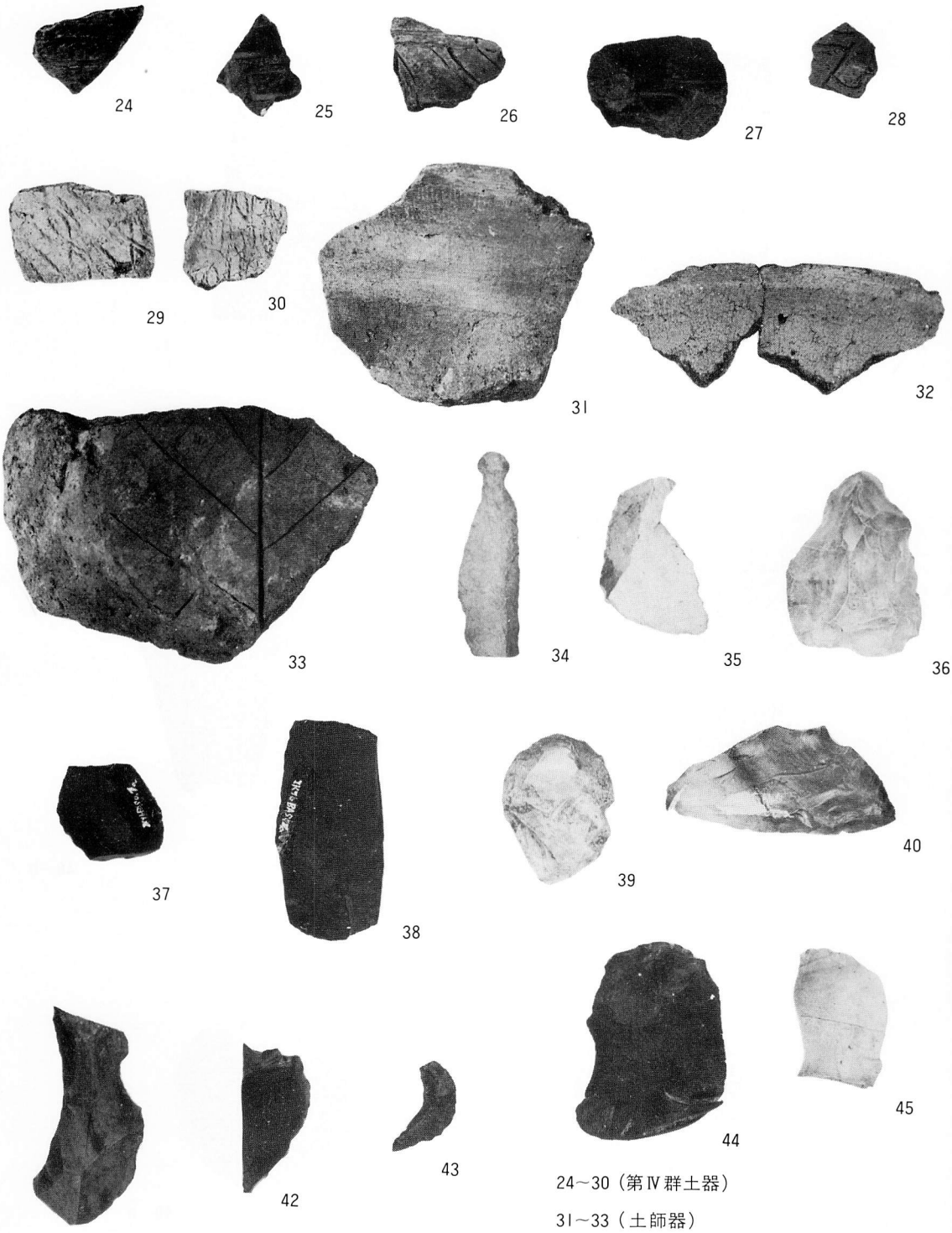
写真図版19



1（第III群土器）
2～10（第I群土器）
11～15（第II群土器）
16～20（第III群土器）
21～23（第IV群土器）

遺構外の出土遺物(1)

写真図版20

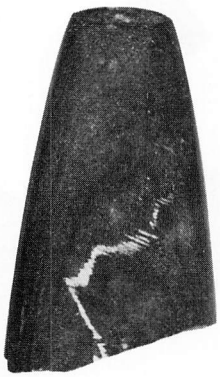


24～30（第Ⅳ群土器）
31～33（土師器）
34・35（石　匙）
36（箆状石器）　37～43（スクレイパー）　44・45（使用痕のある剝片）

遺構外の出土遺物(2)

写真図版21

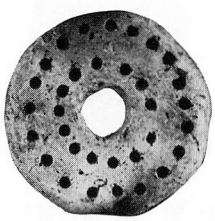
46



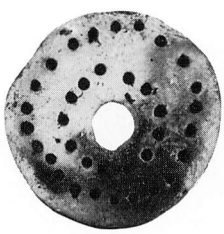
47

48—a

48—b



49—a



49—b

46・47　（石斧）

48　（土偶）

49　（滑車形耳飾り）

遺構外の出土遺物(3)

写真図版22

Ⅲ．長瀬（ながせ）Ａ遺跡

1．遺跡所在地　　岩手県二戸市米沢字長瀬

2．調査担当者　　四井謙吉

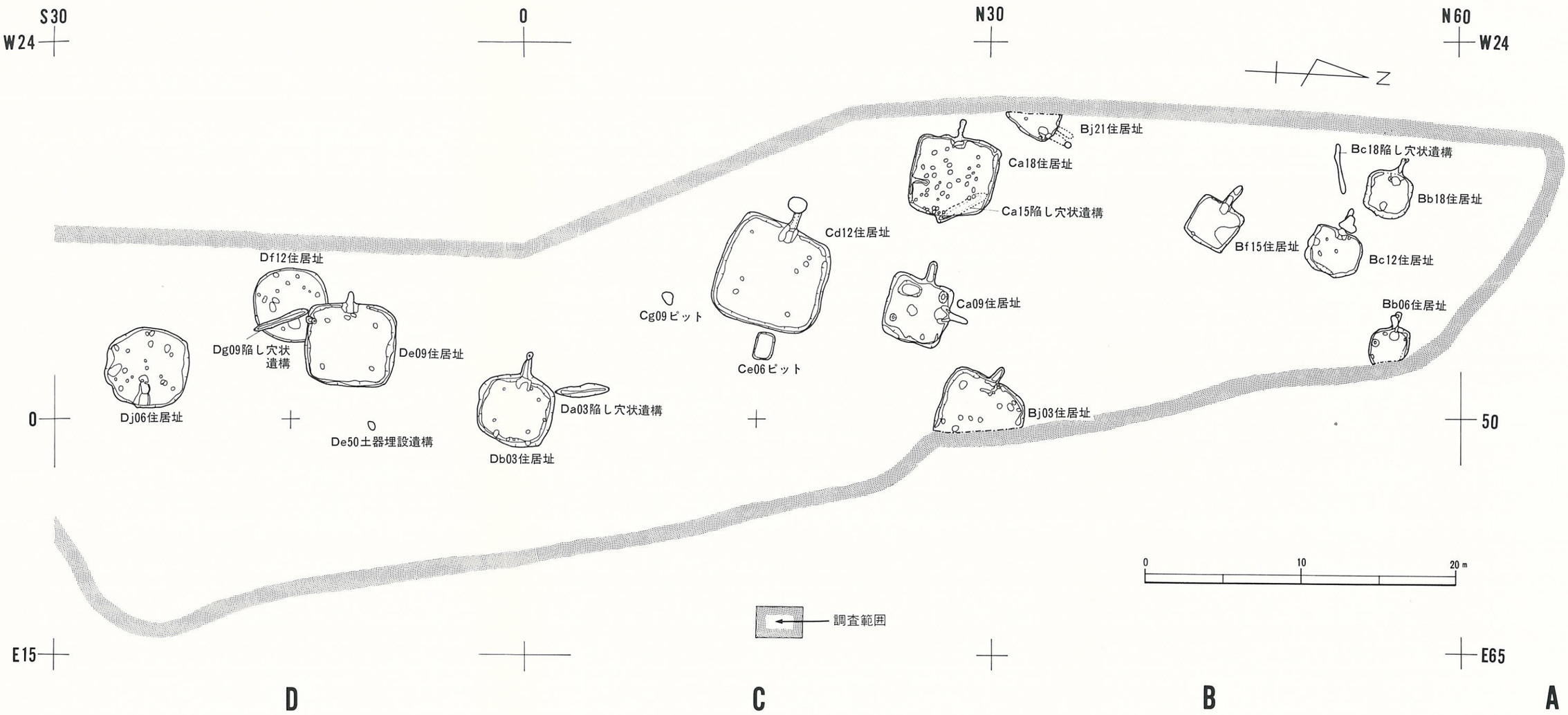
3．調査補助員　　高田和徳・関　　豊・福士廣志・鈴木貞行

4．調査期間　　昭和51年６月21日～10月９日

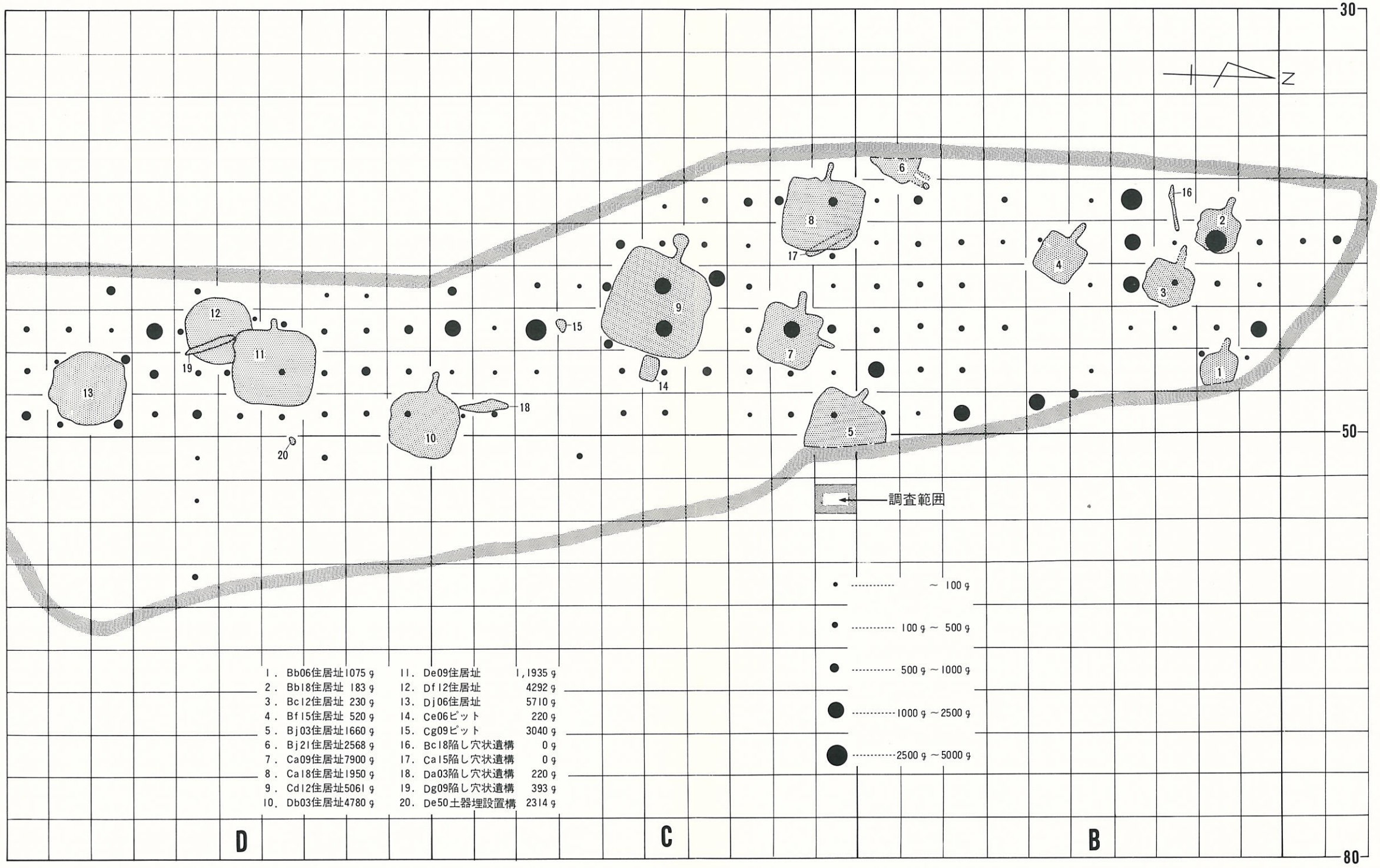
5．調査対象面積　3062m²

6．発掘面積　　3062m²

7．遺跡記号　　ＮＳ－Ａ76



図版１　長瀬Ａ遺跡遺構配置図



図版2　長瀬A遺跡出土遺物重量分布図

1．検出遺構

（1）原始時代

①　竪穴住居址

Ｄｆ12住居址

遺　構（図版３・写真図版3―ｂ、４―ａ～ｃ）

この住居址はⅢ層の上面で検出されたもので、調査対象区の南側部分に位置する。住居址内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、このＤｆ12住居址内には床面・壁・炉などを何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す13棟の住居址が存在していることが判明した。これらの13棟の住居址の新旧関係は不明であるが、一応ここではＤｆ12―ａ住居址・Ｄｆ12―ｂ住居址・Ｄｆ12―ｃ住居址・Ｄｆ12―ｄ住居址・Ｄｆ12―ｅ住居址・Ｄｆ12―ｆ住居址・Ｄｆ12―ｇ住居址・Ｄｆ12―ｈ住居址・Ｄｆ12―ｉ住居址・Ｄｆ12―ｊ住居址・Ｄｆ12―ｋ住居址・Ｄｆ12―ｌ住居址・Ｄｆ12―m住居址と仮称する。これらの住居址について以下に記載するが、柱穴配置以外の各住居址に共通する事項についてまず一括して述べることとする。

規模は径4.7m ±を計り、平面形はやや隅丸方形に近い円形を呈する。

埋土は黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層で構成されている。これらの土層のうち上位にある黒色土層や下位にある暗褐色土層中には炭化物が包含されている。

床面は多少の凹凸はみられるが、ほぼ平坦で堅くしまっている。

壁高は、北壁37cm±・東壁29cm±・南壁37cm±・西壁43cm±を計る。

炉は東壁寄りに位置する石囲炉である。この石囲炉は平面形が径90cm±の円形を呈し、構成礫が二重に巡らされている。炉の構成礫は粒径10cm±～23cm±の安山岩類亜角礫であり、床面から15cm±～19cm±の深さに埋置されている。炉の使用面は床面より20cm±低いレベルにある。この使用面下には火熱により層厚８cm±を計る橙色の現地性の焼土が形成されている。炉内の使用面より上位の部分は炭化物を多量に含む黒褐色土や暗褐色土などで充填されていた。なお西側炉縁の構成礫は、Ｄｇ09陥し穴状遺構によって破壊され消失していた。

南壁寄りの位置に貯蔵穴状のピット（P_{10}）が確認された。P_{10}は炉から105cm±南西にあり、開口部径67cm±×48cm±・底部径55cm±×35cm±・深さ８cm±の規模を計る。平面形は楕円形を示し、断面形は皿形を呈する。このピットの底面上から写真図版４―ｃに示したような状態で土器片が出土している。この住居址はＤｅ09住居址・Ｄｇ09陥し穴状遺構に切られている。

Ｄｆ12―ａ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のようは柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{19}（径25cm±・深さ34cm±）の３個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｄｆ12―ｂ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{20}（径25cm±・深さ72cm±）の３個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｄｆ12―ｃ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_4（径25cm±・深さ20cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の３個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｄｆ12―ｄ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{19}（径25cm±・深さ34cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の４個で構成され、菱形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1-P_{19}・P_8-P_{22}、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ｄｆ12―ｅ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{20}（径25cm±・深さ72cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の４個で構成され、菱形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1-P_{20}・P_8-P_{22}、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ｄｆ12―ｆ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径17cm±・深さ43cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の４個で構成され、菱形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_2-P_{17}・P_8-P_{22}、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ｄｆ12―ｇ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_2（径17cm±・深さ43cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{19}（径25cm±・深さ34cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の６個で構成され、六角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1-P_{19}・P_2-P_{17}・P_8-P_{22}がそれぞれ対になる在り方

をしている。

Ｄｆ12－ｈ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_2（径17cm±・深さ43cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{20}（径25cm±・深さ72cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の６個で構成され、六角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{20}・P_2－P_{17}・P_8－P_{22}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｄｆ12－ｉ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_2（径17cm±・深さ43cm±）・P_5（径20cm±・深さ38cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{13}（径８cm±・深さ26cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{19}（径25cm±・深さ34cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の８個で構成され、六角形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{19}・P_2－P_{17}・P_5－P_{13}・P_8－P_{22}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｄｆ12－ｊ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_2（径17cm±・深さ43cm±）・P_5（径20cm±・深さ38cm±）・P_8（径24cm±・深さ26cm±）・P_{13}（径８cm±・深さ26cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{19}（径25cm±・深さ34cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の８個で構成され、六角形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{19}・P_2－P_{17}・P_5－P_{13}・P_8－P_{22}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｄｆ12－ｋ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_5（径20cm±・深さ38cm±）・P_{14}（径14cm±・深さ20cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{20}（径25cm±・深さ72cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の６個で構成され、六角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{14}・P_5－P_{20}・P_{17}－P_{22}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｄｆ12－ｌ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_2（径17cm±・深さ43cm±）・P_5（径20cm±・深さ38cm±）・P_{13}（径８cm±・深さ26cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{19}（径25cm±・深さ34cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の７個で構成され、七角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1－P_{19}・P_2－P_{17}・P_5－P_{13}がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｄｆ12－ｍ住居址

この住居址は、Ｄｆ12住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径32cm±・深さ69cm±）・P_2（径17cm±・深さ43cm±）・P_5（径20cm±・深さ38cm±）・P_{13}（径８cm±・深さ26cm±）・P_{17}（径25cm±・深さ25cm±）・P_{20}（径25cm±・深さ72cm±）・P_{22}（径33cm±・深さ70cm±）の７個で構成され、七角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_1—P_{20}・P_2—P_{17}・P_5—P_{13}がそれぞれ対になる在り方をしている。

以上の柱穴のほかに住居址内の床面には、P_3（径14cm±・深さ24cm±）・P_6（径15cm±・深さ15cm±）・P_7（径24cm±・深さ７cm±）・P_9（径20cm±・深さ16cm±）・P_{11}（径37cm±・深さ15cm±）・P_{12}（径30cm±・深さ20cm±）・P_{15}（径17cm±・深さ23cm±）・P_{16}（径23cm±・深さ10cm±）・P_{18}（径25cm±・深さ17cm±）・P_{21}（径22cm±・深さ15cm±）の柱穴状のピット群が検出されている。しかしこれらのピット群の具体的な位置づけについては不明である。

出土遺物（図版10—１～28、11—12～27、12—28・写真図版33—1～16、34—17～28）

出土遺物は、床面上や床面直上などから得られた土器片・石器・石製品である。

床面上からは石器が１点（20）が出土している。20は石器の長軸方向につまみ部がある石匙である。つまみ部は打面の反対方向に作り出されている。背面の剝離調整は大変入念であるが、腹面にはつまみ部と側縁部に部分的に細かい剝離調整が施されているだけで第一次剝離面が大きく残されている。

住居址内のピット関係からは、12・13などの土器片が出土している。12・13は貯蔵穴状のピットP_{10}底面上から得られたものである。どちらも口縁部が外反気味に立ちあがる深鉢形土器の破片である。地文はＲＬの単節の斜縄文である。内外面にススが付着している。

以上に述べた遺物のほかはすべて床面直上から得られたものである。床面直上の出土遺物としては、土器片（１～11、14～16）・石器（17～19、21～26）・石製品（27）がある。土器片は文様上の特徴により、Ａ．帯状の磨消縄文と沈線文で文様が構成されているもの、Ｂ．地文のみが施文されているもの、に分けられる。Ａに属するものは１～10の土器片である。１～３には貼付による垂下文が波状口縁の頂部から施文されている。また波状口縁の頂部には小指状の貼付がみられる。これらの土器片の外面には多くのススが付着している。８・９は垂下文に連続する形で「Ｘ」字状に粘土紐が貼り付けられている。このため波状口縁の頂部の部分には菱形を呈する区画が形成されている。これらの外面にもススの付着が認められる。10は口縁部が肥厚し複合口縁状を呈する。Ｂに属するものは11・14～16の土器片である。11は口唇部に沿って幅1.8cm±の粘土紐が貼り付けられており複合口縁状を呈する。地文は無節の斜縄文である。胎土には金雲母が僅かに含まれている。14は網目状撚糸文が施文されているものである。15・16には５～６条を１単位とする縦方向の沈線が櫛目状に施されている。これらの土器片は胎土に細礫を含んでいる。外面に多量のススが付着している。床面直上から出土した石器は、石鏃3

点（17〜19）・石匙１点（21）・ピエス・エスキーユ１点（22）・使用痕のある剝片４点（23〜26）・石斧（28）である。石鏃はいずれも無茎の鏃で基部が直線的なものである。17の側縁部は直線的であり、18・19の側縁部はゆるやかな凸状を示す。19は他の石鏃の約２倍の最大長をもつ。21は破損した石匙の破片である。残存しているのは刃部の先端部分だけであるためつまみ部の形態は不明である。22のピエス・エスキーユは、台形の平面形をもち縦断面形が三角形を呈する。この石器の右側縁部には折断面がみられる。出土した使用痕のある剝片４点のうち23は剝片の長軸方向および短軸方向の側縁部に部分的に使用痕が認められる。これ以外のものは剝片の長軸に平行する側縁部に使用痕がみられる。28の石斧は扁平な自然礫を素材とする打製石斧である。この自然礫は輝石安山岩の亜角礫で平面形が長方形状を呈する。27の石製品はチャートの石材を加工して製作した有孔石製品である。２分の１ほどが欠損している。

なお、これまでに記述した出土遺物のうち土器片は、時期的に縄文時代後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

Ｄｊ06住居址

遺　構（図版４、５・写真図版４－ｄ、５－ａ〜ｃ）

この住居址はⅢ層の上面で検出されたもので、前述のＤｆ12住居址からみて4.9m ±南東の位置にある。住居址内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、このＤｊ06住居址内には床面・壁・炉などを何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す９棟の住居址が存在していることが判明した。これらの９棟の住居址の新旧関係は不明であるが、一応ここではＤｊ06－ａ住居址・Ｄｊ06－ｂ住居址・Ｄｊ06－ｃ住居址・Ｄｊ06－ｄ住居址・Ｄｊ06－ｅ住居址・Ｄｊ06－ｆ住居址・Ｄｊ06－ｇ住居址・Ｄｊ06－ｈ住居址・Ｄｊ06－ｉ住居址と仮称する。これらの住居址について以下に記載するが、柱穴配置以外の各住居址に共通する事項についてまず一括して述べることとする。

規模は径5.2m ±×5.0m ±を計る。平面形はやや隅丸方形に近い円形を呈するが、南側部分は不整形である。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成されている。黒褐色土層および一部の暗褐色土層中には炭化物が包含されている。

床面は多少の凹凸はみられるが、ほぼ平担で堅くしまっている。

壁高は、北壁43cm±・東壁21cm±・南壁25cm±・西壁20cm±を計る。

炉は東壁際に位置する複式炉である。この複式炉は石囲部と前庭部の２つの単位から成るもので、全長155cm±を計る。石囲部は一辺の長さが70cm±の隅丸方形の形をしている。この部位の構成礫は粒径10cm±〜37cm±の安山岩類および凝灰岩類の亜角礫であるが、主として安山岩

類の亜角礫が使用されている。これらの礫は床面から23cm±～26cm±の深さに埋置されている。石囲部の使用面は床面より20cm±低いレベルにある。この使用面下には火熱により層厚4cm±～7cm±を計る赤褐色の現地性の焼土が形成されている。なお西側炉縁の構成礫は二重になっている。また前庭部との境界線になっている東側炉縁の構成礫の2分の1ほどが消失している。前庭部は開口部径90cm±・底部径90cm±×70cm±・深さ11cm±の規模をもつピットとなっている。平面形は隅丸長方形に近い楕円形状を示す。前庭部の底面はやや平坦で堅くしまっており、その末端部は東壁に接続している。底面の北側の立ちあがり部分には、幅8cm±・深3cm±の細い溝がみられる。石囲部寄りの底面上に粒径30cm±×12cm±の安山岩類亜角礫が1個確認された。この礫は火熱を受けた形跡が認められることや石囲部の礫の抜き取り痕の形状と符合することからみて、石囲部の炉縁の構成礫と思われる。複式炉の西側に径75cm±×45cm±の楕円形状の広がりを示す現地性の焼土がみられる。この現地性の焼土は、石囲部の西側炉縁から連続する在り方をしていることから判断して、複式炉と一連のものと考えられる。

南壁際の床面上に貯蔵穴状のピット（P_{14}）が検出された。P_{14}は開口部径90cm±×55cm±・底部径45cm±×35cm±・深さ26cm±を計る。平面形は隅丸長方形状を示し、断面形は皿形を呈する。

Ｄｊ06－ａ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径13cm±・深さ20cm±）・P_8（径35cm±・深さ22cm±）・P_{20}（径30cm±・深さ53cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｄｊ06－ｂ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_1（径13cm±・深さ20cm±）・P_{12}（径20cm±・深さ47cm±）・P_{19}（径20cm±・深さ41cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｄｊ06－ｃ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径30cm±・深さ30cm±）・P_{12}（径20cm±・深さ47cm±）・P_{19}（径20cm±・深さ41cm±）の3個で構成され三角形の配置を示す。

Ｄｊ06－ｄ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径30cm±・深さ30cm±）・P_{12}（径20cm±・深さ47cm±）・P_{19}（径20cm±・深さ41cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

Ｄｊ06－ｅ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径30cm±・深さ30cm±）・P_{12}（径20cm±・深さ47cm±）・P_{19}（径20cm±・深さ41cm±）・P_{25}（径20cm±・深さ54cm±）の４個で構成され、菱形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_2-P_{19}・$P_{12}-P_{25}$、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ｄｊ06―ｆ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径30cm±・深さ30cm±）・P_{12}（径20cm±・深さ47cm±）・P_{20}（径30cm±・深さ53cm±）・P_{25}（径20cm±・深さ54cm±）の４個で構成され、菱形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_2-P_{20}・$P_{12}-P_{25}$、とそれぞれを結ぶ線が対角線を形成し直交する。

Ｄｊ06―ｇ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径30cm±・深さ30cm±）・P_8（径35cm±・深さ22cm±）・P_{15}（径28cm±・深さ55cm±）・P_{19}（径20cm±・深さ41cm±）・P_{28}（径15cm±・深さ20cm±）の５個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_2-P_8・$P_{15}-P_{28}$がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｄｊ06―ｈ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径30cm±・深さ30cm±）・P_{12}（径20cm±・深さ47cm±）・P_{18}（径22cm±・深さ55cm±）・P_{20}（径30cm±・深さ53cm±）・P_{26}（径14cm±・深さ20cm±）の５個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_2-P_{12}・$P_{18}-P_{26}$がそれぞれ対になる在り方をしている。

Ｄｊ06―ｉ住居址

この住居址は、Ｄｊ06住居址内で次のような柱穴配置を示すものである。P_2（径30cm±・深さ30cm±）・P_{12}（径20cm±・深さ47cm±）・P_{18}（径22cm±・深さ55cm±）・P_{21}（径25cm±・深さ45cm±）・P_{26}（径14cm±・深さ20cm±）の５個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P_2-P_{12}・$P_{18}-P_{26}$がそれぞれ対になる在り方をしている。

以上の柱穴のほかに住居址内の床面には、P_3（径25cm±・深さ51cm±）・P_4（径20cm±・深さ30cm±）・P_5（径15cm±・深さ39cm±）・P_6（径17cm±・深さ10cm±）・P_7（径20cm±・深さ31cm±）・P_9（径50cm±・深さ19cm±）・P_{10}（径20cm±・深さ36cm±）・P_{11}（径35cm±・深さ31cm±）・P_{13}（径13cm±・深さ34cm±）・P_{16}（径20cm±・深さ15cm±）・P_{17}（径40cm±×25cm±・深さ10cm±）・P_{22}（径20cm±・深さ37cm±）・P_{23}（径20cm±・深さ41cm±）・P_{24}（径30cm±・深さ39cm±）・P_{27}（径８cm±・深さ５cm±）の柱穴状のピット群が検出されている。しかしこれらのピット群の具体的な位置づけについては不明である。

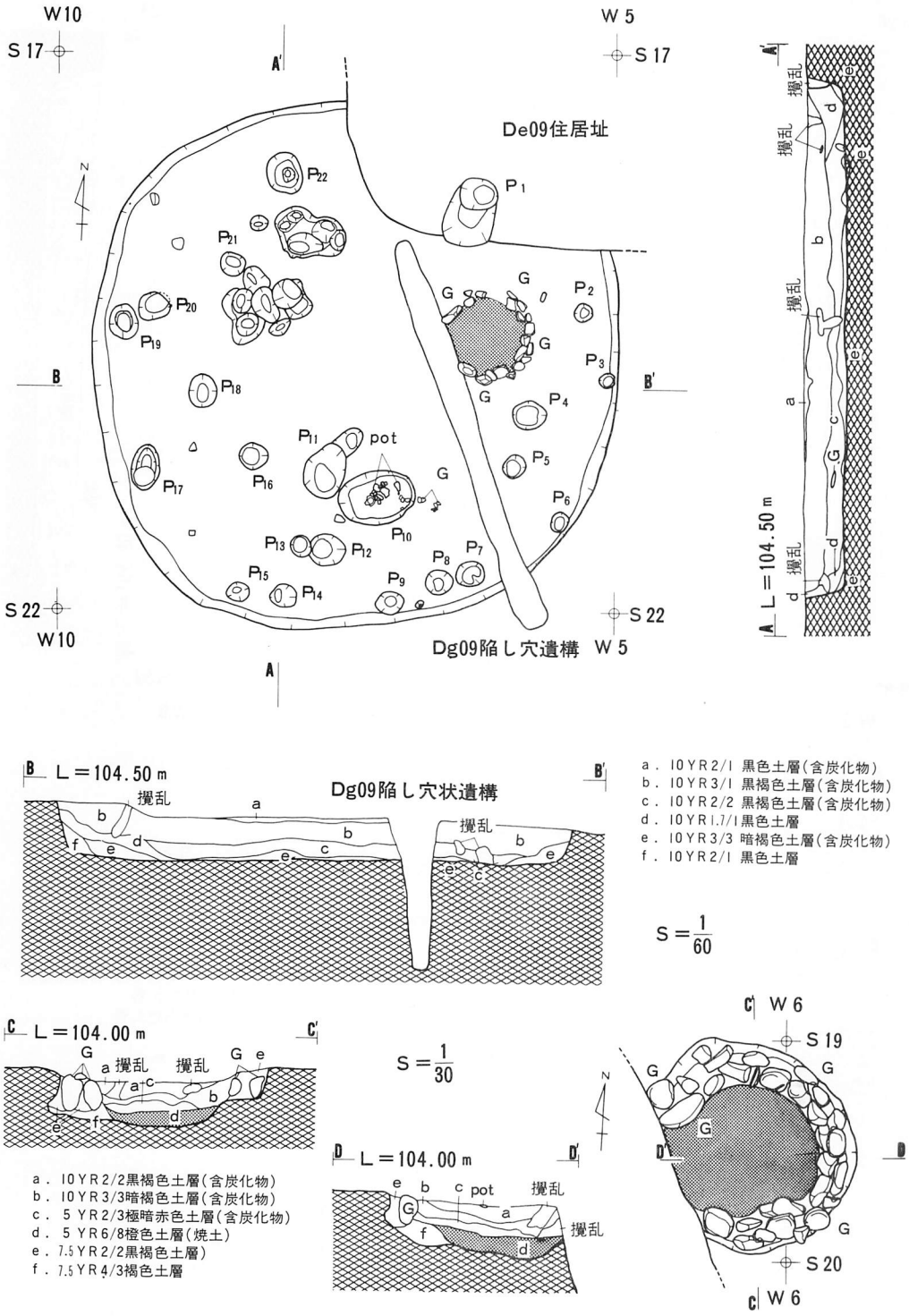
出土遺物（図版12―29～33、13―34～41・写真図版35―29～40）

出土遺物は床面上や埋土の下位から得られた土器・石器などである。

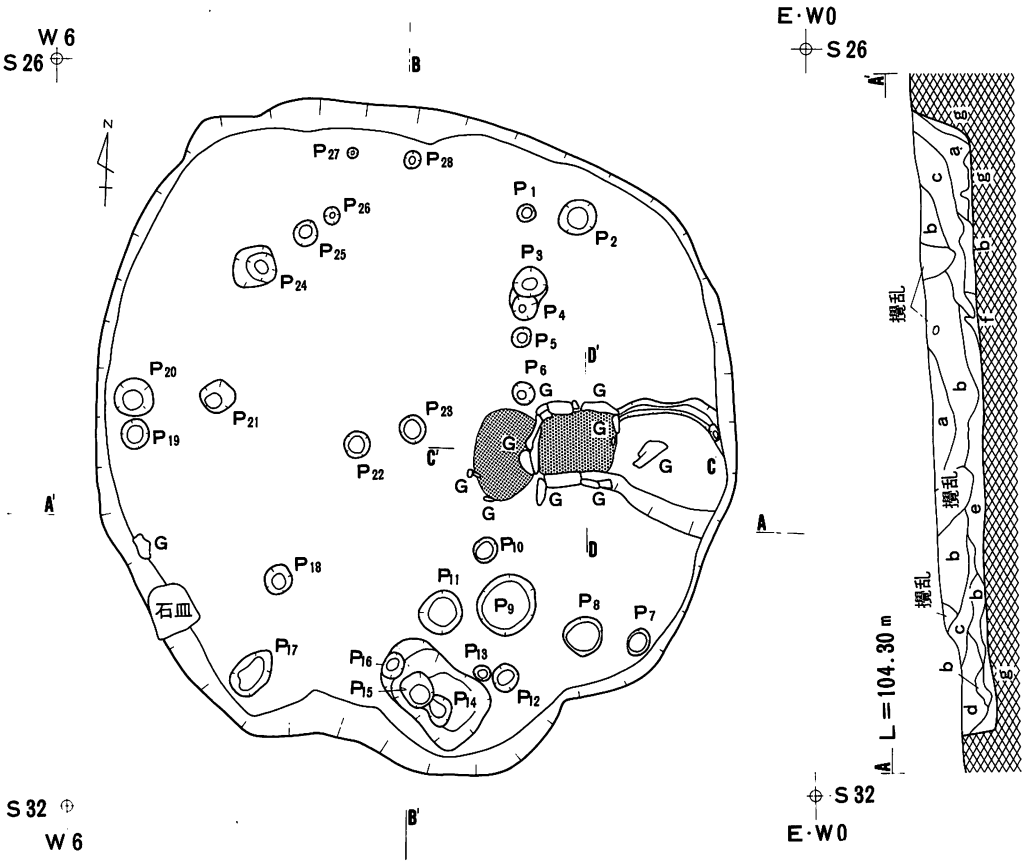
床面上からは29・30の土器と41の石器が出土している。29は体部下半部～底部を欠く深鉢形の土器である。この土器は口縁部が平縁でやや外反気味に立ちあがっており、体部下半部に僅かに膨らみがみられる。地文はＬＲの単節の斜縄文であるが、節が明瞭な条と不明瞭な条が１条ごとに交互に認められる。内面の口縁部には横方向の入念なミガキ調整が施されている。外面の口縁部および体部には多量のススが付着している。また外面の体部のところどころに径３cm±～４cm±の黒斑がみられる。30はほぼ完形の小型土器である。この土器は体部下半部に膨らみをもちフラスコ形ピット状の形をしている。口唇部に沿って径４mm±の貫通孔が環状に巡らされているが、これ以外の部分は無文である。内外面にはナデ調整が施されている。内面にスス状の黒色の付着物が認められる。色調はにぶい黄橙色を示す。41の石器は、南西の壁に斜めに立て掛けられた状態で出土した台石である。この台石は方形の形をした板状の凝灰岩を素材としており、その両面の中央部分が磨り減って楕円形状に凹んでいる。このような凹みの状況からみて、41の台石は石皿的機能を果たしたものと考えられる。

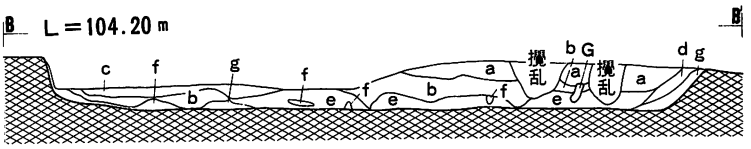
以上に述べた遺物のほかはすべて埋土下位から得られたもので土器片および石器である。土器片は、いずれも拓影図として掲載することが困難なほど極めて小さな破片のものばかりである。出土した石器は、石鏃１点(31)・スクレイパー２点(32・33)・使用痕のある剝片(34～39)・石斧１点（40）である。31は無茎の石鏃で基部が直線的である。32のスクレイパーは石器の長軸と直交する縁辺に刃部が形成されているものである。33のスクレイパーは石器の長軸に平行する右側縁部に刃部が形成されている。このスクレイパーの頭部には打面および折断面がみられる。使用痕のある剝片４点のうち34～38は剝片の長軸に平行する側縁部に使用痕が認められるものである。36は右側縁部に、また37は頭部にそれぞれ折断面をもっている。39は剝片の長軸と直交する縁辺に使用痕が認められるものである。この剝片の左側縁部にも折断面がみられる。40の石斧は刃部が欠損している磨製石斧である。基部の破損もかなり目立つ。

なお、これまでに記述した出土遺物のうち土器および土器片は、時期的に縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

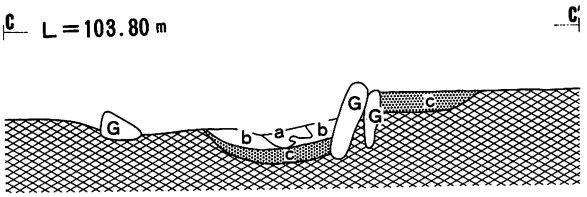

W10
S 17
W 5
S 17
A'
De09住居址
P22
P1
P21
P20
P19
P2
P3
P18
P4
P11
pot
P5
P17
P16
P6
P10
P13
P12
P8
P7
P15
P14
P9
S 22
W10
S 22
W 5
Dg09陥し穴遺構
A
B
B'
G
撹乱
L＝104.50 m
Dg09陥し穴状遺構
a．10YR2/1 黒色土層(含炭化物)
b．10YR3/1 黒褐色土層(含炭化物)
c．10YR2/2 黒褐色土層(含炭化物)
d．10YR1.7/1黒色土層
e．10YR3/3 暗褐色土層(含炭化物)
f．10YR2/1 黒色土層
S＝1/60
C
C'
L＝104.00 m
S＝1/30
a．10YR2/2黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR3/3暗褐色土層(含炭化物)
c．5YR2/3極暗赤色土層(含炭化物)
d．5YR6/8橙色土層(焼土)
e．7.5YR2/2黒褐色土層)
f．7.5YR4/3褐色土層
D
D'
pot
W 6
S 19
S 20
W 6

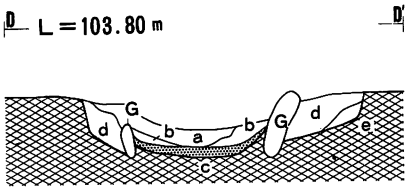
図版3　Df12住居址





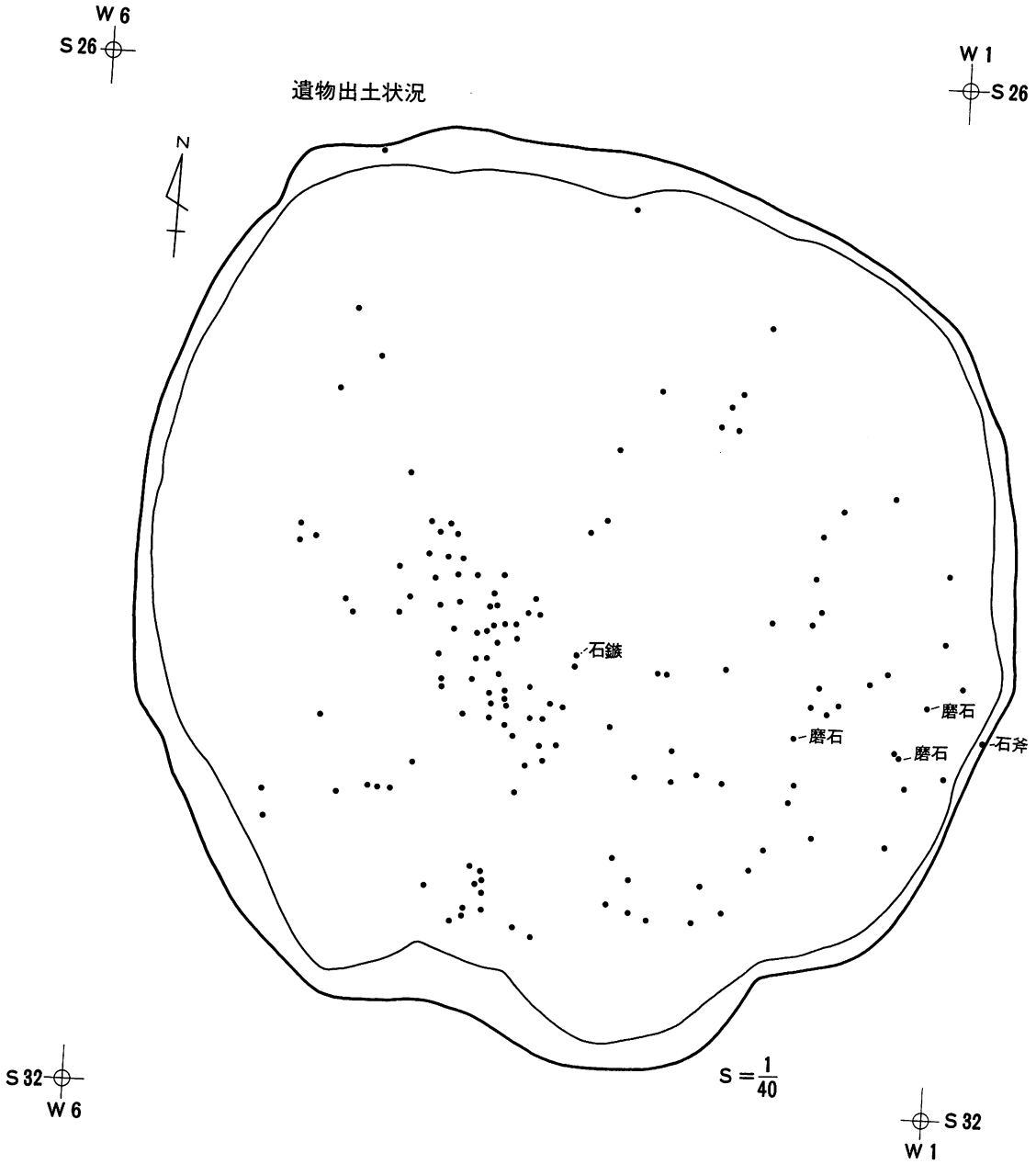
a．10YR2/2黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR2/3黒褐色土層(含炭化物)
c．10YR3/2黒褐色土層(含炭化物)
d．10YR3/3暗褐色土層(含炭化物)
e．10YR3/1黒褐色土層(含炭化物)
f．10YR4/4褐色土層
g．10YR3/4暗褐色土層





a．10YR3/3黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR4/6褐色土層(含炭化物)
c．2.5YR4/8赤褐色土層(焼土)
d．10YR4/4褐色土層
d．10YR2/3黒褐色土層

図版4　Dj06住居址(1)



図版 5　Dj06住居址(2)

② ピット

Ｃｇ09ピット

遺　構（図版６・写真図版６－ａ～ｃ）

このピットは調査対象の中央部分のⅣ層上面で検出されたが、出土遺物の時期や埋土の性状などからみて、実際は層位的にⅡ層の下位に位置するものであろう。規模は開口部径86cm±×66cm±・底部径70cm±×33cm±・深さ22cm±を計り、平面形は楕円形状を示す。断面形は皿形を呈する。

埋土は黒褐色土層・黒色土層・暗褐色土層で構成されている。

底面はほぼ平坦で少しやわらかい。底面の東側部分に径39cm±×30cm±・底面からの深さ11cm±の落ちこみがみられる。

出土遺物（図版14―42・写真図版36―41）

底面上から１個体分の土器片が一括状態で出土した。この土器片を復元したのが42の土器である。42は波状口縁の壺形の土器である。波状口縁の各頂部には大豆状の粘土が貼り付けられており、その上面には竹串のような工具によって刺突が施されている。各頂部の１cm±下方には径７mm±の貫通孔が配置されている。幅５mm±の隆帯が口縁部・頸部・体部に巡らされている。文様帯は頸部と体部の隆帯で区切られた部分に設けられており、この部分には入組形の帯状の磨消縄文による文様が展開されている。磨消縄文のところどころに竹管状の工具によって刺突文が施されている。磨消縄文の地文部は、体部上半部がＬＲの単節の斜縄文で、体部下半部がＬの無節の斜縄文となっている。この土器の色調は内外面とも黒色を呈する。時期的に縄文時代後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

③ 陥し穴状遺構

Ｂｃ18陥し穴状遺構

この陥し穴状遺構は調査対象区の北側部のⅥａ層上面で検出されたが、土層断面の観察結果によれば実際は層位的にはⅡ層の下位に位置するものである。検出面で確認された規模は313cm±×20cm±・底部287cm±×12cm±・深さ65cm±を計り、平面形は長楕円形を示す。横断面形は漏斗状を呈する。長軸の方向はＮ―80°―Ｅを示す。底部における軸長比は0.04である。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・明黄褐色土層などで構成されている。上位にある黒褐色土

層中には炭化物が少量包含されている。

底面はほぼ平坦でやわらかい。出土遺物はない。

Ｃａ15陥し穴状遺構

遺　構（図版７－ｂ・写真図版７－ｃ）

この陥し穴状遺構はⅣ層上面で検出されたが、埋土の性状や他の陥し穴状遺構の層位的事実などからみて、実際は層位的にⅡ層下位に位置するものであろう。検出面での規模は開口部径370cm±×65cm±・底部径333cm±×15cm±・深さ130cm±を計り、平面形は長楕円形を示す。横断面形は漏斗状を呈する。長軸の方向はＮ－35°－Ｗを示す。底部における軸長比は0.05である。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・明黄褐色土層などで構成されている。

底面はほぼ平坦でやわらかい。

この陥し穴状遺構は、古代のＣａ18住居址によって切られている。出土遺物はない。

Ｄａ03陥し穴状遺構

遺　構（図版18－ａ・写真図版８－ａ～ｄ）

この陥し穴状遺構はⅢ層上面で検出されたもので、調査対象区の中央部寄りに位置している。規模は開口部径348cm±×70cm±・底部径310cm±×10cm±・深さ140cm±を計り、平面形は長楕円形を示す。横断面形は漏斗状を呈する。長軸の方向はＮ－10°－Ｗを示す。底部における軸長比は0.03である。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・黄褐色土層などで構成されている。

底面はほぼ平坦でやわらかい。北側の壁は奥に抉りこまれている。

出土遺物（図版14－43～46・写真図版37－43～46）

出土遺物は埋土中から得られた43～46などの土器片である。43・44は帯状の磨消縄文が施文されている土器片で、内面には入念なミガキ調整が加えられている。43の外面の色調は黒色を呈する。45はＲＬの単節の斜縄文が地文として施されている体部の破片である。外面に多量のススが付着している。46は網代痕がみられる底部の破片である。この網代は経の条に対して緯の条が１本越え１本潜り１本送りが編まれているものである。これらの土器片は、時期的に縄文時代後期前葉に属するものと考えられる。

Ｄｇ09陥し穴状遺構

遺　構（図版８－ｂ・写真図版９－ａ～ｃ）

この陥し穴状遺構はⅢ層上面で検出されたもので、調査対象区の南側部分に位置している。

規模は開口部径372cm±×43cm±・底部径350cm±×10cm±・深さ133cm±を計り、平面形は長楕円形を示す。横断面形は漏斗状を呈する。長軸の方向はN—25°—Wを示す。底部における軸長比は0.03である。

埋土は黒色土層・褐色土層・黒褐色土層・にぶい黄橙色土層で構成されている。

底面はほぼ平坦でやわらかい。

この陥し穴状遺構は、Ｄｆ12住居址を切っている。

出土遺物（図版15—47～55・写真図版37—47～55）

出土遺物は埋土中から得られた47～55などの土器片・石器（55）・土製品（54）である。47は口唇部に沿って幅２cm±の帯状の粘土が貼り付けられており、複合口縁状を呈する。地文はＲＬの単節の斜縄文である。48・49は沈線文が施文されている土器片である。50はＬＲ、51はＲＬの単節の斜縄文を地文とする土器片である。51の胎土には金雲母が含まれている。52の地文は網目状撚糸文である。53には条痕状の沈線文が縦位に施文されている。この土器片の胎土に粗粒の砂が多く含まれている。55の石器は使用痕のある剝片であり、剝片の長軸に平行する両側縁部に使用痕が認められる。剝片の頭部に折断面がみられる。54の土製品は土器片の周囲を打ちかいて製作された円盤状土製品である。この土製品の周囲は、打ちかかれた後僅かに擦られている。

以上の出土遺物のうち土器片は、時期的に縄文時代後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

④　土器埋設遺構

Ｄｅ50土器埋設遺構

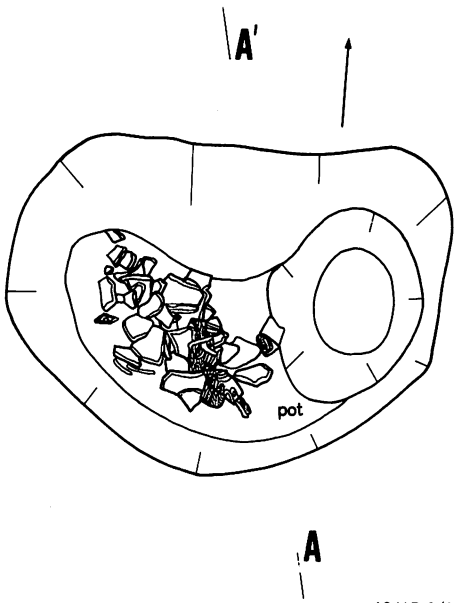
遺　構（図版９・写真図版９—ｄ）

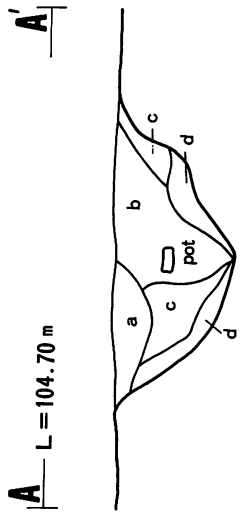
この土器埋設遺構はⅢ層上面で検出されたもので、調査対象区の南側部分に位置している。土器は次に記すような規模・形状をもつピットに直立の状態で埋設されている。このピットは開口部径49cm±×41cm±・底部径26cm±×23cm±・深さ27cm±の規模をもち、平面形が楕円形を示す。断面形は擂鉢形を示す。土器の周囲および内部は黒褐色土によって充填されていた。

出土遺物（図版15—56・写真図版36—42）

埋設されていた土器は深鉢形の土器（56）である。56は体部上半部にゆるやかなくびれをもち口縁部がやや外反気味に立ちあがっているものである。文様は口縁部に施文された２条の平行沈線文と体部に施文された網目状撚糸文で構成されている。体部下半部は無文となっている。

内面の口縁部および外面の口縁部〜体部に多量のススが付着している。この土器は時期的に縄文時代後期前葉に位置づけられるものと考えられる。



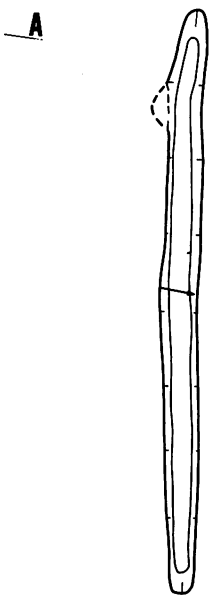


a．10YR 2/2 黒褐色土層
b．10YR 2/1 黒色土層
C．10YR 1.7/1黒色土層
d．10YR 3/3暗褐色土層

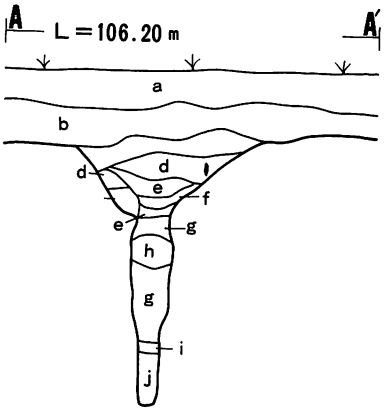
$S = \frac{1}{15}$

図版 6　Cg09 ピット

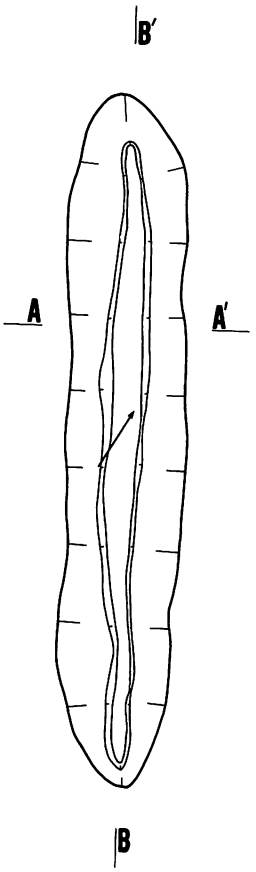
a．Bc18陥し穴状遺構

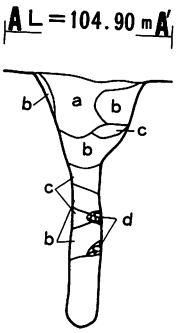


a．10YR3/2 黒褐色土層(Ⅰ層)
b．10YR3/1 黒褐色土層(Ⅱ層)
c．10YR2/3 黒褐色土層)
d．10YR2/2 黒褐色土層(含炭化物)
e．10YR2/1 黒色土層
f．10YR1.7/1黒色土層
g．10YR3/3 暗褐色土層
h．10YR3/4 暗褐色土層
i．10YR6/8 明黄褐色土層
j．10YR5/4 にぶい黄褐色土層

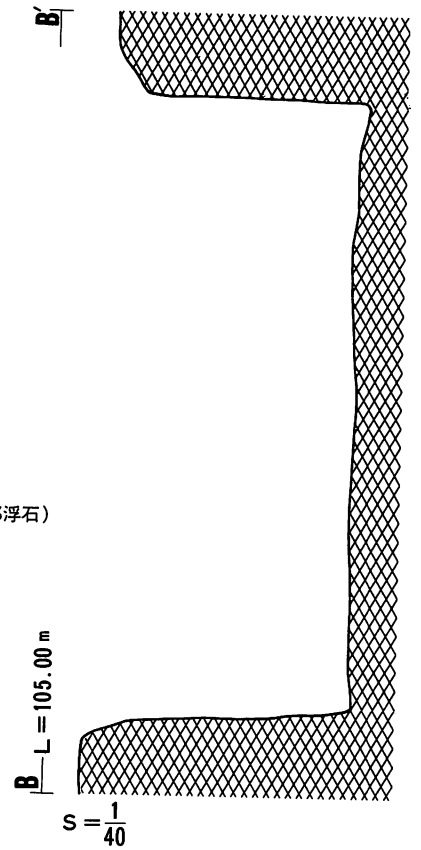


b．Ca15陥し穴状遺構



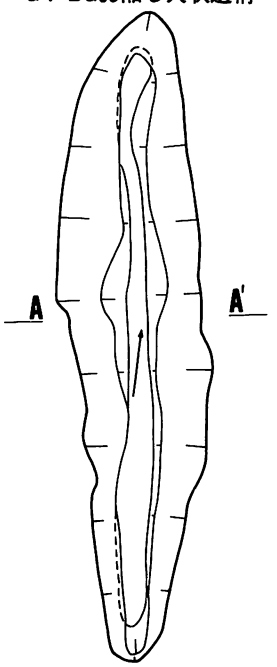


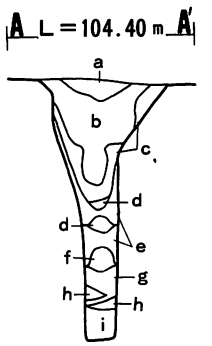
a．10YR3/2黒褐色土層
b．10YR3/3暗褐色土層
c．10YR3/4暗褐色土層
d．10YR6/6明黄褐色土層(南部浮石)
e．7.5YR8/3淡黄色土層



図版7

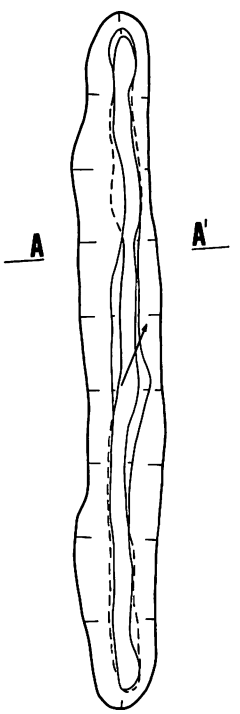
a．Da03陥し穴状遺構

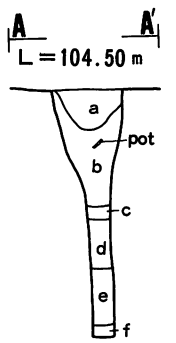




a．10YR2/2黒褐色土層
b．10YR2/3黒褐色土層
c．10YR3/4暗褐色土層
d．10YR3/2暗褐色土層
e．10YR4/8黄褐色土層
f．10YR3/3暗褐色土層
g．10YR3/1黒褐色土層
h．10YR5/4にぶい黄褐色土層
i．10YR6/3にぶい黄橙色土層
j．10YR

b．Dg09陥し穴状遺構

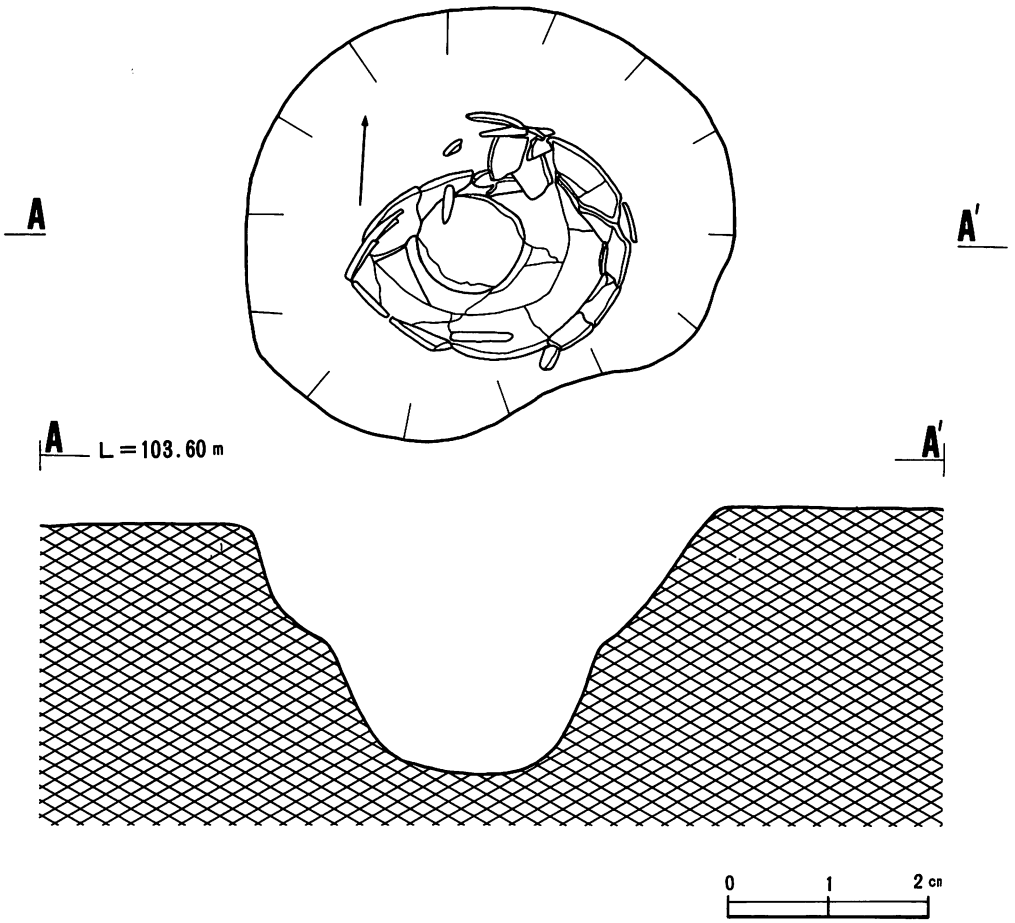




a．10YR1.7/1黒色土層
b．10YR2/1 黒色土層
c．10YR4/6 褐色土層
d．10YR4/4 褐色土層
e．10YR2/2 黒褐色土層
f．10YR6/4 にぶい黄橙色土層

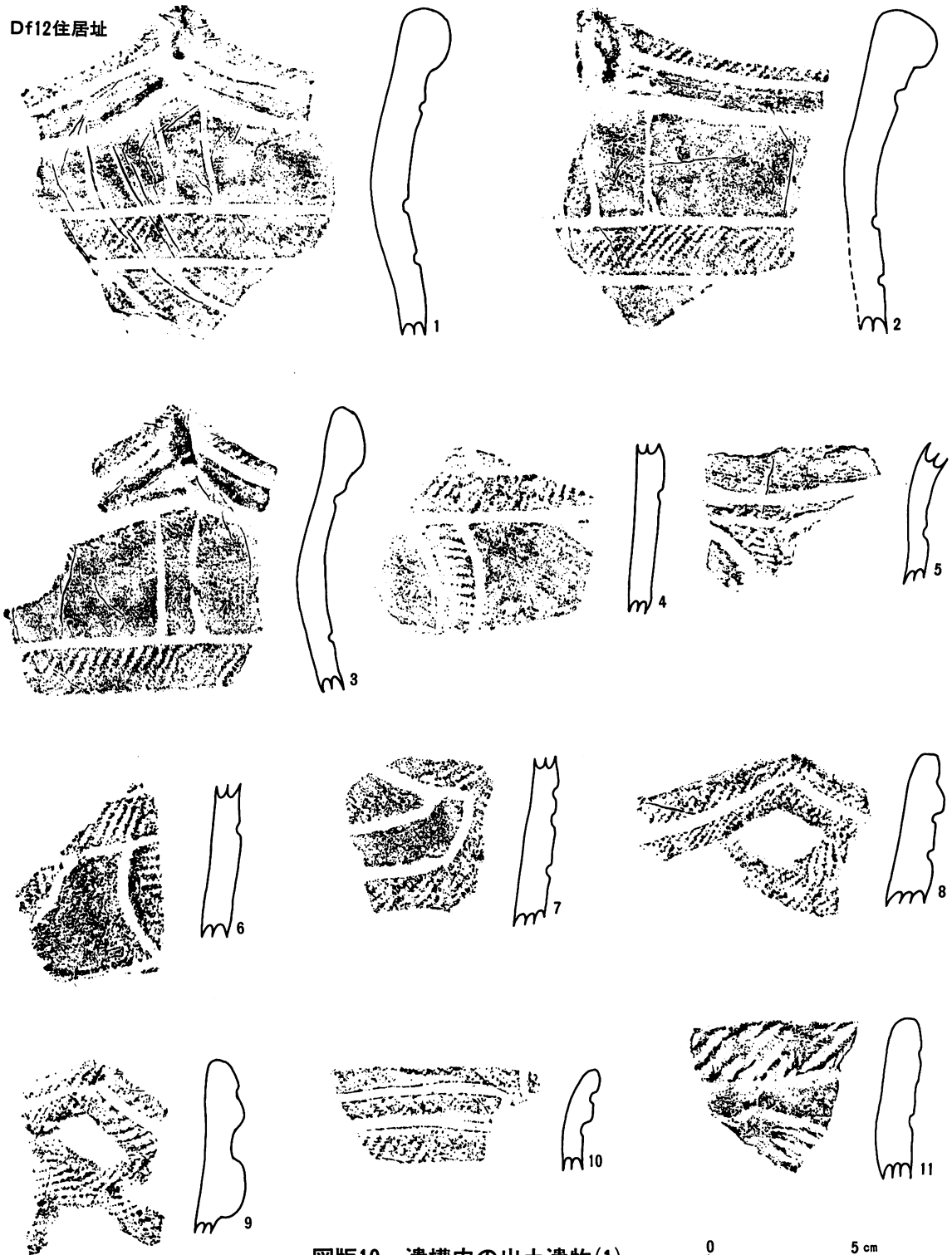
$S = \frac{1}{40}$

図版8



図版 9　De50土器埋設遺構

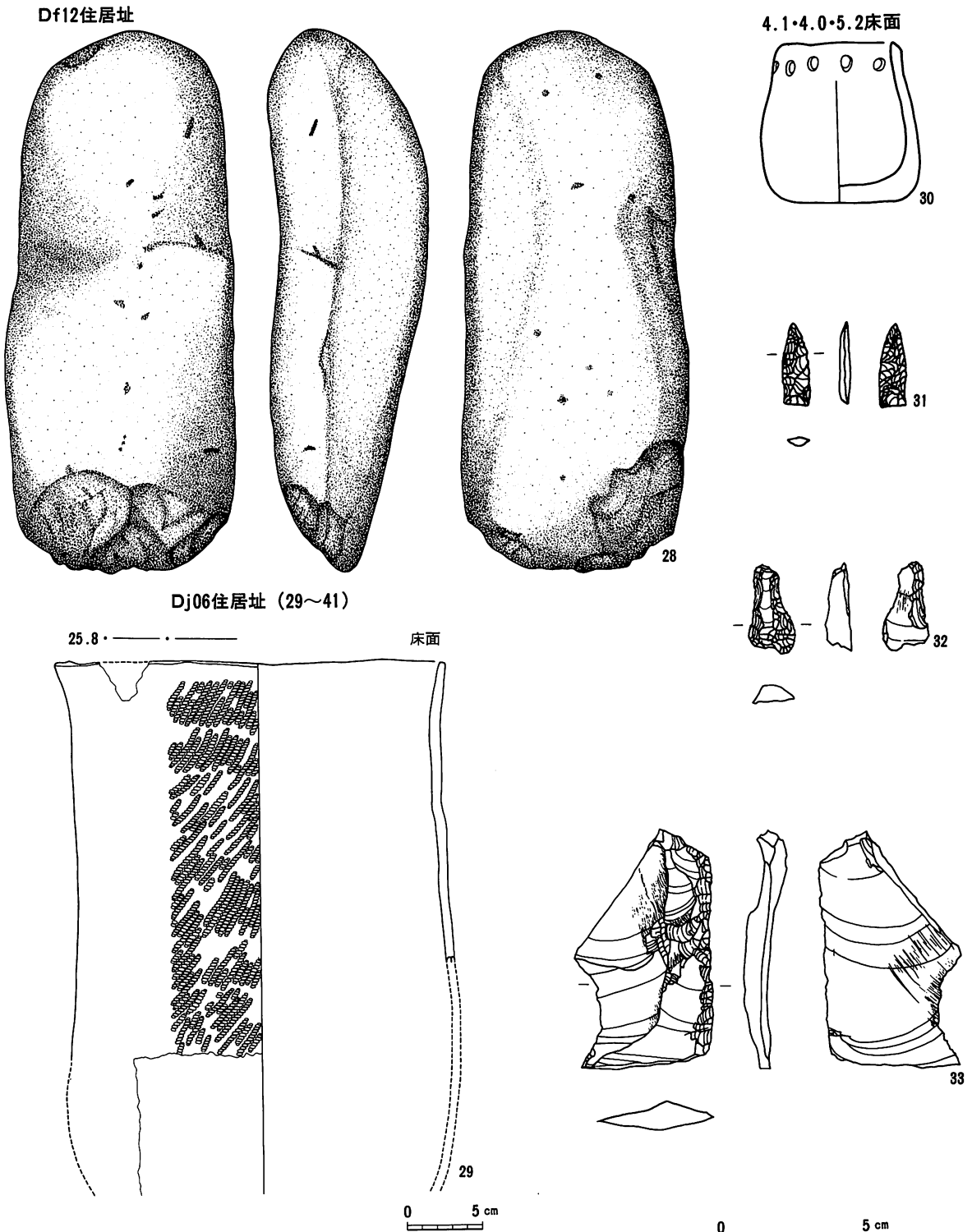
Df12住居址



図版10　遺構内の出土遺物(1)

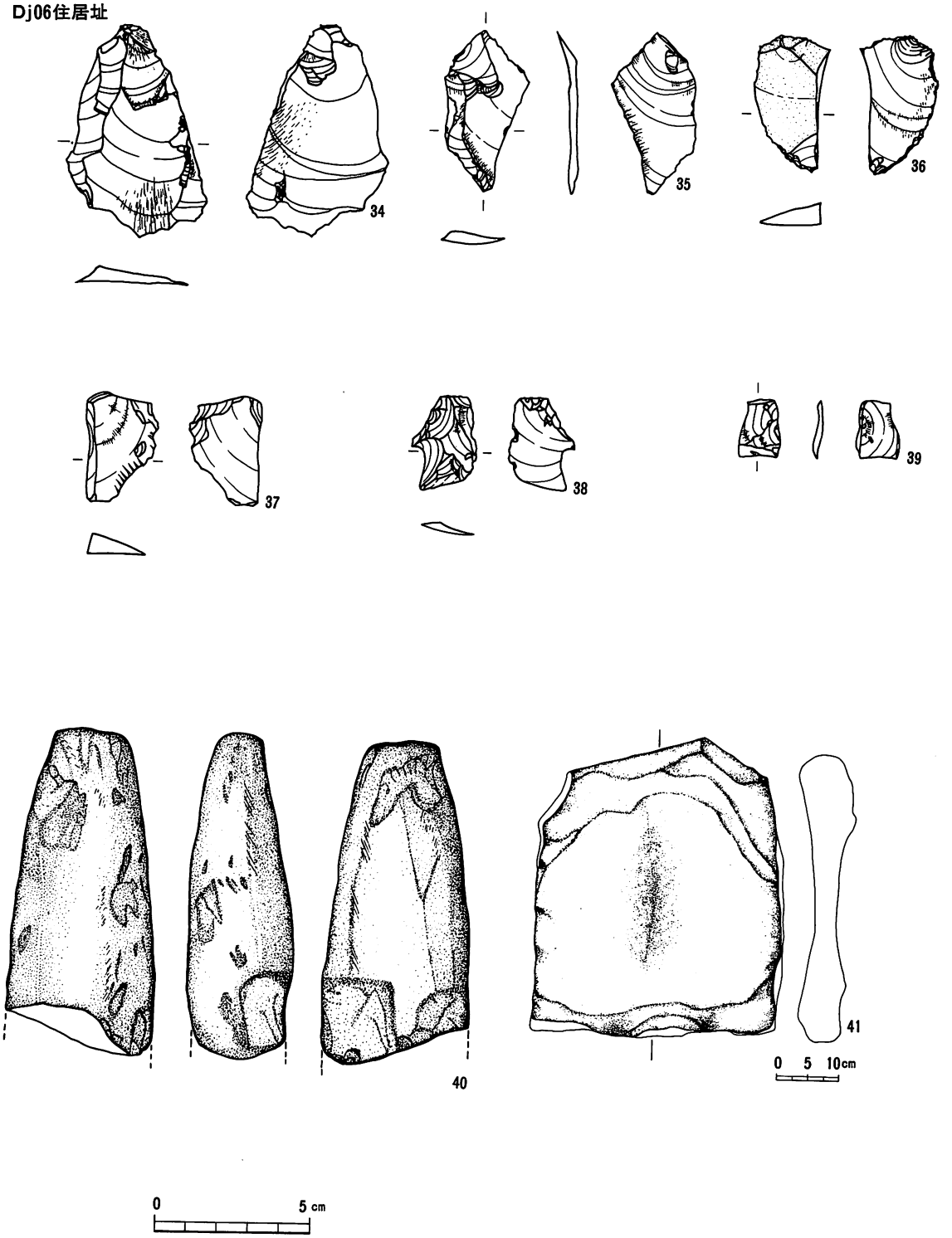
Df住居址

図版11　遺構内の出土遺物(2)

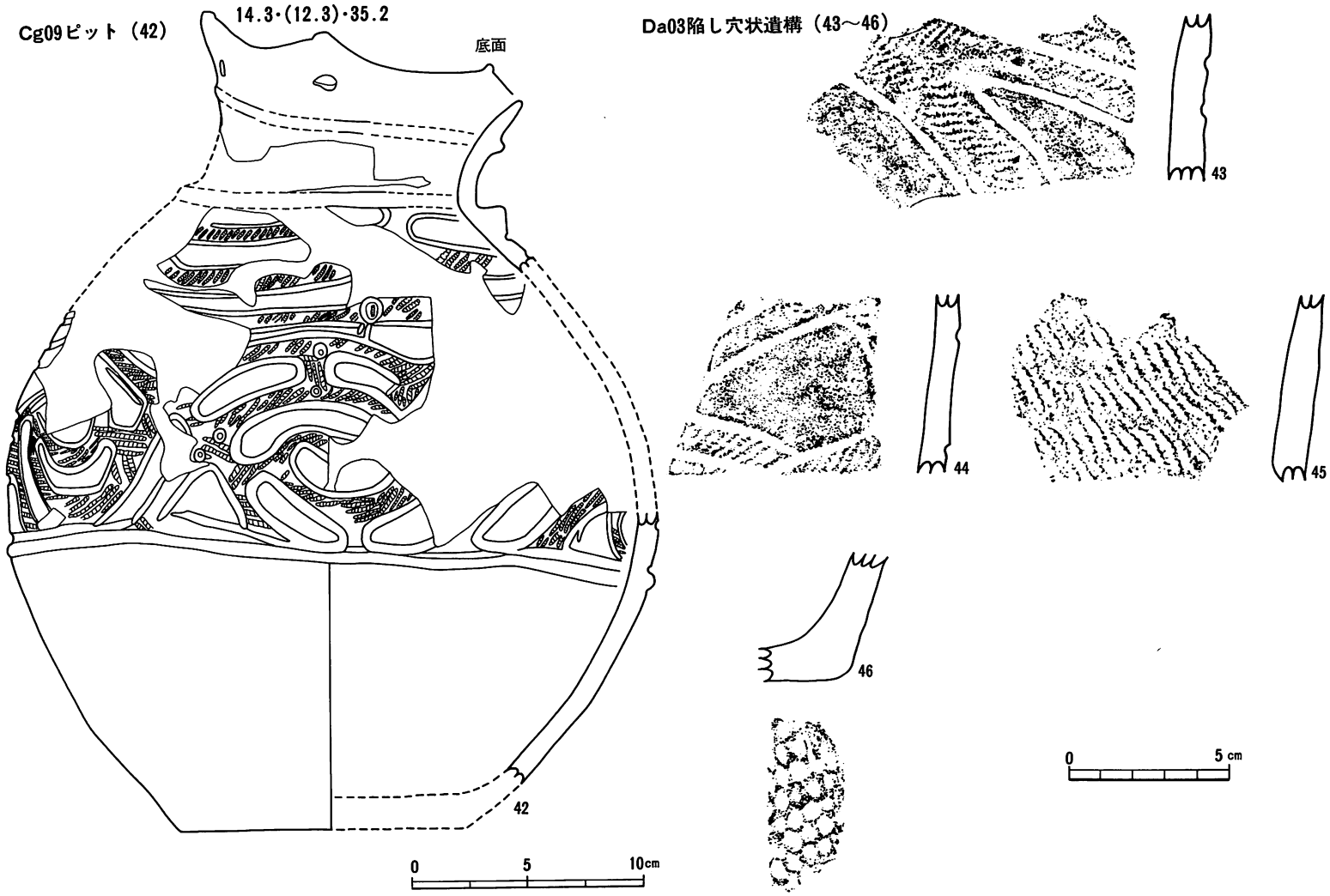


図版12　遺構内の出土遺物(3)

Dj06住居址

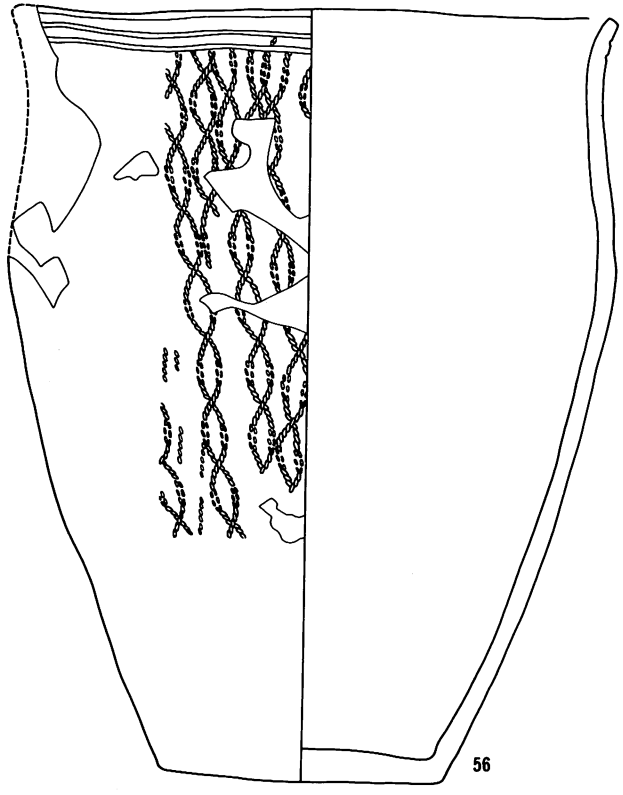


図版13　遺構内の出土遺物(4)

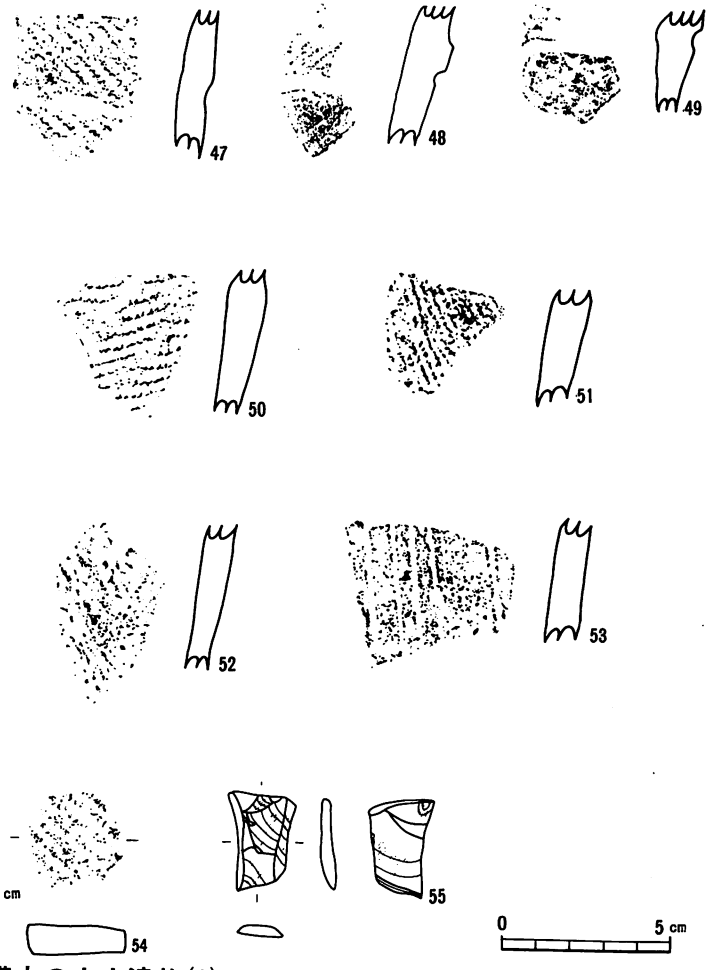


図版14　遺構内の出土遺物(5)

De50土器埋設遺構（56）
25.0・11.8・31.8



Dg09陥し穴状遺構（47～55）



図版15　遺構内の出土遺物(6)

（2）古　代

①　竪穴住居址

Ｂｂ06住居址

遺　構（図版16・写真図版10―ａ・ｂ、11―ａ～ｄ）

この住居址はⅢ層の上面で検出されたもので、調査対象区の北端に位置している。住居址の東側部分が県道工事の際に破壊されているためその規模・形状を正確に把握することはできないが、残存部から推定して平面形が一辺2.5m ±の隅丸方形を呈するものと考えられる。

埋土は暗褐色土層・黒褐色土層によって構成されている。ほとんどの土層中に灰白色の色調を示すブロック状の十和田ａ降下火山灰が包含されている。しかし壁際に堆積している褐色をおびた黒褐色土層中には十和田ａ降下火山灰は含まれていない。

床面は全体的に多少凹凸がみられ堅くしまっており、特にカマド周辺の部分は大変堅緻である。

柱穴配置は不明であるが、住居址内に検出されたピット群のうち規模や位置からみて、P_1（径20cm±・深さ17cm±）・P_4（径20cm±・深さ13cm±）などで構成されるものと考えられる。これらのピット以外に床面からP_2（径45cm±・深さ22cm±）・P_3（径35cm±・深さ14cm±）の２個のピットが検出されている。このうち後者のP_3はカマドの左袖部に接続する形で存在していることから推測すると、貯蔵穴的なピットとも考えられる。

壁高は、北壁28cm±・南壁28cm±・西壁35cm±を計る。

幅８cm±～14cm±・深さ５cm±～12cm±を計る壁溝が西壁の一部から北壁にかけて鉤形に設けられている。

カマドは西壁のやや北側に偏った位置にあり、全長175cm±を計る。袖部は左右ともその一部分が残存しているにすぎない。また煙道部の中央部分が攪乱を受けて破損している。袖部はにぶい黄橙色の粘土質シルトの積み重ねによって構築されている。燃焼部はその使用面が周辺の床面より４cm±低いレベルにあるものとなっている。この使用面下には火熱により層厚５cm±～10cm±を計る明赤褐色の現地性の焼土が形成されている。燃焼部から煙道部に移行する境界部分の上部に天井石が残存していた。この天井石は、35cm±×13cm±の板状の凝灰岩を素材としており両袖部の上に架けられている。煙道部は燃焼部から緩やかに上昇した後僅かに下降する構造をもつ。規模は全長115cm±・最大幅36cm±を計る。煙道部内の埋土は炭化物を含む黒褐色土・暗褐色土などで構成されている。煙道部の下底部には火熱による赤色変化があまりみられなかった。煙出し部は柱穴状の落ちこみをもたず垂直に近い状態で立ちあがっている。

出土遺物（図版34―１～３・写真図版38―１）

出土遺物は床面上や埋土中から得られた土器・土器片である。

床面上からは１～３の土器および土器片である。１は個体の約２分の１ほどが欠損しているロクロ成形の坏であり、底部の切り離し方法は回転糸切りとなっている。底部には漆のような油性をおびた物質が付着している。また底部の周縁部分には手もちのヘラケズリによる再調整が施されている。内面は黒色処理がなされている。２・３はロクロ不使用の輪積み成形のものである。２は甕の口縁部～体部の破片である。外面の調整は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリである。また内面の調整は口縁がヨコナデ、体部がナデとなっている。３は木葉痕が明瞭に残されている甕の底部である。外面の体部下半部にはヘラケズリがみられる。以上の土器および土器片の色調は、淡赤橙色（１）・浅黄橙色（２）・灰褐色（３）を示す。

Ｂｂ18住居址

遺　構（図版17・写真図版12―ａ・ｂ、13―ａ）

この住居址はⅢ層の上面で検出されたもので、調査対象区の北側部分に位置している。規模は2.9m ±×2.8m ±を計り、平面形は隅丸方形を呈する。

埋土は黒褐色土層・黒色土層・明黄褐色土層・暗褐色土層で構成されている。住居址の北東部分の埋土下位に長さ10cm±～55cm±・幅４cm±～20cm±の炭化材が検出された。この炭化材に伴うと思われる焼土は確認されなかった。

床面は多少凹凸がみられるがほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴配置は明らかでないが、住居址内にはP_1（径60cm±×45cm±・深さ17cm±）・P_2（径10cm±・深さ10cm±）・P_3（径20cm±・深さ17cm±）の３個のピットが検出されている。これらのピットの性格については不明である。

壁高は、北壁31cm±・東壁35cm±・南壁36cm±・西壁39cm±を計る。

幅10cm±～15cm±・深さ３cm±～５cm±の壁溝が、各壁に沿って巡っている。しかし北壁および南壁の中央部分では断ち切れて不連続である。

カマドは西壁の中央部に位置しており、全長185cm±を計る。袖部は左右とも破損しており残存状態はあまり良好ではない。袖部の芯は扁平な板状の凝灰岩であり、この周辺に灰黄褐色を呈する粘土質シルトを貼り付けて袖部を構築している。燃焼部はその使用面が周辺の床面より５cm±高いレベルにあるものとなっている。この使用面下には火熱により層厚２cm±～８cm±を計る赤褐色の現地性の焼土が形成されている。煙道部は燃焼部からやや急な勾配を上昇した後緩やかに下降して煙出し部に至る構造をもつ。規模は全長110cm±・最大幅35cm±を計る。煙道部内の埋土は黒褐色土・褐色土・暗褐色土などで構成されている。煙出し部寄りの下底部に

堆積している暗褐色土には炭化物が多く含まれている。下底部には火熱による赤色変化はあまり認められなかった。煙出し部は径30cm±・煙出部底面からの深さ10cm±の柱穴状の小ピットを伴うものである。

出土遺物

出土遺物は埋土中から得られた少量の土器片である。これらの土器片はロクロ未使用の甕の破片である。いずれも実測不可能な細片ばかりである。

Ｂｃ12住居址

遺　構（図版18・写真図版13―ｂ・ｃ、14―ａ・ｂ）

この住居址はⅢ層上面で検出されたもので、調査対象区の北側部分に位置している。規模は3.3m ±×2.9m ±を計り、平面形は隅丸方形を呈する。

埋土は黒褐色土層・黒色土層・暗褐色土層で構成されている。床面直上のレベルで現地性の焼土が２箇所に確認された。焼土は180cm±×80cm±、65cm±×45cm±の不整形な広がりを示す。これらの焼土上には、長さ５cm±～55cm±・幅３cm±～10cm±を計る炭化材が散在している。北東の壁寄りに残存している炭化材は、写真図版14―ａに見られるような出土状態を示す。炭化材の両端で床面とのレベル差が大きく異なり、壁に寄りかかるような出土状態である。以上の状況からみてこの住居址は焼失を受けたものと考えられる。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴配置は明らかではないが、床面から検出されたピット群のうち規模や位置から判断して、P_1（径30cm±・深さ51cm±）・P_2（径22cm±・深さ49cm±）などで構成されるものと考えられる。これらのピット以外に床面にはP_3（径24cm±・深さ62cm±）のピットが検出されている。しかしこのピットの性格については不明である。

壁高は、北壁33cm±・東壁34cm±・南壁30cm±・西壁31cm±を計る。

東壁から南壁にかけて鉤形に設けられている壁溝は幅20cm±・深さ７cm±である。

カマドは西壁の中央部に位置しており、全長210cm±を計る。煙道部の大半が攪乱を受けて破損しているなどカマドの残存状態は全体的にあまり良好ではない。袖部は芯とした凝灰岩の周囲ににぶい黄橙色の粘土質シルトを貼り付けて構築されている。燃焼部はその使用面が周辺の床面よりも５cm±高いレベルにあるものとなっている。この使用面下には火熱により層厚５cm±～10cm±を計る赤褐色の現地性の焼土が形成されている。燃焼部から煙道部に移行する部分の上部には60cm±×20cm±の板状の凝灰岩を素材とした天井石がみられる。この天井石の上は袖部と同じ粘土質シルトで覆われている。煙道部は燃焼部から緩やかに這いあがる構造をもつが、煙出し部までの下底部の状況は攪乱によって破壊されているため把握できない。規模は

全長170cm±・幅20cm±を計る。煙出し部は径30cm±・煙出部底面からの深さ20cm±の柱穴状のピットを伴うものである。なお右袖部の脇に30cm±×15cm±の板状の凝灰岩が壁に対して斜めに立て掛けられた状態で出土した。この凝灰岩は、その形状・出土状態とカマドの精査結果との関連などから推測して、カマドの焚口部の天井石として使用されたものであろうと考えられる。

出土遺物（図版34―４・５・写真図版38―２）

出土遺物は床面上から得られた４などの土器片と土製品（５）である。

４はロクロ未使用の巻き上げ成形の坏である。この坏は口縁部が内弯しながら立ちあがるもので、この部分に段をもつ。底部は丸底の形態を示す。外面の調整は、口縁部の段から上位がヨコナデ、段より下位がヘラケズリ＋ナデである。内面の調整は入念なヘラミガキである。色調はにぶい黄橙色を示す。これ以外の土器片は実測不可能な甕の細片である。５は土製の紡錘車である。上底径4.7cm±・下底径5.5cm±・高さ1.8cm±を計る。全体に入念なヘラミガキが施されている。色調はにぶい橙色を示す。上下底面に黒斑がみられる。

Ｂｆ15住居址

遺　構（図版９・写真図版14―ｃ、15―ａ）

この住居址はⅢ層上面で検出されたもので、前述のＢｃ12住居址からみて4.5m ±南側に位置する。この住居址の平面形は、一辺が3.0m ±を計る隅丸方形を呈する。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層で構成されている。埋土の上位を占める黒褐色土層中にはブロック状の十和田ａ降下火山灰が含まれている。

床面はやや凹凸があり、軟質なものとなっている。北壁寄りの床面は攪乱を受けて破損している。

柱穴配置は明らかではないが、住居址内に検出されたピット群のうち規模や位置からみて、P_1（径16cm±・深さ15cm±）・P_3（径12cm±・深さ13cm±）などで構成されるものと考えられる。これらのピット以外の床面からP_2（径17cm±・深さ５cm±）のピットが検出されている。しかしこのピットの性格については不明である。

壁高は、北壁26cm±・東壁23cm±・南壁31cm±・西壁31cm±を計る。

南壁および西壁の一部を除く部分に壁溝が設けられている。壁溝は幅10cm±～15cm±・深さ６cm±～13cm±を計る。北壁中央部分の壁溝は攪乱によって損失している。

カマドは西壁の中央部に位置しており、全長200cm±を計る。カマドの残存状態は不良で、袖部の左側部分は全くなくその痕跡すら認められない。右側の袖部には芯として使用された板状の凝灰岩とその周囲に貼り付けられた粘土質シルトが僅かに残されているだけである。燃焼部はその使用面が周辺の床面よりも５cm±～10cm±高いレベルにあるものとなっている。この使

用面下には火熱により層厚5cm±～10cm±の明赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。煙道部は燃焼部から僅かに上昇して煙出し部に至る構造をもつ。規模は全長155cm±・最大幅53cm±を計る。煙道部内の埋土は黒褐色土・暗褐色土・黒色土で構成されている。一部の暗褐色土および黒褐色土には焼土粒が含まれている。下底部には火熱による赤色変化はあまり認められなかった。煙出し部は径75cm±×50cm±・煙道部底面からの深さ16cm±の長方形を呈するピットを伴うものである。

出土遺物

出土遺物は埋土中から得られた土器片だけである。土器片はロクロ不使用の甕の細片である。細片であるため実測は不可能である。

Ｂｊ03住居址

遺　構（図版20・写真図版15―ｂ、16―ａ～ｄ）

この住居址はⅢ層の上面で検出されたもので、調査対象区中央部の東端に位置している。この住居址の東側部分は県道工事の際に破壊されて消失している。このため住居址の正確な規模・形状の詳細は不明であるが、残存部の状況から推定して、一辺の長さが5.5m ±の隅丸方形を呈するものと考えられる。

埋土は黒色土層・黒褐色土層で構成されている。黒褐色土層中には炭化物が包含されている。

床面は平坦で全体的にやや軟質なものとなっているが、カマドの周辺部分だけは大変堅くしまっている。

柱穴は、P_2（径32cm±・深さ48cm±）・P_3（径40cm±・深さ62cm±）・P_5（径30cm±・深さ30cm±）・住居址の北東部分の床面上に存在したであろうと思われる仮想柱穴P_xの４個で構成され、正方形の配置を示すものと考えられる。以上の柱穴のほかに住居址内には、P_1(径40cm±・深さ22cm±)・P_4（径25cm±・深さ52cm±）・P_6（径28cm±・深さ11cm±）・P_7（径20cm±・深さ14cm±）・P_8（径35cm±・深さ32cm±）・P_9（径15cm±・深さ17cm±）・P_{10}（径20cm±・深さ17cm±）・P_{11}(径25cm±・深さ14cm±)・P_{12}(径15cm±・深さ13cm±)・P_{13}(径32cm±・深さ17cm±)・P_{14}（径16cm±・深さ８cm±）の柱穴状のピットが11個検出されている。しかしこれらのピット群の性格については不明である。

壁高は、北壁34cm±・南壁20cm±・西壁38cm±を計る。

カマド袖部の両脇から残存している壁に沿って壁溝が巡っている。壁溝の規模は、幅12cm±～20cm±・深さ４cm±～10cm±である。

カマドは西壁の中央部に位置しており、全長195cm±を計る。袖部や焚口部が破損しているなど、カマド全体の残存状態はあまり良好ではない。袖部は芯とした板状の凝灰岩の周囲に浅黄

橙色の粘土質シルトを貼り付けて作られている。燃焼部はその使用面が周辺の床面とほぼ同じレベルにあるものとなっている。この使用面下には火熱により層厚5cm±～10cm±の明赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。煙道部は燃焼部から煙出し部までやや急な勾配を一気に上昇する構造をもつ。規模は全長120cm±・最大幅43cm±を計る。煙道部内の埋土は黒褐色土・褐色土・暗褐色土で構成されている。煙道部の下底部には火熱による赤色変化があまり認められなかった。煙出し部は柱穴状の落ちこみをもたず斜めに立ちあがっている。なお焚口部分に崩壊した板状の凝灰岩が数個みられる。これらの凝灰岩は焚口部の上部構造を形成していたものと思われる。これらのうち最大のものは80cm±×20cm±を計る。

出土遺物（図版34―6・7・写真図版38―3・4）

出土遺物は、カマド右袖部の脇から得られた6・7の土器と埋土中から得られた土器片である。2つの土器は上下に積み重ねて右袖部に寄りかけられたような状態で出土した。6は7の上にあった土器で、ロクロ未使用の長胴形の甕である。体部中央部に最大径をもち、18.5cm±を計る。外面の調整は口縁部がヨコナデ後ヘラミガキ、体部上半部がハケ目後ヘラミガキ、体部下半部がハケ目となっている。内面の調整は口縁部がヨコナデ後ヘラミガキ、体部がハケ目となっている。色調は暗褐色を示す。7もロクロ未使用の長胴形の甕である。体部下半部以下の部位が欠如している。この土器の口径と体部の最大径は同じ数値を示す。外面の調整は口縁部がハケ目後ヨコナデ、体部がハケ目となっている。また内面の調整は口縁部がハケ目後ヨコナデ、体部がハケ目となっている。外面の口縁部～体部上半部に焼土と思われる泥状の付着物が認められる。この下半部にはススが付着している。色調はにぶい褐色を示す。土器片はいずれもロクロ未使用の甕の細片で、実測不可能なものである。なお以上の土器・土器片のほかにカマドの燃焼部の埋土中から焼成を受けた鳥獣類の骨片が数個出土している。

Bj21住居址

遺　構（図版21・写真図版17―a・b、18―a）

この住居址はⅢ層上面で検出されたもので、調査対象区中央部の西端に位置している。半分以上がバイパス建設予定地外にあるため、精査できたのは住居址全体の中の一部分である。したがってこの住居址の規模・形状の詳細は不明であるが、精査された部分から推測すると、一辺の長さが3.1m の隅丸方形を呈する住居址と考えられる。

埋土は黒褐色土層・黒色土層・暗褐色土層で構成されている。黒褐色土層および黒色土層中にはブロック状の十和田a降下火山灰が包含されている。

検出された部分の床面は平坦で堅くしまっている。

柱穴配置は明らかではないが、床面からP_1（径20cm±・深さ9cm±）・P_2（径17cm±・深さ19

cm±）・P_3（径10cm±・深さ5cm±）の柱穴状のピット群が検出されている。しかしこれらのピット群の性格については不明である。

壁高は、北壁21cm±・東壁15cm±・南壁19cm±を計る。

カマドは北壁の東側に偏った位置にあり、新旧2基のカマドが設けられている。記述の都合上ここでこの新旧のカマドに1号・2号の名称を付す。

1号カマドは2号カマドの東隣にあり、全長240cm±を計る。袖部は右側の部分だけが残存している。芯とした板状の凝灰岩の周囲に粘土質シルトを貼り付けて袖部を作っている。燃焼部はその使用面が周辺の床面と同じレベルにあるものとなっている。この使用面下には火熱により層厚10cm±を計る橙色の現地性の焼土が形成されている。煙道部はトンネル式の構造をもつもので、燃焼部の境界部分から煙出し部に至るその下底部はかなりの傾斜をもって下降している。規模は全長140cm±・最大幅40cm±を計る。煙道部内の埋土は色調・含有物が微妙に異なる黒褐色土によって構成されている。煙出し部は径50cm±の円形のピットとなっている。その下底部は検出面から50cm±の深さにある。

2号カマドは煙道部分のみ残存している。煙道部は1号カマドと同じトンネル式の構造のもので、その下底部はやはりかなりの傾斜をもって下降している。規模は全長125cm±・最大幅30cm±を計る。煙道部内は黒褐色土によって充填されている。煙出し部は径13cm±の円形のピットで、煙道部上部構造の中間部分に設けられている。

出土遺物（図版35―8～10・写真図版39―5～7）

出土遺物はカマドの周辺から得られた土器（8・9）と埋土中から得られた土器片（10）である。8はカマド袖の脇から出土した土器で、ロクロ不使用の甕である。体部下半部以下の部位が欠如している。口径と体部の最大径がほぼ同じ数値を示す。この土器は整形も調整も9の土器に比べて大変粗雑である。特に外面体部のヘラケズリはその痕跡が明瞭に認められるほど粗い点が注目される。内面の調整は口縁部がヨコナデ、体部がナデとなっている。色調はにぶい橙色を示す。9もロクロ不使用の甕で、1号カマドの煙道部内から出土している。体部上半部以上の部位は欠如している。内外面の調整はナデとなっている。底部には木葉痕がみられる。内外面にススが付着している。色調は橙色を示す。10は甑の底部片である。この甑は多孔式の形態のもので、径5mm±の孔が穿たれている。内外面の調整はナデとなっている。色調はにぶい橙色を示す。

Ｃａ09住居址

遺　構（図版22、23・写真図版18―ｂ、19―ａ～ｃ、20―ａ～ｄ、21―ａ）

この住居址はⅢ層上面で検出されたもので、調査対象区の中央部に位置している。この住居

址の平面形は、一辺の長さが4.0m ±の隅丸方形を呈する。

埋土はブロック状の十和田a降下火山灰を含む黒褐色土層・暗褐色土層・極暗赤褐色土層などで構成されている。

床面は、かなり凹凸のある住居址の掘り方の上に黒褐色土を盛って形成された貼床である。この黒褐色土にもブロック状の十和田a降下火山灰が含まれている。床面は多少凹凸をもち全体的に堅くしまっている。

柱穴配置は明らかではないが、床面から検出されたピット群のうち規模や位置からみて、P_1（径35cm±・深さ20cm±）・P_2（径40cm±・深さ21cm±）などで構成されるものと考えられる。

壁高は、北壁13cm±・東壁11cm±・南壁8cm±・西壁36cm±を計る。壁高に大きな差がみられるのは、粗掘り・遺構検出のときに北壁〜南壁の部分を掘りすぎてしまったためである。

幅10cm±〜20cm±・深さ14cm±〜18cm±の規模をもつ壁溝が東壁および南壁の一部に設けられている。

この住居址に確認されたカマドは2基である。これらのカマドには新旧関係がみられる。記述の都合上ここで2基のカマドに1号（新）・2号（旧）の名称を付す。

1号カマドは北壁の西側に偏った位置にあり、全長230cm±を計る。カマドの残存状態は良好である。袖部はにぶい褐色を呈する粘土質シルトを積み重ねて作られている。この袖部の内側の側壁には、袖部の崩壊防止と補強のために土器片が使用されている。燃焼部の煙道部寄りの位置に支脚の機能を果たしたと思われる礫が確認された。この礫は粒径25cm±×10cm±の扁平な安山岩類亜角礫であり、15cm±の深さに直立の状態で埋置されている。燃焼部には層厚12cm±を計る明赤褐色の現地性の焼土が形成されている。この焼土の中には土器片が包含されていた。燃焼部と煙道部の境界部分にはレベル差が4cm±の段がみられる。煙道部は、この段の上端から極めて緩やかに上昇した後途中で僅かに下降して煙出し部に至る構造をもつ。規模は全長135cm±・最大幅30cm±を計る。煙道部内の埋土は色調・含有物が若干異なる黒褐色土によって構成されている。この下底部全体に火熱による赤色変化がみられた。煙出し部は径25cm±・煙道部底面からの深さ7cm±のピットを伴うものであり、その末端部は垂直に立ちあがっている。

2号カマドは西壁の中央部に設けられているが、残存していたのは燃焼部の掘り方と煙道部のみである。掘り方の部分は平面形が楕円形状を呈するピットとなっている。このピットの規模は、開口部径80cm±×40cm±・底部径65cm±×20cm±・深さ12cm±を計る。掘り方はブロック状の十和田a降下火山灰を含む明褐色土や黄褐色を呈する粘土質シルトで充填されている。煙道部は煙出し部に向って緩やかに上昇する構造をもつ。規模は全長140cm±・最大幅65cm±を計る。煙出部内の埋土は黒色土・黒褐色土・暗褐色土などで構成されている。下底部に火熱による赤色変化が僅かに認められた。煙出し部は柱穴状の落ちこみをもたず斜めに立ちあがって

いる。

先に述べた柱穴と思われるP_1・P_2のほかに、床面からP_3・P_4・P_5・P_6の4個のピットが検出されている。これらのピットの状況は次のとおりである。P_3は住居址の南西隅にあるピットで、開口部155cm±×115cm±・底部105cm±×60cm±・深さ100cm±の規模をもつ。平面形は隅丸長方形で、断面形はビーカー形を呈する。このピット内の埋土はブロック状の十和田a降下火山灰を含む黒色土・黒褐色土・暗褐色土などで構成されているが、このうち最下位の底面の壁際に堆積しているものは他の土を含まない純粋な灰白色を呈する十和田a降下火山灰である。P_3は検出状況から判断して、2号カマドが廃棄された後に設けられたものと考えられる。なおこのピットの底面上からは粗製の甕などの破片がまとまった形で出土している。P_4は住居址の北西隅にあるピットで、開口部径85cm±×60cm±・底部径60cm±×45cm±・深さ26cm±を計る。平面形は楕円形で、断面形は浅いビーカー形を呈する。このピット内の埋土は、ブロック状の十和田a降下火山灰を含む黒褐色土で構成されており単層である。P_5・P_6は住居址の中央部寄りにあるピットで、どちらの下底部にも火熱による赤色変化が認められる。これらのピット内の埋土はブロック状の十和田a降下火山灰を含む黒褐色土で構成されており単層である。この黒褐色土中には炭化物・焼土粒・火熱を受けた小礫のほかに鉱滓が包含されていた。P_5・P_6の2個のピットの上に火熱を受けた礫の集石がみられた。礫は粒径5cm±～35cm±を計る安山岩類亜角礫である。これらのピットの周辺部には火熱を受けた礫のほかに鞴の羽口片や炭化材が散在していた。

住居址の南東隅にブロック状の十和田a降下火山灰を含む黒褐色土で構築された盛土が確認された。この盛土は住居址外に若干張り出す形になっており、その頂部は東壁の最上部とほぼ同じ高さである。盛土の上面は大変堅くしまっている。盛土に使用された黒褐色土の中には鉱滓・土器片・礫が包含されている。この盛土は、以上の事実や壁溝がこの部分の両脇で跡切れていることなどから推定して、「出入口」状の施設ではないかと考えられる。

出土遺物（図版35―11～14、36―15～24、37―25～31・写真図版40―8～13、41―14～20）

出土遺物は、床面上・カマド・ピットから得られた土器および土器片・鉄器・土製品である。

床面上からは、27の土器片と31の土製品（鞴の羽口）が出土している。27はロクロ使用の甕の口縁部である。色調は浅黄橙色を示す。31の鞴の羽口は住居址内に散乱していた破片を接合したものである。外径7cm±・内径2.8cm±を計る土管状の形態を示す。吹出口の先端部分は火熱により黒色を呈するガラス質に変質している。全体の色調は橙色を示す。

ピット関係で遺物が出土したものは、P_3とP_6の2個である。P_3から出土した遺物は、土器片（11～13・18・19・21～24・28）と鉄器（30）である。これらの遺物は底面上および底面直上から出土している。11・12はロクロ使用の坏の口縁部片である。11は外面の口唇部にヘラミガ

キが施されている。また内面には黒色処理が施されている。色調は、にぶい赤褐色（11）・にぶい黄橙色（12）を示す。以上の土器片のほかはすべて甕の破片である。これらの甕の破片はその成形技法によって次のように大別できる。A．ロクロを使用しない輪積み成形のもの（13・18・19・21～24）。13・18・19・21は口縁部片である。21は口径12cm±を計る小型の甕である。他のものは口径が22cm前後の数値を示すものである。22～24は底部片である。Bに属する土器片の特徴的な点は外面体部に施されているヘラケズリの調整が大変粗いことである。その中にあって24のヘラケズリは他のものに比べて細かく趣が異なる。b．ロクロを使用して成形したもの（28）。28は個体の大半が欠如しているものである。この甕は口径・底径に比較して器高が低く全体的にズングリした形をしている。胎土には細礫のほかに金雲母が微量に含まれている。色調はにぶい黄橙色を示す。30の鉄器は刀子の破片と思われるものである。この刃部は幅1.0cm±・厚さ0.4cm±を計る。P_6から出土した遺物は26の土器片で、その底面上から得られたものである。26はロクロ使用の甕の口縁部～体部上半部の破片である。色調はにぶい橙色を示す。

1号カマドからの出土遺物は、燃焼部や煙道部などから得られた土器および土器片（14～17・20・25・29）である。これらもその成形技法により次のように分けられる。A．ロクロを使用しない輪積み成形のもの（14～17・20）。14は燃焼部の使用面上から押しつぶされたような状態で出土した甕で、歪な形をしている。外面の調整はヘラケズリ後ナデが施されている。他の土器片は甕の口縁部～体部上半部の破片である。いずれも外面体部の調整が粗いヘラケズリのものである。B．ロクロを使用して成形したもの（25・29）。25は袖部の補強用として使用されていた甕の口縁部～体部上半部の破片である。29は回転糸切りの底部をもつ小型の甕であるが、個体の半分以上が欠如している。底部には再調整はみられない。外面の体部下半部にススが付着している。2号カマドからは実測不可能なロクロ不使用の甕の破片が少量出土した。なお「出入口」状施設の可能性が考えられる盛土中から出土した土器片も同じような甕の細片である。

Ｃａ18住居址

遺　構（図版24、25・写真図版21－ｂ、22－ａ～ｅ）

この住居址はIII層上面で検出されたもので、調査対象区中央部の西側に位置している。規模は5.4m ±×4.9m ±と南北方向がやや長く、平面形は隅丸方形を呈する。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層で構成されている。床面直上のレベルに炭化材および現地性の焼土が検出された。これらの周囲には粒径10cm±～20cm±の安山岩類亜角礫が散在している。炭化材は長さ8cm±～58cm±・幅4cm±～14cm±を計る。焼土は12箇所に確認されており、径13cm±～60cm±の楕円形状の広がりを示す。以上の状況からみて、この住居址は焼失を受けたものと考えられる。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴はP_1（径22cm±・深さ41cm±）・P_2（径28cm±・深さ50cm±）・P_3（径26cm±・深さ48cm±）・P_4（径27cm±・深さ47cm±）の4個で構成され、正方形の配置を示す。住居址内には以上の柱穴のほかに数十の柱穴状のピット群が検出されているが、これらの性格については不明である。

壁高は、北壁18cm±・東壁15cm±・南壁23cm±・西壁27cm±を計る。

カマドの脇から各壁に沿って壁溝が巡っている。この壁溝は、幅8cm±～15cm±・深さ3cm±～8cm±の規模を計る。

西壁の中央部に位置するカマドは全長190cm±を計る。カマドの残存状態は比較的良好である。袖部は芯とした板状の凝灰岩の周囲に淡黄色を呈する粘土質シルトを貼り付けて作られている。使用された凝灰岩は長さ32cm±～42cm±・厚さ5cm±～10cm±のもので、床面から9cm±～14cm±の深さに直立の状態で埋置されている。燃焼部はその使用面が周辺の床面よりも4cm±低いレベルにあるものとなっている。この使用面下には火熱により層厚12cm±の橙色を呈する現地性の焼土が形成されている。燃焼部の上部構造は、両袖部を結ぶ形で横に渡された板状の凝灰岩とその上に貼り付けられた粘土質シルトとで形成されている。煙道部は燃焼部から緩やかに上昇した後ほぼ平坦な状態で煙出し部に至る構造をもつ。煙道部内の埋土は黒褐色土・にぶい黄橙色土などで構成されている。下位にある黒褐色土の中には粘土質シルトのブロックがみられる。煙出し部は径25cm±・煙道部底面からの深さ3cm±を計る皿形の浅いピットを伴うものである。なお焚口部にこの部位の天井石として使用されていたと思われる板状の凝灰岩が崩落状態で確認された。この凝灰岩は、長さ73cm±・幅13cm±・厚さ3cm±の規模をもつ。

P_1・P_2の周辺部に間仕切り的な溝が2条確認された。P_1の周辺部にみられる溝は、P_1の北方20cm±の地点から北壁に平行する状態で東進し北東隅の壁溝に接続している。この溝は長さ90cm±・幅17cm±・深さ14cm±を計る。P_2の周辺部にみられる溝は、P_2の西方40cm±の地点から東壁に平行する状態で南進し南壁際の壁溝に接続している。この住居址はＣａ15陥し穴状遺構を切っている。

出土遺物（図版38―32～39・写真図版42―21～25）

出土遺物は、床面上やカマドから得られた土器および土器片・鉄器・土製品である。

床面上からは土器および土器片（32・34・36）・鉄器（37・38）・土製品（39）が出土している。32は丸底の坏の破片である。外面の調整は入念なヘラミガキである。内面は入念なヘラミガキが施された後黒色処理がなされている。色調はにぶい橙色を示す。34は口径がその最大径となっている小型の甕である。外面の調整は口縁部がハケ目後ヨコナデ、体部がハケ目＋部分に施されたヘラミガキとなっている。内面の調整は口縁部がヨコナデ、体部がハケ目となっている。色調は明褐色を示す。外面体部中央部に黒斑のほかにススの付着が認められる。36は甕

の底部片である。外面の調整はヘラケズリで、内面の調整はヘラケズリ→ハケ目→ヘラミガキとなっている。色調は灰黄褐色を示す。これらはいずれもロクロ未使用のもので、32には巻き上げ、34・36には輪積みの成形技法が用いられている。37・38の鉄器は刀子の破片と考えられる。刃部の最大幅・最大厚はそれぞれ1.9cm±・0.3cm±（37)、2.1cm±・0.4cm±を計る。39は土製の紡錘車で、断面形が台形を呈するものである。上底径3.1cm±・下底径5.3cm±・高さ2.1cm±を計る。全面に入念なヘラミガキの調整が施されている。上底の面には黒斑がみられる。色調はにぶい橙色を示す。

カマド関係から出土した遺物は、33・35の土器である。33は左袖部に寄りかかった状態で出土した長胴形の甕である。最大径が体部中央部にあり、19.1cm±を計る。外面の調整は口縁部～体部中央部分までの部位がヘラミガキ、それより下位の部分がヘラケズリとなっている。内面の調整はハケ目後部分的にヘラミガキが施されているものである。色調はにぶい黄橙色を示す。35は燃焼部から出土した甕の底部である。調整は外面がヘラミガキ、内面がハケ目＋部分的に施されたヘラミガキとなっている。色調はにぶい黄橙色を示す。これらの土器もロクロ未使用のもので、輪積みの成形技法が用いられている。

Ｃｄ12住居址

遺　構（図版26、27、28・写真図版23―ａ・ｂ、24―ａ・ｂ、25―ａ・ｂ）

この住居址はIII層上面で検出されたもので、調査対象区の中央部に位置している。規模は6.8m ±×6.6m ±を計り、平面形は隅丸方形を呈する。

埋土の最上位に十和田ａ降下火山灰がレンズ状に堆積している。この十和田ａ降下火山灰層は色調が灰黄褐色を呈する部分（層厚７cm±）と灰白色を呈する部分（層厚20cm±）とに分けられる。これより下位の埋土は黒褐色土層・黒色土層・にぶい黄褐色土層で構成されている。床面直上のレベルに大量の炭化材と現地性の焼土が検出された。これらの炭化材のうち西壁寄りに確認されたものは、崩落以前の材の組合せがある程度把握できるような状態で出土している。以上の状況からみて、この住居址は焼失を受けたものと考えられる。

床面は北壁寄りの部分にかなり凹凸をもつが、そのほかの部分はほぼ平坦である。全体的に床面は大変堅くしまっている。

柱穴はP_1（径25cm±・深さ80cm±）・P_7（径25cm±・深さ87cm±）・P_8（径30cm±・深さ74cm±）・P_9（径26cm±・深さ78cm±）の４個で構成され、正方形の配置を示す。以上の柱穴のほかに床面からP_2（径12cm±・深さ25cm±）・P_3（径24cm±・深さ24cm±）・P_4（径22cm±・深さ42cm±）・P_5（径15cm±・深さ18cm±）・P_6（径12cm±・深さ16cm±）の柱穴状のピットが５個検出されている。しかしこれらのピット群の性格については不明である。

壁高は、北壁34cm±・東壁6cm±・南壁41cm±・西壁44cm±を計る。東壁が他の壁より低いのは粗掘り・遺構検出の際に掘りすぎたためである。

カマドの脇から各壁に沿って壁溝が巡っている。但し北西隅の部分では不連続である。壁溝は幅10cm±～20cm±・深さ3cm±～14cm±の規模をもつ。

カマドは西壁の中央部に位置している。煙道部の先端部分が攪乱によって破壊されているため、このカマドの全長や煙道部の全長を把握することができない。袖部は板状の凝灰岩を芯としてその周囲に淡黄色の粘土質シルトを貼り付けて作られている。使用されている凝灰岩は長さ27cm±・厚さ6cm±～10cm±を計り、床面から6cm±～10cm±の深さに直立の状態で埋置されている。燃焼部はその使用面が周辺の床面とほぼ同じレベルにあるものとなっている。この使用面下には火熱により層厚5cm±を計る橙色の現地性の焼土が形成されている。煙道部は燃焼部から煙出し部の方向に向って急上昇する構造をもつ。煙道部内の埋土は黒褐色土・暗褐色土などで構成されている。

P_1・P_7の柱穴の間に溝状の浅い凹みが認められるが、これがどのような性格のものか明らかでない。

出土遺物（図版38―40・41、39―42～50・写真図版42―26～29）

出土遺物は、床面上や埋土中から得られた土器および土器片・石器・土製品・石製品である。

床面上からは、土器および土器片（40～44・47）・土製品（49）・石製品（50）が出土している。40～42は坏の破片で、体部に段がみられるものである。底部の形態は、丸底のもの（40・41）と平底のもの（42）に分けられる。いずれも内外面にヘラミガキが施されており、40・42はヘラミガキ調整後内面が黒色処理されている。色調は、橙色（40・41）・浅黄橙色（42）を示す。43・44は長胴形の甕で、底部が欠如しているものである。どちらも体部の最大径が体部中央部にあり口唇部が直立している。またこれらの土器の内外面にはハケ目が施されている。色調はにぶい橙色を示す。47は壺の底部片である。調整は外面はヘラケズリ、内面がハケ目＋部分的に施されたナデとなっている。色調はにぶい黄橙色を示す。49は土製の勾玉で、上部が欠損している。全体に入念なミガキが施されている。色調は暗褐色を示す。50は流紋岩を加工した石製の丸玉である。色調は灰白色を示す。

埋土中からは、土器（45・46）と石器（48）が出土している。45は体部下半部以下が欠如している長胴形の甕である。内外面の調整は先に述べた44などとあまり大差はない。46は甕の底部である。調整は外面がヘラケズリ、内面がナデとなっている。色調はともににぶい黄橙色を示す。48は凹石であり、その一部は欠損している。両面に凹みが形成されている。この凹石は縄文時代のものと考えられる。

これまでに述べた遺物のうち土器および土器片はいずれもロクロ未使用のもので、坏は巻き

上げ、甕は輪積みの成形技法が用いられている。なお以上の遺物のほかに床面直上から写真図版25—bに示したような海苔巻状の炭化した樹皮が出土している。

Db03住居址

遺　構（図版29、30・写真図版26—a・b、27—a～c、28—a～f）

この住居址はIII層上面で検出されたもので、調査対象区の南側寄りに位置している。規模は4.8m ±×4.4m ±で、平面形は隅丸方形を呈する。

埋土の最上位に十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積している。この十和田a降下火山灰層は色調が灰黄褐色を示す部分（層厚8cm±）と灰白色を示す部分（層厚20cm±）とに分けられる。これより下位の埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

床面は平坦で大変堅くしまっている。

柱穴はP_1（径25cm±・深さ54cm±）・P_5（径23cm±・深さ65cm±）・P_7（径25cm±・深さ59cm±）・P_9（径23cm±・深さ61cm±）の4個で構成され、正方形の配置を示す。これらの柱穴には掘り方が伴っている。それぞれの掘り方の規模は、P_1—径45cm±・P_5—径36cm±・P_7—径34cm±・P_9—径45cm±を計る。以上の柱穴のほかに住居址にはP_2（径27cm±・深さ20cm±）・P_3（径15cm±・深さ17cm±）・P_4（径37cm±・深さ21cm±）・P_6（径25cm±・深さ12cm±）・P_8（径20cm±・深さ10cm±）・P_{10}（径20cm±・深さ19cm±）などの柱穴状のピット群が検出されている。しかしこれらのピット群の性格については不明である。

壁高は、北壁45cm±・東壁27cm±・南壁48cm±・西壁61cm±を計る。

カマド袖部の両脇から各壁に沿って壁溝が巡っている。この壁溝の規模は、幅10cm±～15cm±・深さ6cm±～12cm±を計る。

カマドは西壁の中央部に位置しており、全長260cm±を計る。カマドの残存状態は比較的良好である。袖部は板状の凝灰岩を芯としてその周囲に浅黄色の粘土質シルトを貼り付けて作られている。使用された凝灰岩は、長さ16cm±～36cm±・厚さ3cm±～7cm±のもので、床面から6cm±～10cm±の深さに斜位に埋置されている。燃焼部はその使用面が周辺の床面より5cm±高いレベルにあるものとなっている。この使用面下には層厚5cm±の橙色を呈する現地性の焼土が形成されている。燃焼部の上部構造は、両袖部を結ぶ形で横に渡された板状の凝灰岩とその上に貼り付けられた粘土質シルトで形成されている。煙道部は燃焼部から急上昇して煙出し部に至る構造をもつ。煙道部内の埋土は黒色土・暗褐色土などで構成されている。煙出し部は径45cm±・煙道部底面からの深さ20cm±を計る柱穴状のピットを伴うものである。

出土遺物（図版40—51～61・写真図版43—30～33、44—34～39）

出土遺物は、床面上や埋土中から得られた土器および土器片・鉄器・石器・土製品・石製品

である。

床面上から出土したものは、土器および土器片（51～55）・鉄器（56）・土製品（58・59・61）・石製品（60）である。51は口縁部に段をもつ坏の破片である。内外面にヘラミガキが施されている。内面はヘラミガキ後黒色処理がなされている。52は口縁部に段をもつ高坏で、脚部が破損している。外面の調整は段から上部がヘラミガキ、下部がヘラケズリとなっている。内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。51・52の色調はにぶい橙色である。53は底部に木葉痕がみられる甕である。54は口縁部が欠如している甕で、53より小型である。これらの甕には内面の一部にハケ目の痕跡が認められるとともに、体部下半部にススが付着している。色調は褐灰色（53）・にぶい橙色（54）を示す。なお54は底部の木葉痕がナデによって、ほとんど磨消されている。55は多孔式の甑で、内外面の調整はハケ目となっている。孔は径5㎜±を計り、底部のほかに体部下半部にもみられる。輪積み痕が明瞭に残っているためかなり凹凸のある器面となっている。色調はにぶい橙色である。56の鉄器は鎌である。刃部の規模は、最大長16cm±・最大幅3cm±・最大厚0.4cm±を計る。出土した土製品は紡錘車（58・59）と勾玉（61）である。紡錘車は断面形が台形を呈するものである。58は上底径3.1cm±・下底径4.9cm±・高さ2.4cm±でにぶい橙色の色調を示す。59は2分の1ほどが欠損しているため正確な計測値を求めることができないが、残存部から推定して上底径4.0cm±・下底径5.1cm±・高さ2.1cm±を計るものと思われる。色調は明赤褐色を示す。61の土製の勾玉のほかに床面上からは、メノウを素材とする石製の勾玉が出土している。

埋土中の中位から縄文時代のものと考えられる57の打製石斧が1点出土した。石質はスピライト質凝灰岩である。

これまでに述べた遺物のうち土器および土器片はいずれもロクロ未使用のもので、巻き上げあるいは輪積みの成形技法が用いられている。

Ｄｅ09住居址

遺　構（図版31、32・写真図版29―ａ・ｂ、30―ａ・ｂ、31―ａ～ｃ）

この住居址はIII層上面で検出されたもので、調査対象区の南側に位置している。5.7m±×5.3m±×5.3m±の規模をもち、隅丸方形を呈する住居址である。

埋土は炭化材や焼土粒などを含む黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層で構成されている。この埋土の最上位に写真図版30―ａにみられるような灰白色の十和田ａ降下火山灰層が堆積している。床面上や床面直上のレベルに多量の炭化材や現地性の焼土などが検出された。炭化材の残存状態は比較的良好で、崩落以前の材の組合せがある程度把握できるような状況である。以上の点からみて、この住居址は焼失を受けたものと考えられる。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴はP_1（径30cm±・深さ80cm±）・P_2（径33cm±・深さ72cm±）・P_3（径30cm±・深さ75cm±）・P_4（径30cm±・深さ73cm±）の4個で構成され、方形の配置を示す。

壁高は、北壁32cm±・東壁12cm±・南壁31cm±・西壁28cm±を計る。東壁部分が他に比べて低いのは、粗掘り・遺構検出の段階で掘りすぎたためである。

幅15cm±～23cm±・深さ8cm±～17cm±を計る壁溝が、カマド袖部の両脇から各壁に沿って巡っている。しかしこの壁溝は南東の隅で跡絶えている。

カマドは西壁のほぼ中央部に位置しており、全長145cm±を計る。カマド全体の残存状態はあまり良好ではない。袖部は芯とした板状の凝灰岩に淡黄色の粘土質シルトを貼り付けて作られている。芯に使用された凝灰岩は、長さ20cm±～30cm±・厚さ4cm±～8cm±を計り直立の状態で深さ6cm±に埋置されている。燃焼部はその使用が周辺の床面とほぼ同じレベルにあるものとなっている。この使用面下には層厚6cm±の橙色を呈する現地性の焼土が形成されている。煙道部は燃焼部から煙出し部に向って急上昇する構造をもつ。燃焼部との境界線部分には10cm±の段差がみられる。煙道部内の埋土は黒色土・黒褐色土・暗褐色土などで構成されている。煙出し部は柱穴状の落ちこみをもたず斜めに立ちあがっている。

この住居址は、原始時代に属するＤｆ12住居址を切っている。

出土遺物（図版41―62～68、42―69～73、43―74～78・写真図版45―40～45、46―46～49、47―50～55）

出土遺物は床面上や埋土中などから得られた土器および土器片・石器・土製品である。

床面上から出土した土器および土器片は、坏・甕・甑の器形のものである。坏は3点（62・65・66）である。62は口縁部に段をもつ丸底の坏の破片である。65・66は段をもたない平底風の坏である。いずれも内面が黒色処理されている。甕は6点（67～69・71・72・74）である。67～69は長胴形の甕である。71は67などに比べて中型のズングリした感じの甕である。72は小型の甕である。これらの甕の外面体部には入念なヘラミガキが施されている。74は底部に木葉痕がみられるものである。甑は1点（73）である。この甑は多孔式の形態のもので、底部に径5mm±の孔が穿たれている。外面の体部には入念なヘラミガキが施されている。このほかに床面上から出土した遺物としては、砥石2点（75・76）と土玉2点（77・78）がある。

カマド関係からは、70の長胴形の甕が出土している。この土器は右袖部と西壁の両方に寄りかかった状態で出土したものである。外面体部の器表面がアバタ状に剝落している。この部分の調整はヘラミガキとなっている。

床面直上からは63の坏が出土している。この坏は体部下半部に段をもつもので、底部の形態は丸底である。内面には黒色処理が施されている。外面は66と同じように黒色と明褐色がマダ

ラ状に入り混じった色相を呈している。内外面のヘラミガキは大変入念である。

埋土中位からは64の坏が出土している。この坏も体部下半部に段をもち底部形態が丸底である。内外面ともヘラミガキがみられる。内面は黒色処理されている。外面の色調は黒色とにぶい褐色が入り混じったマダラ状を呈している。体部下半部の器表面が剝落している。

これまでに述べた土器および土器片はロクロ未使用のもので、巻き上げあるいは輪積みの成形技法が用いられている。

② ピット

Ｃｅ06ピット

遺　構（図版33・写真図版32―ａ・ｂ）

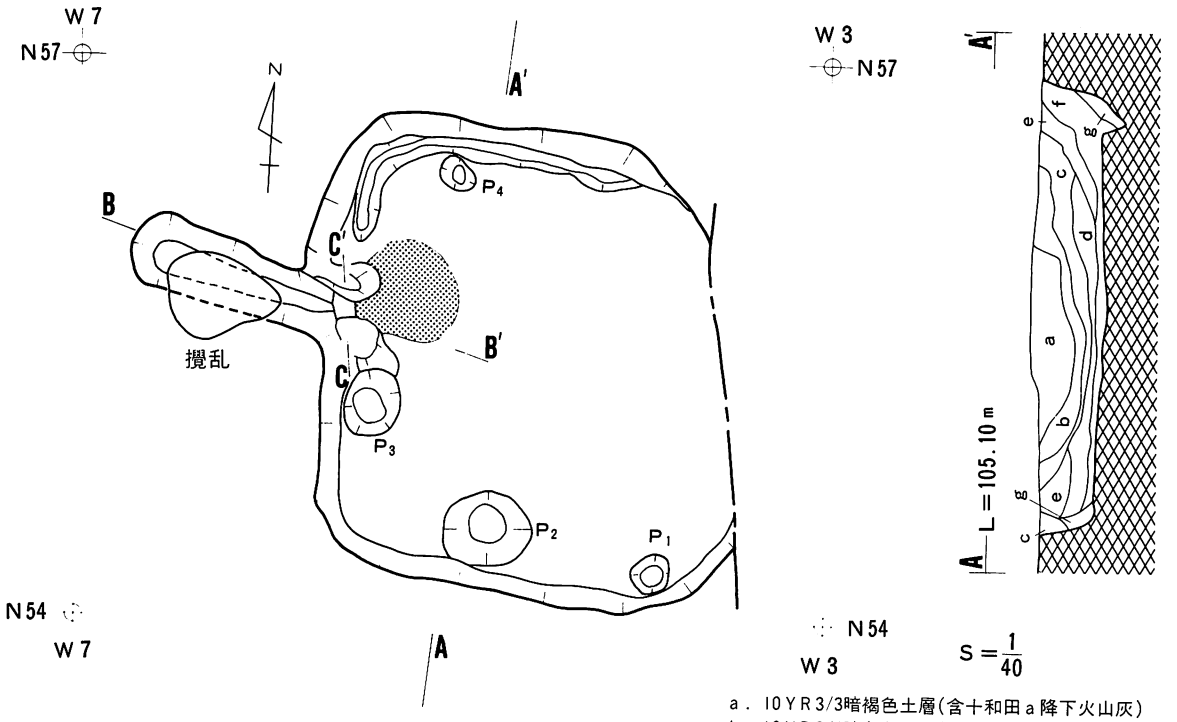
このピットはIII層上面で検出されたもので、調査対象区の中央部に位置している。Ｃｄ12住居址との間隔は30cm±を計り、極めて接近した位置関係にある。規模は開口部170cm±×125cm±・底部155cm±×115cm±・深さ20cm±を計る。平面形は隅丸長方形で、断面形は皿形を呈する。

埋土はブロック状の十和田ａ降下火山灰を含む黒褐色土層・暗褐色土層などで構成されているが、その中に灰白色を呈する純粋な十和田ａ降下火山灰だけの層（層厚５cm±）がみられる。

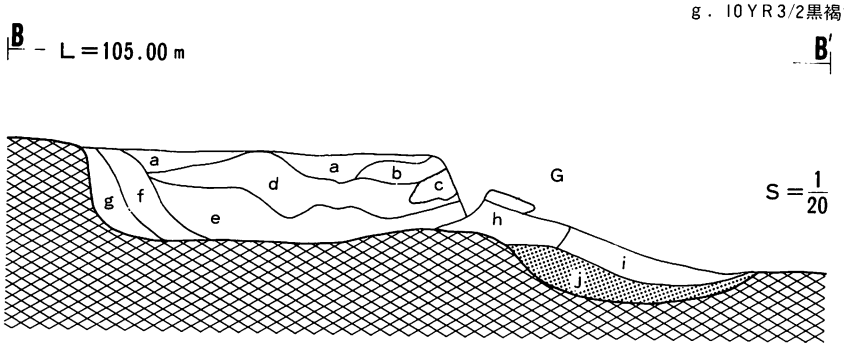
底面は起伏がみられ、やや軟質なものとなっている。

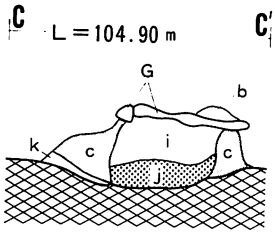
出土遺物（図版43―79・写真図版47―56）

埋土中から出土した土器片を接合・復元したのが79の土器である。79はロクロ成形の坏で内面が黒色処理されている。底部の切り離し方法は回転糸切りである。この土器の器表裏面は剝落が著しくアバタ状を呈する。このため底部の再調整の有無については識別できない。外面の色調は浅黄橙色を示す。



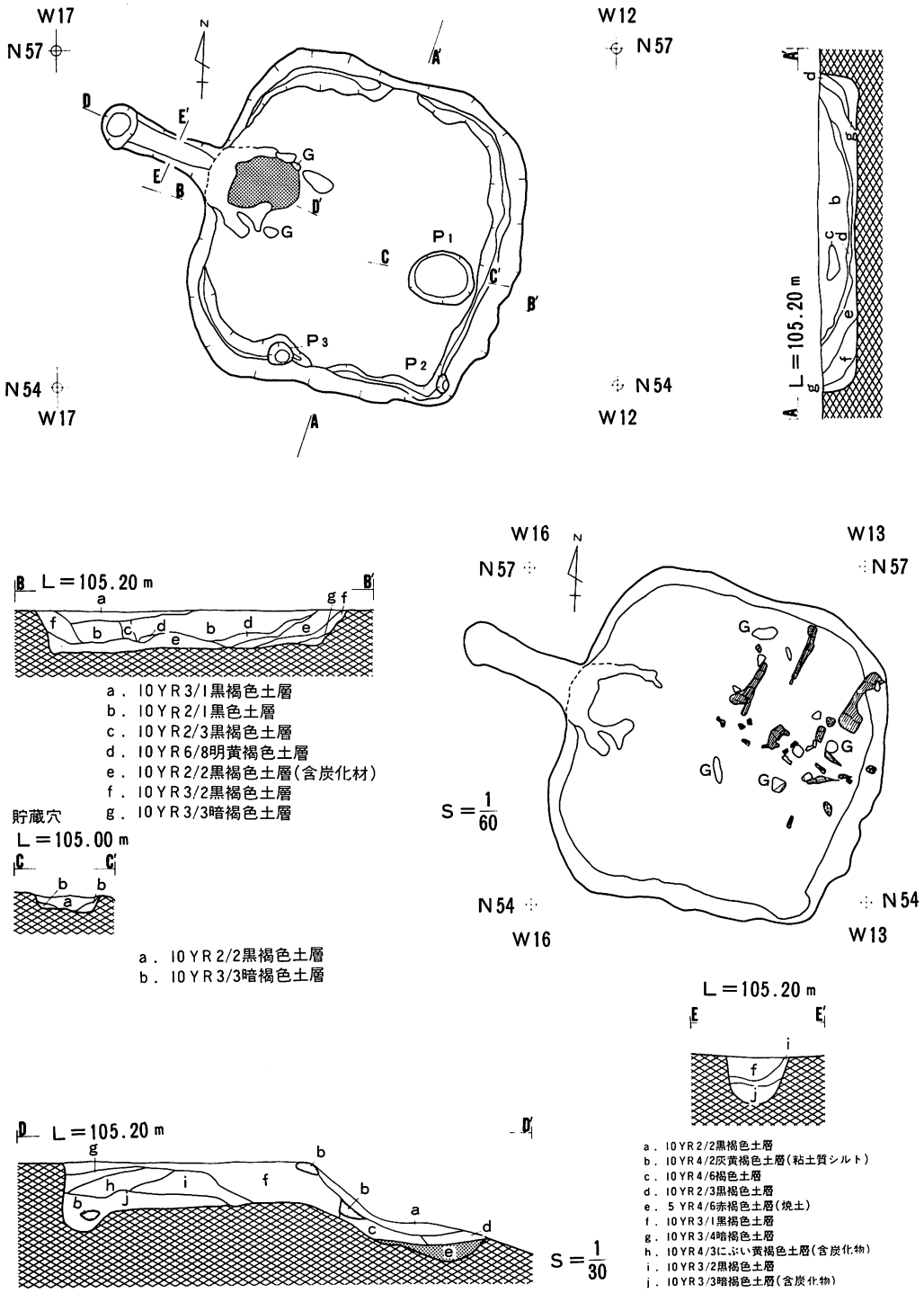
a．10YR3/3暗褐色土層(含十和田a降下火山灰)
b．10YR3/4暗色色土層(含十和田a降下火山灰)
c．10YR2/3黒褐色土層(含十和田a降下火山灰)
d．10YR3/1黒褐色土層(含十和田a降下火山灰)
e．10YR2/2黒褐色土層(含十和田a降下火山灰)
f．10YR3/3暗褐色土層(含焼土粒)
g．10YR3/2黒褐色土層



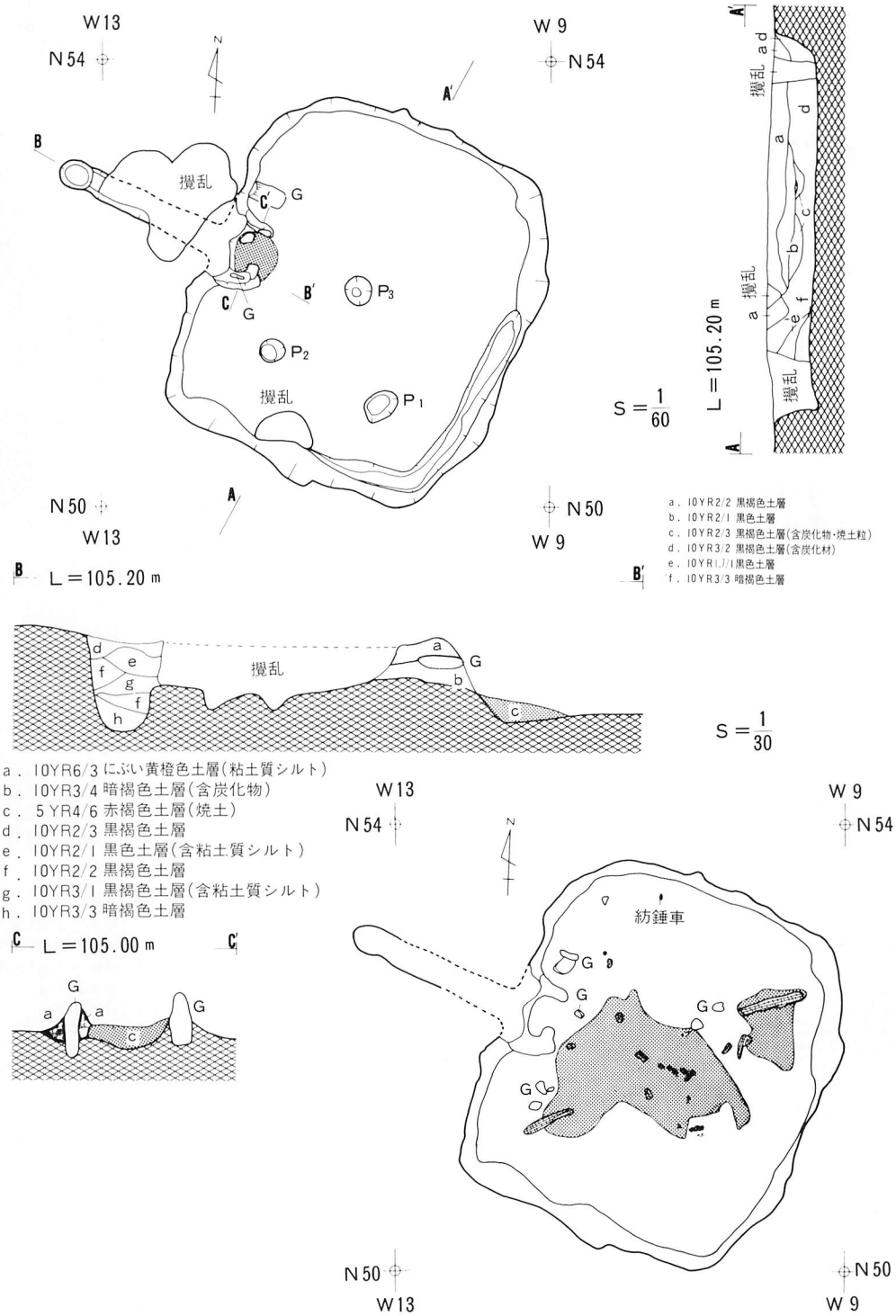


a．10YR2/2 黒褐色土層
b．10YR2/1 黒色土層
c．10YR7/4 にぶい黄橙色土層(粘土質シルト)
d．10YR1.7/1黒色土層
e．10YR3/3 暗褐色土層(含炭化物)
f．10YR2/3 黒褐色土層(含炭化物)
g．10YR3/4 暗褐色土層(含炭化物)
h．10YR3/1 黒褐色土層(含炭化物)
i．10YR4/6 褐色土層(含炭化物・焼土粒)
j．5 YR5/8 明赤褐色土層(焼土)
k．10YR3/2 黒褐色土層

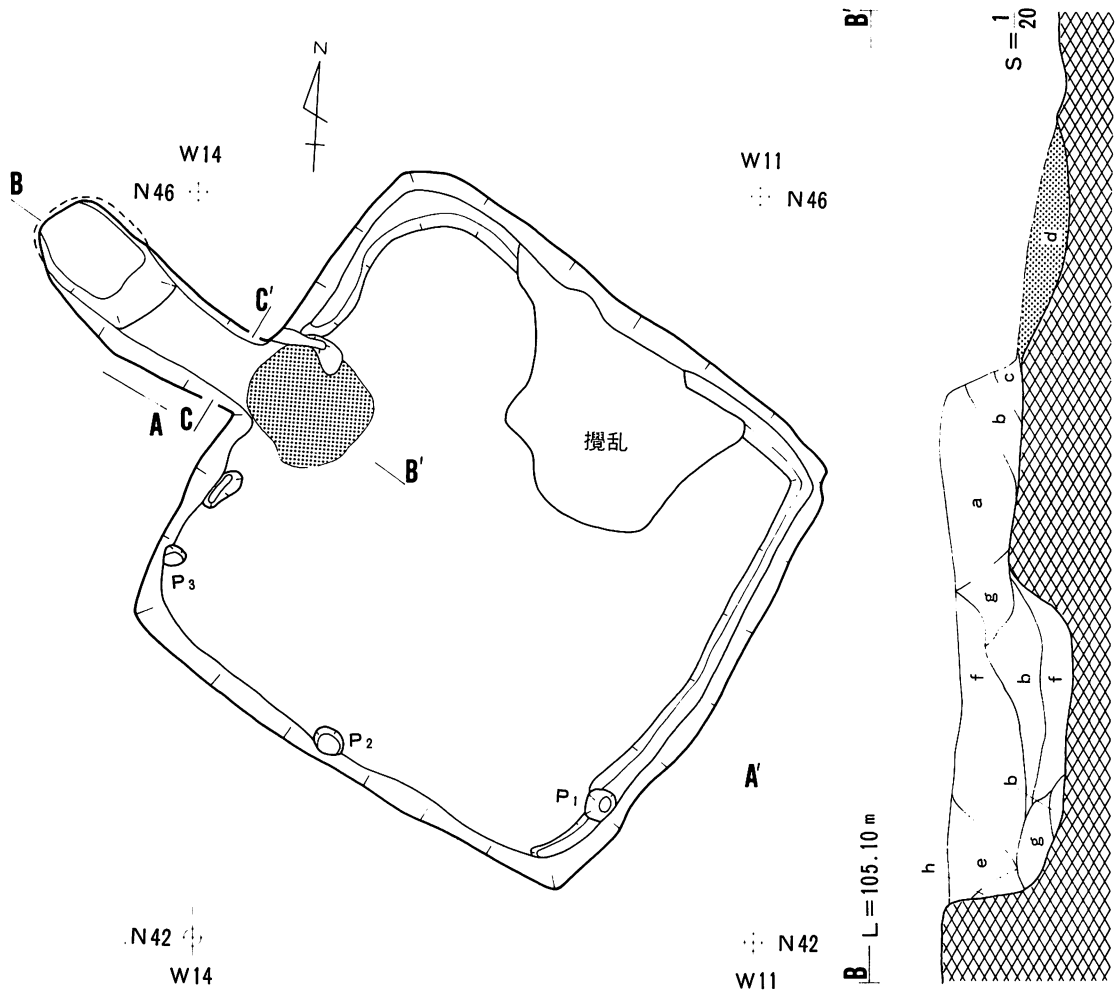
図版16　Bb06住居址



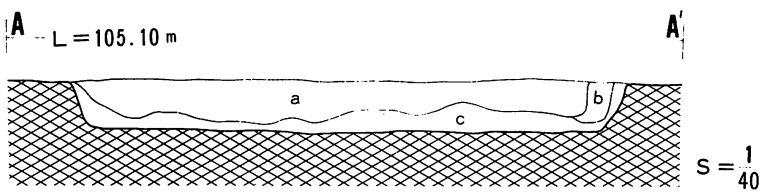
図版17　Bb18住居址



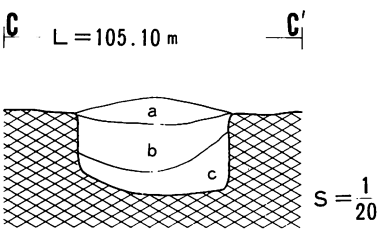
図版18　Bc12住居址



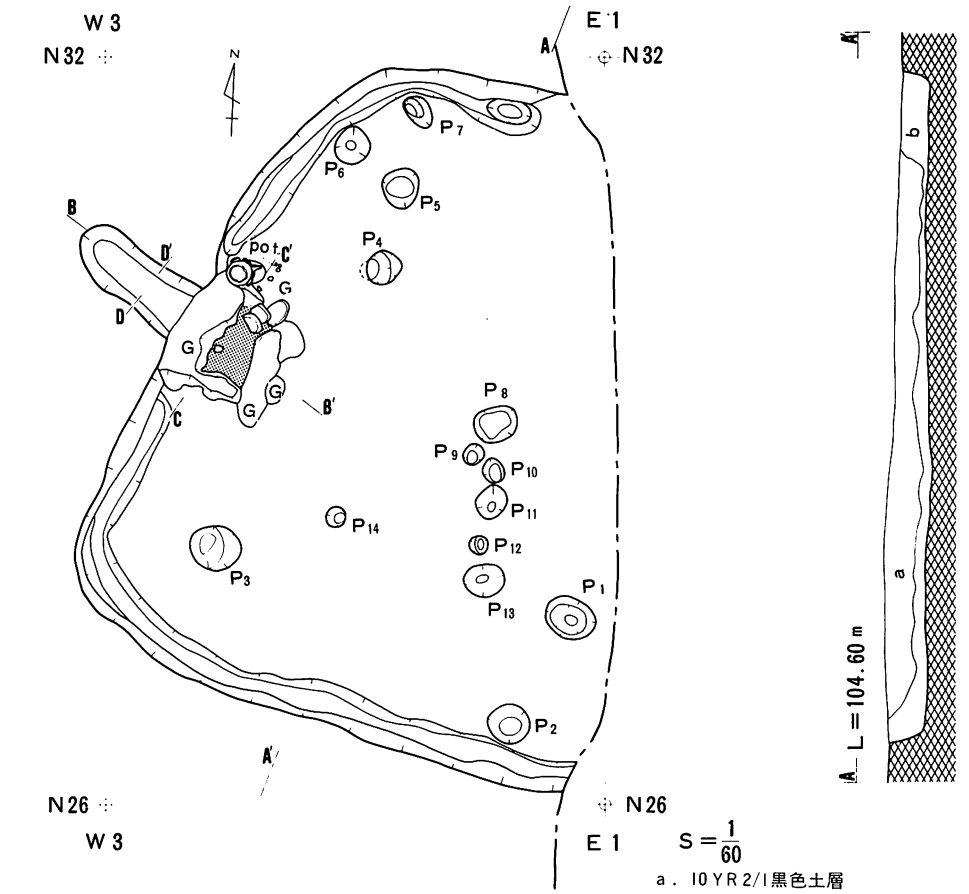
a．10YR2/2黒褐色土層
b．10YR2/3黒褐色土層
c．10YR3/3暗褐色土層(含焼土粒)
d．5YR5/8明赤褐色土層(焼土)
e．10YR3/1黒褐色土層(含焼土粒)
f．10YR3/2黒褐色土層
g．10YR2/1黒色土層
h．10YR3/4暗褐色土層



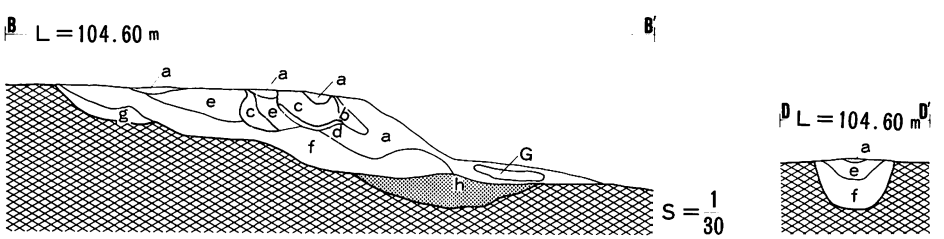
a．10YR3/2黒褐色土層(含十和田a降下火山灰)
b．10YR2/2黒褐色土層
c．10YR3/4暗褐色土層(含炭化物)

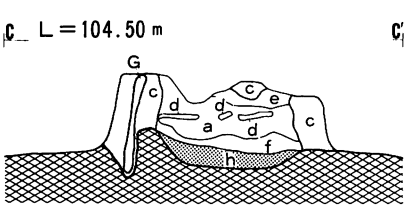


図版19　Bf15住居址



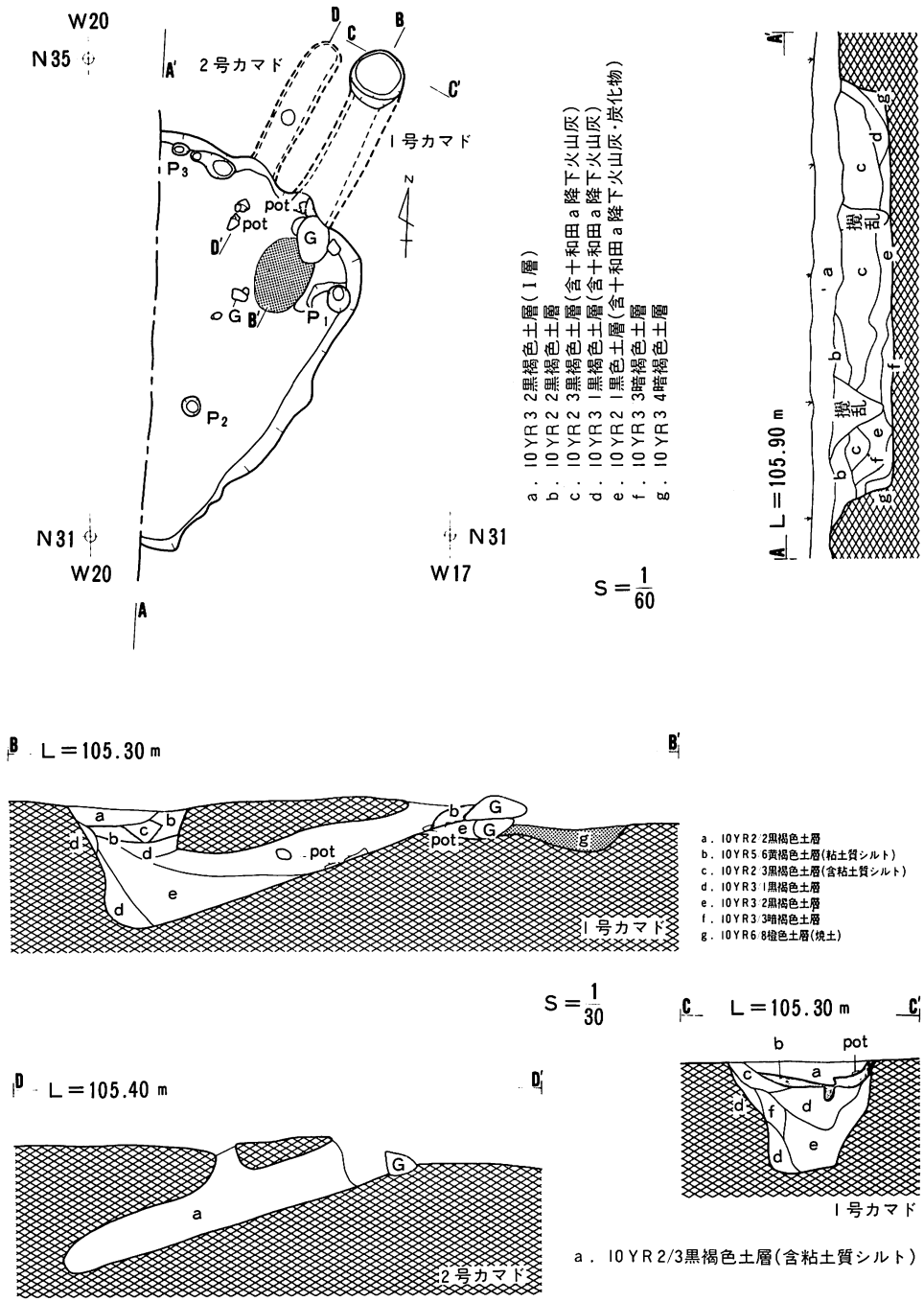
a．10YR2/1黒色土層
b．10YR2/2黒褐色土層(含炭化物)



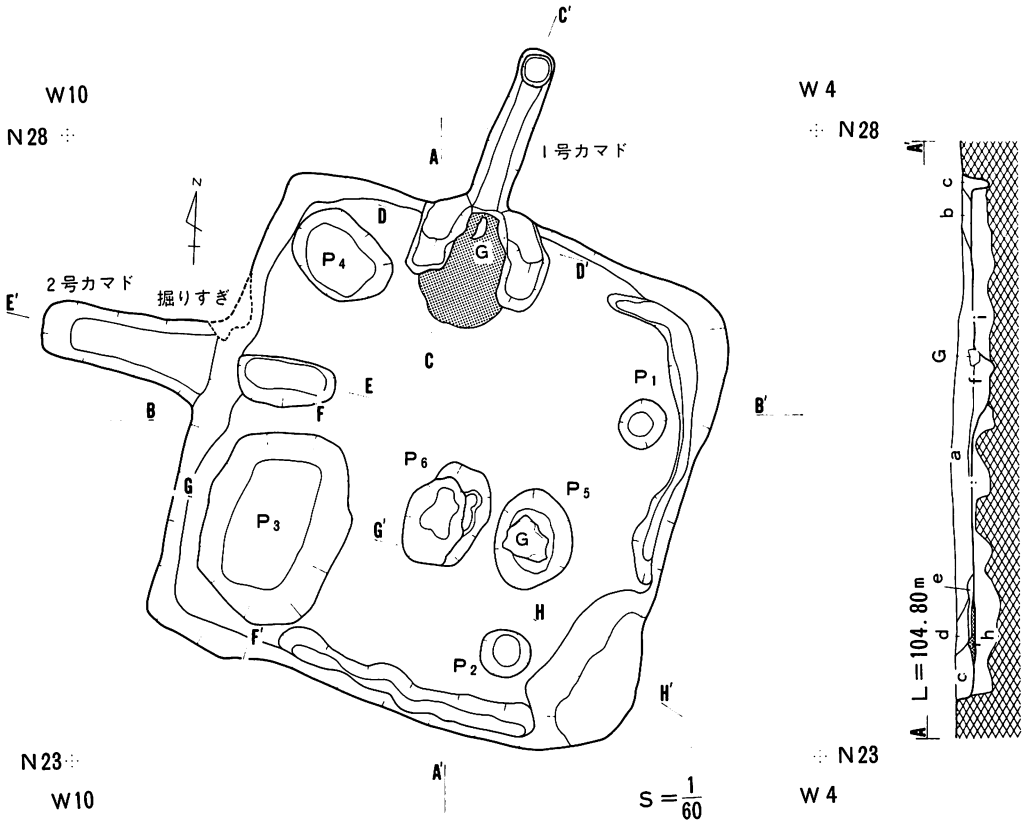


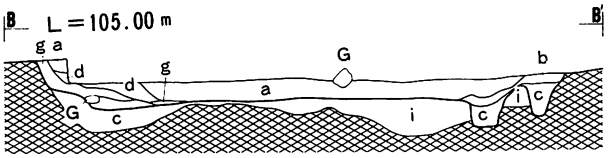
a．10YR2/2黒褐色土層(含炭化物)
b．10YR3/2黒褐色土層
c．10YR8/4浅黄橙色土層(粘土質シルト)
d．10YR4/6褐色土層
e．10YR3/3暗褐色土層
f．10YR3/1黒褐色土層
g．10YR2/3黒褐色土層
h．2.5YR5/8明赤褐色土層(焼土)

図版20　Bj03住居址

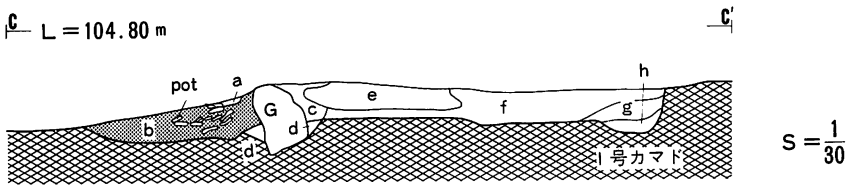


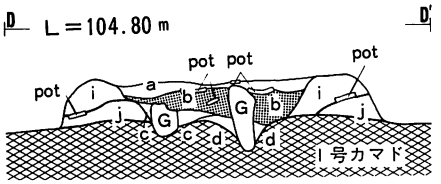
図版21　Bj21住居址





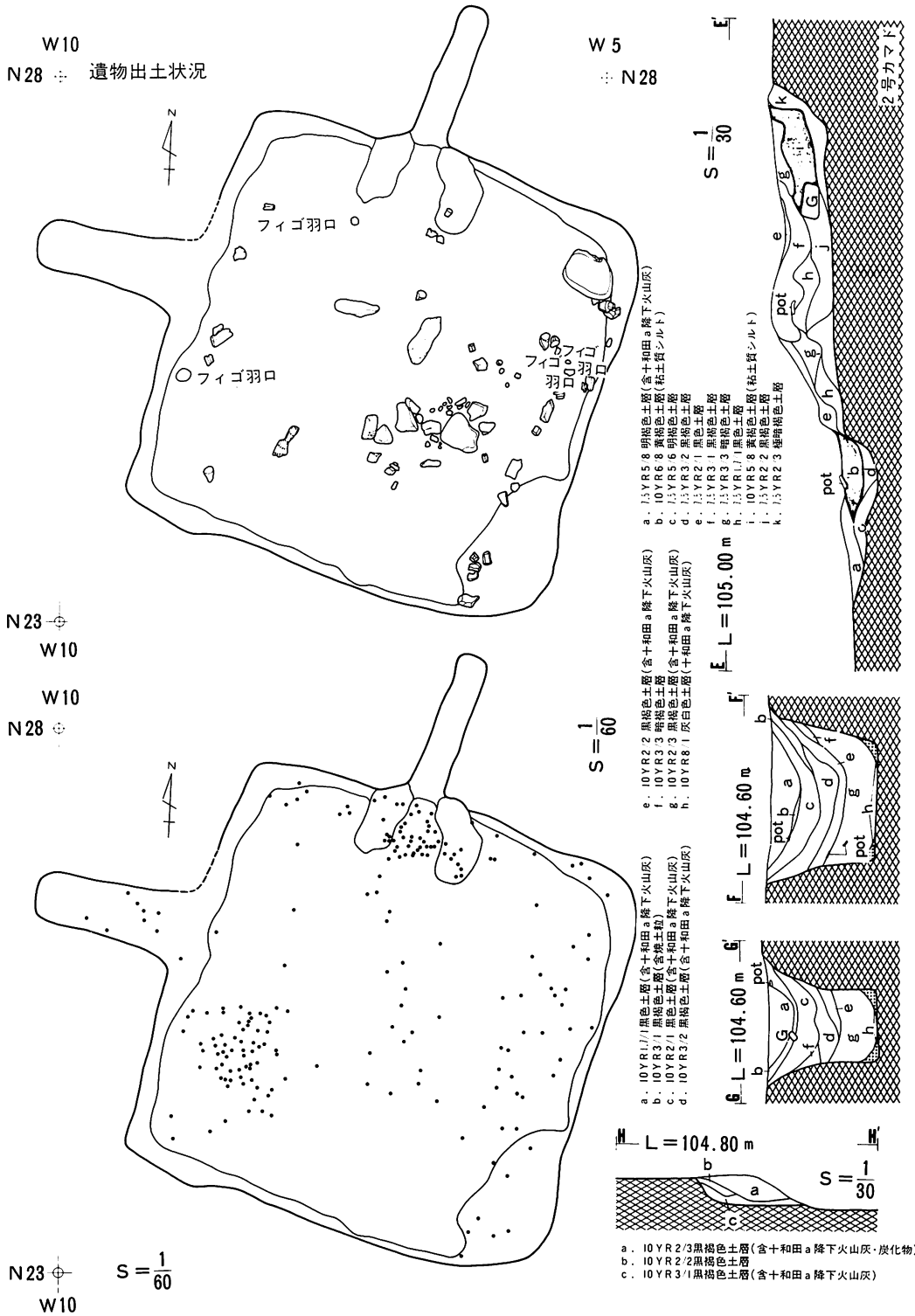
a．10YR3/2黒褐色土層（含十和田a降下火山灰）
b．10YR3/4暗褐色土層（含十和田a降下火山灰）
c．10YR3/3暗褐色土層
d．10YR2/2黒褐色土層（含十和田a降下火山灰）
e．5YR2/3極暗赤褐色土層
（含十和田a降下火山灰・炭化物・焼土粒）
f．7.5YR2/3極暗褐色土層（含十和田a降下火山灰）
g．10YR3/1黒褐色土層（含十和田a降下火山灰）
h．5YR5/8明赤褐色土層（焼土）
i．10YR2/3黒褐色土層（含十和田a降下火山灰）



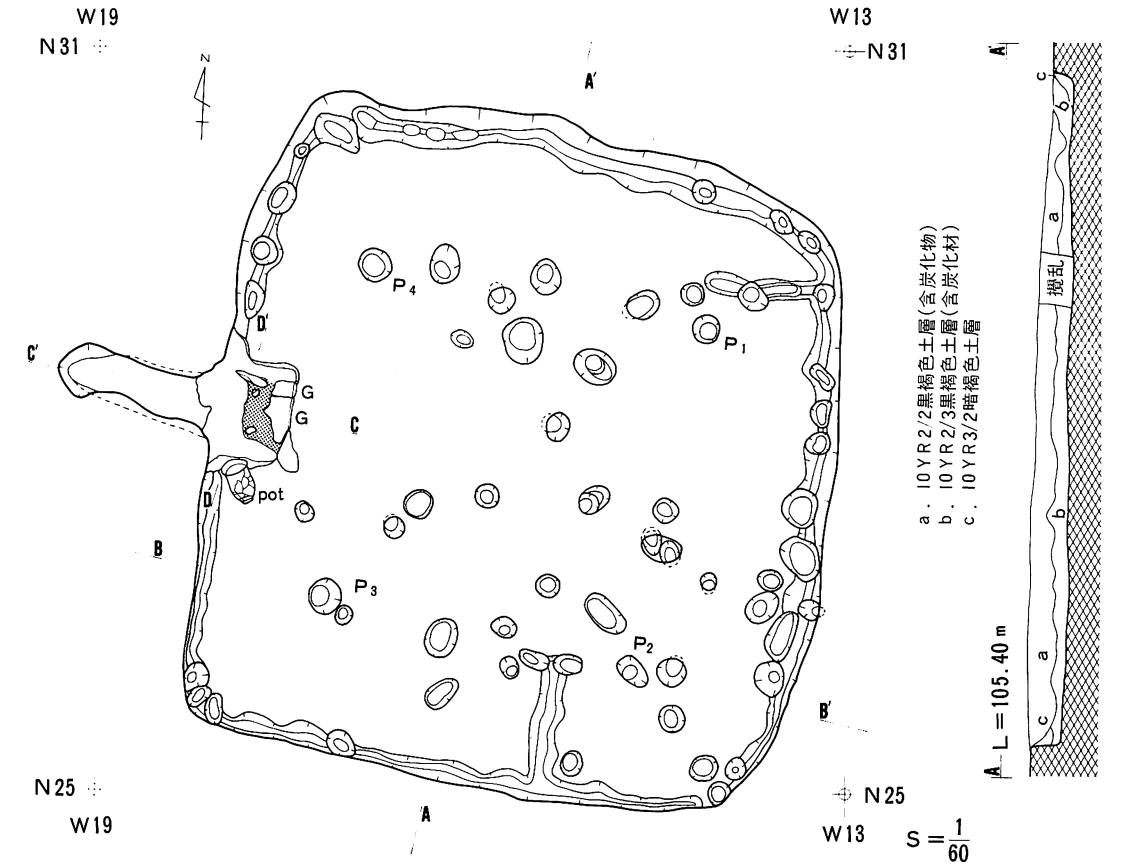


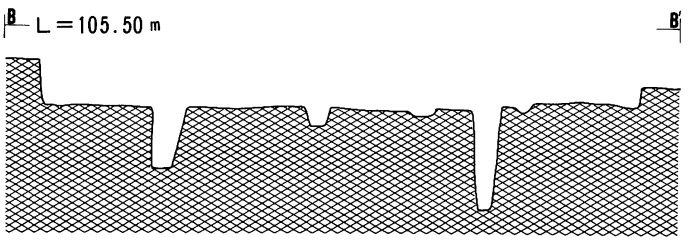
a．10YR3/2黒褐色土層
b．5YR5/8明赤褐色土層（焼土）
c．10YR2/2黒褐色土層（含焼土粒）
d．10YR2/3黒褐色土層（含焼土粒）
e．5YR3/1黒褐色土層
f．10YR3/1黒褐色土層
g．7.5YR3/1黒褐色土層（含十和田a降下火山灰）
h．7.5YR2/1黒色土層
i．7.5YR5/4にぶい褐色土層（粘土質シルト）
j．7.5YR5/3にぶい褐色土層（粘土質シルト）

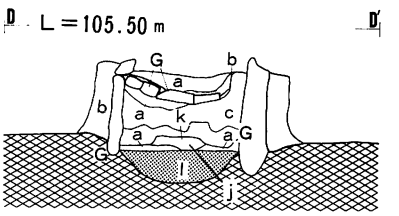
図版22　Ca09住居址(1)

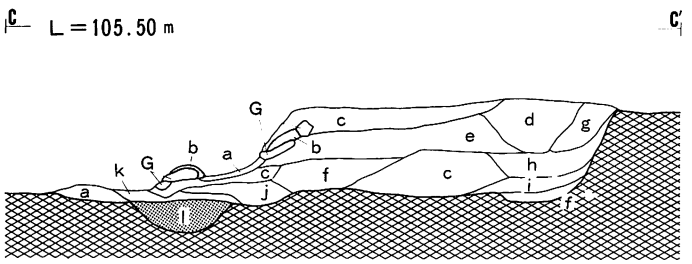


図版23　Ca09住居址(2)



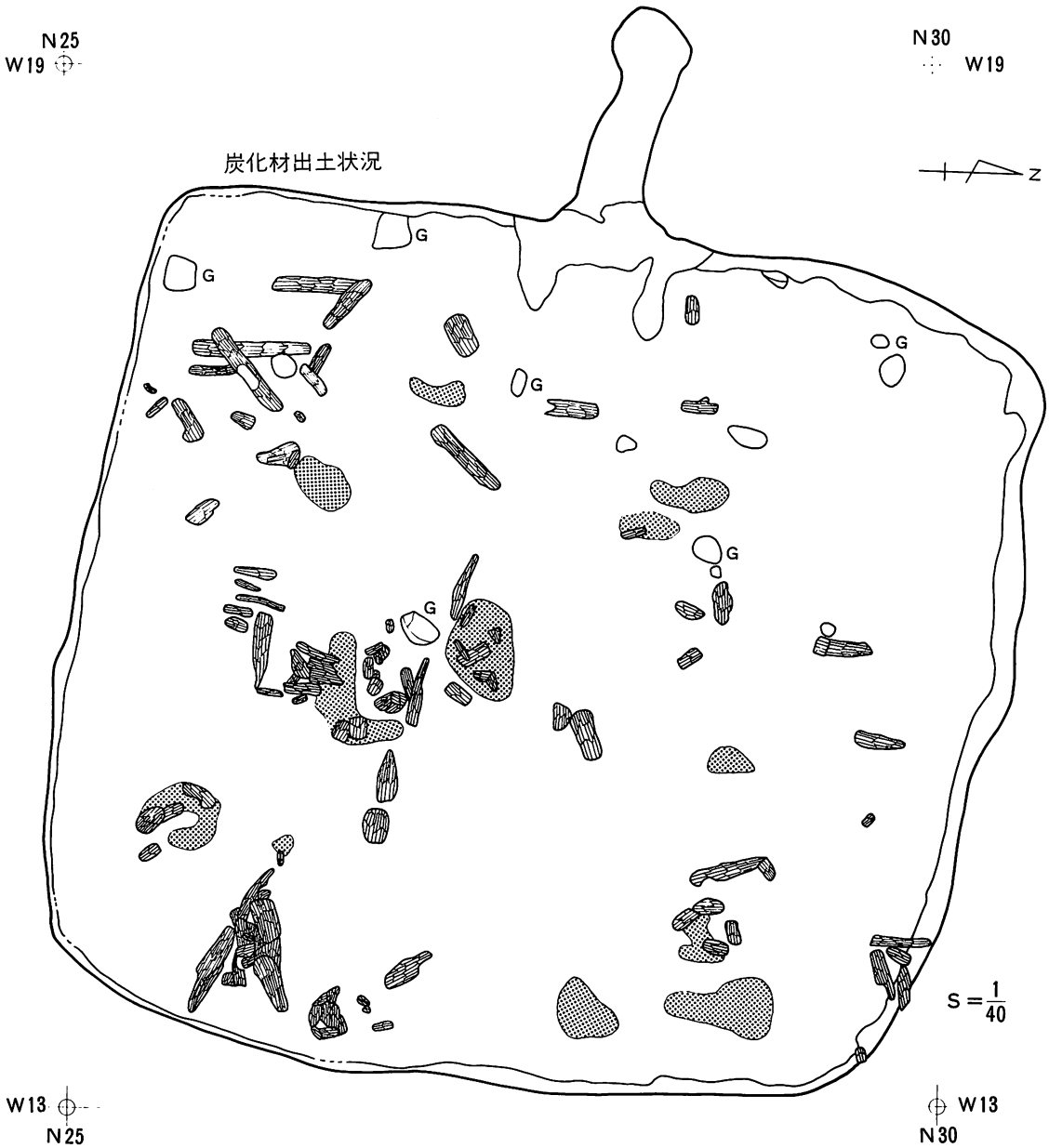




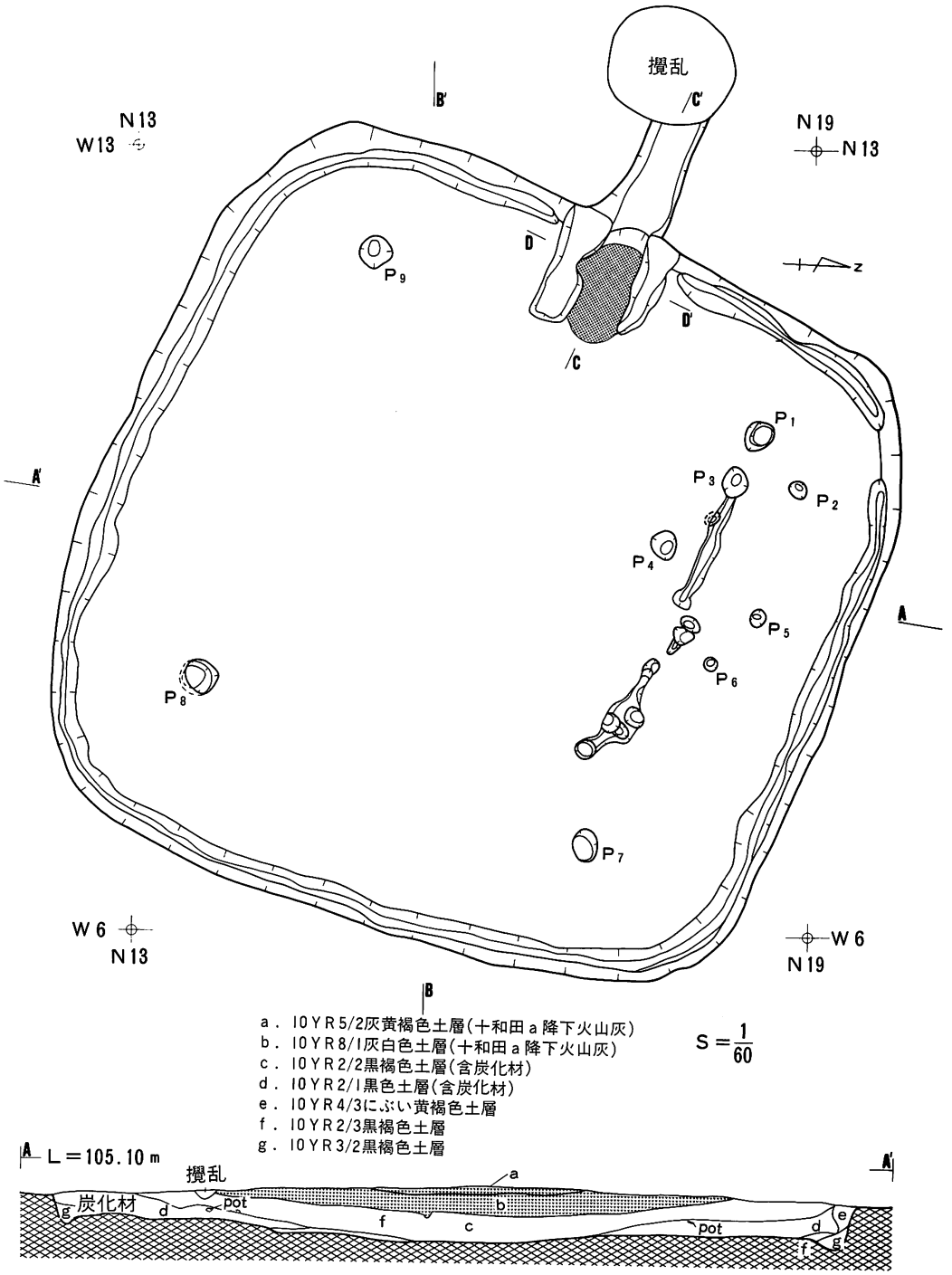


a．10YR2/2黒褐色土層
b．5YR8/3淡黄色土層(粘土質シルト)
c．10YR3/2黒褐色土層
d．10YR6/3にぶい黄橙色土層
e．10YR3/1黒褐色土層
f．10YR2/3黒褐色土層(含粘土質シルト)
g．10YR4/4褐色土層(含焼土粒)
h．10YR4/6褐色土層(含焼土粒)
i．10YR3/3暗褐色土層(含焼土粒)
j．10YR5/6黄褐色土層(含炭化物)
k．5YR7/2明褐灰色土層(木灰)
l．5YR6/8橙色土層(焼土)

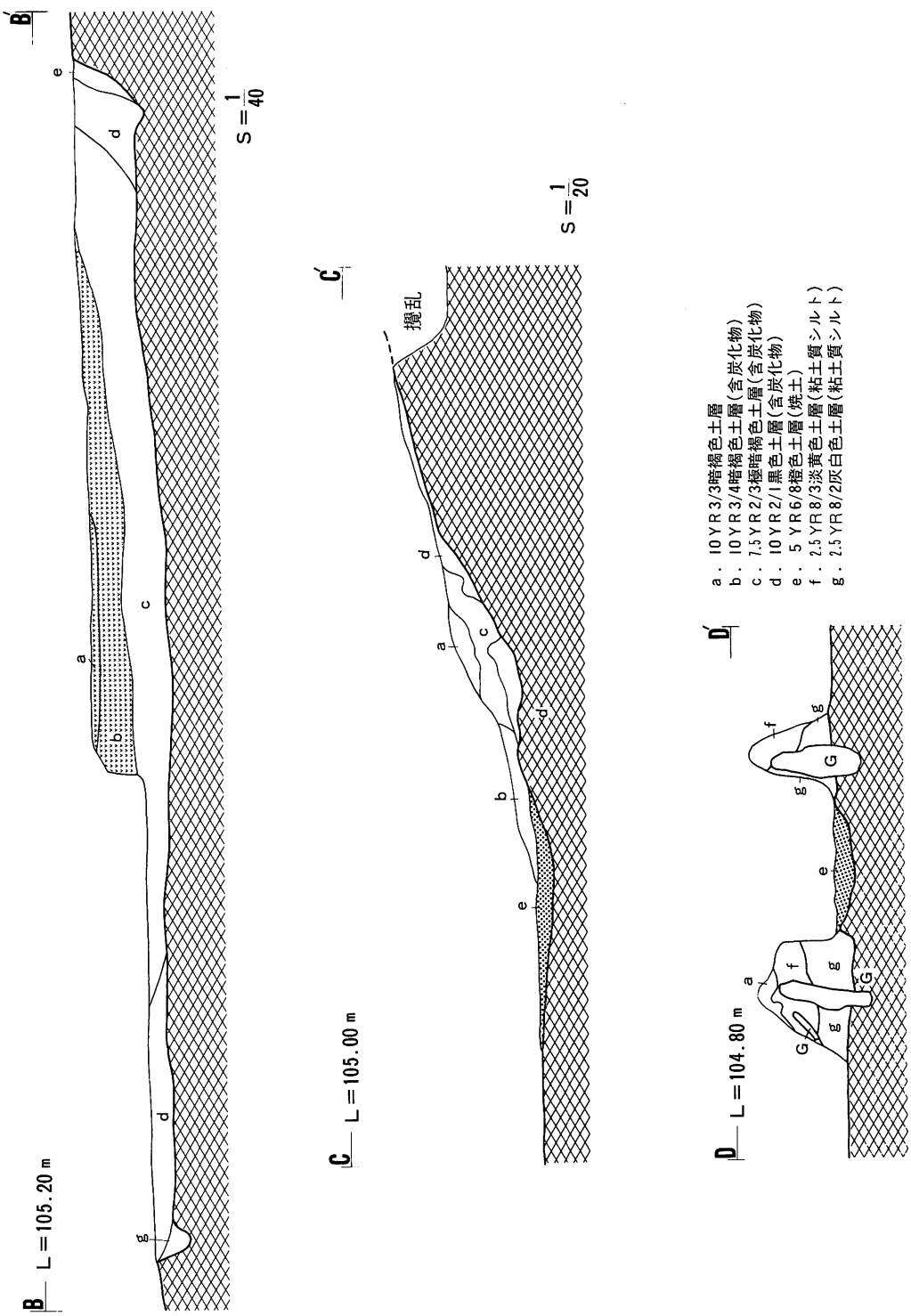
図版24　Ca18住居址(1)



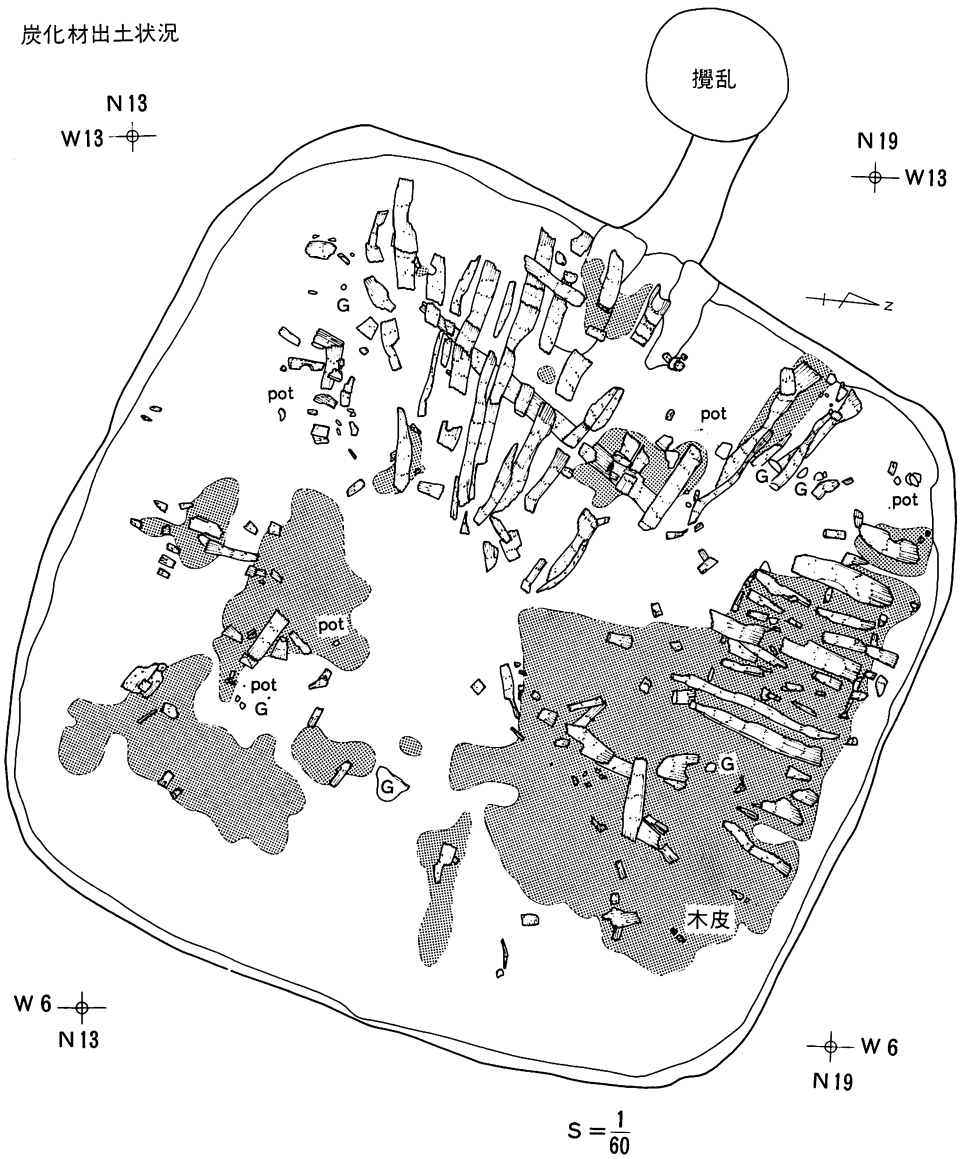
図版25　Ca18住居址(2)



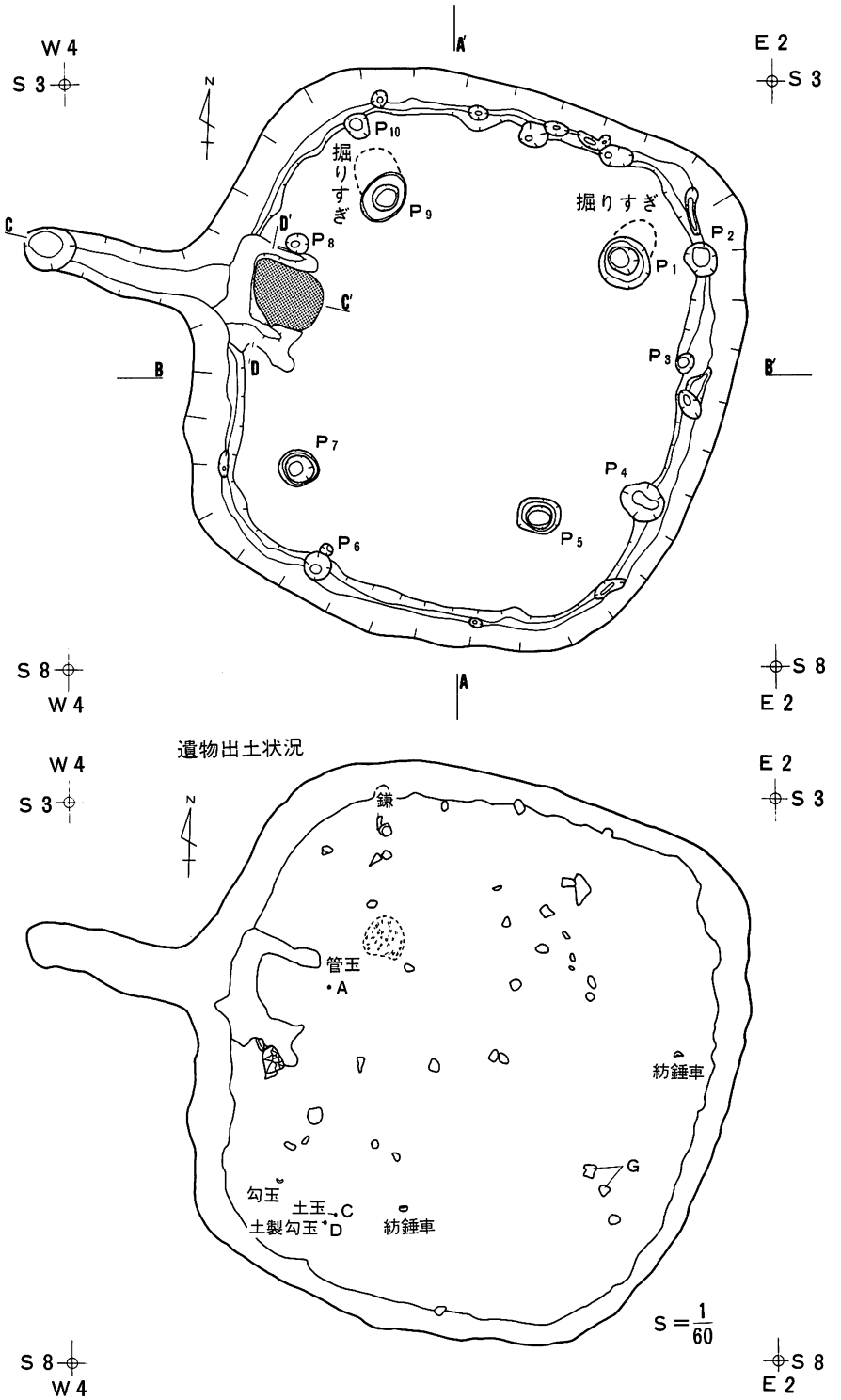
図版26　Cd12住居址(1)



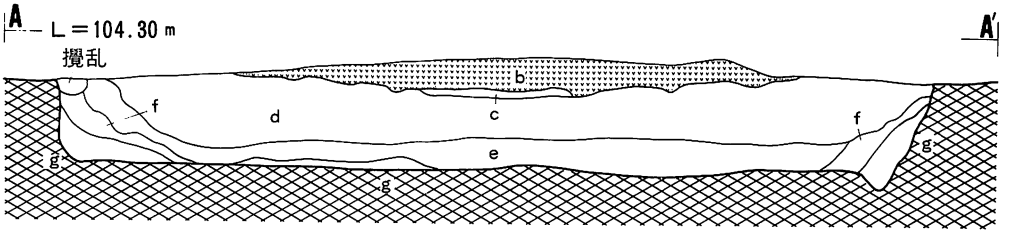
図版27　Cd12住居址 (2)



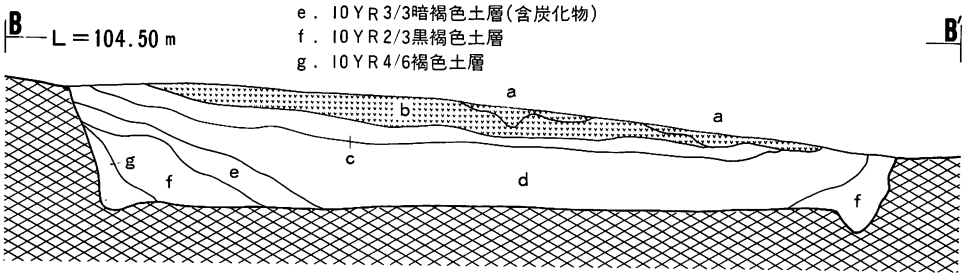
図版28　Cd12住居址 (3)



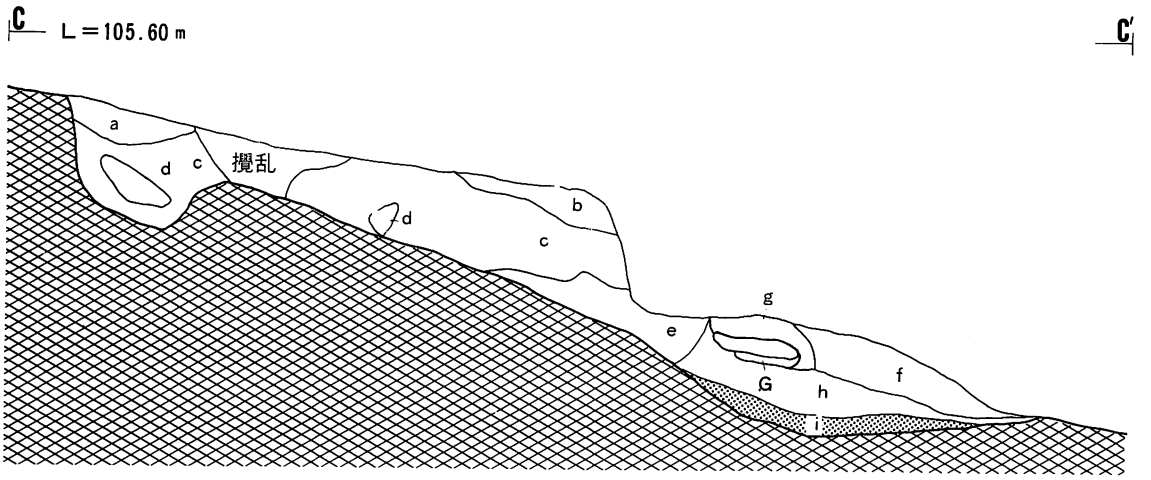
図版29　Db03住居址(1)

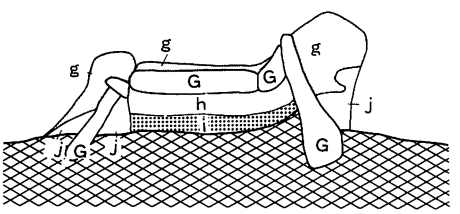


a．10YR6/2灰黄褐色土層(十和田a降下火山灰)
b．10YR8/2灰白色土層(十和田a降下火山灰)
c．10YR2/1黒色土層
d．10YR2/2黒褐色土層
e．10YR3/3暗褐色土層(含炭化物)
f．10YR2/3黒褐色土層
g．10YR4/6褐色土層



S＝1/40

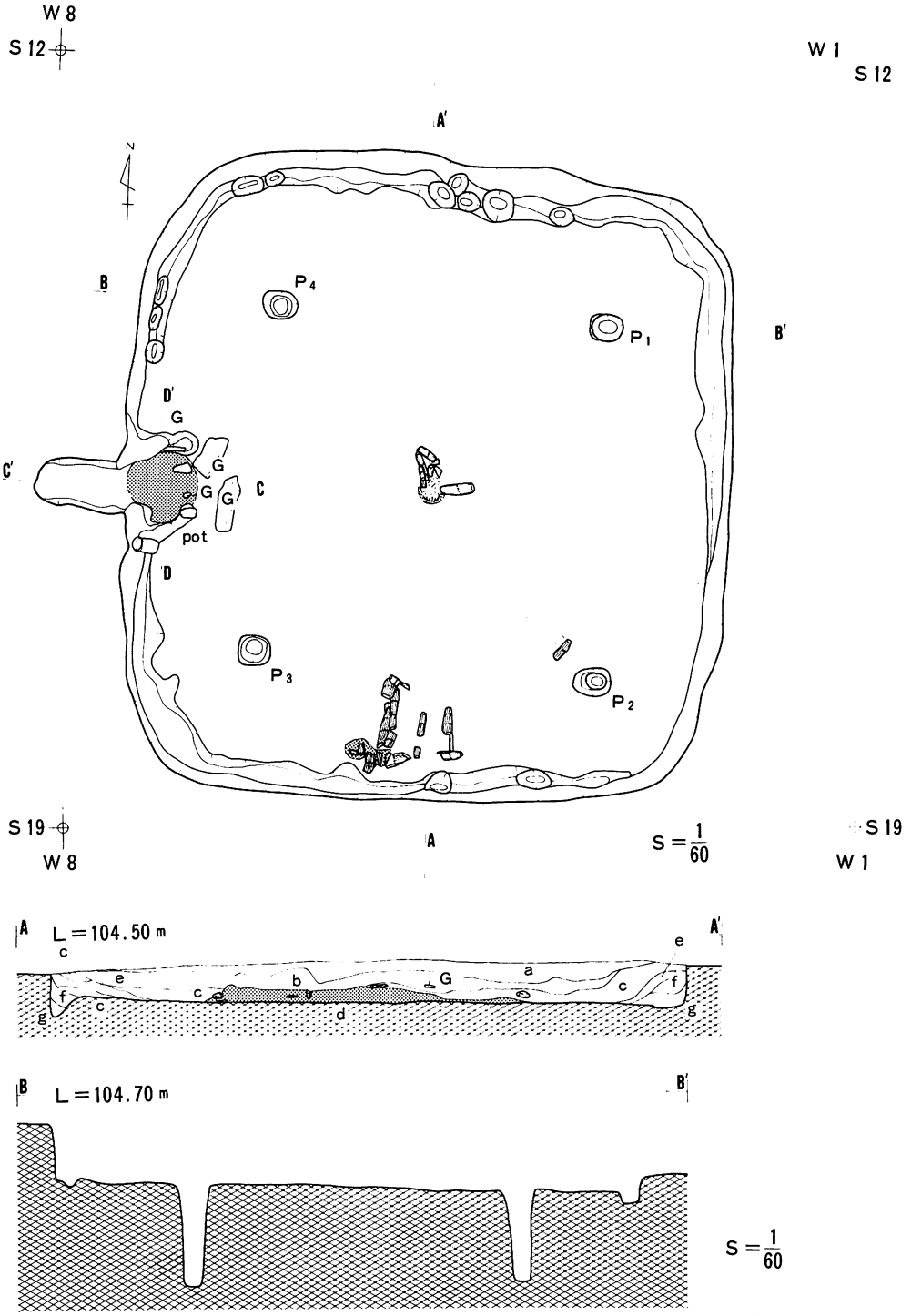




S＝1/20

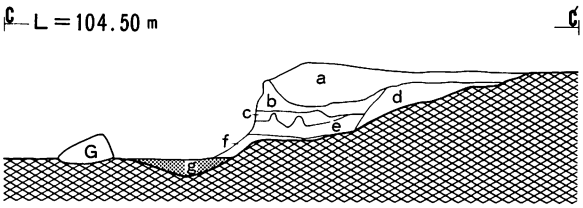
a．7.5YR2/2 黒褐色土層
b．10YR1.7/1 黒色土層(含焼土粒)
c．10YR2/1 黒色土層
d．5YR8/2 灰白色土層(粘土質シルト)
e．10YR3/3 暗褐色土層
f．10YR5/3 にぶい黄褐色土層
g．5YR7/3 浅褐色土層(粘土質シルト)
h．10YR3/4 暗褐色土層(含炭化物・焼土粒)
i．7.5YR7/6 橙色土層(焼土)
j．10YR2/3 黒褐色土層

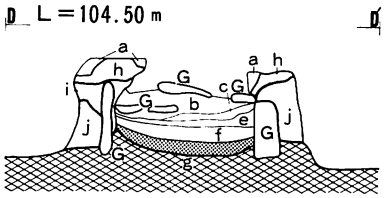
図版30　Db03住居址(2)



a．10YR2/1 黒色土層(含十和田a降下火山灰)
b．10YR1.7/1黒色土層
c．10YR3/1 黒褐色土層(含炭化材)
d．7.5YR6/8 橙色土層(焼土)
e．10YR2/2 黒褐色土層(含焼土粒)
f．10YR2/3 黒褐色土層
g．10YR3/3 暗褐色土層

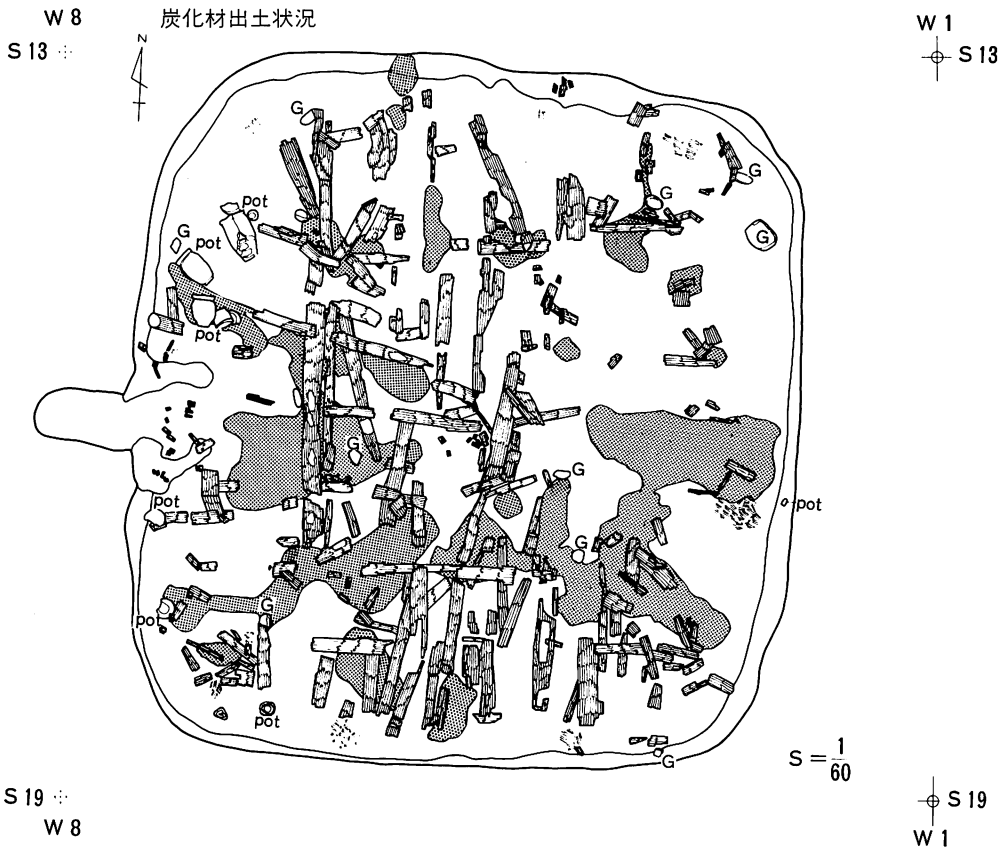
図版31　De09住居址 (1)



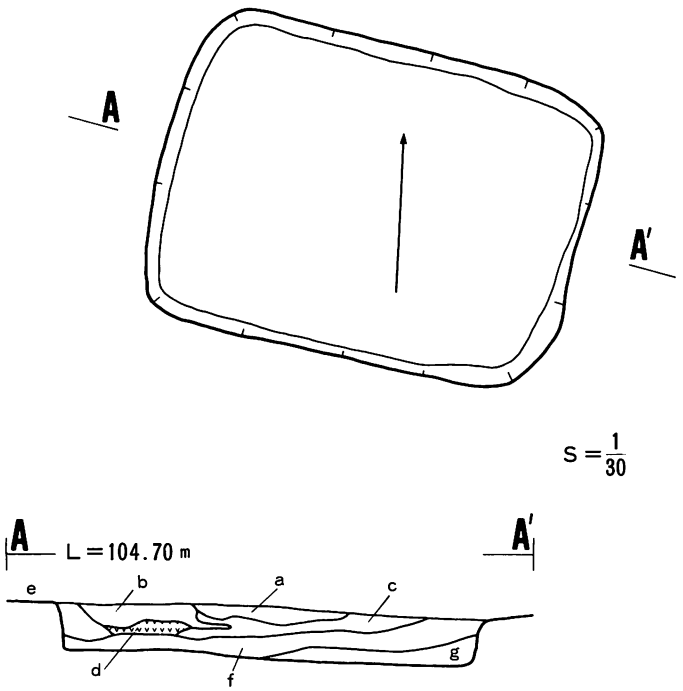


S＝1/30

a．10YR2/1黒色土層(含焼土粒)
b．10YR2/2黒褐色土層
c．10YR3/4暗褐色土層
d．10YR3/1黒褐色土層
e．7.5YR5/4にぶい褐色土層
f．7.5YR4/4暗褐色土層
g．5YR6/8橙色土層(焼土)
h．2.5YR8/1灰白色土層(粘土質シルト)
i．10YR7/3にぶい黄橙色土層(粘土質シルト)
j．5YR8/3淡黄色土層(粘土質シルト)

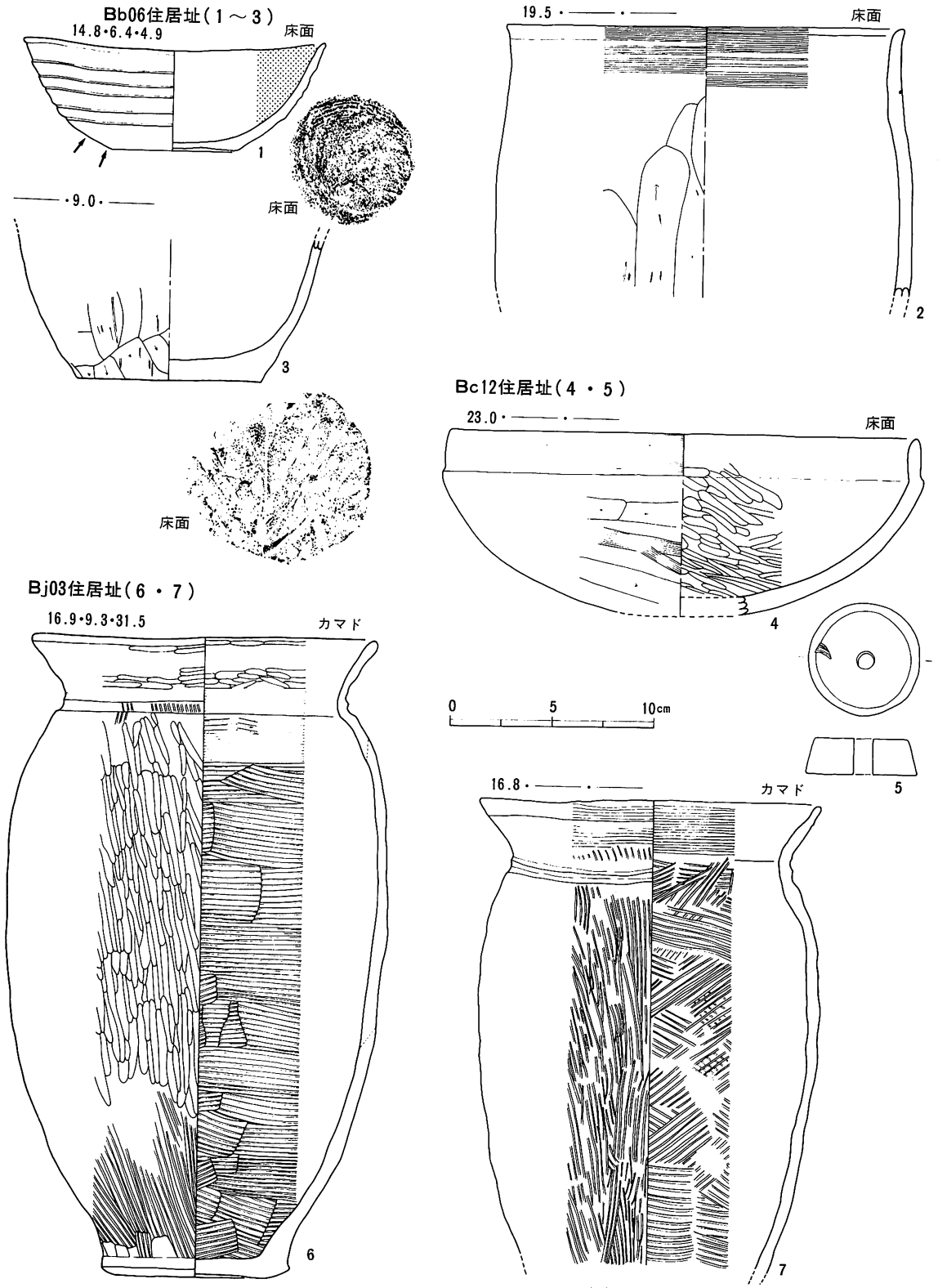


図版32　De09住居址(2)

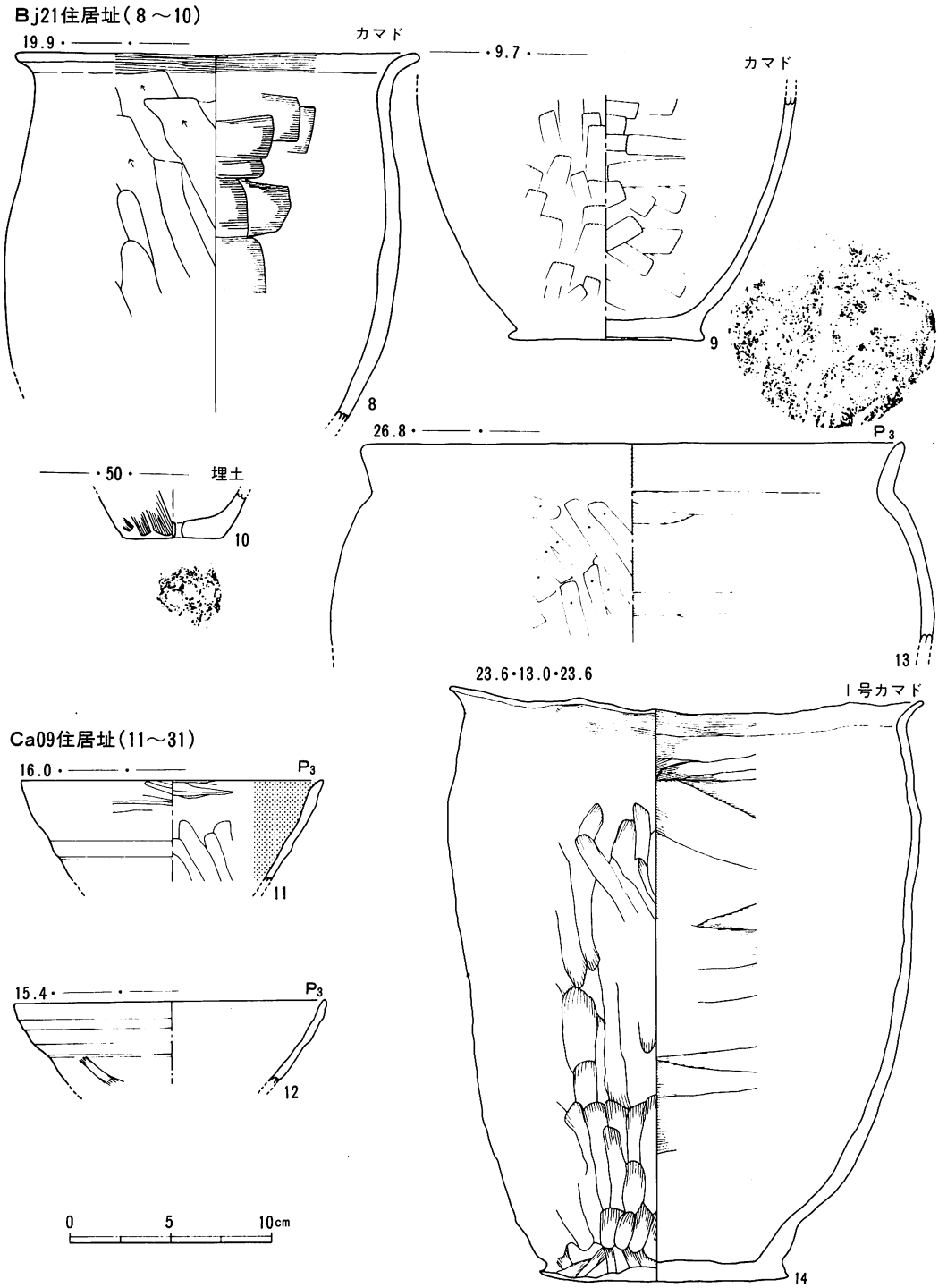


a．10YR2/2黒褐色土層(含十和田a降下火山灰・炭化物)
b．7.5YR3/1黒褐色土層(含十和田a降下火山灰・炭化物)
c．10YR3/1黒褐色土層(含十和田a降下火山灰・炭化物)
d．10YR8/2灰白色土層(十和田a降下火山灰)
e．10YR2/2黒褐色土層(含十和田a降下火山灰)
f．10YR3/3暗褐色土層(含十和田a降下火山灰)
g．10YR3/4暗褐色土層(含十和田a降下火山灰)

図版33　Ce06ピット

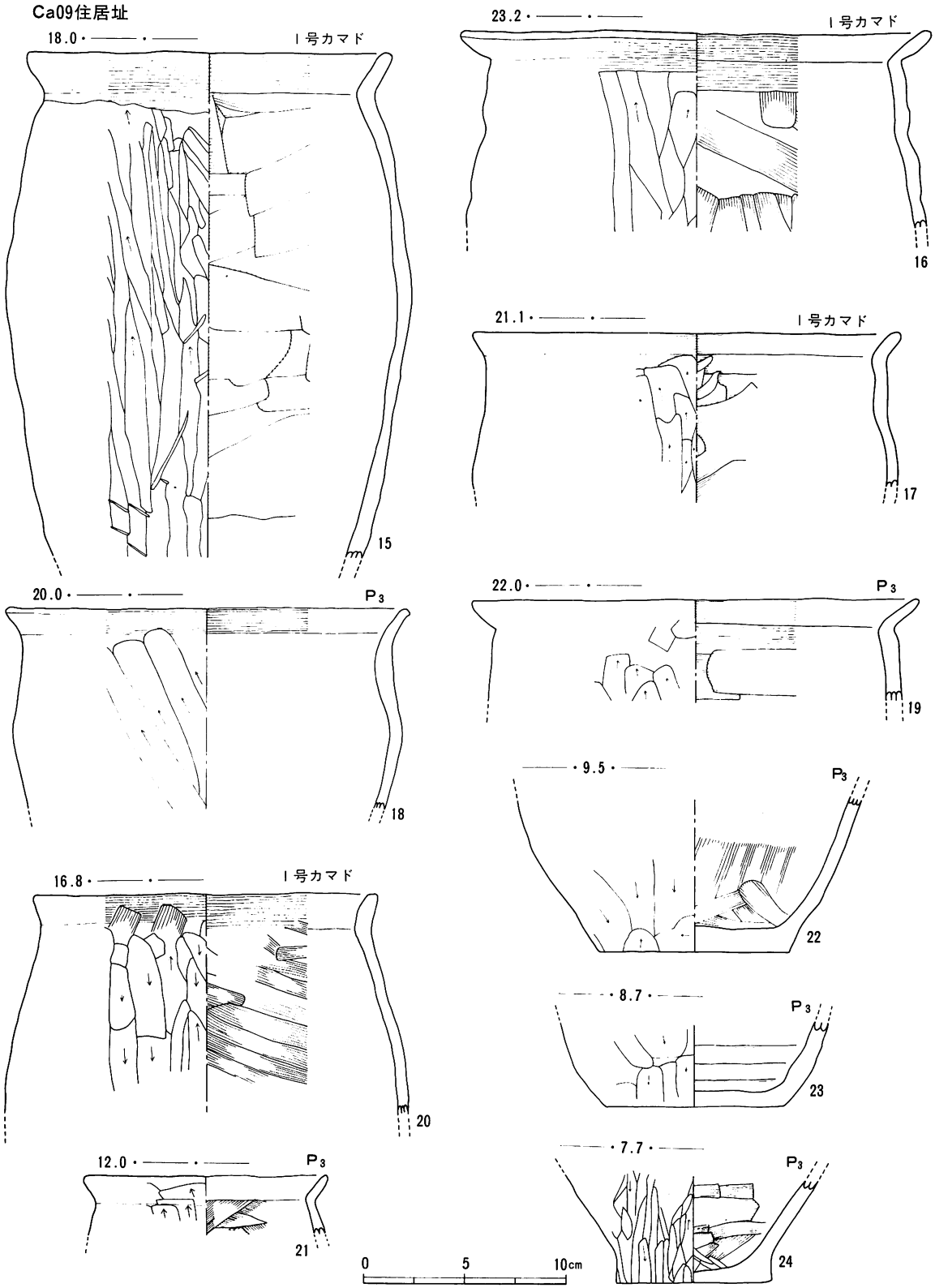


図版34　遺構内の出土遺物(7)

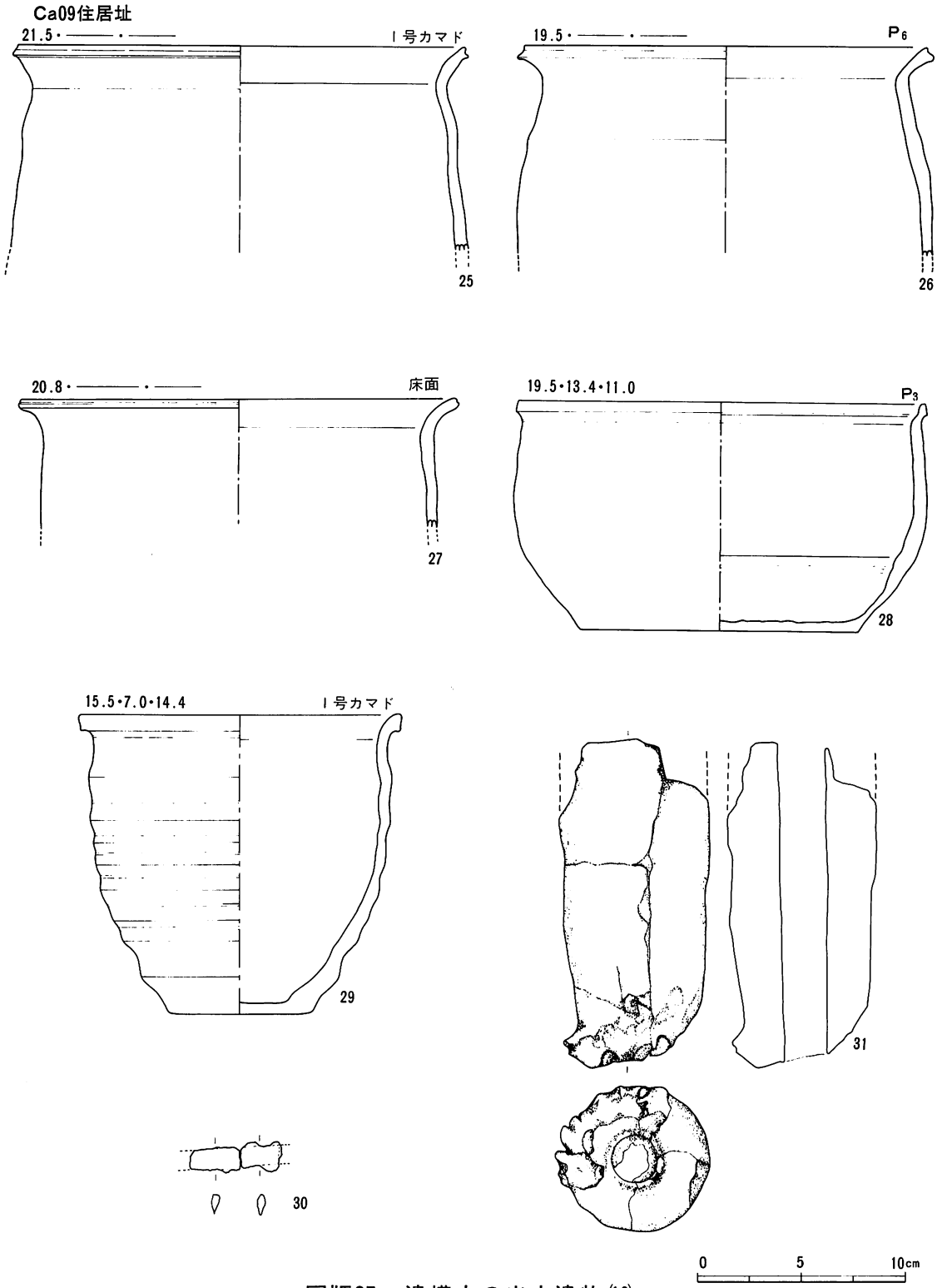


図版35　遺構内の出土遺物(8)

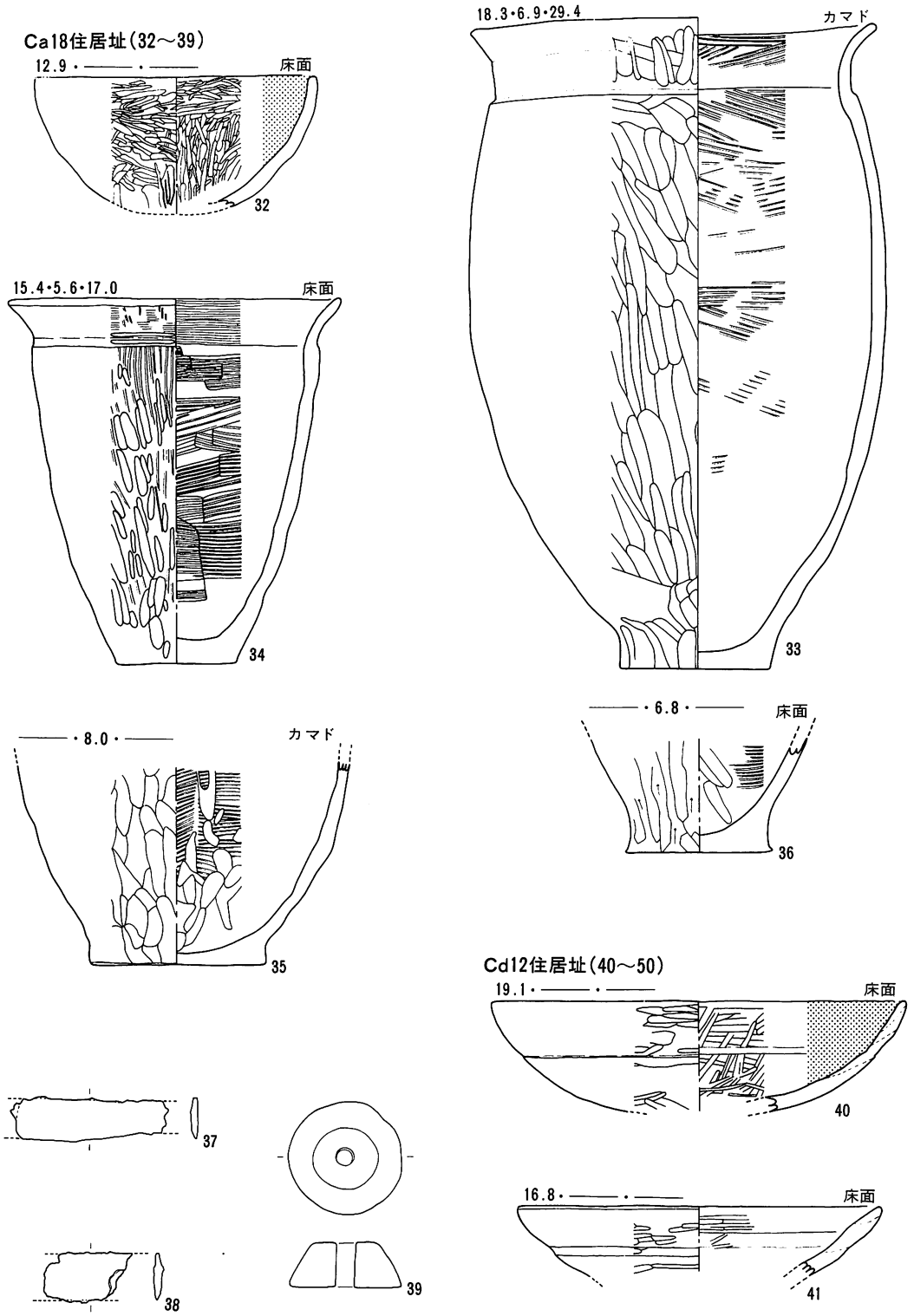
Ca09住居址



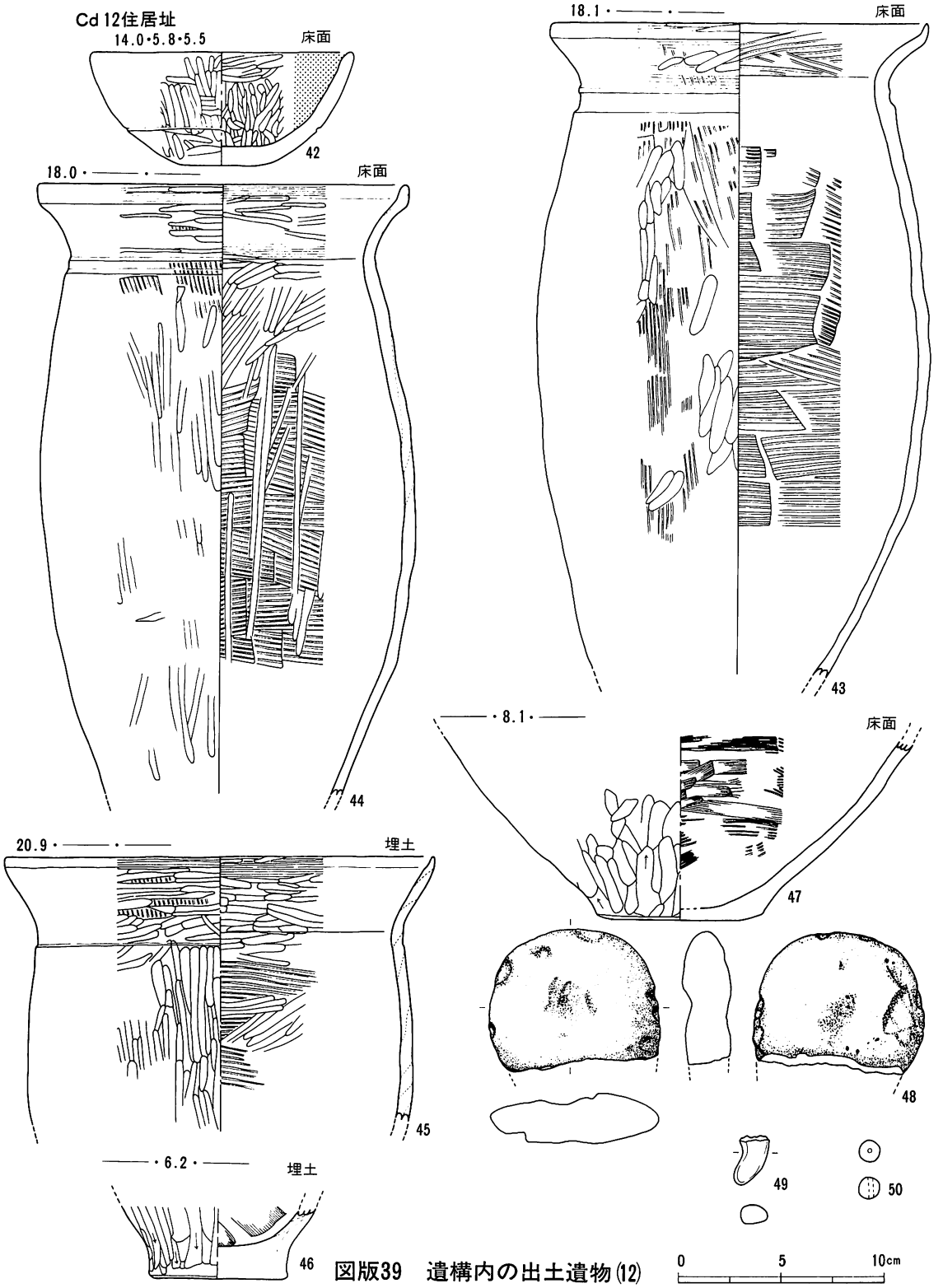
図版36　遺構内の出土遺物(9)



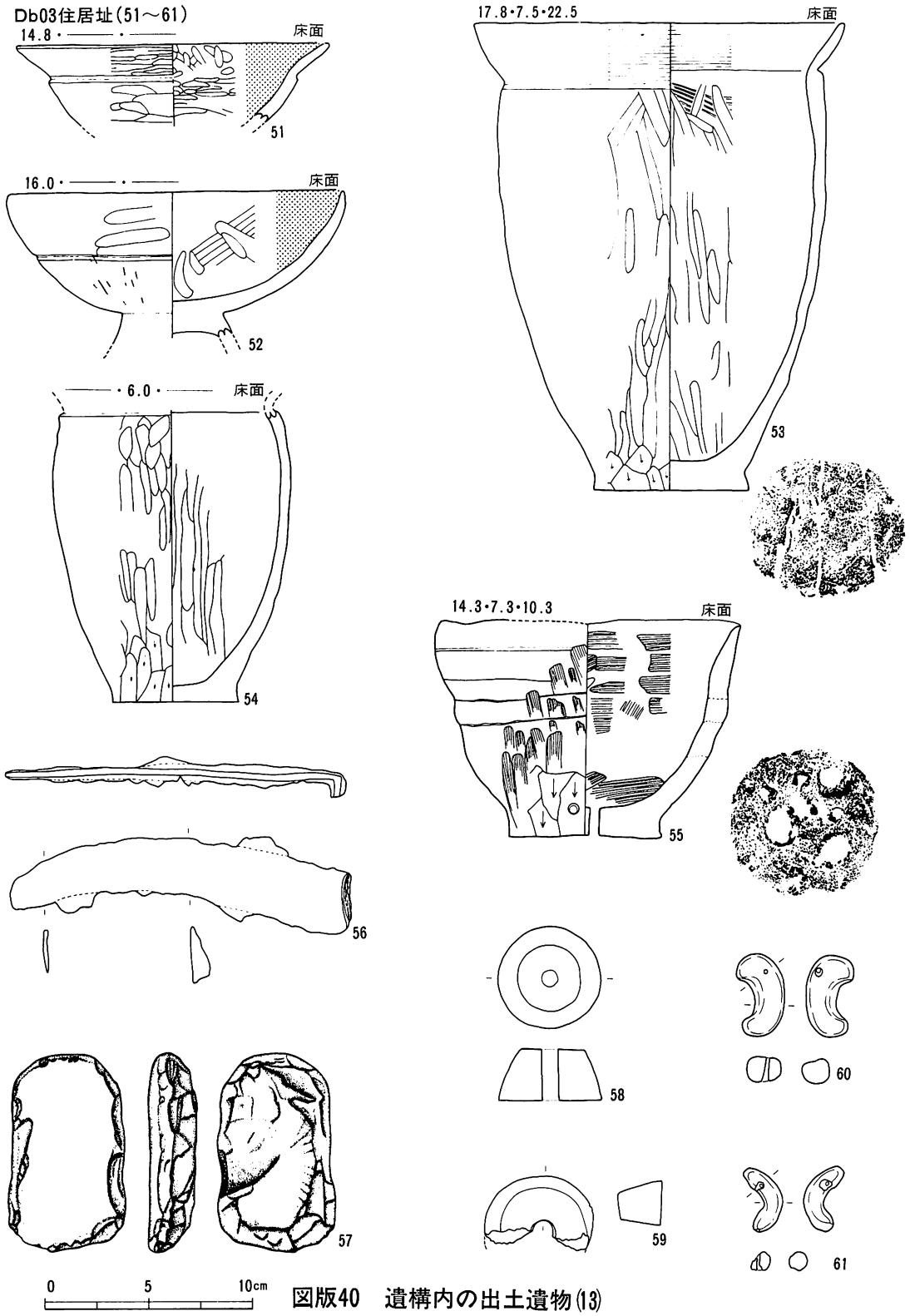
図版37　遺構内の出土遺物(10)



図版38　遺構内の出土遺物(11)

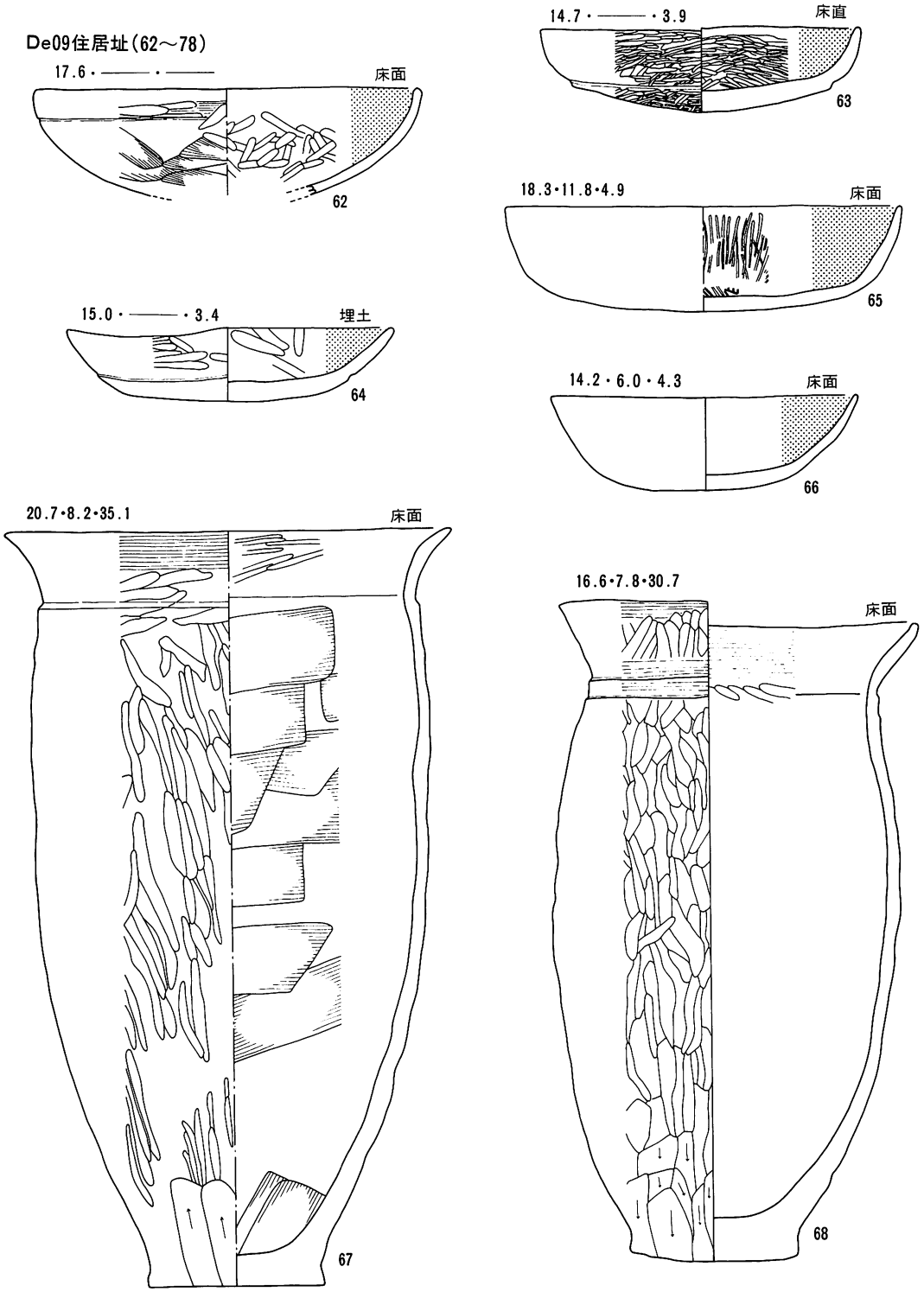


図版39　遺構内の出土遺物(12)



図版40　遺構内の出土遺物(13)

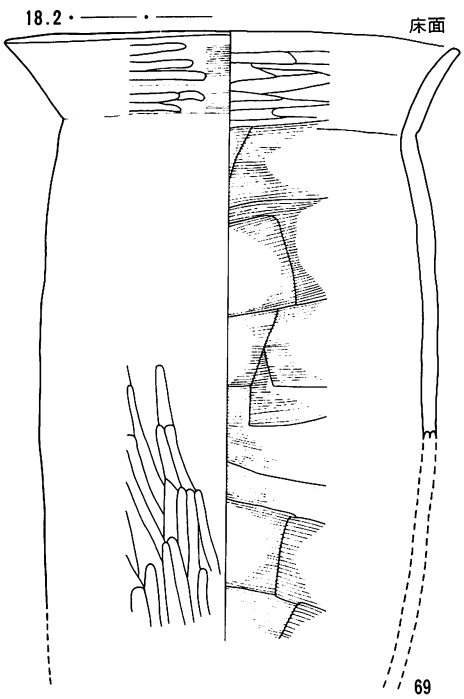
De09住居址(62～78)

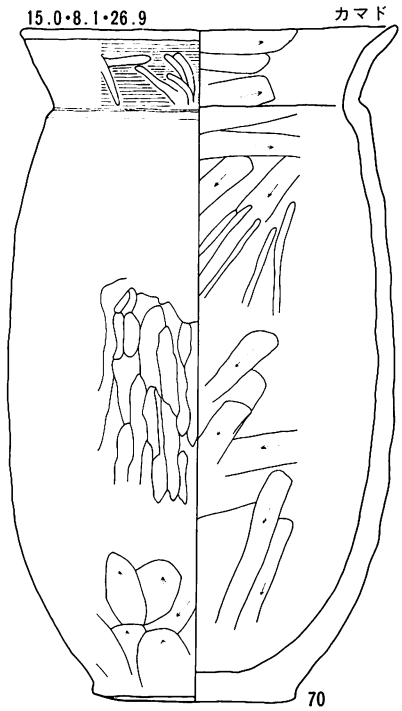


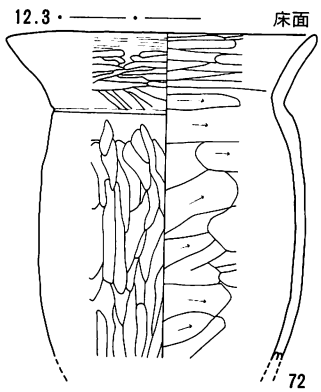
図版41　遺構内の出土遺物(14)

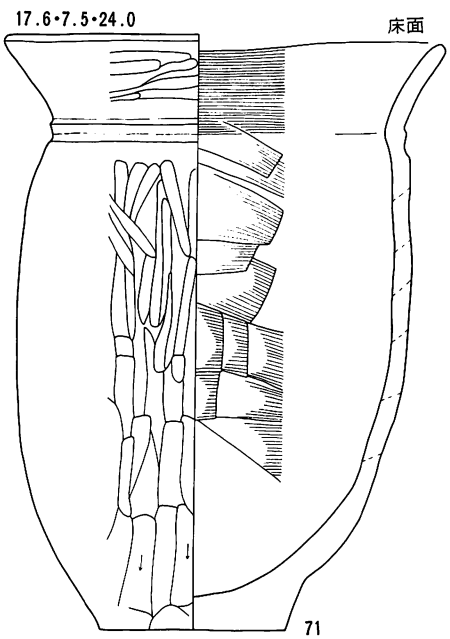
0　5　10cm

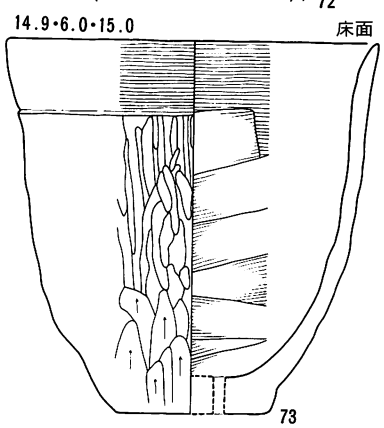
De09住居址





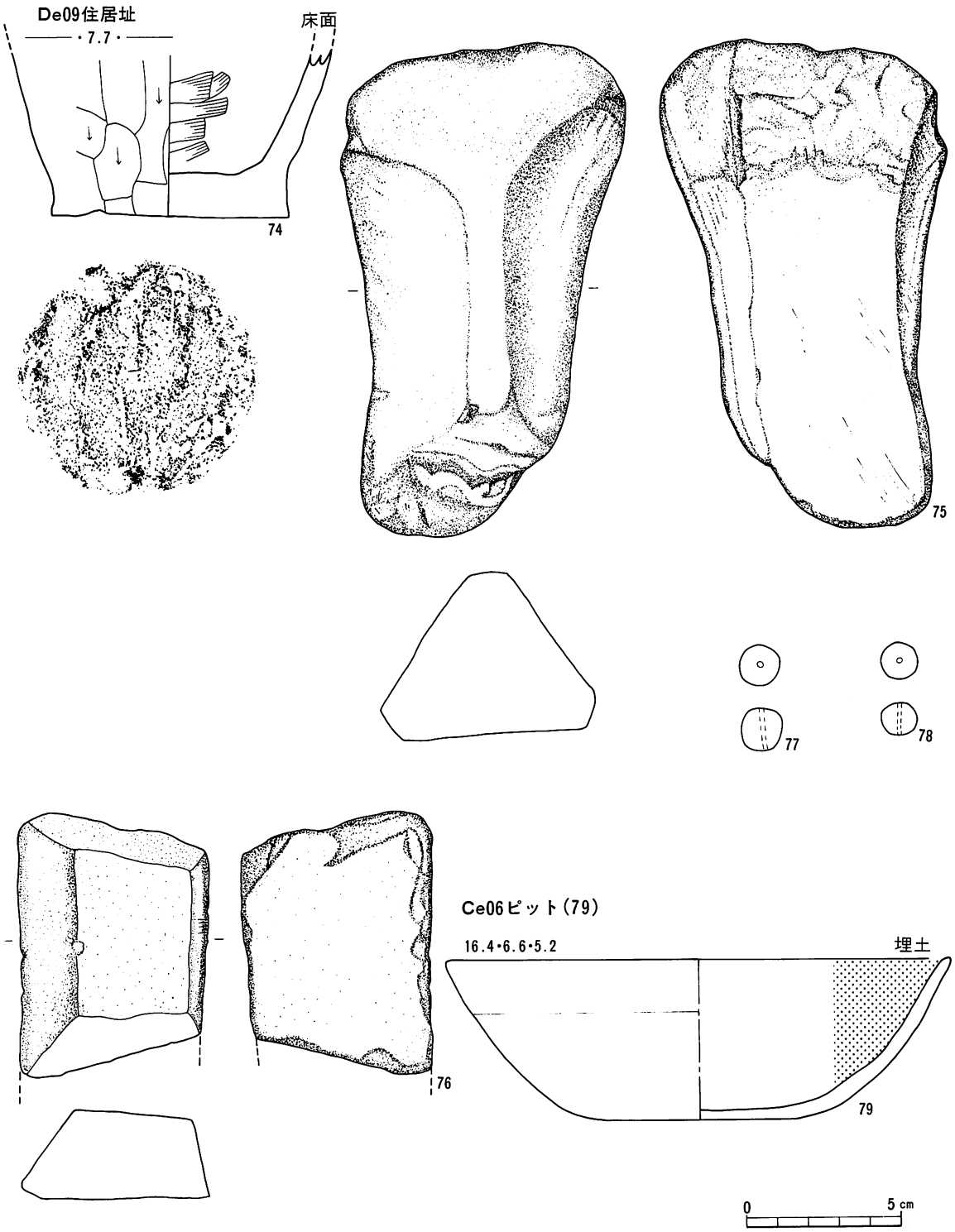






図版42　遺構内の出土遺物(15)

0　5　10cm



図版43　遺構内の出土遺物(16)

2．遺構外の出土遺物

長瀬A遺跡の遺構外の出土遺物は、土器、石器、土製品からなる。出土した土器は縄文土器だけである。石器としては、石槍・石鏃・石匙・箆状石器・スクレイパー・不定形石器・使用痕のある剝片・石斧・凹石・磨石・石錘が出土している。土製品としては円盤状土製品が出土している。以下にこれらの出土遺物について述べる。但し出土層位が不明なものや表採資料などは記述の対象から除外した。

（1）土　器

①　原始時代

〔1〕縄文土器

長瀬A遺跡の遺構外から出土した縄文土器は、第Ⅰ群土器・第II群土器・第IV群土器に属する土器である。

1）第Ⅰ群土器（図版44―2～21・写真図版48―2～21）

この群に属する土器はIV層下位から出土したもので、文様上の特徴により次のように分けられる。

A．貝殻腹縁の圧痕文によって幾何学的な文様が施文されているもの（2～12）

2～12の文様は、基本的には貝殻腹縁およびヘラ状工具の先端部によって施文された平行沈線文とこの平行沈線文によって区画された地に施文された貝殻腹縁文とで構成されている。平行沈線文は直線的・曲線的に施文されており、貝殻腹縁文は羽状・刻目状に施文されている。2・4の口唇部上面にはヘラ状工具によって刻目が施されている。いずれも胎土に金雲母と粗粒の砂が含まれているが、繊維の混入は全くみられない。内面にはミガキあるいはナデの調整が施されている。色調はにぶい黄橙色または暗褐色を示す。

B．竹管によって幾何学的な文様が施文されているもの（13～20）

13～20には半截竹管の刺突によって、波状・羽状・渦巻状を呈する文様が施文されている。13～15の口唇部上面にはヘラ状工具によって刻目が施されている。いずれも内面の調整が入念なミガキで、胎土に繊維が少量含まれている。色調はにぶい橙色または灰褐色を示す。

C．斜縄文が施文されているもの（21）

21の斜縄文はＬＲの単節である。胎土に繊維が多く含まれている。色調はにぶい橙色を示す。

2）**第II群土器**（図版45—22～30・写真図版49—22～30）

この群に属する土器はIV層上位から出土したもので、施文方法の違いによって次のように分けられる。なおいずれもその胎土に多量の繊維が含まれている。色調はにぶい橙色～褐灰色を示す。

A．撚り方の異なる原体によって羽状縄文が施文されているもの（25～30）

30の口唇部には割箸状の工具によって刺突文が施されている。

B．原体の回転方向を変えて施文された斜行縄文が羽状を呈するもの（22～24）

22・23は条間の稜が明瞭であるのに対して節が不明瞭である。

3）**第IV群土器**（図版44—1、45—31～45・写真図版48—1、49—31～45）

この群に属する土器はII層下位から出土したもので、文様上の特徴により次のように分けられる。色調は橙色～にぶい橙色を示す。

A．貼付による垂下文が施文されているもの（31）

31の波状口縁の頂部には小指状の貼付がみられる。外面にススが少量付着している。

B．帯状の磨消縄文が施文されているもの（32～39）　この類に含まれるものの地文部の縄文には、無節の斜縄文と単節の斜縄文の2つがみられる。前者の斜縄文を地文としているのは、32・33・38・39の4点である。後者の斜縄文を地文としているのは、34・35・36・37の4点である。

C．沈線文が施文されているもの（40～43）

40・41は1本描きの沈線で文様が構成されている。42・43は数本を1単位とする流線状の沈線によって文様が構成されている。43には刺突文が施されている。

D．綾絡文が施文されているもの（44）

E．斜縄文が施文されているもの（1・45）

1は体部上半部に膨らみをもつ土器で、LRLの複節の斜縄文が施文されている。45の斜縄文はLRの単節である。この土器片の胎土には金雲母が微量に含まれている。

4）**土器底部**（図版45—46～48・写真図版49—46～48）

ここでは出土した縄文土器の底部の中で、圧痕文が施されているものだけについて述べる。46・48の底部には網代痕が施されている。これらに使用された網代は経の条に対して緯の条が1本越え1本潜り1本送りの方法で編まれたものである。47は46などと同じ方法で編まれた網代で圧痕が施されているが、その後さらに木葉痕が付加されている。47の胎土には金雲母が微量に含まれている。

（2）石　　器

①　原始時代

〔1〕**石　槍**（図版46―1・写真図版50―1）

出土した石槍は1点（1）でIV層上位から得られている。1は板状のチャート質粘板岩を加工して作られているもので、基部に抉りがみられる。

〔2〕**石　鏃**（図版46―2～6・写真図版50―2～6）

出土した石鏃は5点（2～6）である。それぞれの出土層準は次のとおりである。2はVIa層上位、3はIV層上位、4～6はII層下位である。2は五角形の平面形を呈するもので、尖頭部と基部に比較的細かい剥離調整がみられる。3の平面形は菱形状を呈する。4～6は三角形状の平面形をもち、基部が直線的なものである。6の右側縁部には折断面がみられる。

〔3〕**石　匙**（図版46―7・8・写真図版50―7・8）

出土した石匙は2点（7・8）でII層下位から得られている。7は石器の長軸方向につまみ部が作られており、8は石器の長軸方向に対してやや右側寄りにつまみ部が作られている。8は剝片剝離の作業過程で得られた石匙の形をした剝片に部分的に加工を施して製作されたもので、刃部の先端部に打面・バルブがみられる。

〔4〕**箆状石器**（図版46―9～11・写真図版50―9～11）

出土した石器は3点（9～11）でII層下位から得られている。これらの平面形はそれぞれ次のような形状を呈する。9は三角形状、10・11は五角形状を示す。刃部の加工は、9が背面だけの片面加工、10・11は両面加工となっている。

〔5〕**スクレイパー**（図版47―12～21・写真図版50―12～21）

出土したスクレイパーは10点（12～21）である。これらのスクレイパーは刃部が形成されている位置によって次のように分けられる。

A．石器の長軸を直交する縁辺に刃部が形成されているもの（12～17）

この類に属するスクレイパーの出土層準は、VIa層上位（12）・IV層上位（13～15）・II層下位（16・17）である。15は右側縁部に、また17は頭部にそれぞれ折断面がみられる。

B．石器の長軸に平行する縁辺に刃部が形成されているもの（18～21）

この類に属するスクレイパーの出土層準は、VIa層上位（18）・IV層上位（19・20）・II層下位（21）である。18の背面には自然面が残されている。

〔6〕不定形石器（図版47―22・23・写真図版50―22・23）

出土した不定形石器は2点（22・23）でII層下位から得られている。どちらも石器の長軸に

平行する縁辺の一部分が刃部加工されている。

〔7〕**使用痕のある剝片**（図版48—24～28・写真図版51—24～28）

出土した使用痕のある剝片は5点（24～28）でIV層上位から得られている。いずれも剝片の長軸に平行する側縁部に使用痕が認められるものである。

〔8〕**石　斧**（図版48—29・30・写真図版51—29・30）

出土した石斧は2点（29・30）でII層下位から得られている。どちらも磨製石斧の破片であり、それぞれの残存部位は29が刃部、30が基部である。

〔9〕**凹　石**（図版48—31・32・写真図版51—31・32）

出土した凹石は2点（31・32）でIV層上位から得られている。31は円形、32は楕円形の平面形を呈する。どちらも片面の凹みが深く明瞭なものとなっている。

〔10〕**磨　石**（図版49—33～36・写真図版51—33～36）

出土した磨石は4点（33～36）でIV層上位から得られている。33～35は2分の1ほどが欠損している磨石で、平面形が隅丸長方形状～長楕円形状を呈する。36の平面形は楕円形状を呈する。いずれも側縁部に研磨痕がみられる。なお35には敲打痕も認められる。

〔11〕**石　錘**（図版49—37・写真図版51—37）

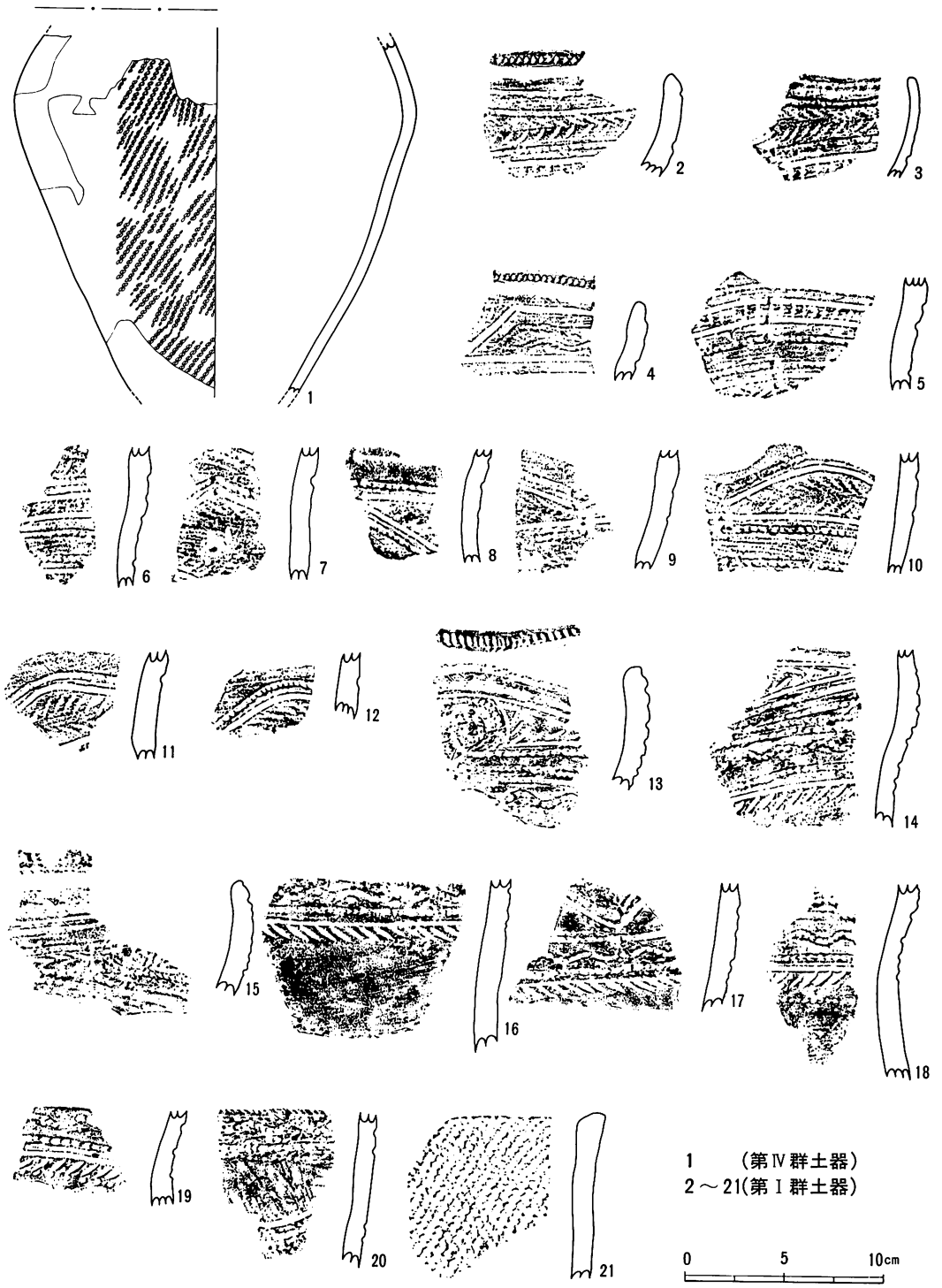
出土した石錘は1点（37）でIV層上位から得られている。37は平面形が楕円形を呈する扁平な硬砂岩の自然礫を素材としており、礫の短軸の両端に打ちかきがみられる。

（3）土製品

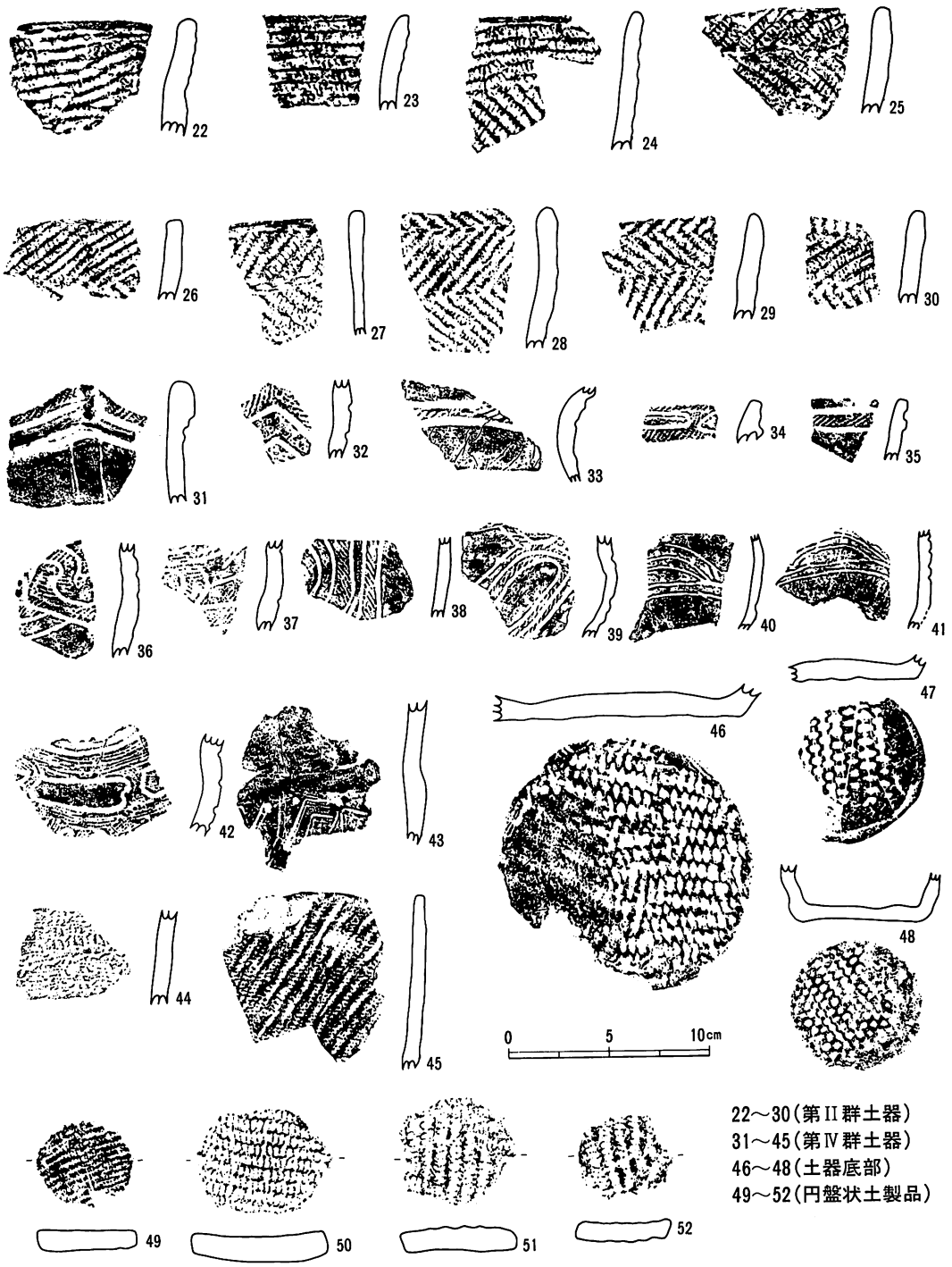
①　原始時代

〔1〕**円盤状土製品**（図版45—49～52・写真図版49—49～52）

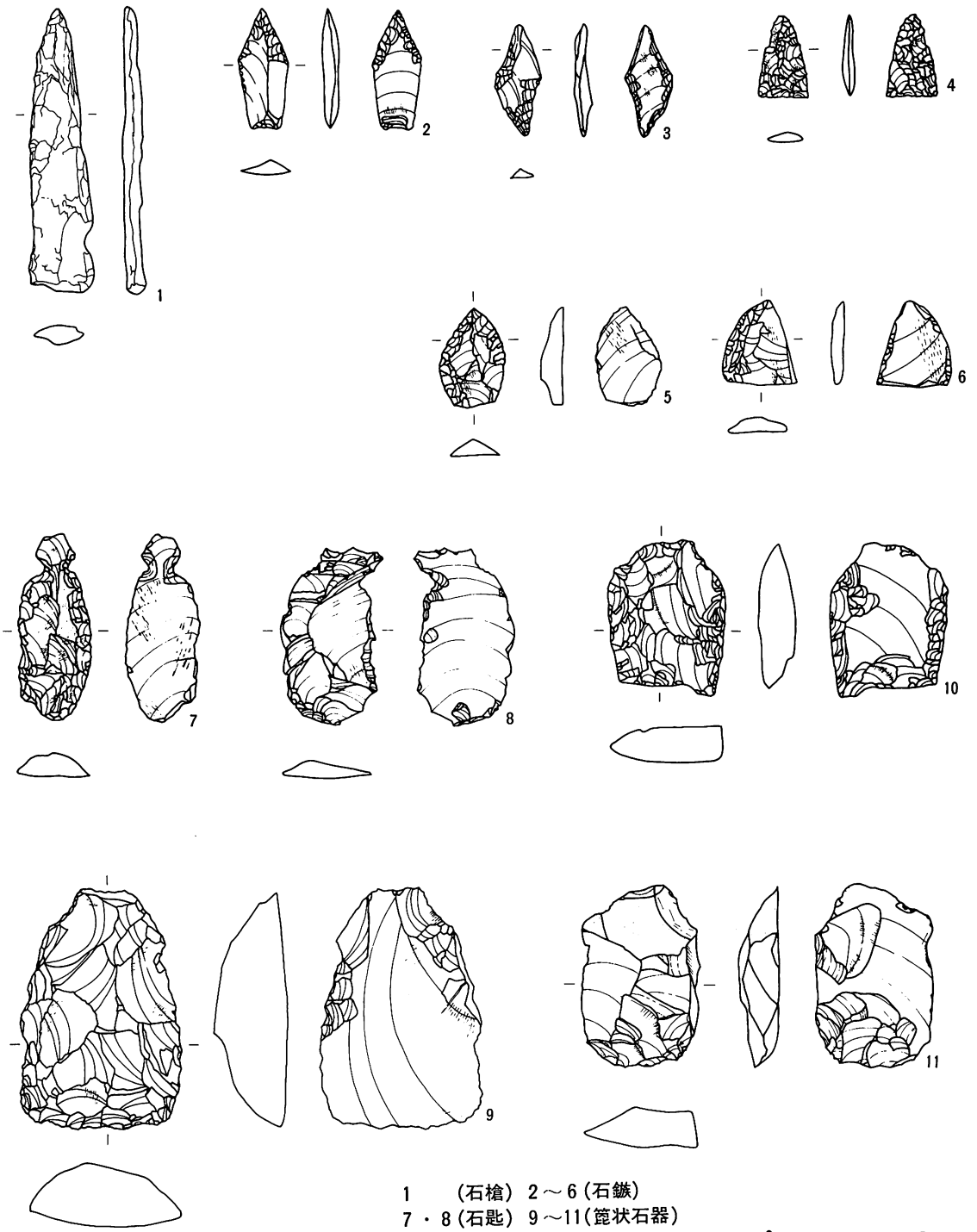
出土した円盤状土製品は4点（49～52）である。出土層準は49・50がII層下位、51・52がIV層上位となっている。49はその周囲が打ちかきの後研磨されているもので、平面形は楕円形を呈する。50～52はその周囲が打ちかかれただけのものである。いずれも平面形が不整な楕円形状を呈し、胎土には繊維が含まれている。但し51の胎土に含まれている繊維は微量である。またこの胎土には極めて微量の金雲母が混入している。



図版44　遺構外の出土遺物(1)



図版45　遺構外の出土遺物(2)

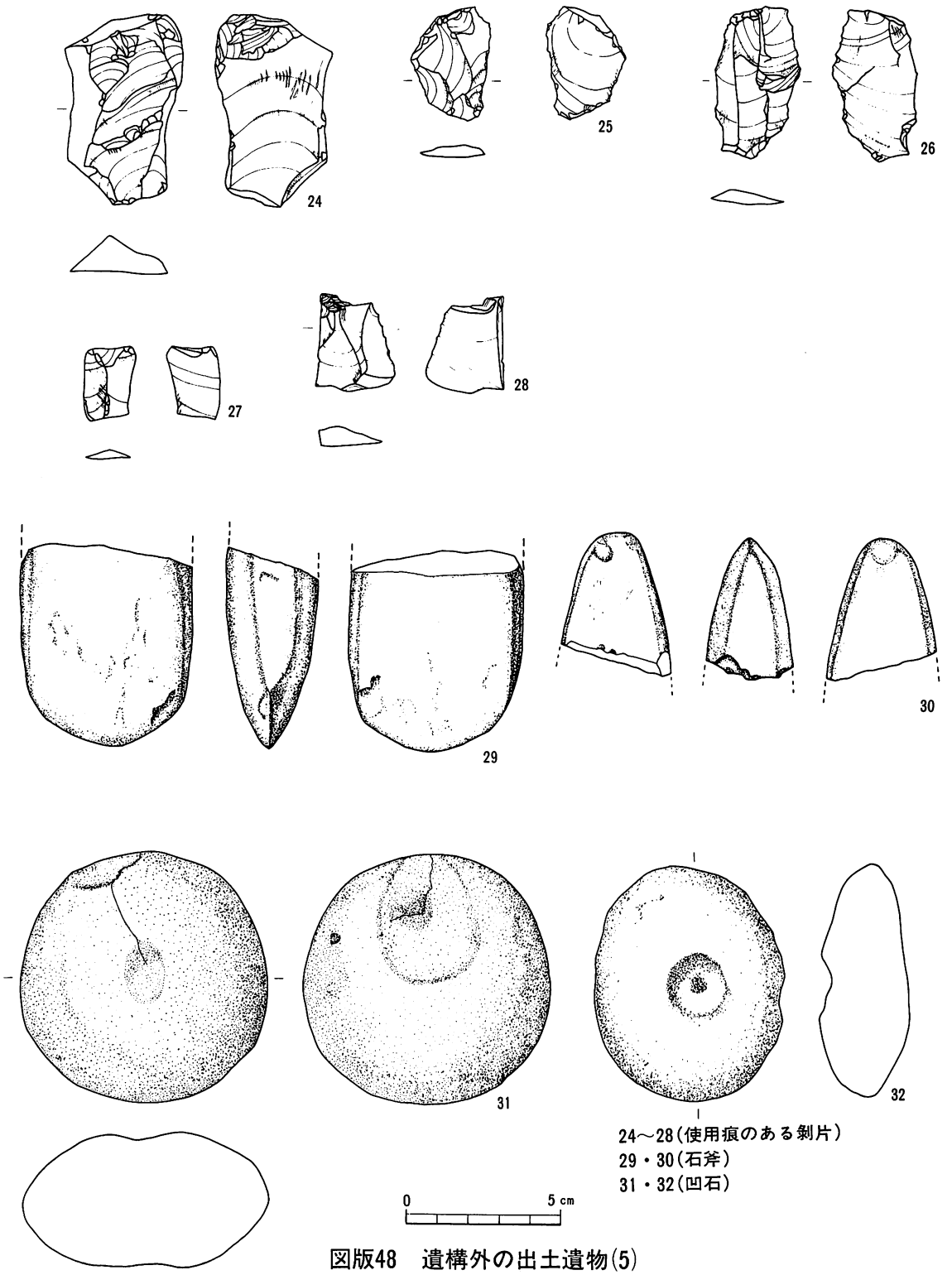


1　（石槍）2～6（石鏃）
7・8（石匙）9～11（箆状石器）

図版46　遺構外の出土遺物(3)

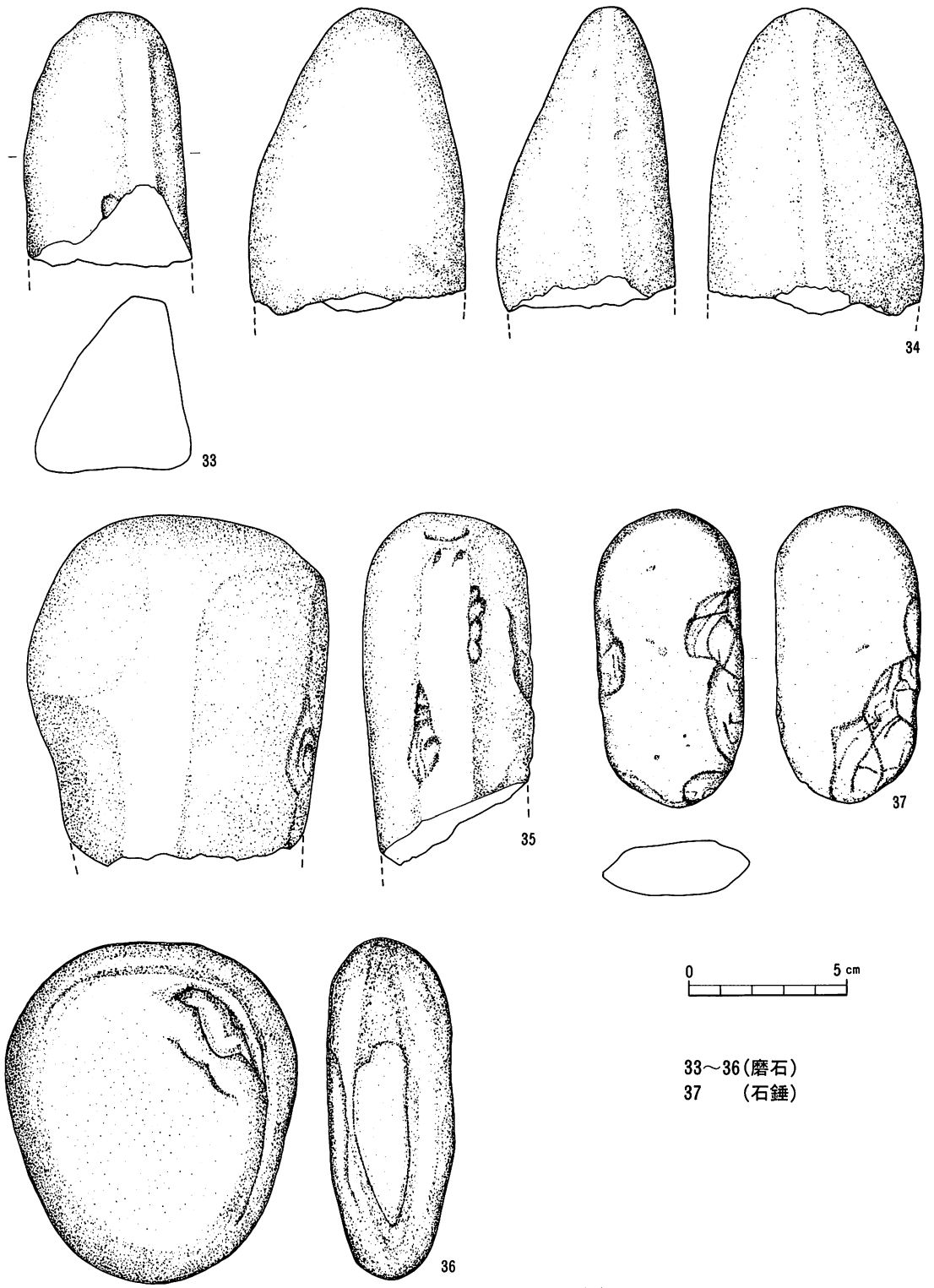
12～21(スクレイパー)
22・23(不定形石器)

図版47　遺構外の出土遺物(4)



24～28(使用痕のある剝片)
29・30(石斧)
31・32(凹石)

図版48　遺構外の出土遺物(5)



33～36(磨石)
37　　(石錘)

図版49　遺構外の出土遺物(6)

表1　長瀬A遺跡出土石器・石製品計測表

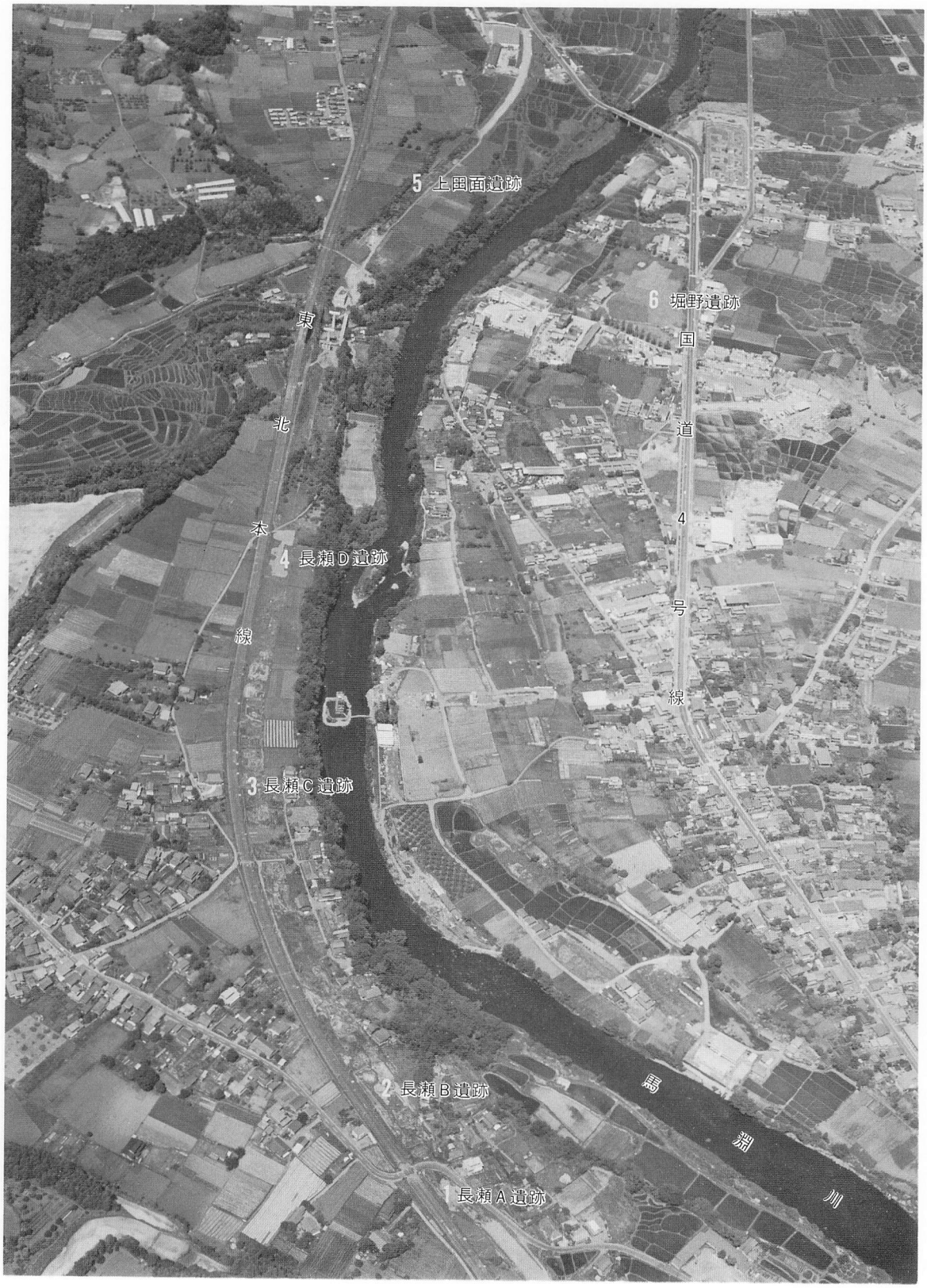
番号	器　　種	出土遺構・地区	図版番号	写真図版番　号	計測値 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　　質	産　　地
1	石　鏃	Df 12住居址	11—17	34—17	1.8	1.3	0.3	0.6	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
2	石　鏃	Df 12住居址	11—18	34—18	2.1	1.6	0.7	1.55	チャート	北上山地、古世界
3	石　鏃	Df 12住居址	11—19	34—19	4.1	1.1	0.4	1.38	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
4	石　匙	Df 12住居址	11—20	34—20	5.9	2.4	0.7	8.06	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
5	石　匙	Df 12住居址	11—21	34—21	3.8	1.6	0.6	2.30	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
6	ピエス・エスキーユ	Df 12住居址	11—22	34—22	2.9	2.6	1.1	8.85	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
7	使用痕のある剝片	Df 12住居址	11—23	34—23	3.7	2.4	0.6	5.55	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
8	使用痕のある剝片	Df 12住居址	11—24	34—24	2.4	1.7	0.2	9.90	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
9	使用痕のある剝片	Df 12住居址	11—25	34—25	1.8	1.7	0.6	0.50	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地、中新統
10	使用痕のある剝片	Df 12住居址	11—26	34—26	2.1	1.3	0.3	0.65	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
11	有孔石製品	Df 12住居址	11—27	34—27	2.6	0.5	0.5	0.8	チャート	北上山地、古生界
12	石　斧	Df 12住居址	12—28	34—28	17.6	7.3	4.8	912.0	輝石安山岩	奥羽山地、新第三系
13	石　鏃	Dj 06住居址	12—31	34—31	2.6	0.8	0.3	0.8	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
14	スクレイパー	Dj 06住居址	12—32	34—32	2.6	1.5	0.8	3.36	玻璃質流紋岩	奥羽山地、中新統
15	スクレイパー	Dj 06住居址	12—33	34—33	7.6	4.4	0.8	28.92	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
16	使用痕のある剝片	Dj 06住居址	13—34	34—34	6.8	4.1	0.5	13.65	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
17	使用痕のある剝片	Dj 06住居址	13—35	34—35	5.2	2.7	0.4	4.06	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
18	使用痕のある剝片	Dj 06住居址	13—36	34—36	4.2	2.3	0.7	7.64	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
19	使用痕のある剝片	Dj 06住居址	13—37	34—37	3.5	2.2	0.6	0.59	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
20	使用痕のある剝片	Dj 06住居址	13—38	34—38	2.4	2.1	0.2	5.49	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
21	使用痕のある剝片	Dj 06住居址	13—39	34—39	1.7	1.3	0.2	2.21	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
22	石　斧	Dj 06住居址	13—40	34—40	10.2	4.7	3.4	230.0	スピライト質凝灰岩	北上山地、古生界
23	台　石	Dj 06住居址	13—41	34—41	47.3	39.1	8.1	—	砂質粗粒凝灰岩	————
24	使用痕のある剝片	Dg 09陥し穴状遺構	15—55	37—55	2.9	1.9	0.4	2.4	硬質泥岩	奥羽山地、中新統

番号	器　　種	出土遺構・地区	図版番号	写真図版番　号	計測値 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　　質	産　　地
25	凹　石	Cd 12住居址	39—48	42—27	6.5	8.3	2.4	171.0	輝石安山岩	奥羽山地、新第三系
26	丸　玉	Cd 12住居址	39—50	42—29	1.0	1.0	1.0	1.25	流紋岩	奥羽山地、中新統
27	石　斧	Db 03住居址	40—57	44—35	9.5	5.5	2.3	205.0	スピライト質凝灰岩	北上山地、古生界
28	勾　玉	Db 03住居址	40—60	44—38	4.0	1.6	1.2	13.6	メノウ	————
29	砥　石	De 09住居址	43—75	47—52	15.3	9.0	6.9	790.0	玻璃質流紋岩	奥羽山地、中新統
30	砥　石	De 09住居址	43—76	47—53	8.5	6.1	2.9	215.0	凝灰質細粒砂岩	北上山地、古生界
31	石　槍	Cc ～Cg —Ⅳ	46— 1	50— 1	8.8	2.0	0.6	13.9	チャート質粘板岩	北上山地、古生界
32	石　鏃	Be 06—Ⅵa	46— 2	50— 2	3.7	1.5	0.5	2.1	玻璃質流紋岩	奥羽山地、中新統
33	石　鏃	Cc ～Cg —Ⅳ	46— 3	50— 3	3.4	1.4	0.4	1.06	玻璃質流紋岩	奥羽山地、中新統
34	石　鏃	Cd 18—Ⅱ	46— 4	50— 4	2.6	1.5	0.3	1.55	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
35	石　鏃	Dh 03—Ⅱ	46— 5	50— 5	3.1	2.0	0.7	4.03	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
36	石　鏃	Ch 09—Ⅱ	46— 6	50— 6	2.7	2.3	0.4	3.67	輝緑凝灰岩	北上山地、古生界
37	石　匙	Cj 12—Ⅱ	46— 7	50— 7	5.8	2.2	0.7	7.40	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
38	石　匙	Dg 03—Ⅱ	46— 8	50— 8	5.5	2.9	0.5	11.76	チャート	北上山地、古生界
39	箆状石器	Cc 09—Ⅱ	46— 9	50— 9	7.4	4.9	2.3	84.0	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
40	箆状石器	Bb 15—Ⅱ	46—10	50—10	4.4	3.6	1.2	21.0	凝灰質硬質泥岩	奥羽山地、中新統
41	箆状石器	Cg 09—Ⅱ	46—11	50—11	5.6	3.6	1.2	27.05	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
42	スクレイパー	Bd 18—Ⅵa	47—12	50—12	5.1	3.1	1.0	21.15	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
43	スクレイパー	Bh 03—Ⅳ	47—13	50—13	4.2	2.7	0.7	9.03	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
44	スクレイパー	Bh 03—Ⅳ	47—14	50—14	2.9	2.7	0.6	9.0	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
45	スクレイパー	Cc ～Cg —Ⅳ	47—15	50—15	2.3	1.5	0.6	6.5	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
46	スクレイパー	Bd 12—Ⅱ	47—16	50—16	2.1	2.5	1.2	6.6	凝灰質硬質泥岩	奥羽山地、中新統
47	スクレイパー	Cb 18—Ⅱ	47—17	50—17	3.2	3.8	1.2	17.85	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
48	スクレイパー	Bd 18—Ⅵa	47—18	50—18	4.6	2.1	0.6	6.85	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
49	スクレイパー	Cc ～Cg —Ⅳ	47—19	50—19	2.9	3.3	0.5	5.09	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
50	スクレイパー	Ci 03—Ⅳ	47—20	50—20	4.0	2.4	0.5	6.30	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
51	スクレイパー	Bg 09—Ⅱ	47—21	50—21	8.3	5.3	1.1	59.1	チャート	北上山地、古生界

番号	器　　種	出土遺構・地区	図版番号	写真図版番　号	計測値 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　　質	産　　地
52	不定形石器	Cb 03—II	47—22	50—22	5.7	4.0	0.8	23.93	玻璃質流紋岩	奥羽山地、中新統
53	不定形石器	Ce 15—II	47—23	50—23	2.5	2.0	0.4	2.44	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
54	剥片石器	Dh 03—IV	48—24	51—24	6.0	3.5	1.2	28.30	チャート	北上山地、古生界
55	剥片石器	Bh 03—IV	48—25	51—25	3.6	2.4	0.4	4.03	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
56	剥片石器	Cc ～Cg —IV	48—26	51—26	4.9	2.7	0.4	5.01	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
57	剥片石器	Cc ～Cg —IV	48—27	51—27	2.4	1.6	0.3	1.6	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
58	剥片石器	Cc ～Cg —IV	48—28	51—28	2.9	2.5	0.6	4.35	硬質泥岩	奥羽山地、中新統
59	石　斧	Df 12—II	48—29	51—29	6.3	5.5	2.9	152.0	角閃石玢岩	北上山地、古生界
60	石　斧	Df 06—II	48—30	51—30	4.3	3.5	2.8	60.0	角閃石玢岩	北上山地、古生界
61	凹　石	Cc ～Cg —IV	48—31	51—31	8.0	7.9	4.3	342.0	輝石安山岩	新期火山、第四系
62	凹　石	Cc ～Cg —IV	48—32	51—32	7.5	5.9	2.9	180.0	輝石安山岩	奥羽山地、新第三系
63	磨　石	Cc ～Cg —IV	49—33	51—33	8.0	5.1	5.4	340.0	輝石安山岩	奥羽山地、新第三系
64	磨　石	Df 03—IV	49—34	51—34	9.6	6.8	5.6	382.0	輝石安山岩	新期火山、第四系
65	磨　石	Cc ～Cg —IV	49—35	51—35	10.8	9.4	5.3	700.0	輝石安山岩	奥羽山地、新第三系
66	磨　石	Cc ～Cg —IV	49—36	51—36	10.7	9.1	4.0	567.0	角閃石安山岩	奥羽山地、新第三系
67	石　錘	Cd 12—IV	49—37	51—37	9.3	4.6	1.7	110.0	硬砂岩(グレイワッチ)	北上山地、古生界

表 2　長瀬A遺跡円盤状土製品計測表

番号	出土遺構・地区	図版番号	写真図版番　号	計測値 長軸長×短軸長(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)
1	Bg 09陥し穴状遺構	15—54	37—54	3.4×3.1	0.8	9.4
2	Df 12—II	45—49	49—49	4.2×4.8	0.8	21.3
3	Dh 06—II	45—50	49—50	6.7×5.2	0.9	39.0
4	Da 09—IV	45—51	49—51	6.0×5.2	0.8	29.9
5	Cc ～Cg —IV	45—52	49—52	4.7×3.9	0.7	17.8

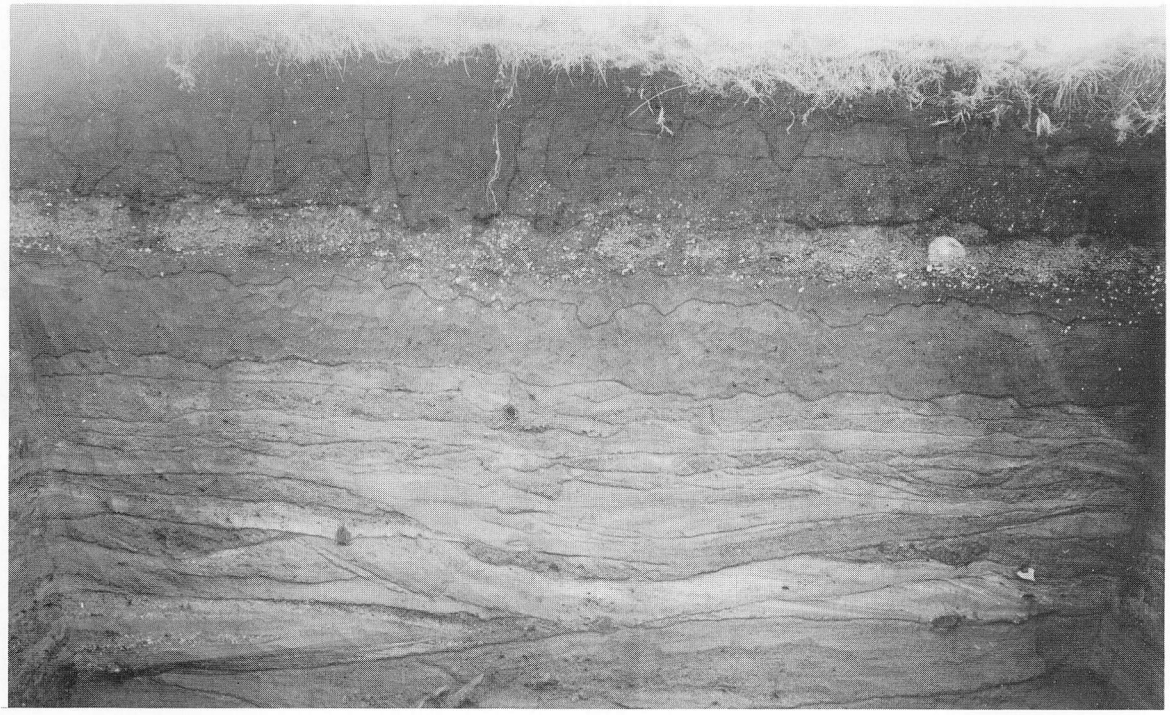


遺跡周辺の航空写真

写真図版 1

検出遺構群

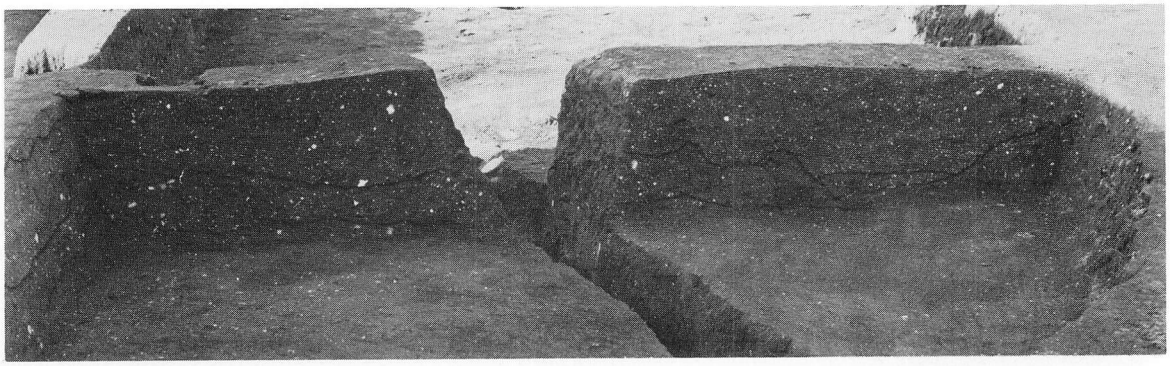
写真図版 2



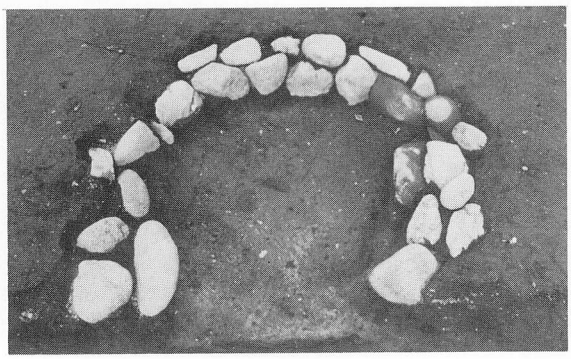
a. 深掘り土層断面

b. Df12住居址

写真図版 3

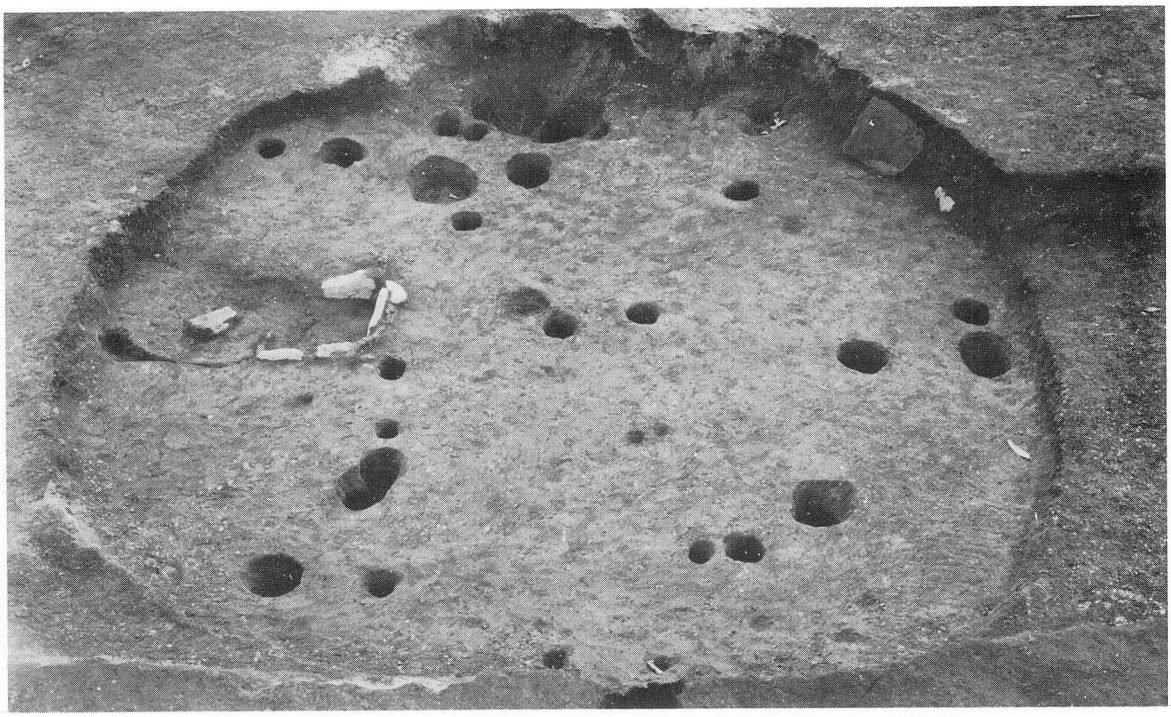


a. Df12住居址（土層断面）



b. Df12住居址炉

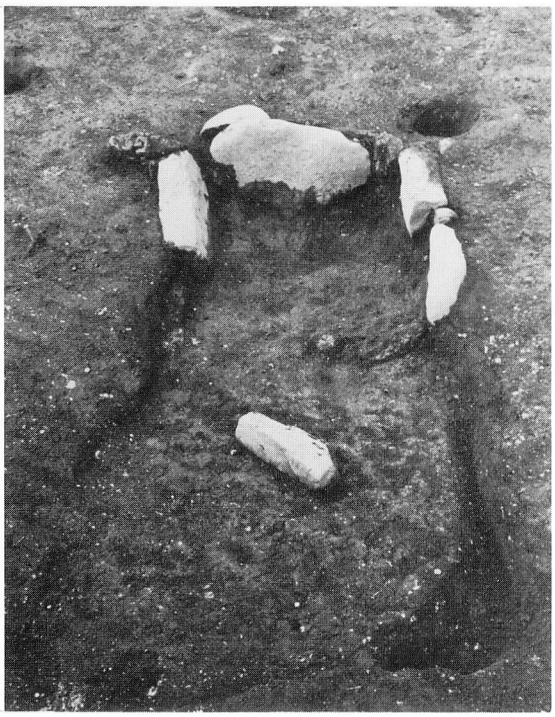
c. Df12住居址P_{10}（土器出土状況）



d. Dj06住居址

写真図版 4

a. Dj06住居址（土層断面）

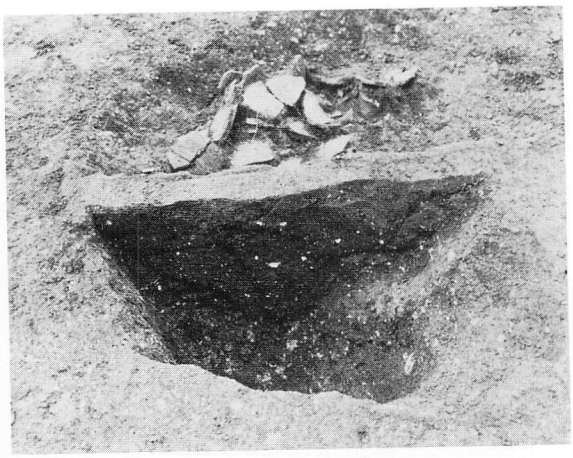


b. Dj06住居址炉

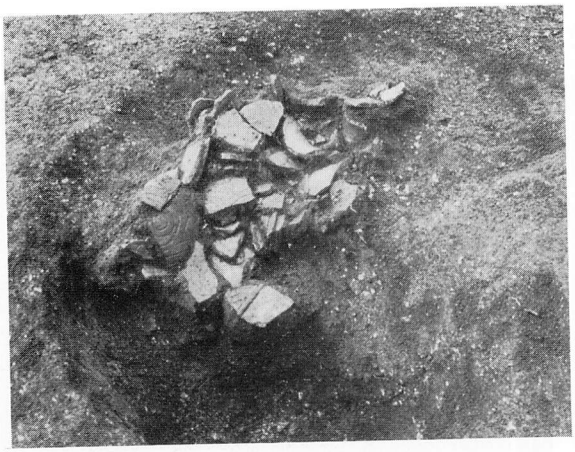
c. Dj06住居址（土器出土状況）

写真図版 5

a. Cg09ピット

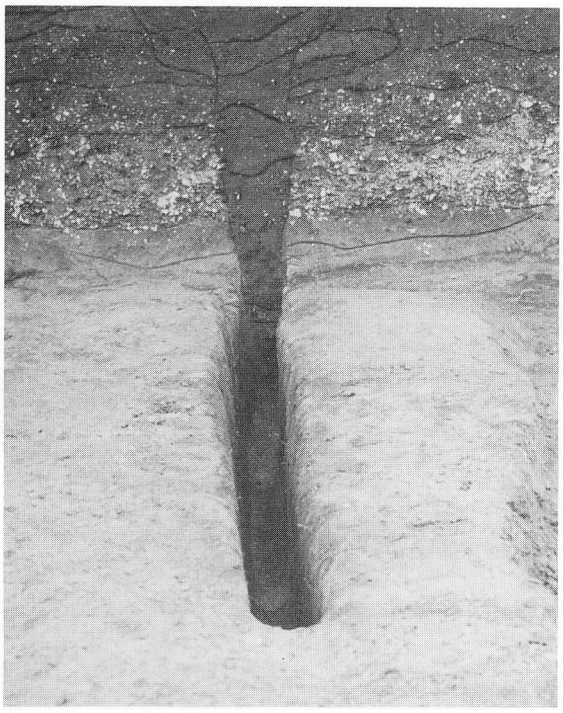


b. Cg09ピット（土層断面）

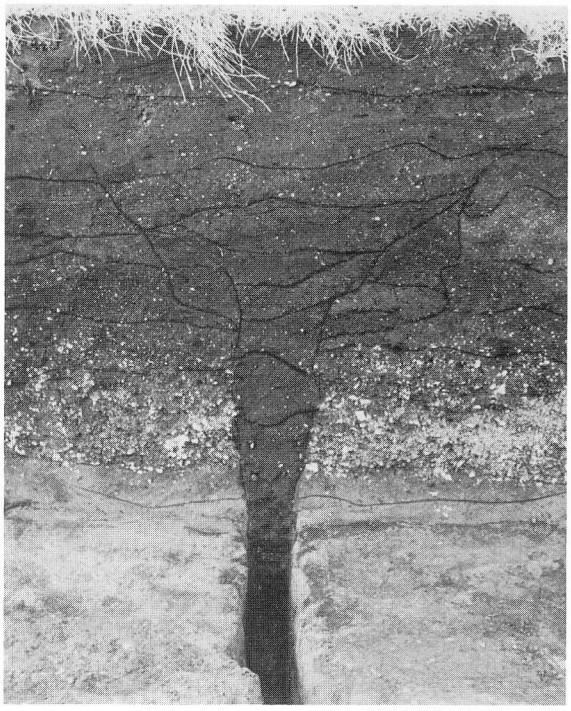


c. Cg09ピット（土器出土状況）

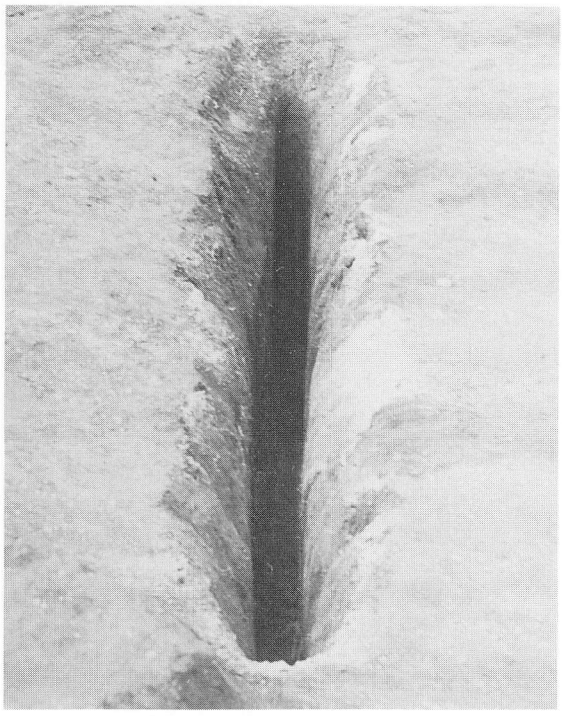
写真図版 6



a. Bc18陥し穴状遺構



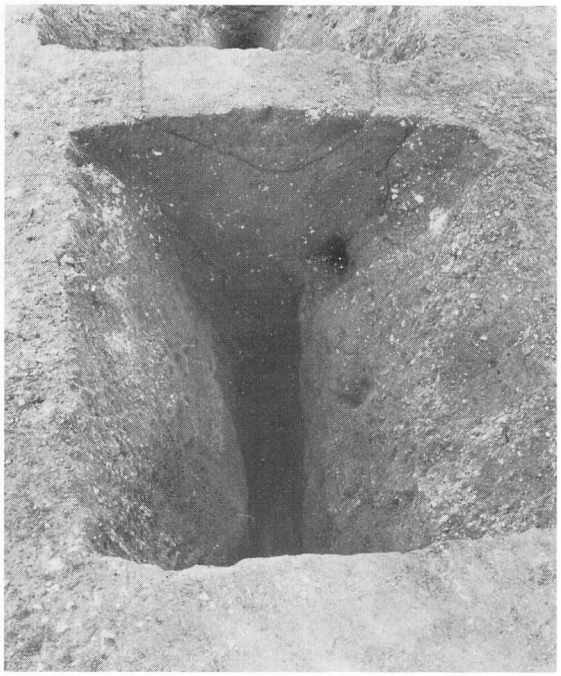
b. Bc18陥し穴状遺構（土層断面）



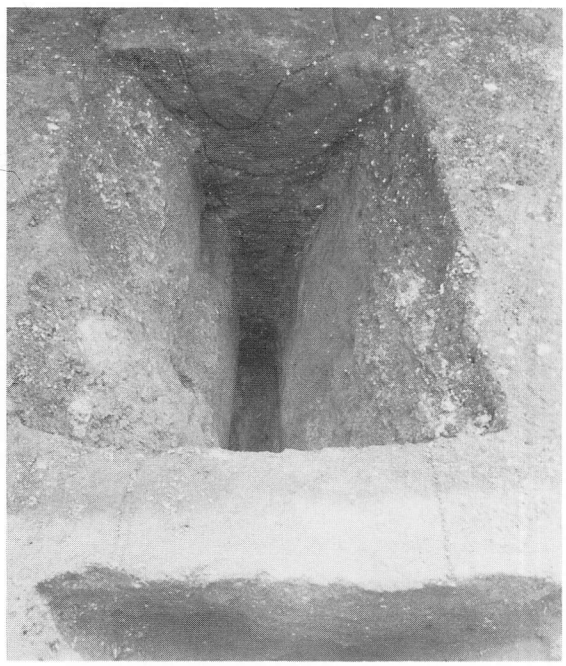
c. Ca15陥し穴状遺構

写真図版 7

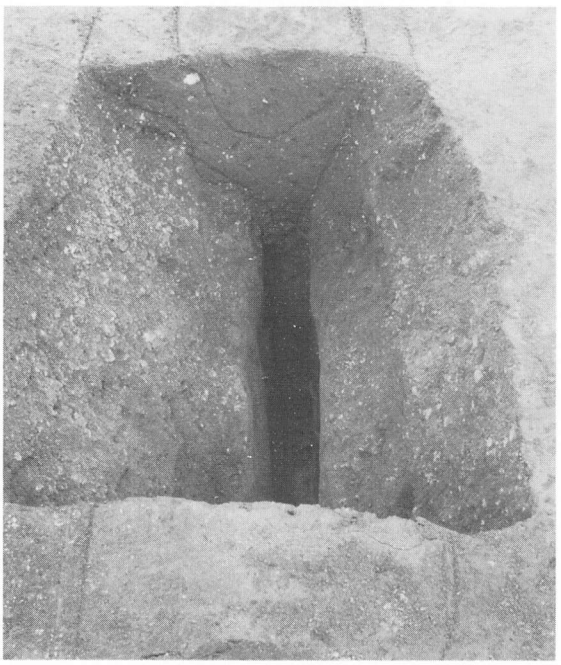
a. Da03陥し穴状遺構



b. Da03陥し穴状遺構（土層断面）



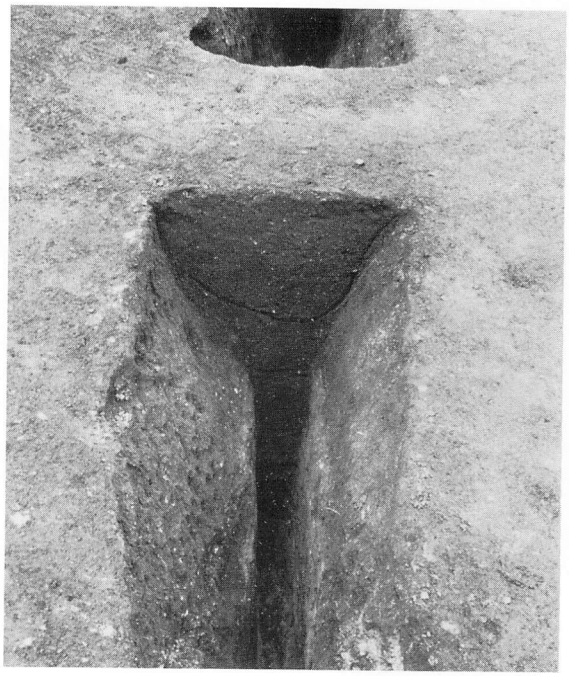
c. Da03陥し穴状遺構（土層断面）



d. Da03陥し穴状遺構（土層断面）

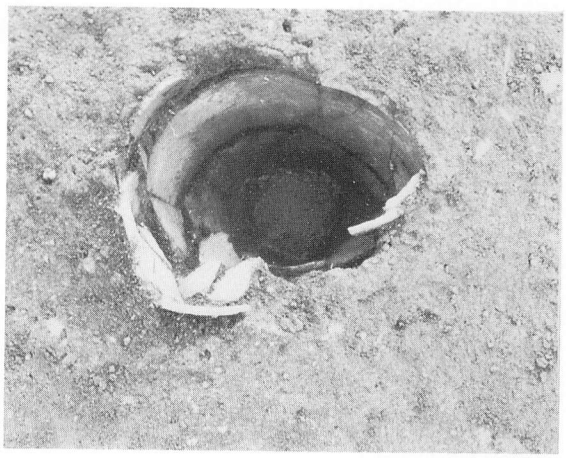
写真図版 8

a. Dg09陥し穴状遺構



b. Dg09陥し穴状遺構（土層断面）

c. Dg09陥し穴状遺構（土層断面）



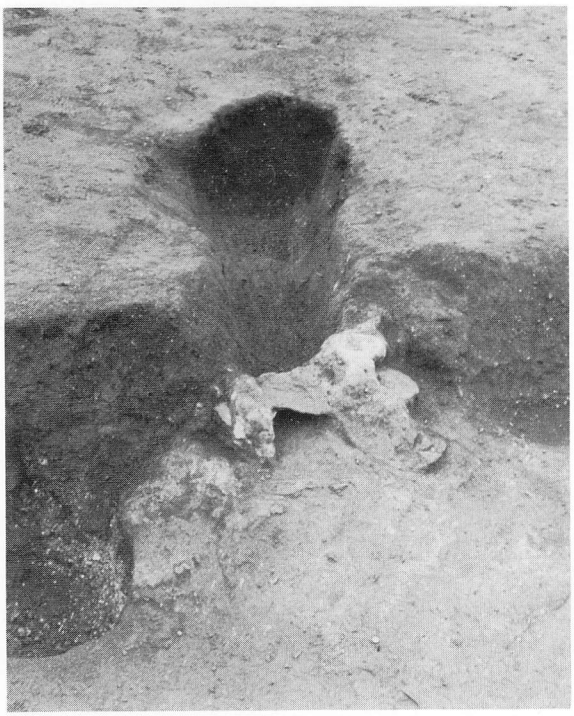
写真図版 9

a. Bb06住居址

b. Bb06住居址（土層断面）

写真図版10

a. Bb06住居址（土層断面）

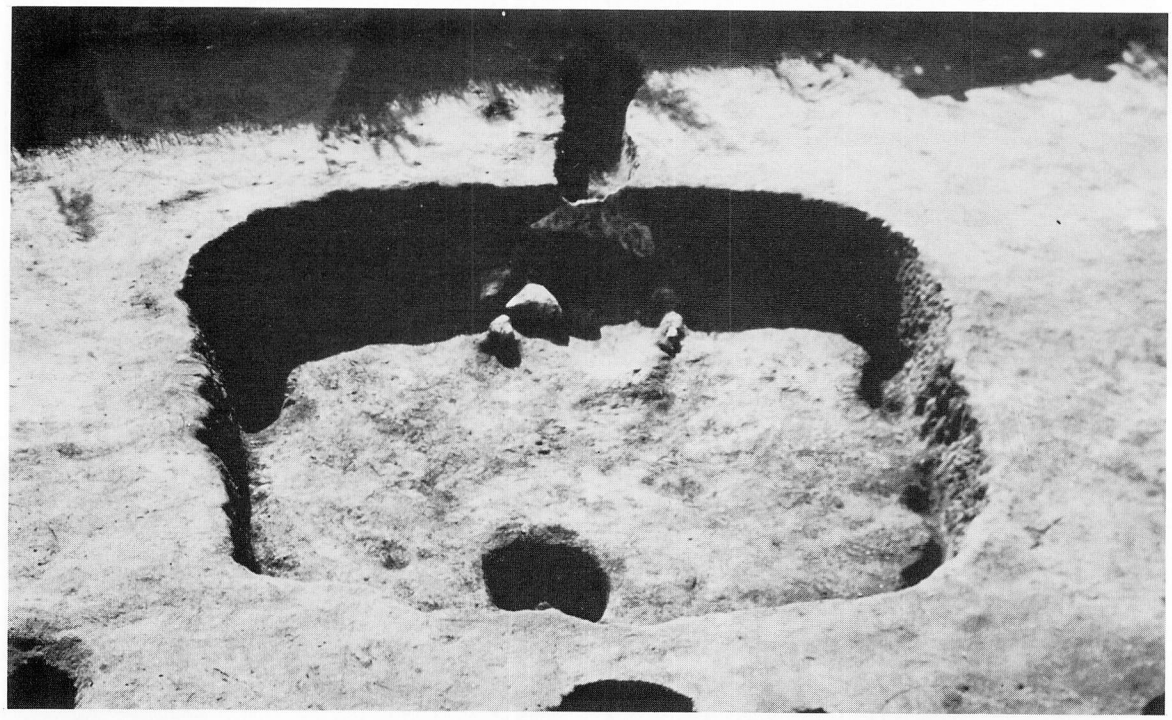


b. Bb06住居址カマド

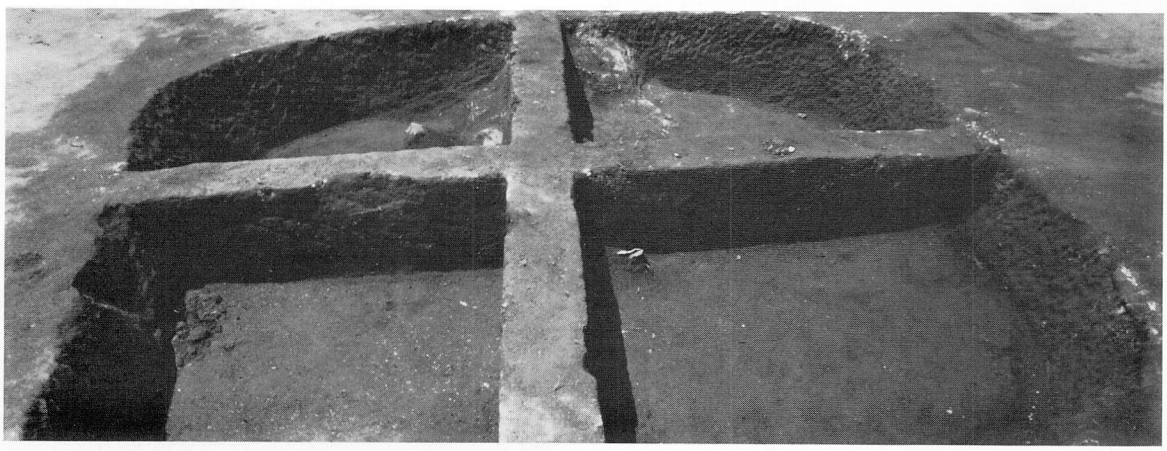
c. Bb06住居址（土器出土状況）

d. Bb06住居址（土器出土状況）

写真図版11

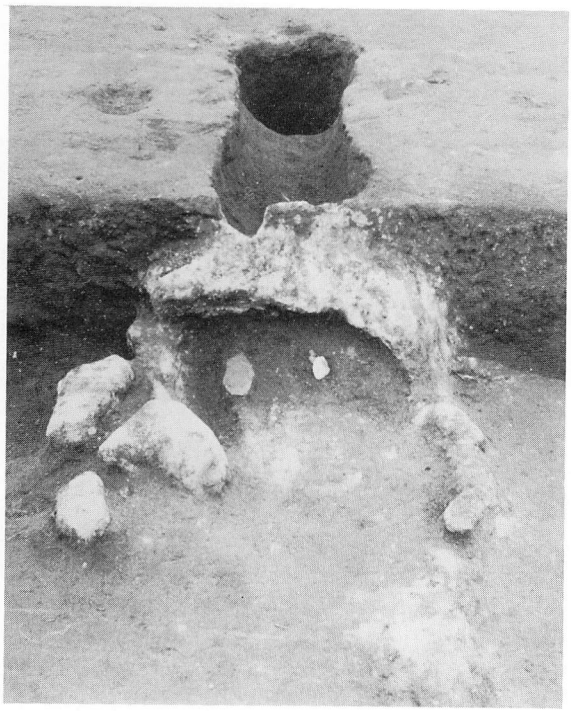


a. Bb18住居址

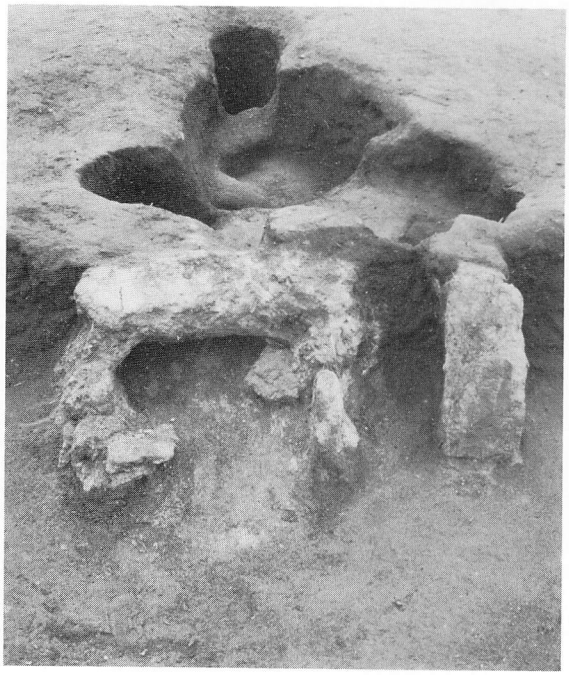


b. Bb18住居址（土層断面）

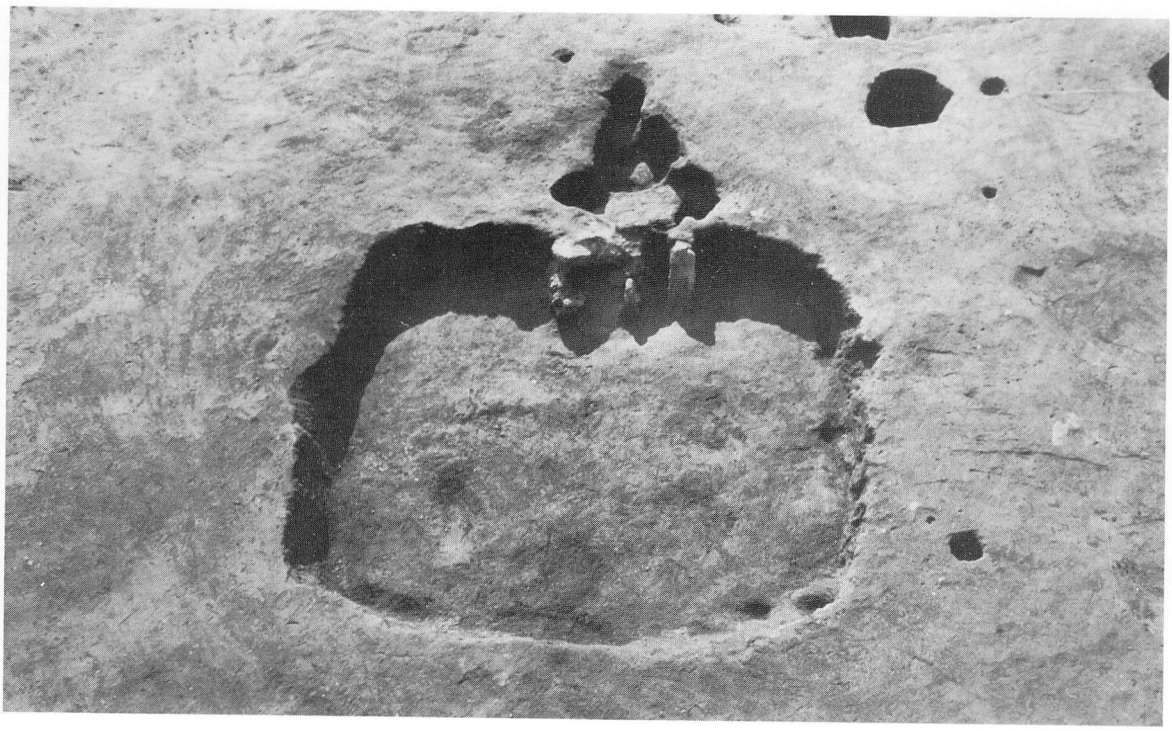
写真図版12



a. Bb18住居址カマド



b. Bc12住居址カマド

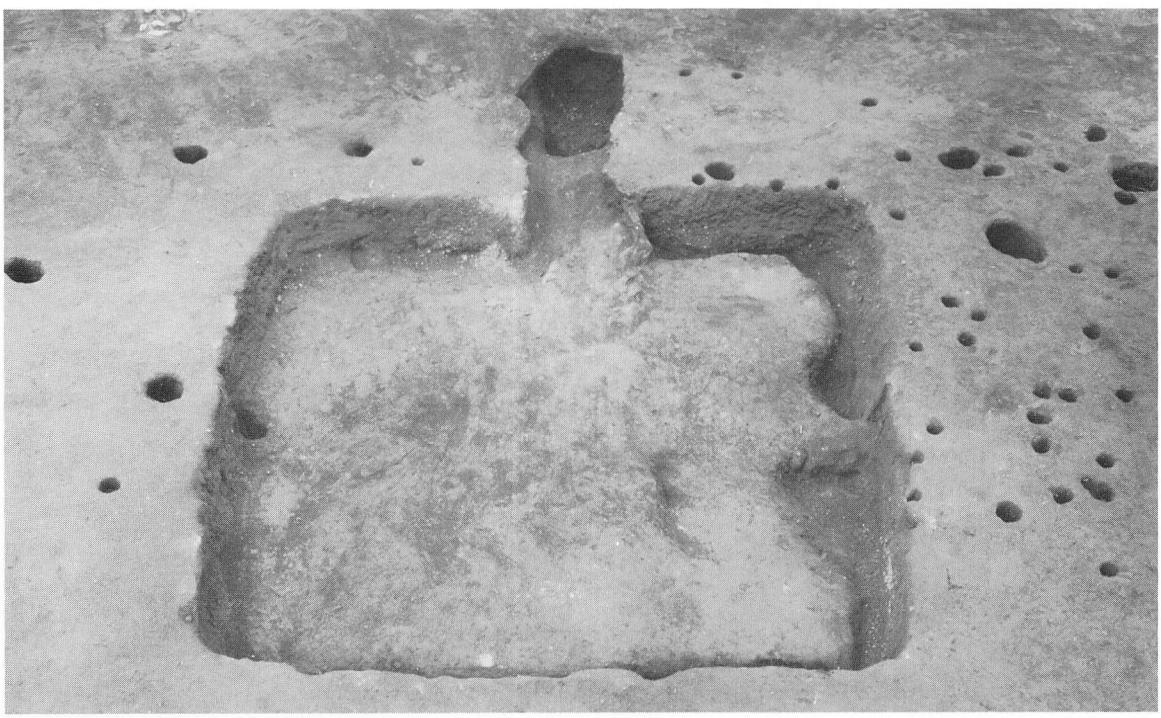


c. Bc12住居址

写真図版13

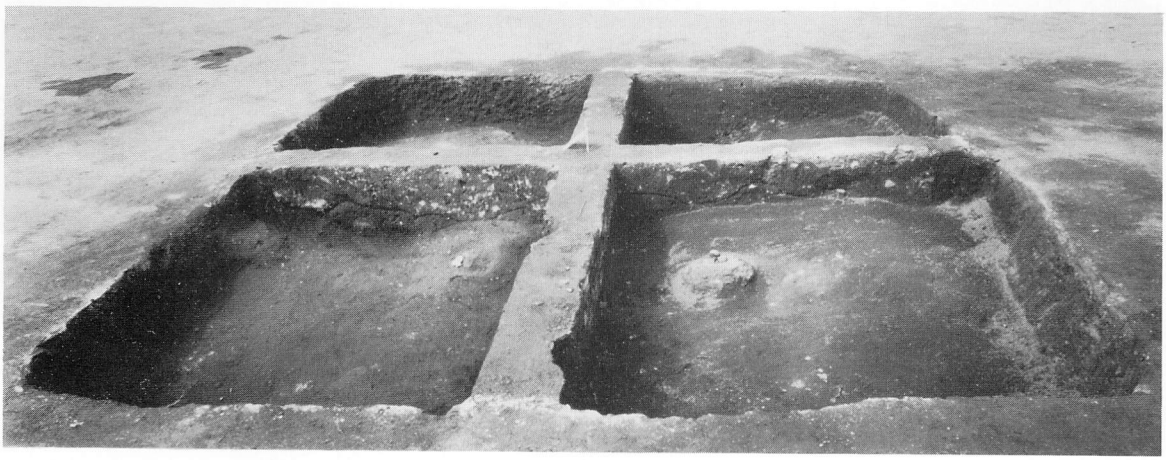
a. Bc12住居址（炭化材出土状況）

b. Bc12住居址（紡錘車出土状況）



c. Bf15住居址

写真図版14

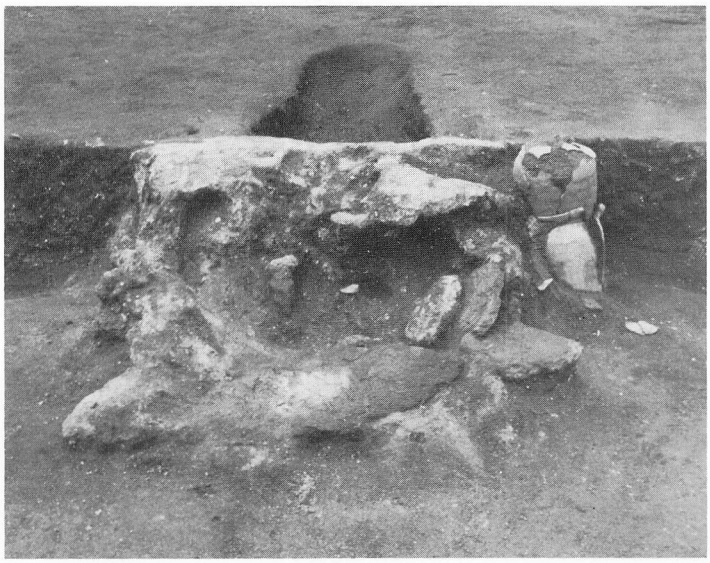


a. Bf15住居址（土層断面）

b. Bj03住居址

写真図版15

a. Bj03住居址（土層断面）

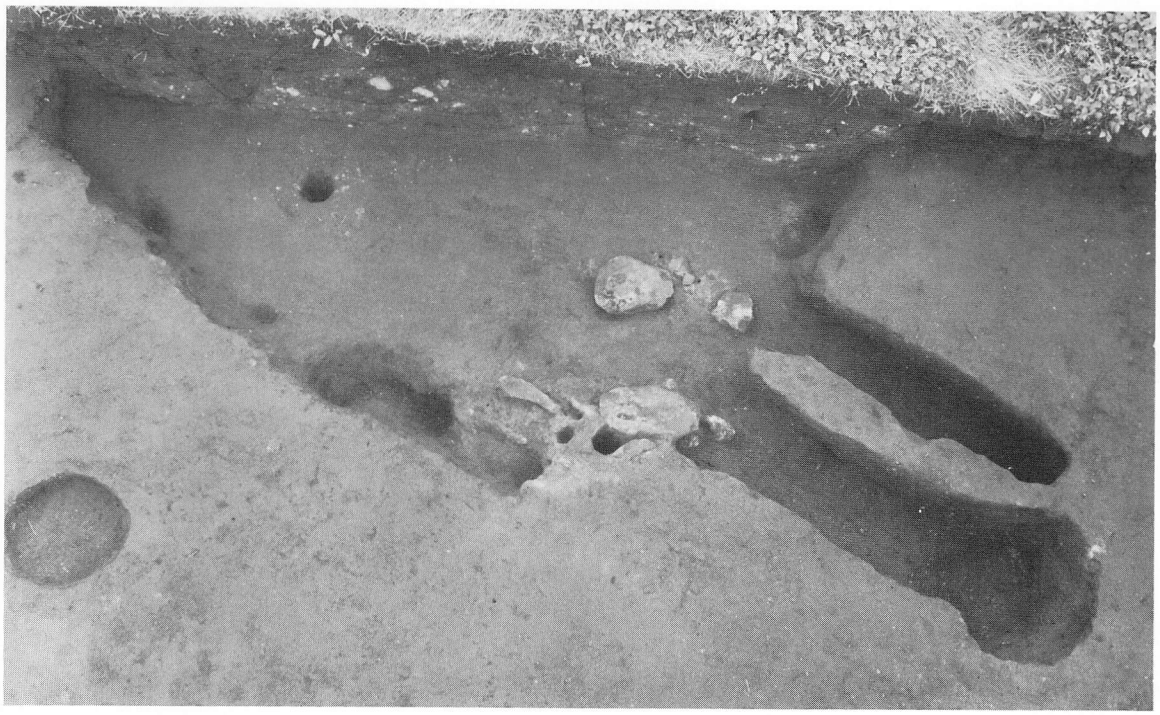


b. Bj03住居址カマド

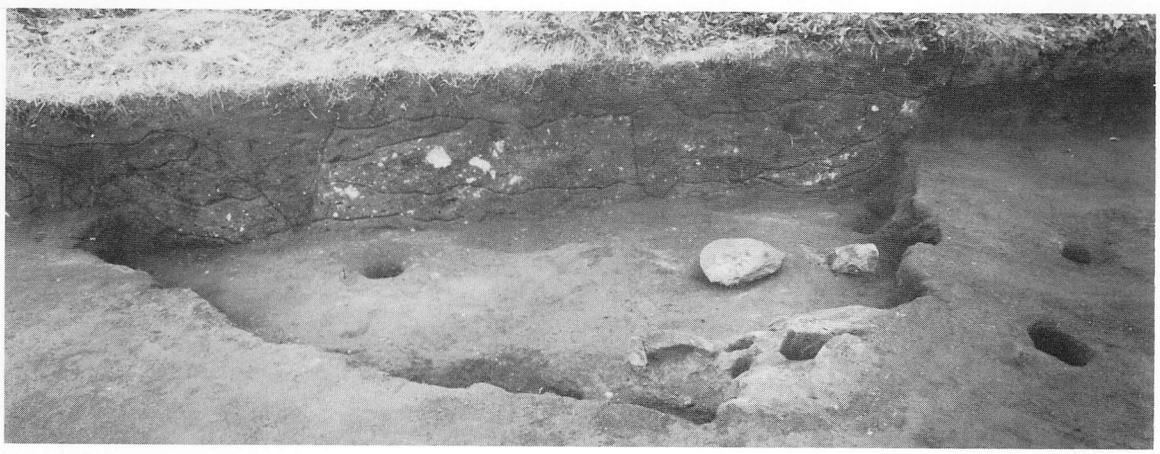
c. Bj03住居址（土器出土状況）

d. Bj03住居址（鳥獣類骨片出土状況）

写真図版16



a. Bj21住居址



b. Bj21住居址（土層断面）

写真図版17

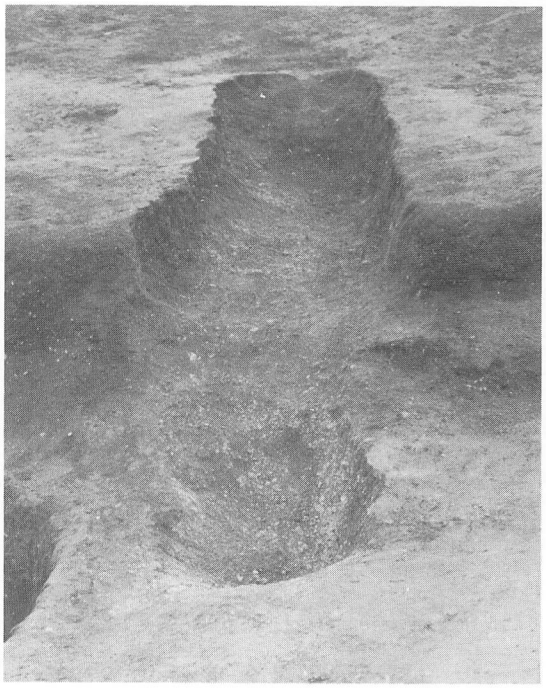
a. Bj21住居址カマド

b. Ca09住居址

写真図版18

a. Ca09住居址（検出状況）

b. Ca09住居址１号カマド



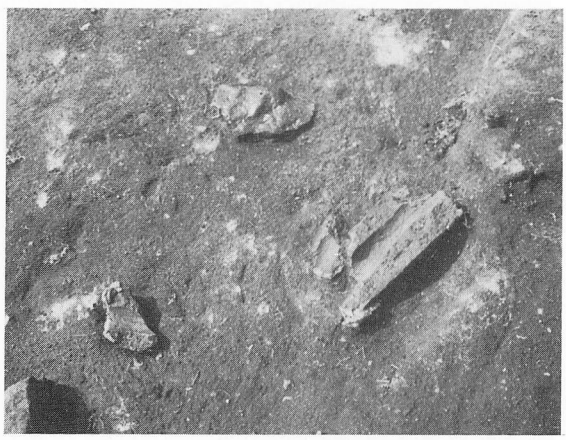
c. Ca09住居址２号カマド

写真図版19

a. Ca09住居址P_3

b. Ca09住居址P_3（土器出土状況）

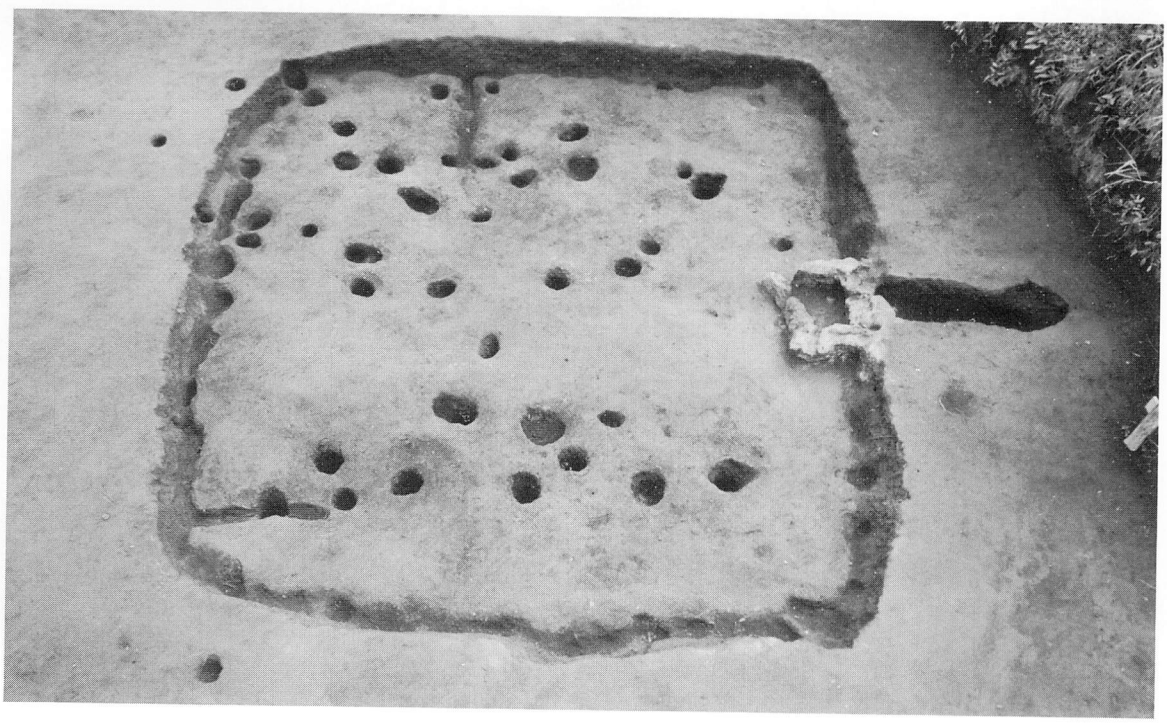
c. Ca09住居址P_3（土層断面）



d. Ca09住居址（フイゴ羽口出土状況）

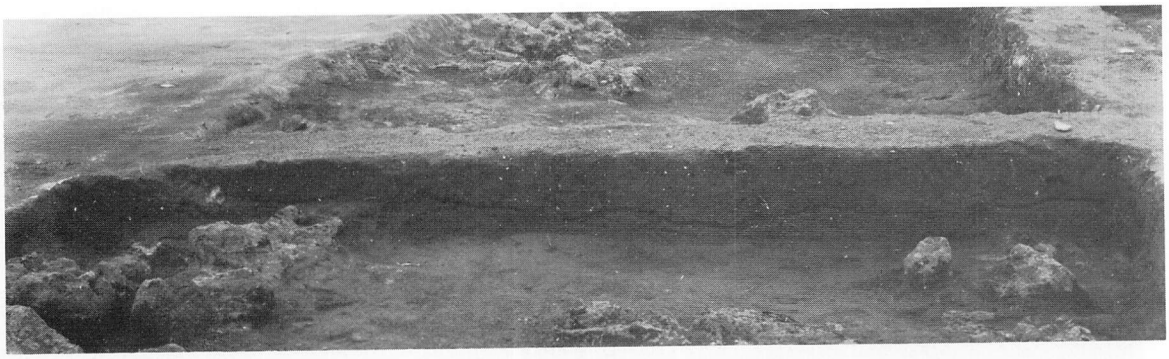
写真図版20

a．Ca09住居址　（遺物・礫出土状況）



b．Ca18住居址

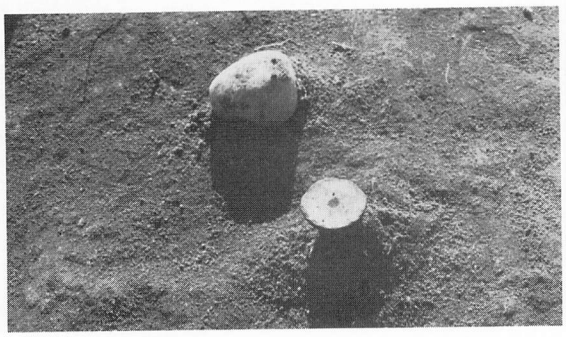
写真図版21



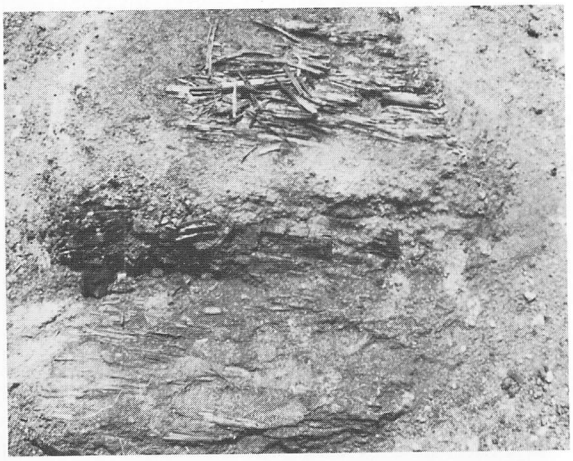
a．Ca18住居址（土層断面）

b．Ca18住居址カマド

c．Ca18住居址（土器出土状況）



d．Ca18住居址（紡錘車出土状況）



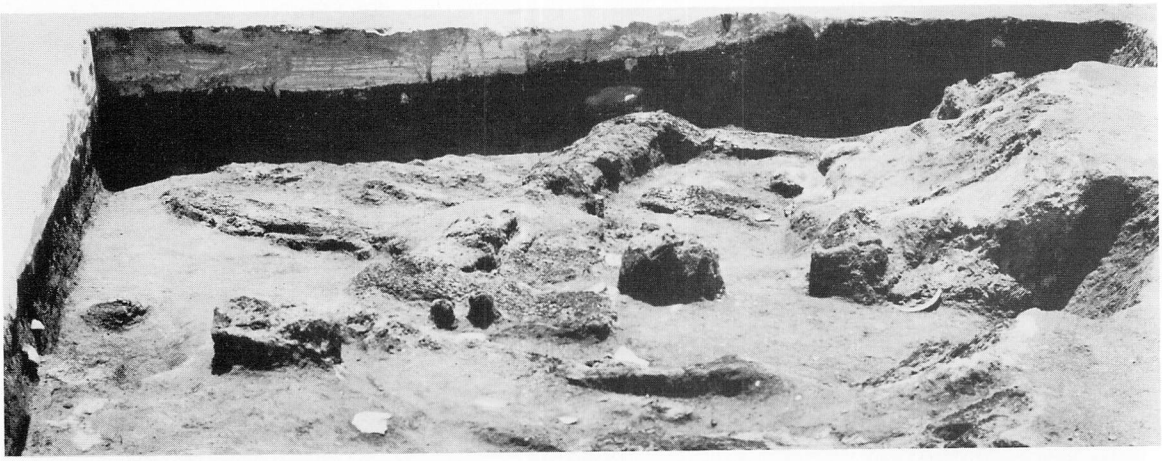
e．Ca18住居址（カヤ出土状況）

写真図版22

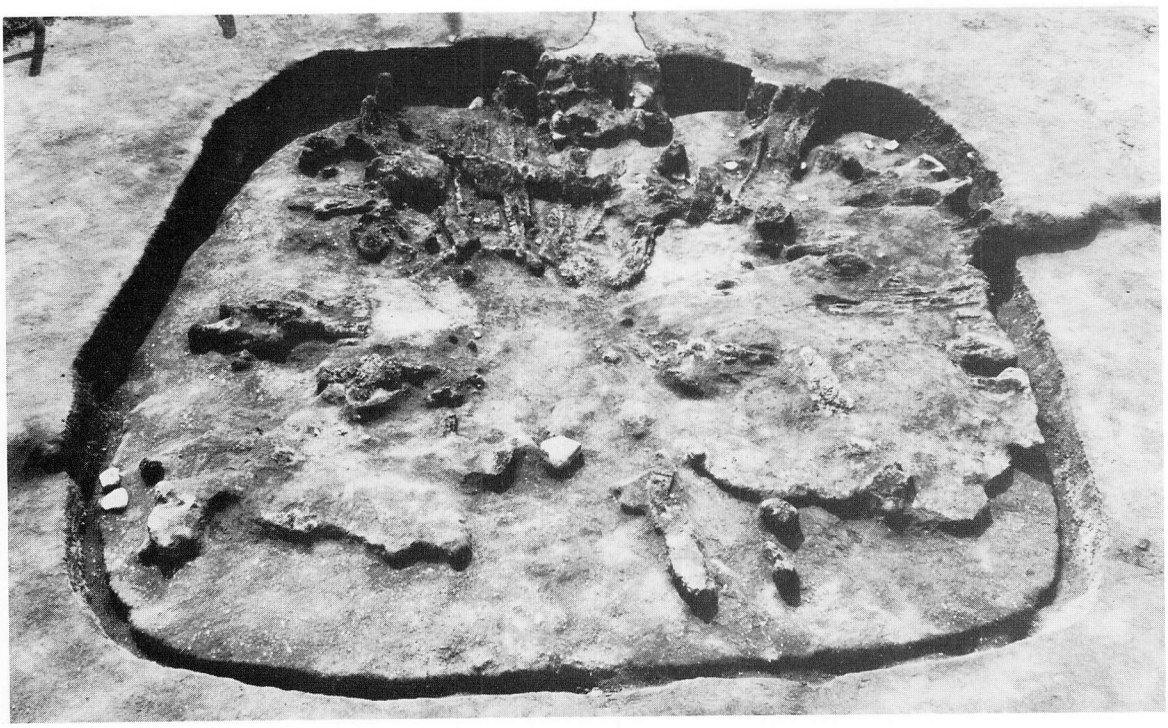
a．CdI2住居址

b．CdI2住居址（検出状況）

写真図版23



a．Cd12住居址（土層断面）



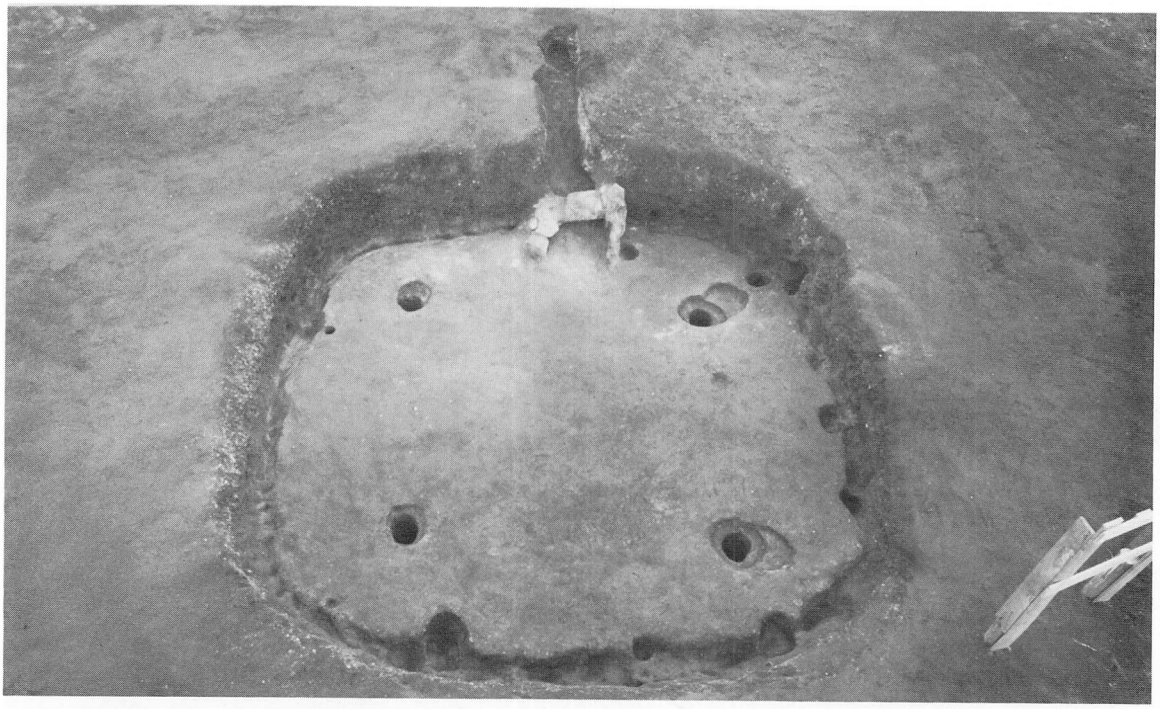
b．Cd12住居址（炭化材出土状況）

写真図版24

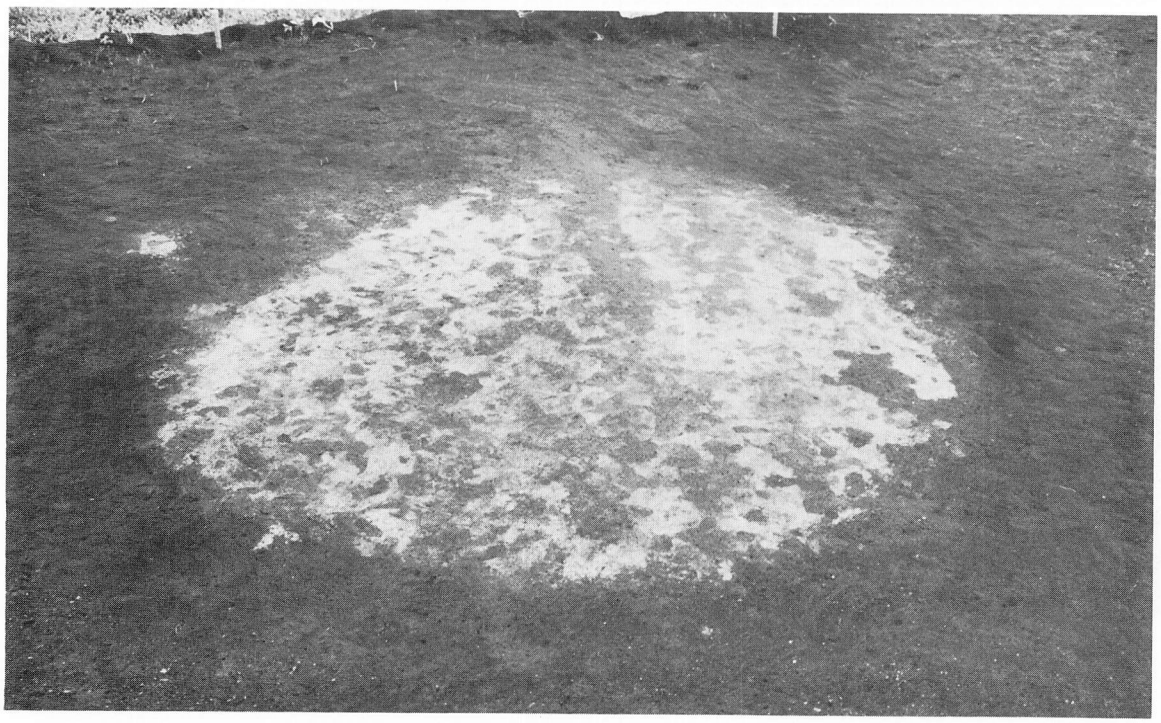
a．Cd12住居址（炭化材出土状況）

b．Cd12住居址（炭化樹皮出土状況）

写真図版25

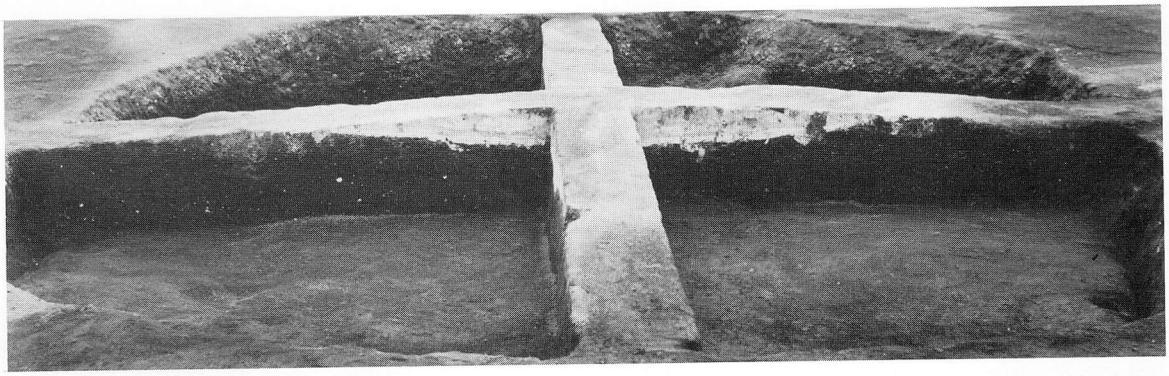


a．Db03住居址

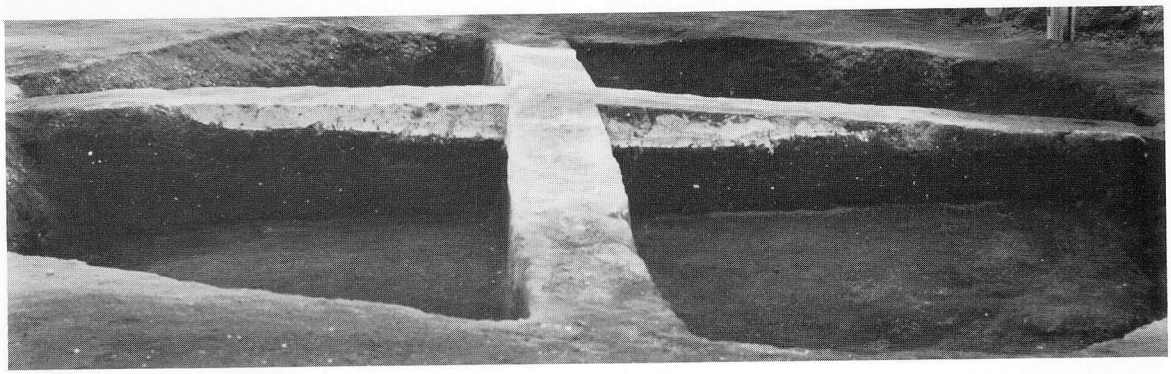


b．Db03住居址（検出状況）

写真図版26



a．Db03住居址（土層断面）



b．Db03住居址（土層断面）

c．Db03住居址カマド

写真図版27

a．Db03住居址（土器出土状況）

b．Db03住居址（土器・鉄器出土状況）

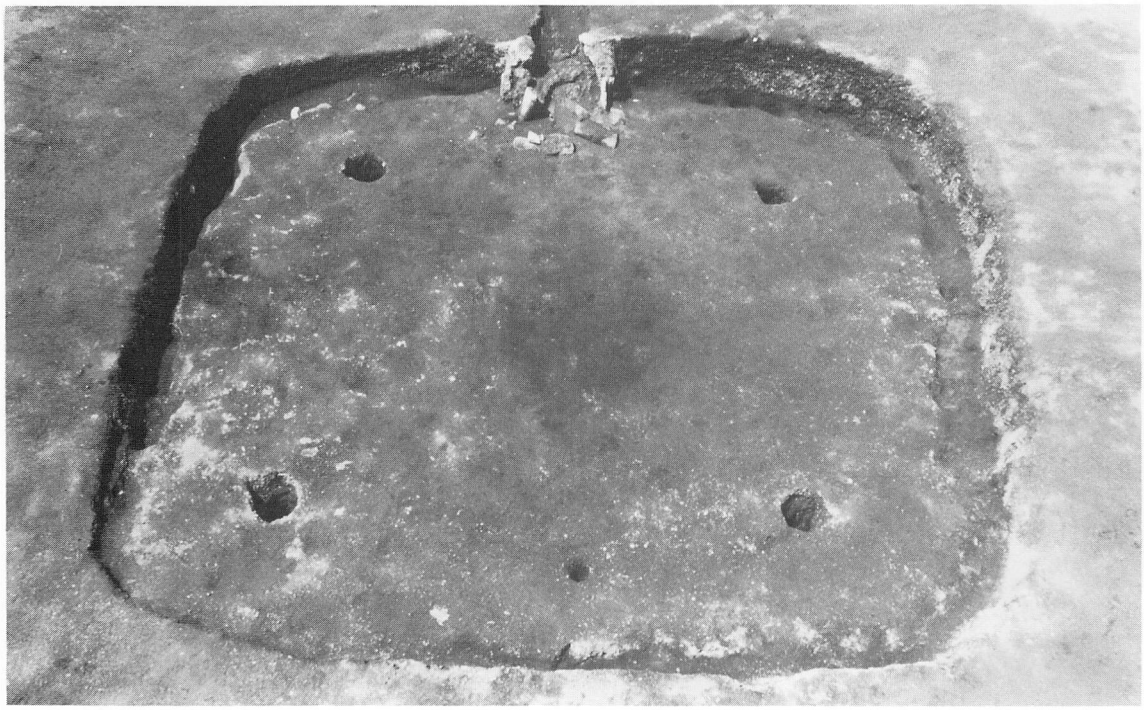
c．Db03住居址（紡錘車出土状況）

d．Db03住居址（勾玉出土状況）

e．Db03住居址（土製勾玉・土玉出土状況）

f．Db03住居址（炭化物出土状況）

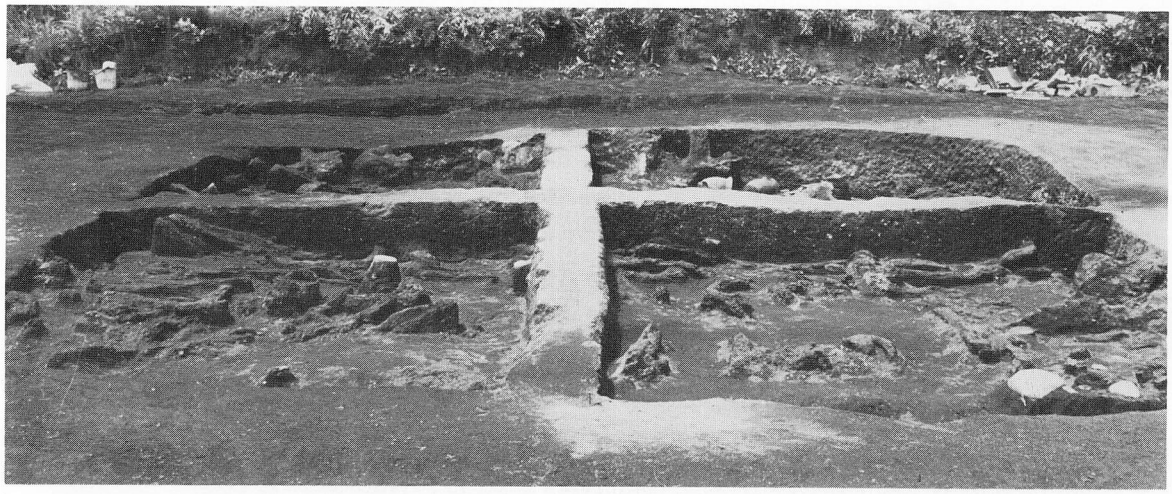
写真図版28



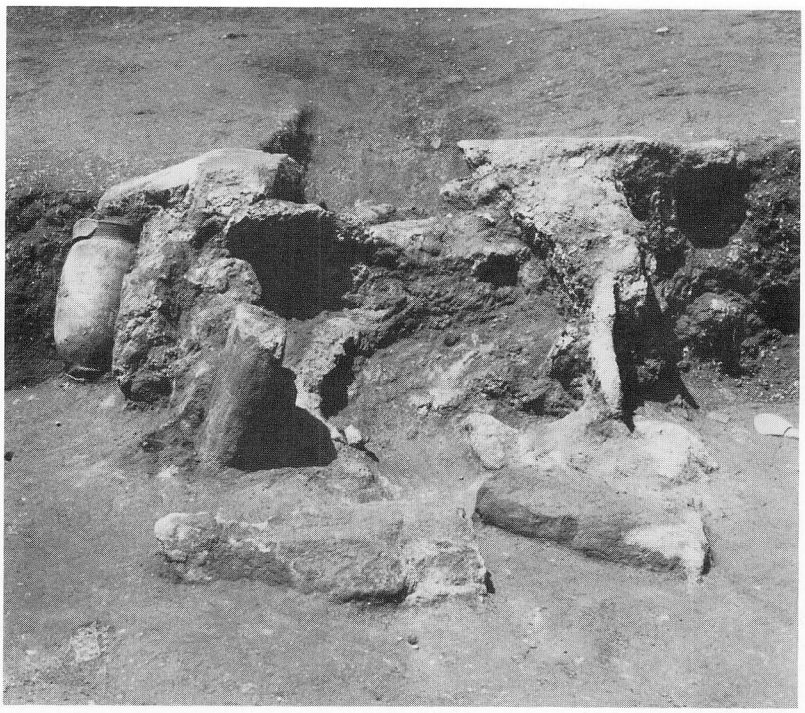
a．De09住居址

b．De09住居址（検出状況）

写真図版29

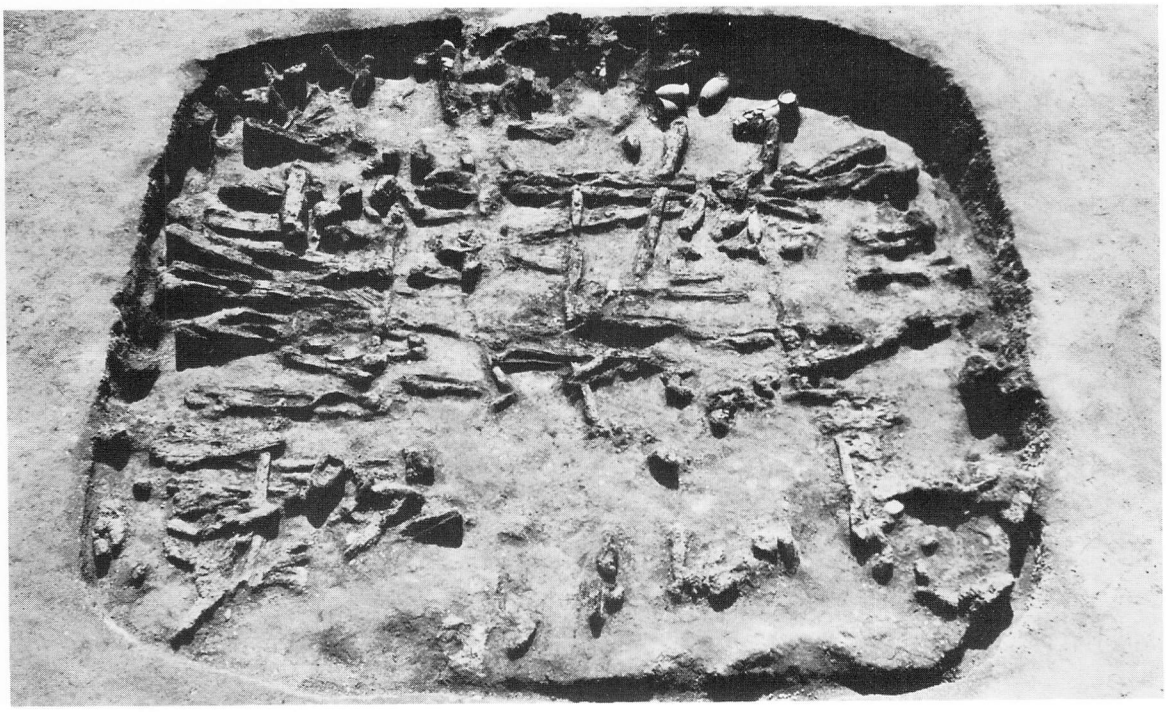


a．De09住居址（土層断面）

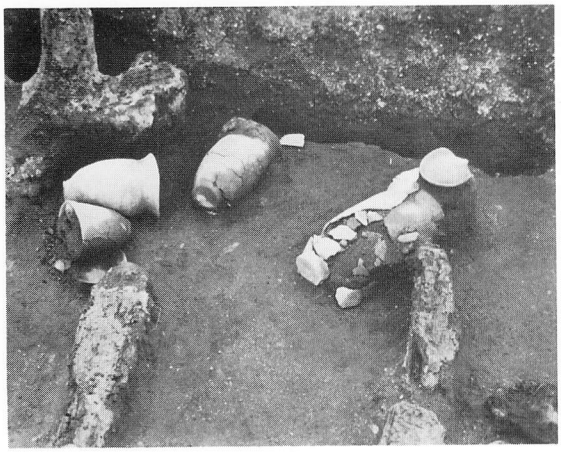


b．De09住居址カマド

写真図版30



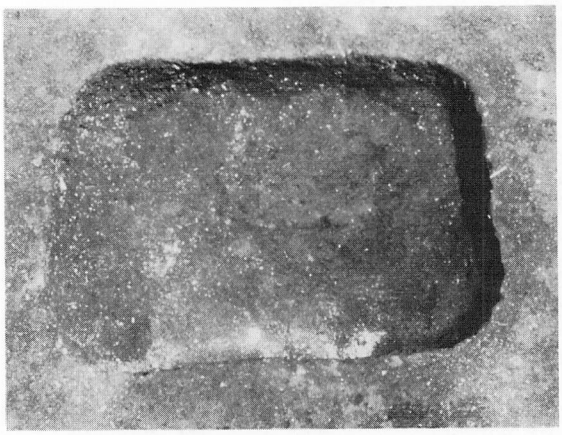
a．De09住居址（炭化材出土状況）



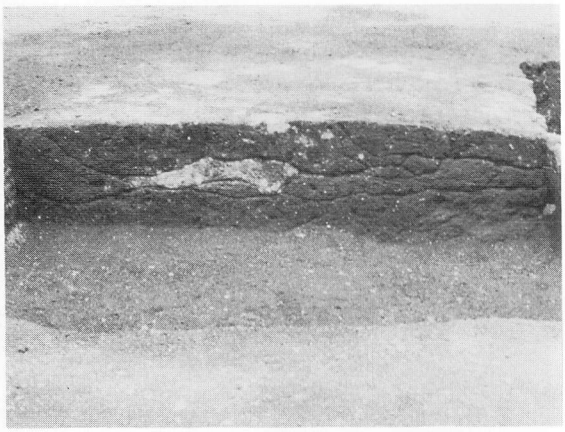
b．De09住居址（土器出土状況）

c．De09住居址（カヤ出土状況）

写真図版31



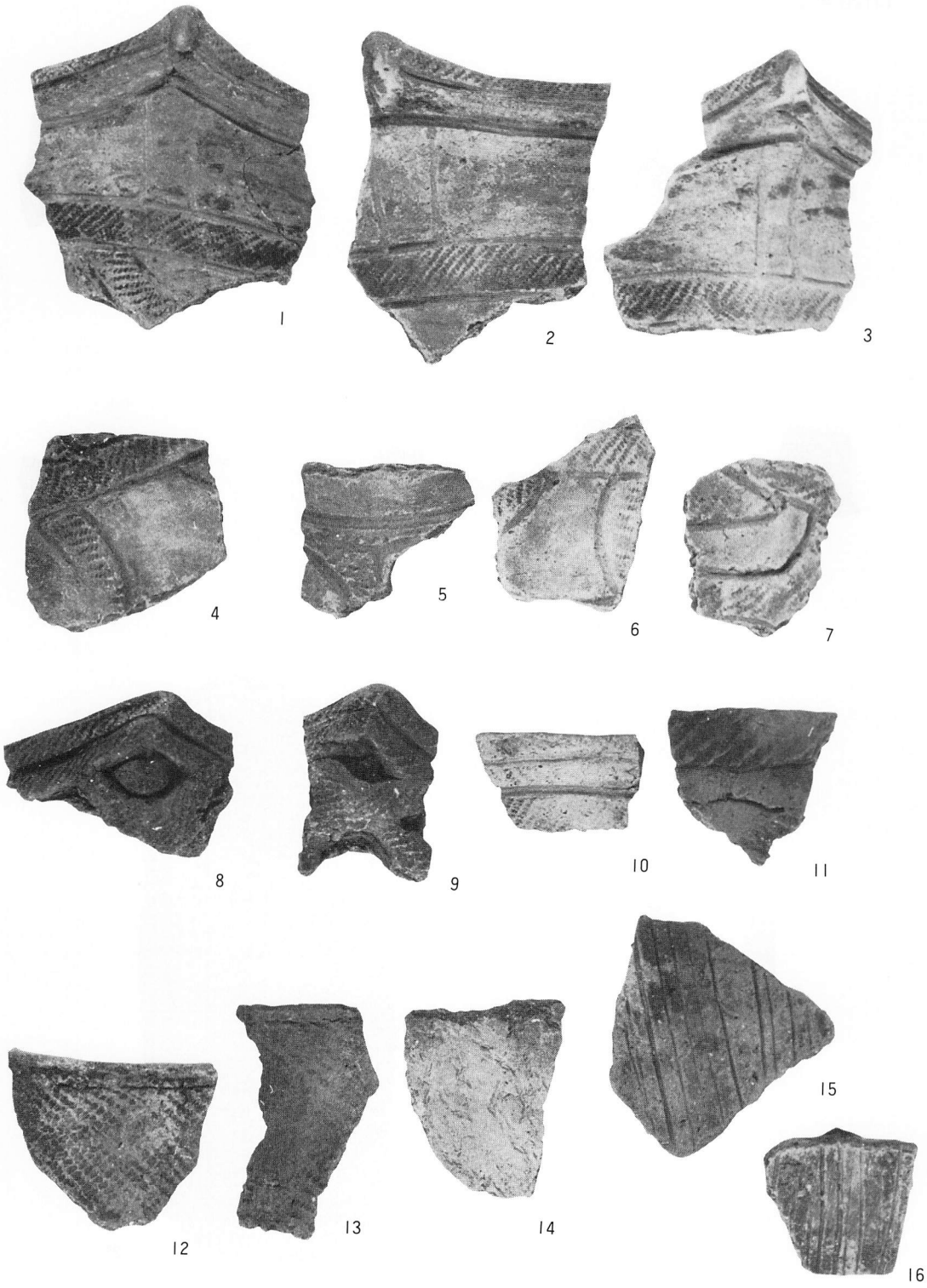
a. Ce06ピット



b. Ce06ピット（土層断面）

写真図版32

Df12住居址（1～28）



遺構内の出土遺物　（1）

写真図版33

Df12住居址

17

18

19

20

21

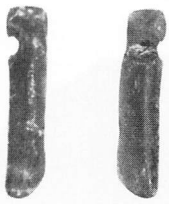
22

23

24

25

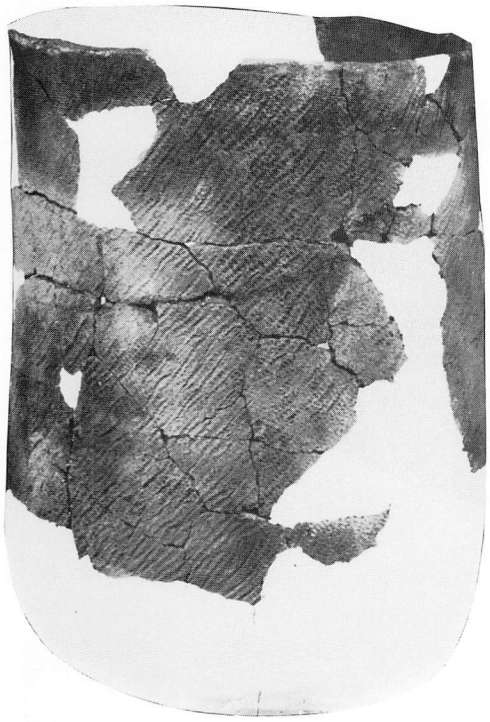
26


27

28

遺構内の出土遺物　(2)

写真図版34



29

30

31

32

33

34

35

36

40

37

38

39

遺構内の出土遺物　(3)

写真図版35

Cg09ピット（41）

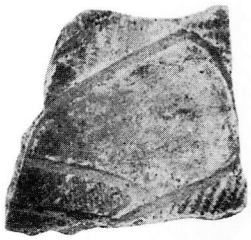
De50土器埋設遺構（42）

遺構内の出土遺物（4）

写真図版36

Da03陥し穴状遺構（43～46）

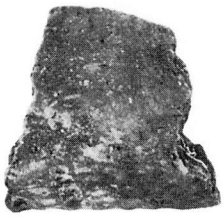
43



44

Dg09陥し穴状遺構（47～55）

45



46

47

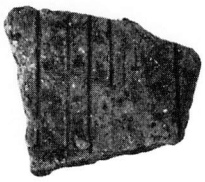
48

49

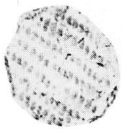
50

51

52



53



54

55

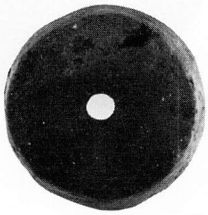
遺構内の出土遺物　（5）

写真図版37

Bb06住居址（1）

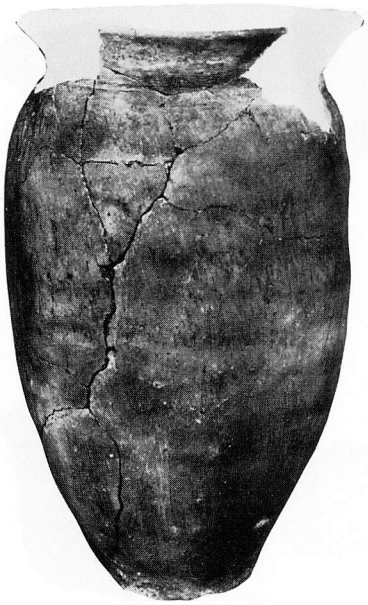
1

Bc12住居址（2）



2

Bj03住居址（3・4）



3

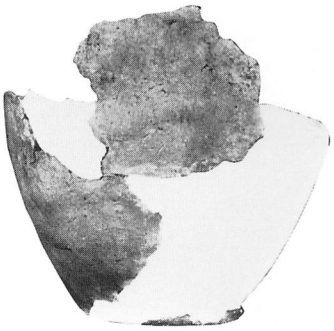
4

遺構内の出土遺物　（6）

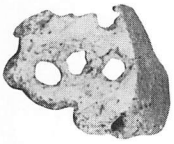
写真図版38

Bj21住居址（5～7）

5



6

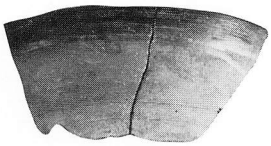


7

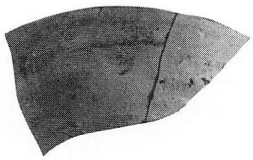
遺構内の出土遺物　（7）

写真図版39

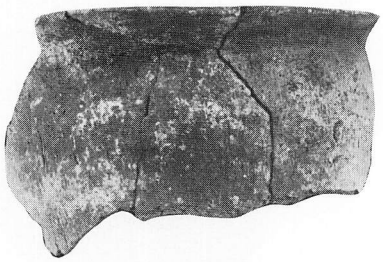
Ca09住居址（8～20）



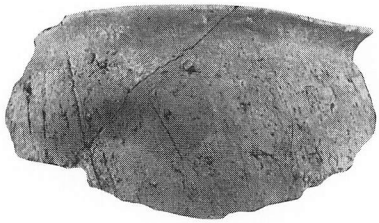
8



9

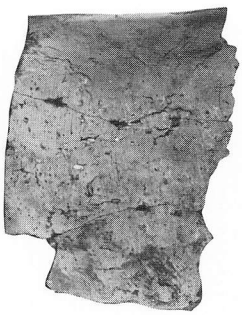


11



12

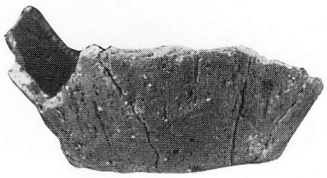
10



13

遺構内の出土遺物　（8）

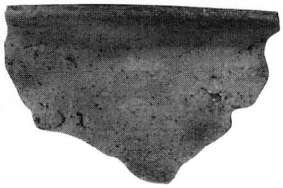
写真図版40



14

15

16



17

19

18

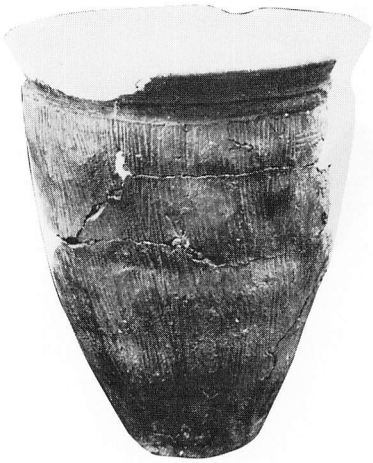
20

遺構内の出土遺物　(9)

写真図版41

Ca18住居址（21～25）

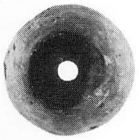
21



22

23

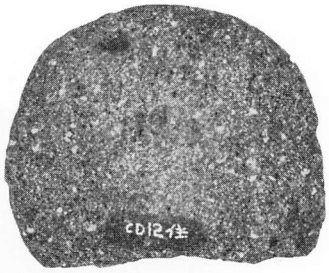
24



25

Cd12住居址（26～29）

26



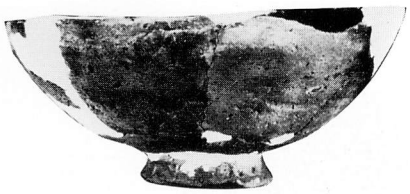
27

28

29

遺構内の出土遺物　（10）

写真図版42



30

32

31

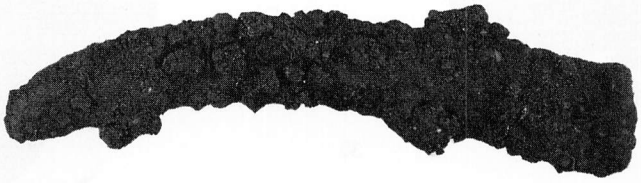
33—a

33—b

遺構内の出土遺物　（11）

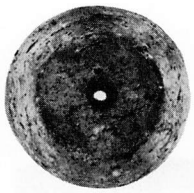
写真図版43

Db03住居址



34

35



36

37

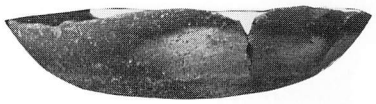
38

39

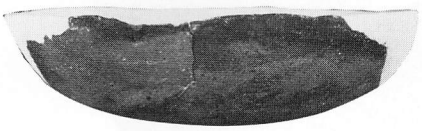
遺構内の出土遺物（12）

写真図版44

40

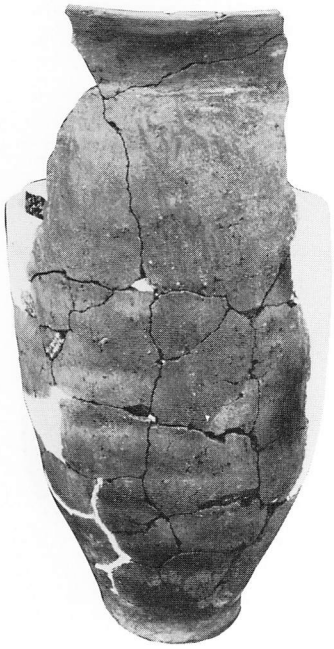


41



42

43



44

45

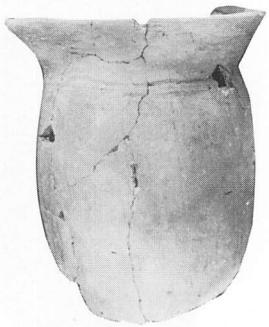
遺構内の出土遺物（13）

写真図版45

46

47

48

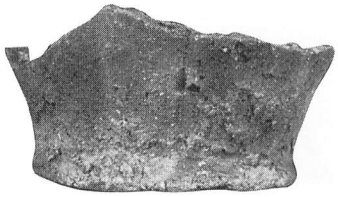


49

遺構内の出土遺物（14）

写真図版46

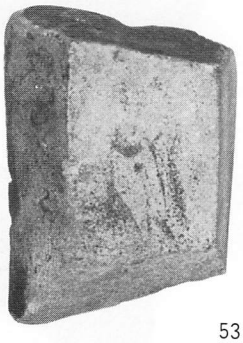
50—a



51

50—b

52

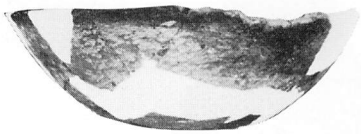


53

54

Ce06ピット（56）

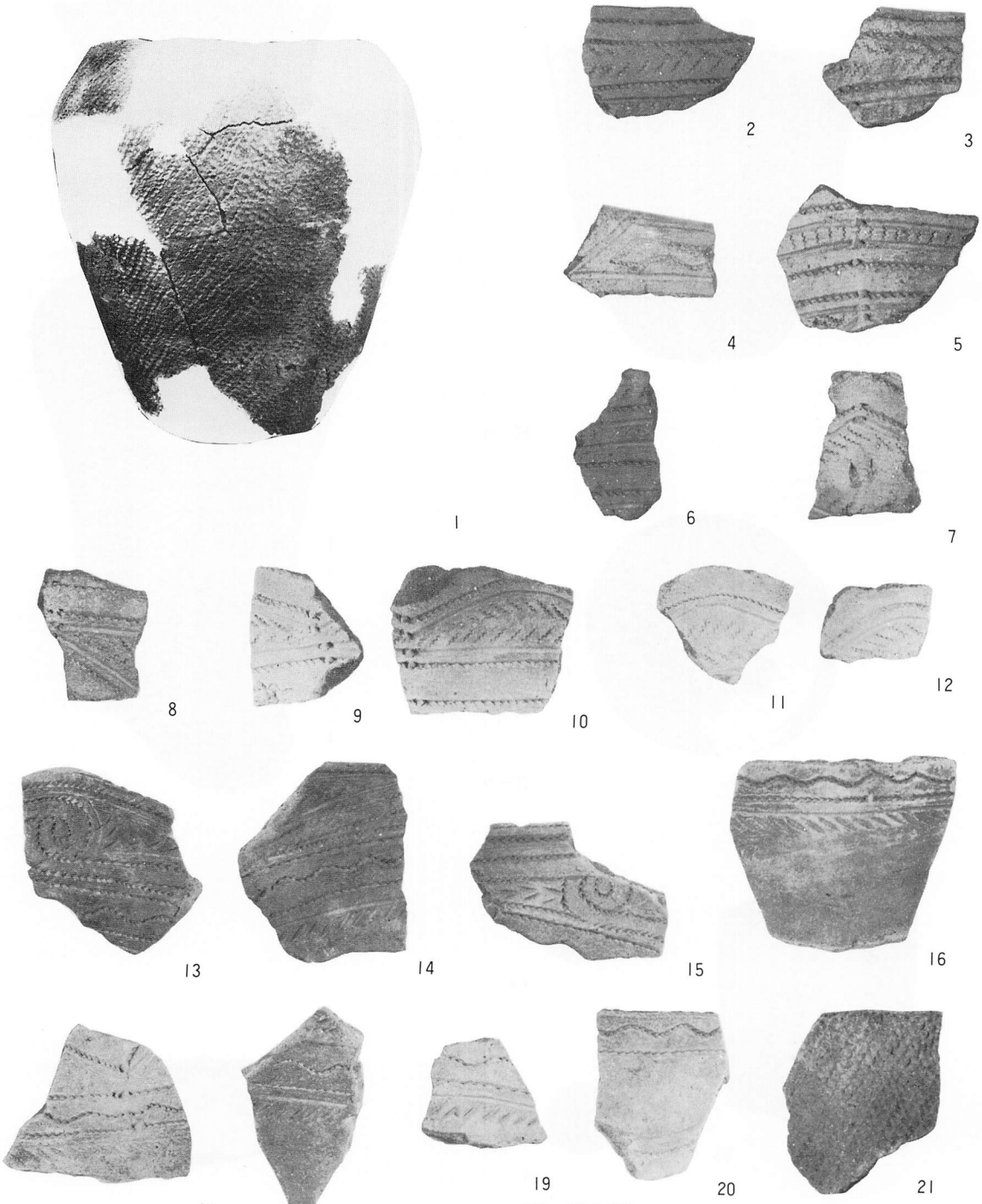
55



56

遺構内の出土遺物（15）

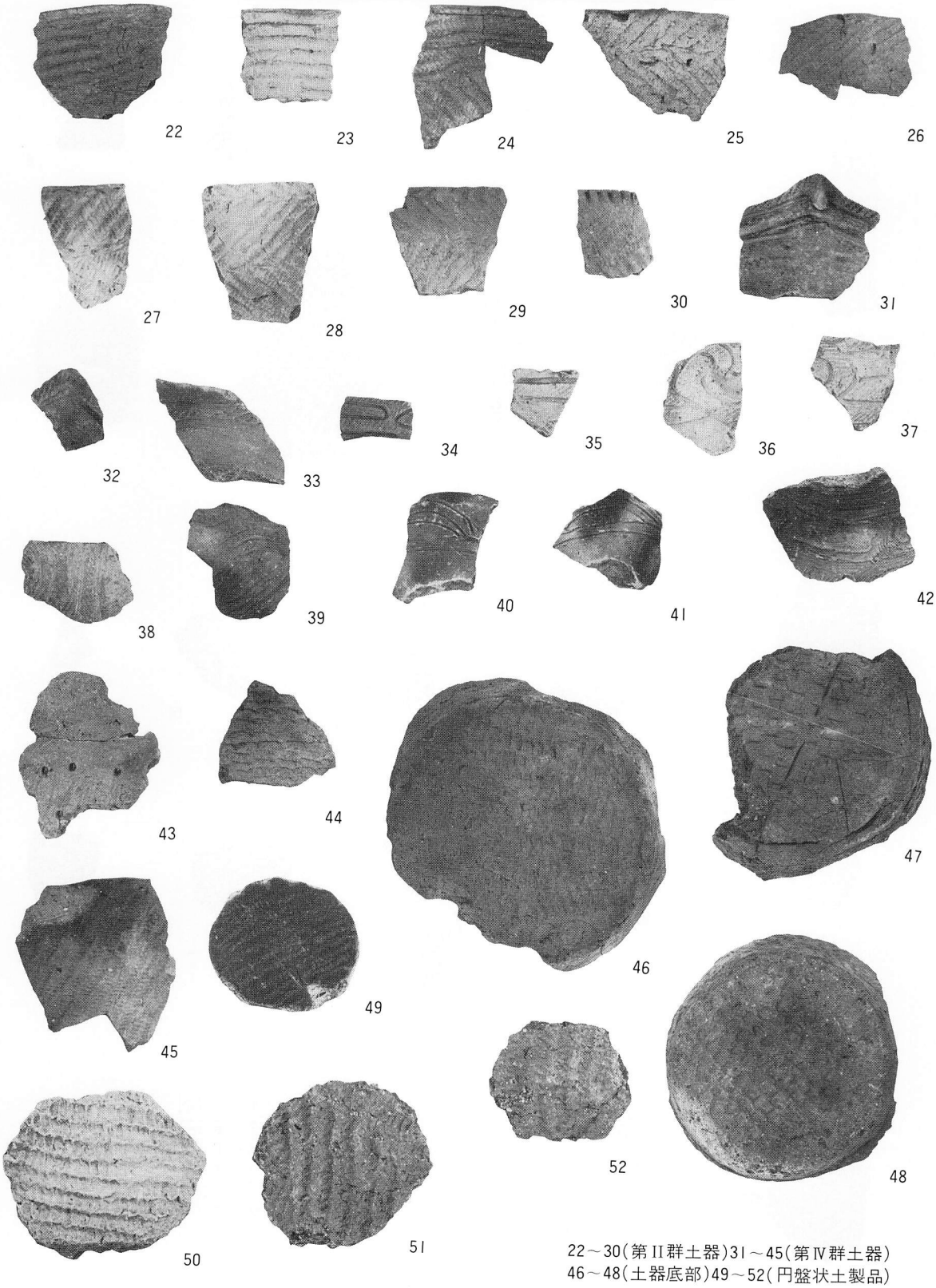
写真図版47



1　　（第Ⅳ群土器）
2～21　（第Ⅰ群土器）

遺構外の出土遺物　（1）

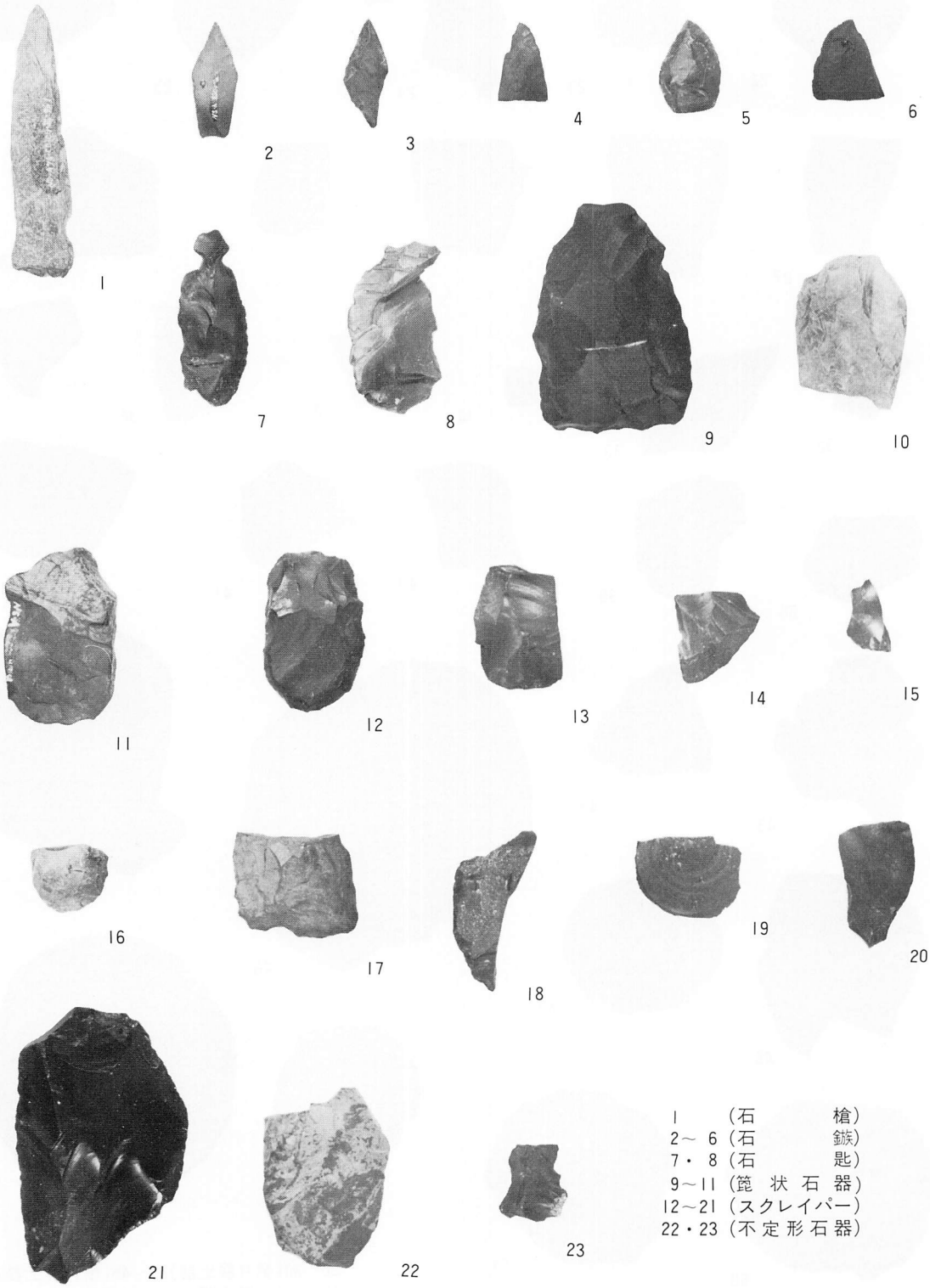
写真図版48



22～30(第II群土器)31～45(第Ⅳ群土器)
46～48(土器底部)49～52(円盤状土製品)

遺構外の出土遺物　(2)

写真図版49



1　（石　　槍）
2～ 6（石　　鏃）
7・ 8（石　　匙）
9～11（箆 状 石 器）
12～21（スクレイパー）
22・23（不 定 形 石 器）

遺構外の出土遺物　(3)

写真図版50

24

25

26

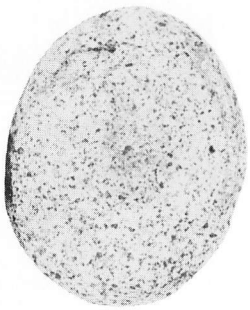
27

28

29

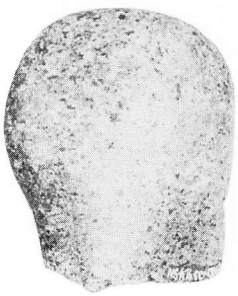
30

31


32

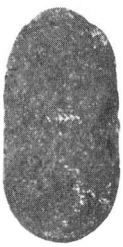
33

34


35

24～28（使用痕のある剝片）
29・30（石斧）
31・32（凹石）
33～36（磨石）
37　　（石錘）

36


37

遺構外の出土遺物　(4)

写真図版51

二戸バイパス関連遺跡発掘調査協力者名簿

（1976年　家ノ上・長瀬A遺跡）

二戸市米沢	竹林卯太郎	二戸市米沢	高村浩司	二戸市米沢	畑中トシ
〃	三ッ森与助	〃	小野寺光則	〃	小林マツノ
〃	澤内義一	〃	三ッ森ホノ	〃	欠端ツヨ
〃	吉田森	〃	吉田初代	〃	畑本トヨ
〃	藤村徳治	〃	小野寺ミヨ	〃	前澤フキ
〃	畑中七蔵	〃	小野寺カヤ	〃	小林テイ
〃	畑本芳雄	〃	小野寺敏子	〃	近田ミサ
〃	平昭雄	〃	平サメ	〃	平フデ
〃	稲葉幸作	〃	平ニナエ	〃	内村リエ
〃	平留治	〃	澤内ヒデ	〃	泉館妙子
〃	田口優	〃	畑本吉衛	〃	欠端キヨ
〃	畑山博	〃	畑本トス	〃	米田フツ
〃	中島重志	〃	畑中ハルノ	〃	峠琴子

二戸市米沢	前澤千賀子	二戸市石切所	多井作悦蔵
〃	槻館庚午郎	〃	熊谷義幸
〃	米田武司	〃	山田繁
〃	槻館絹江	〃	小野寺秋男
〃	槻館トミ	〃	高橋トワ
〃	槻館ミチ	〃	築部ハル
〃	槻館禮子	二戸市福岡	山本順悦
〃	高村サダ	一戸町烏越	柴田宗次郎
〃	槻館テル	〃	稲葉熊吉
〃	米田セイ	〃	柴田留吉
〃	高村キエ	一戸町高善寺	西向功
二戸市下斗米	中道清	一戸町小鳥谷	牧田嘉男
〃	米田福治		

岩手県埋文センター文化財調査報告書第35集

二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書

二戸市　（家ノ上遺跡・長瀬A遺跡）

昭和57年３月20日印刷
昭和57年３月25日発行
発行　財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割
字高屋敷185　ＴＥＬ（0196）38―9001
印刷　株式会社富士屋印刷所